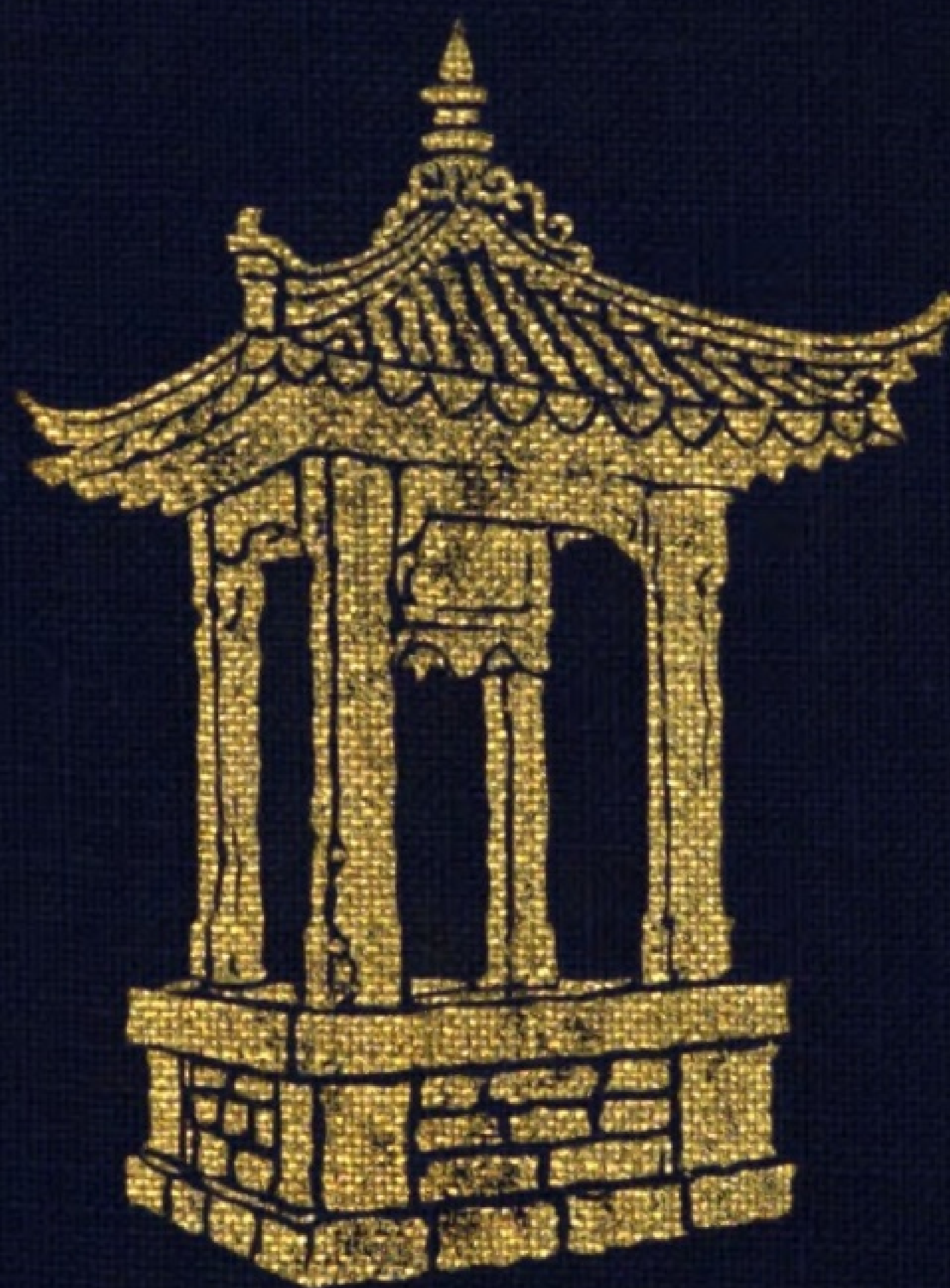


遲塚麗水著

滿鮮趣味の旅

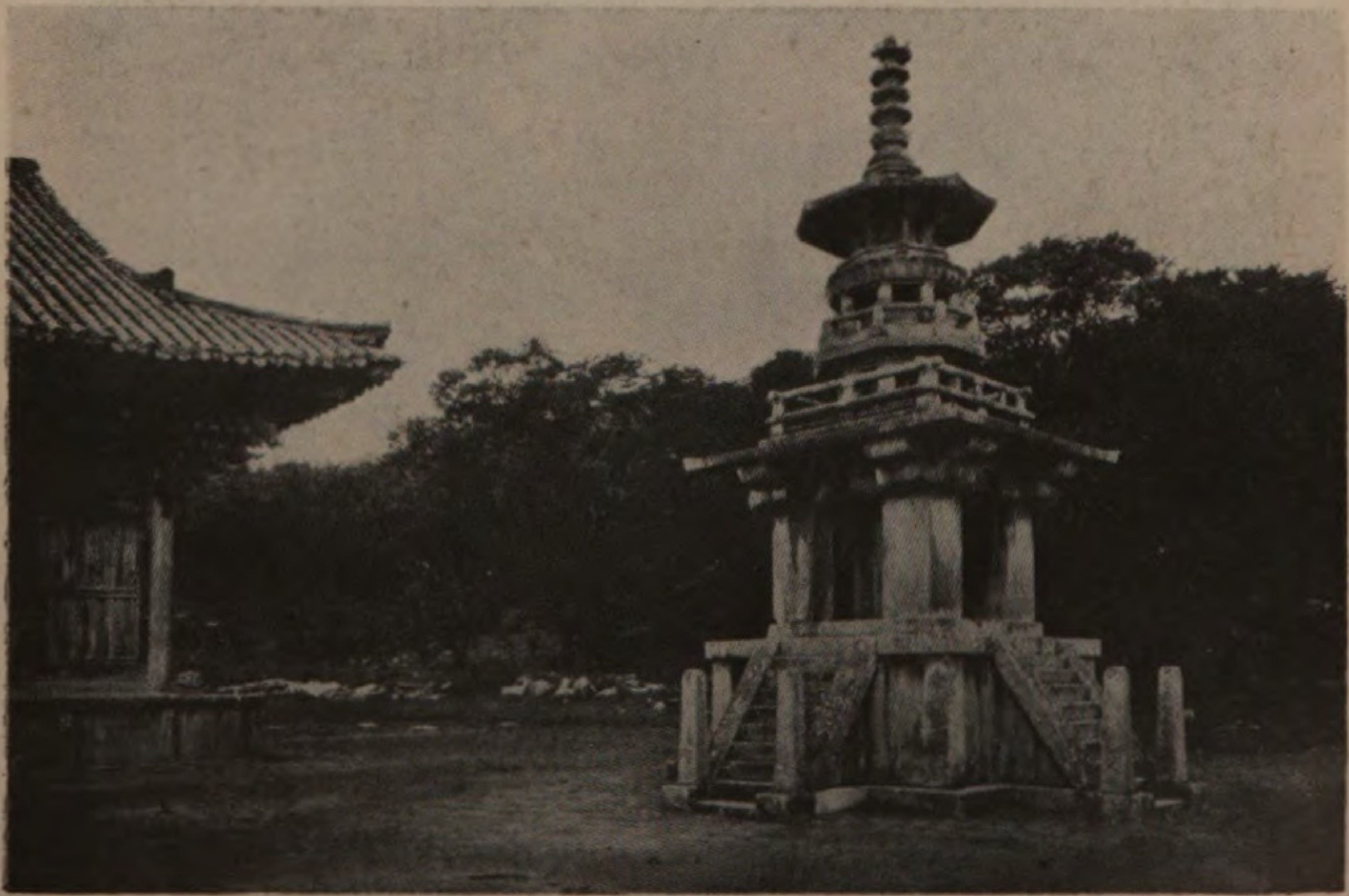
東京大阪屋號發行



大邱の牛の市



佛國寺の前景



佛國寺の多寶塔



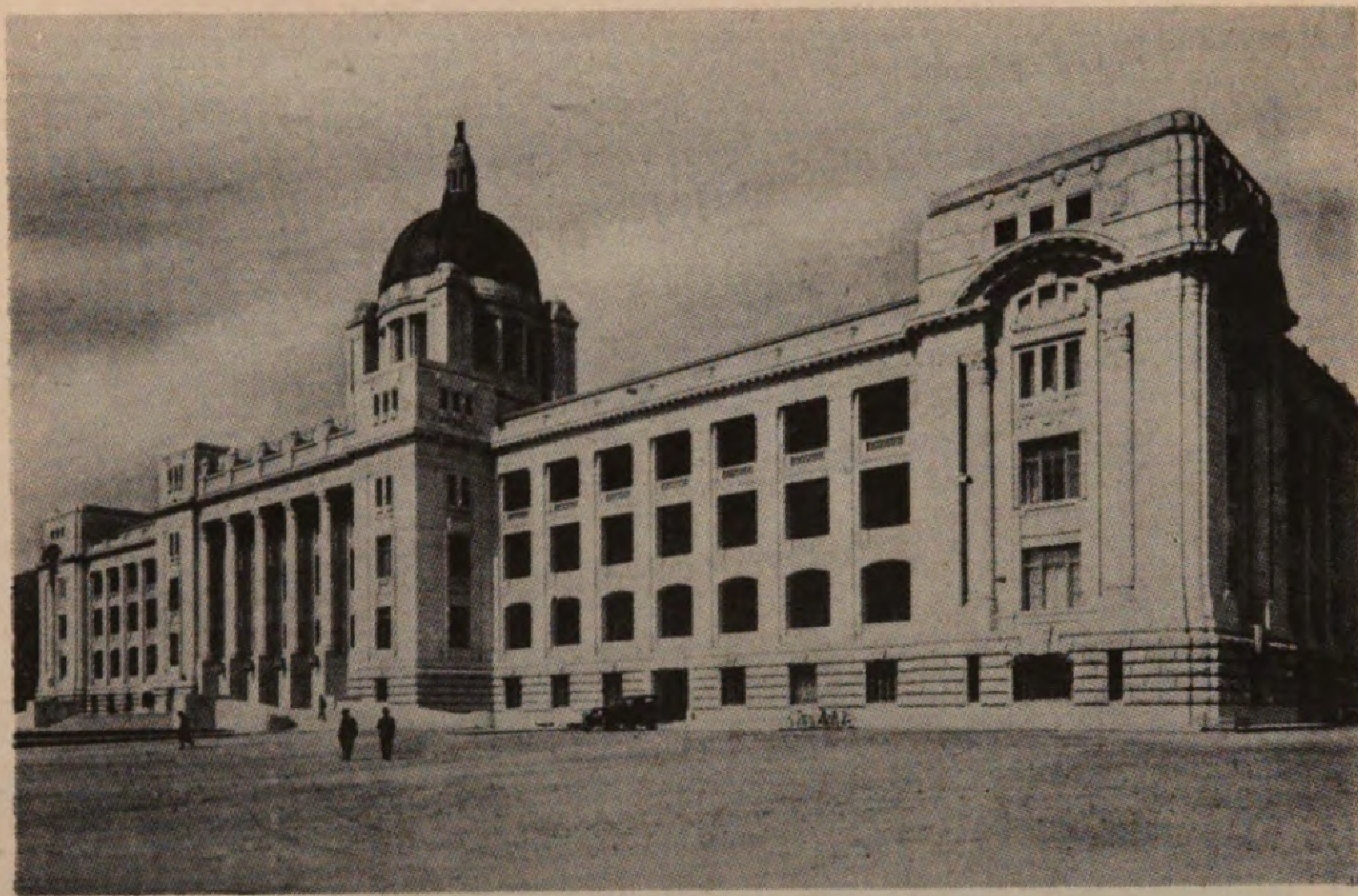
佛國寺の盧舍那佛



石窟庵の全景



石窟庵本尊釋迦如來像



朝鮮總督府



昌德宮の仁政殿內部



秘苑の宙合樓



妓生の舞



加藤清正の軍を駐めた鍾城の高樓



間島の小富士



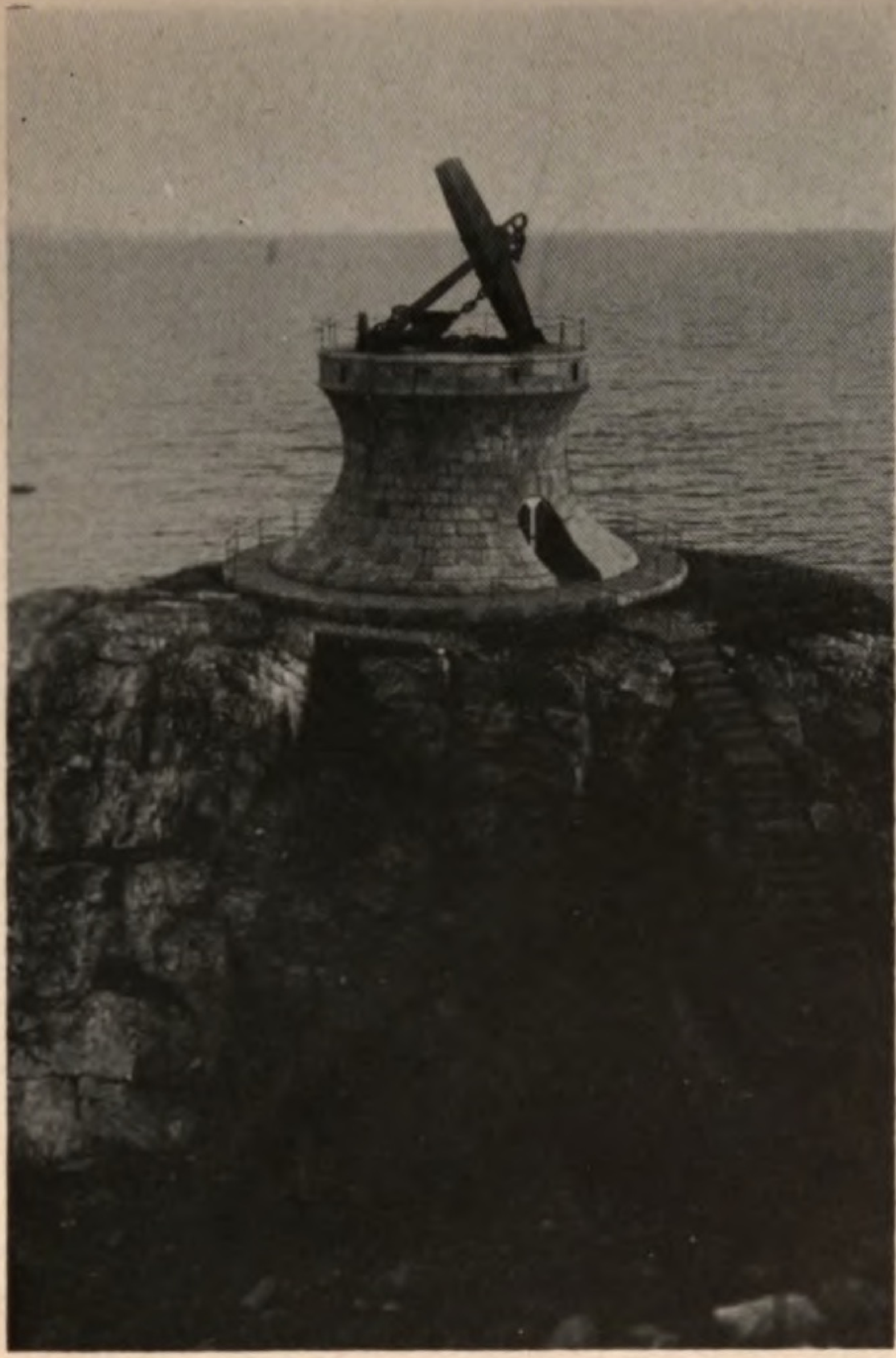
海蘭江に沿へる龍井村



雄大なる間島高原



會寧五國城址にある徽宗帝御筆の古碑



旅順海軍閉塞隊紀念碑



鴨綠江上游の流筏



安東の筏群



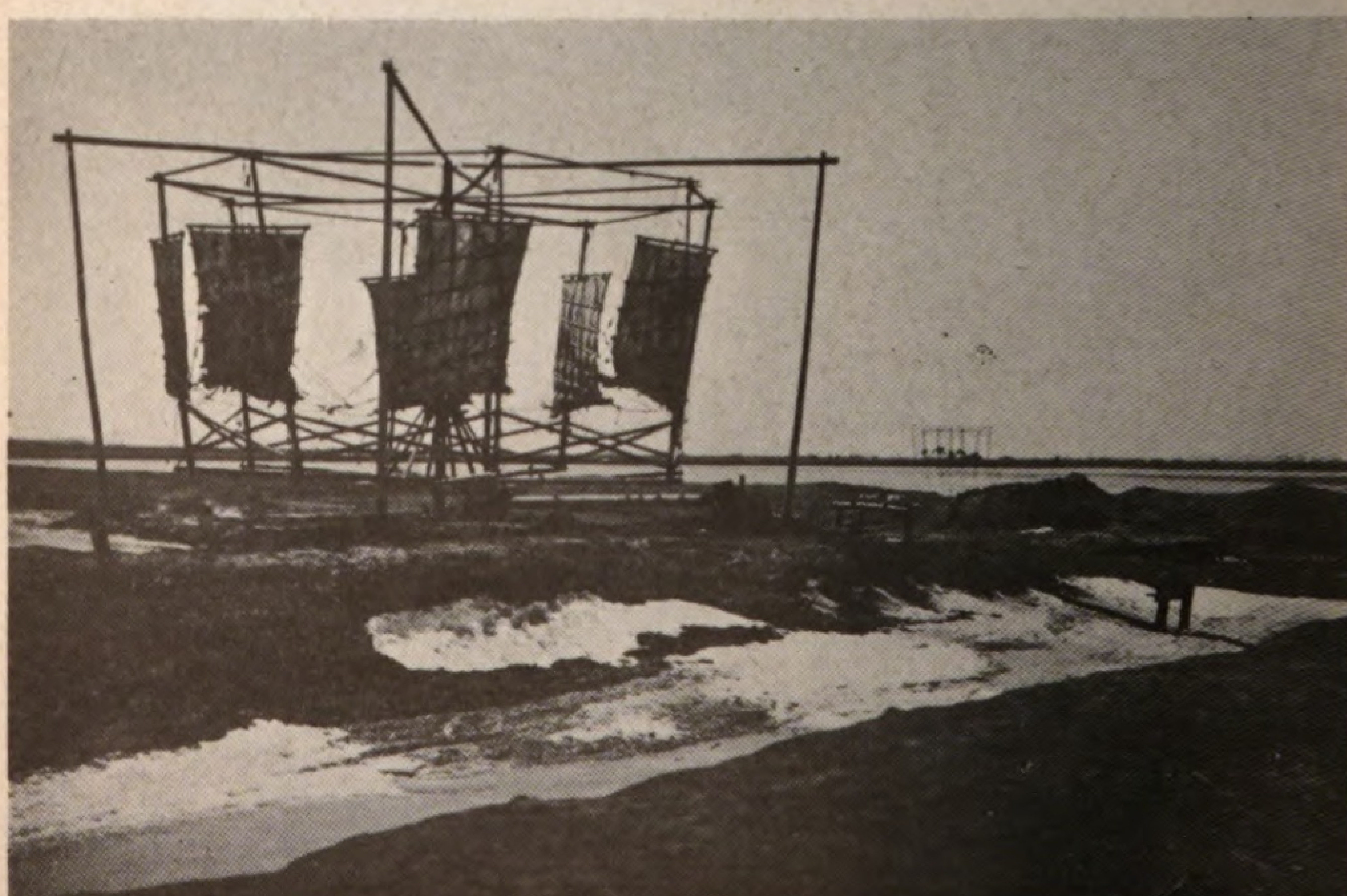
大連埠頭



満洲大豆の海



金州城



鹽田の風車



迷鎮山の娘々廟



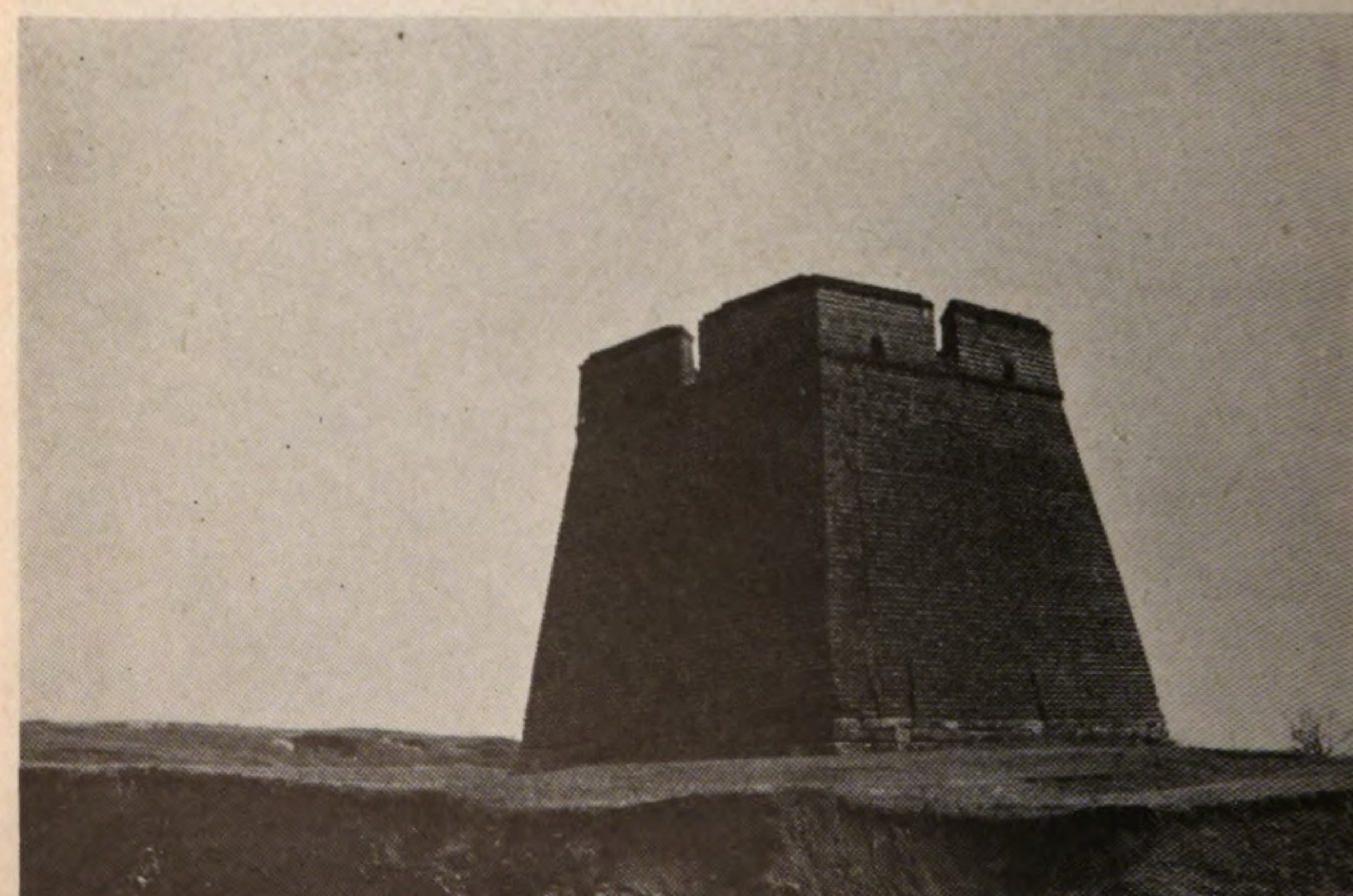
娘々廟內部



河を隔てゝ遼陽を望む



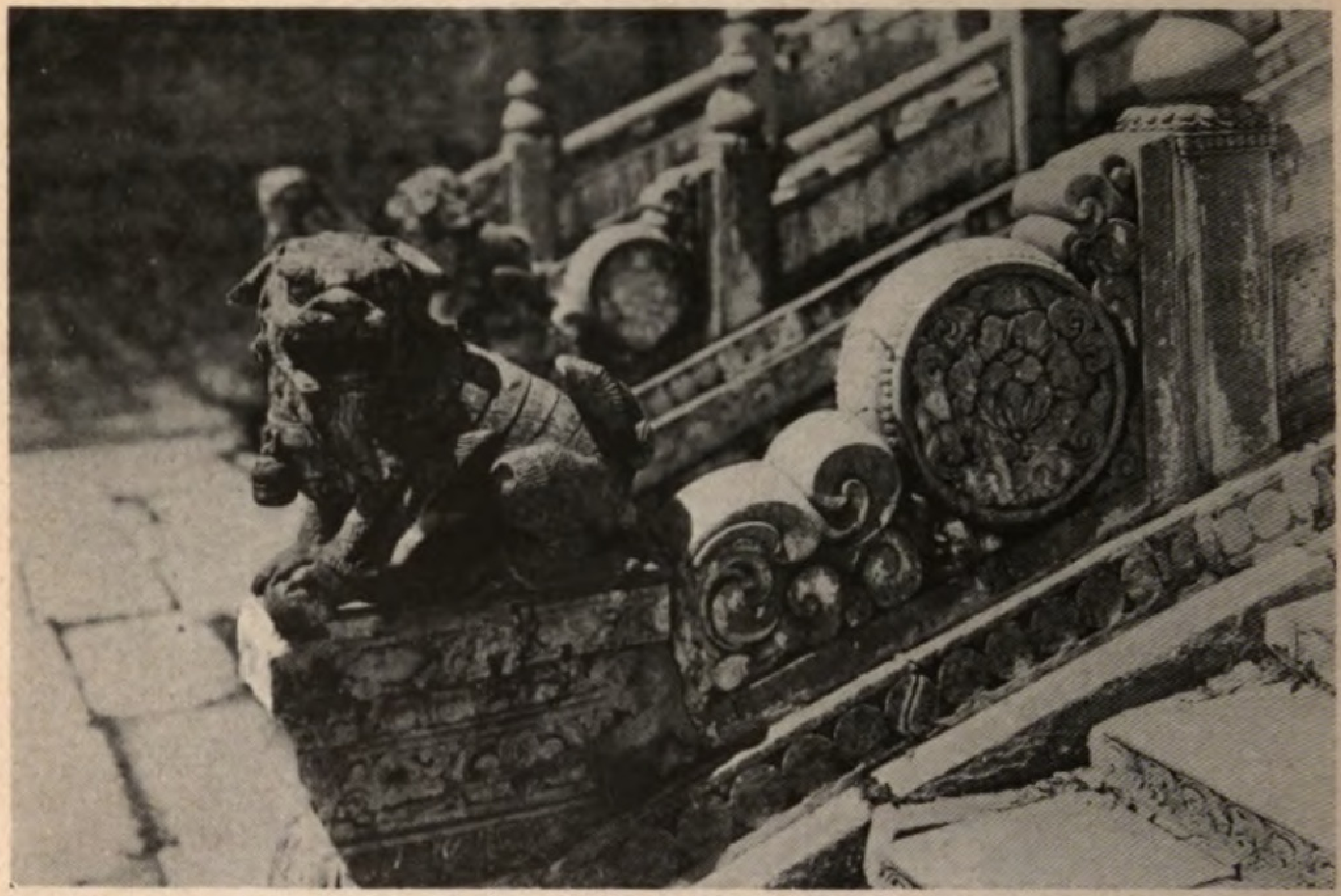
遼陽城外



太平山烽火臺



遼陽關帝廟照墻の一部



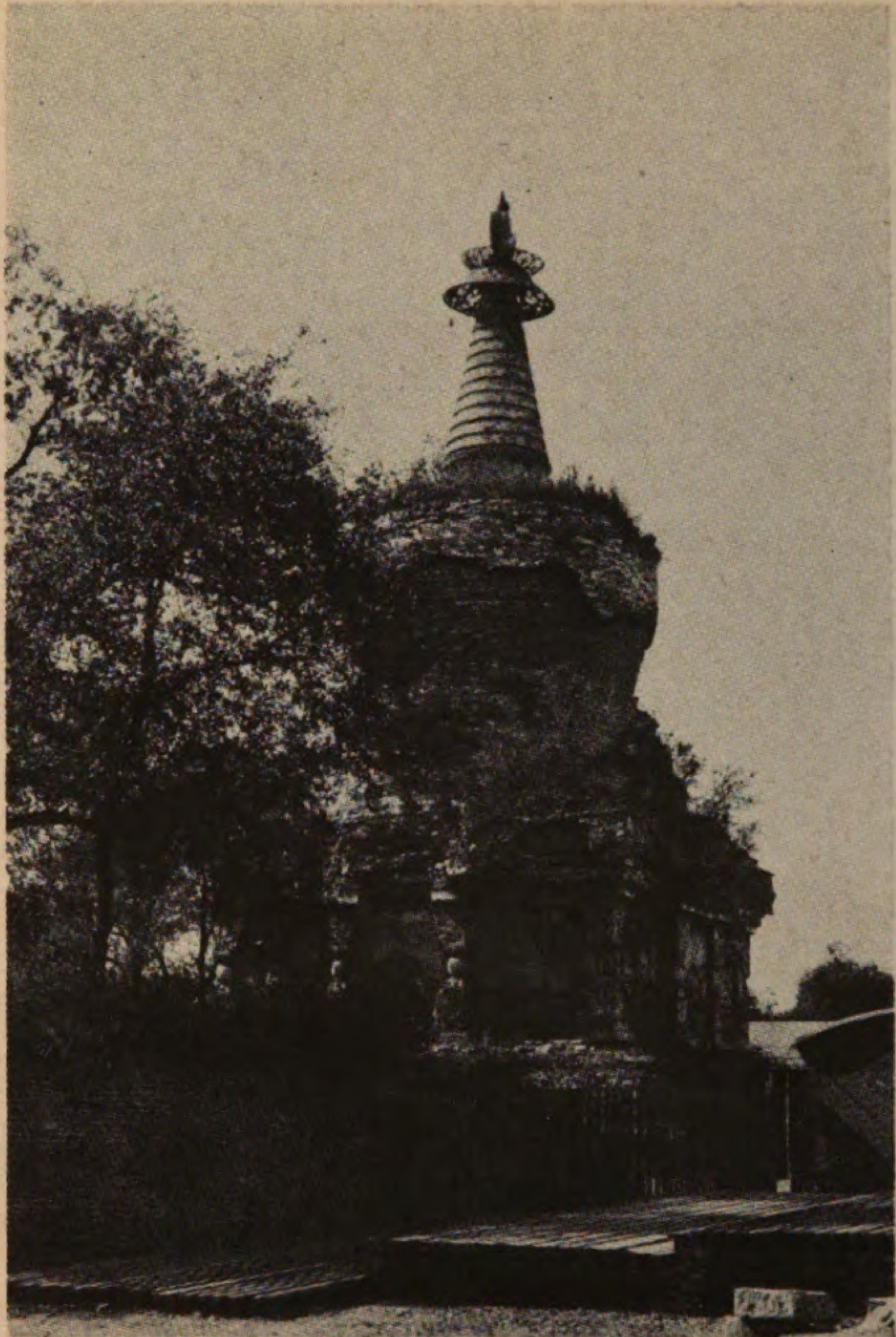
北陵隆恩殿の階欄



滿洲の曠野を往く牛車の群



普蘭店の鐘閣



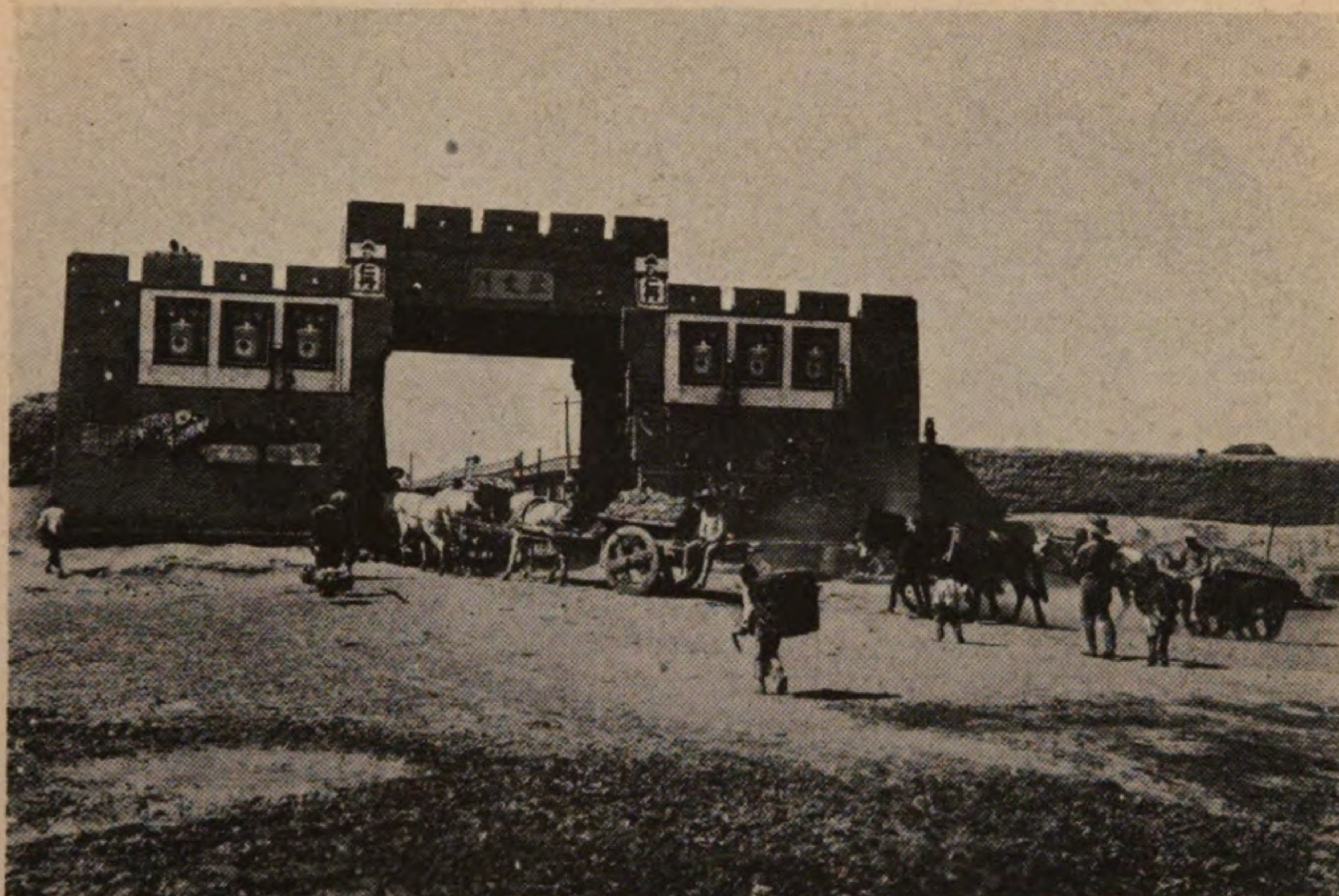
奉天の喇嘛塔



奉天東陵の佳城



鐵嶺市街商舖の看板



洮南の城門



洮南の名木薩鶏街茅土



草地と駱駝の群



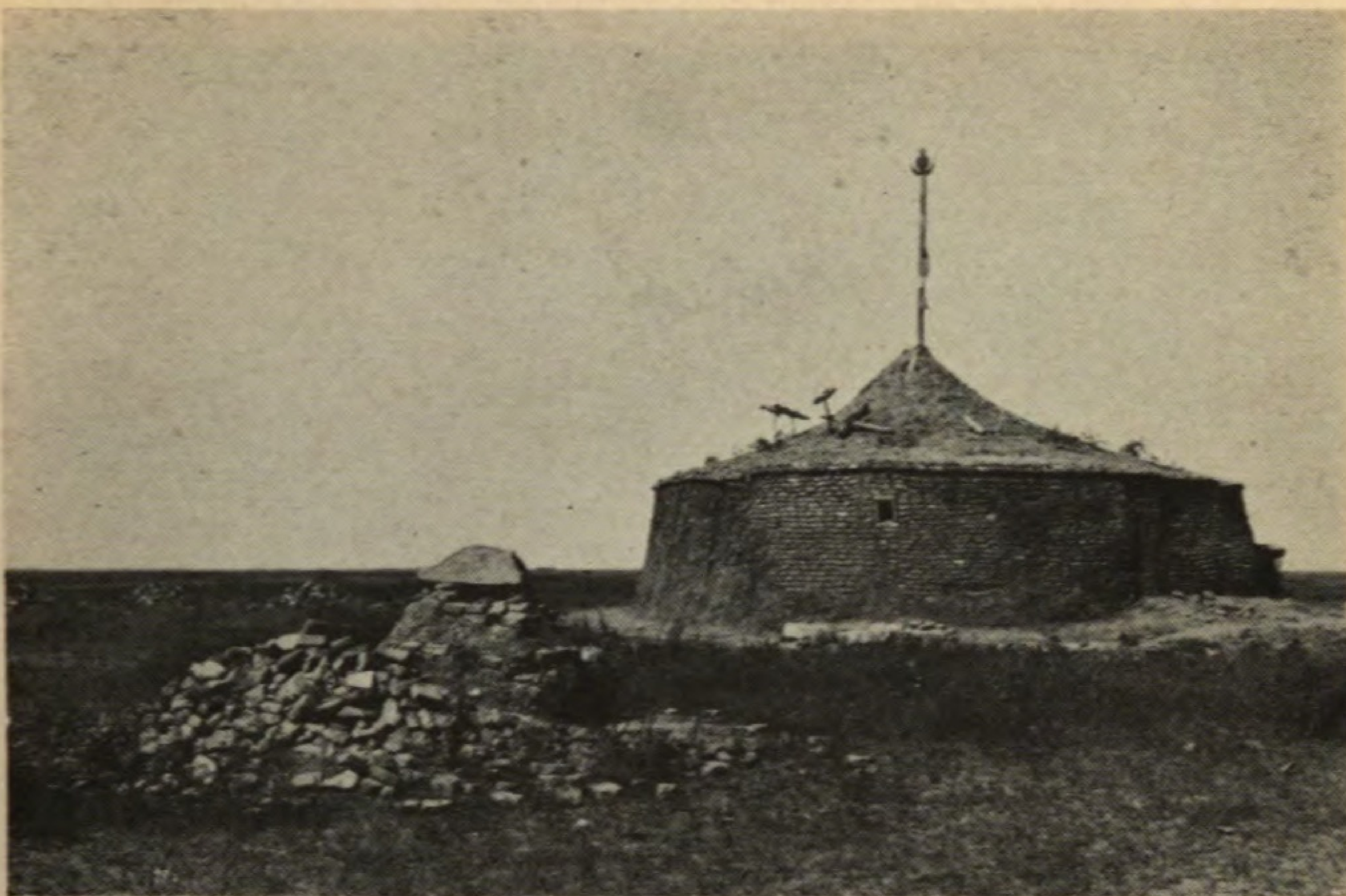
洮昂線洮南驛



蒙古包



莫林廟道中の沙漠



旗領境界の鄂博



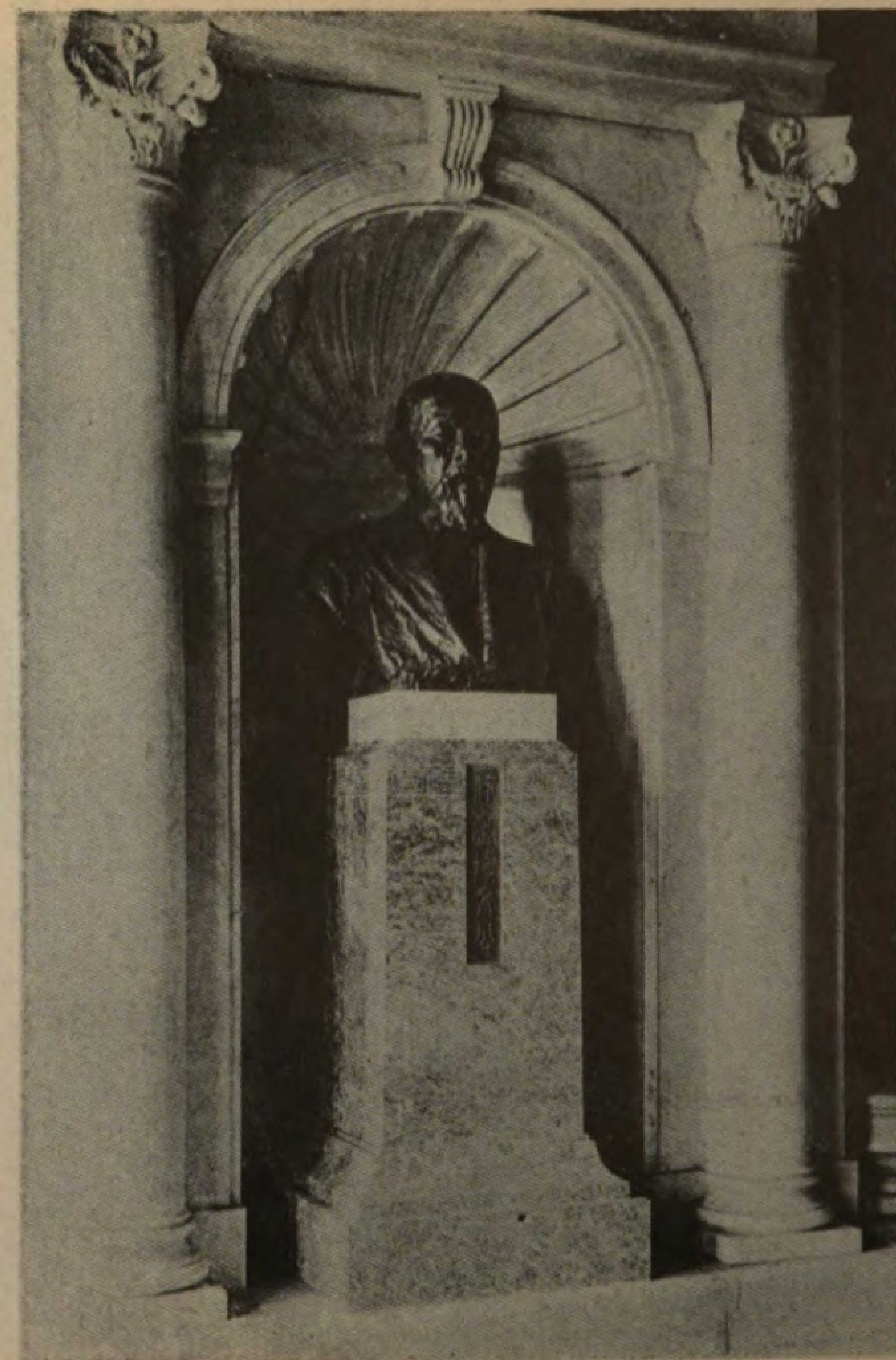
東支鐵道俱樂部



哈爾賓停車場



喇嘛僧



伊藤博文公の銅像



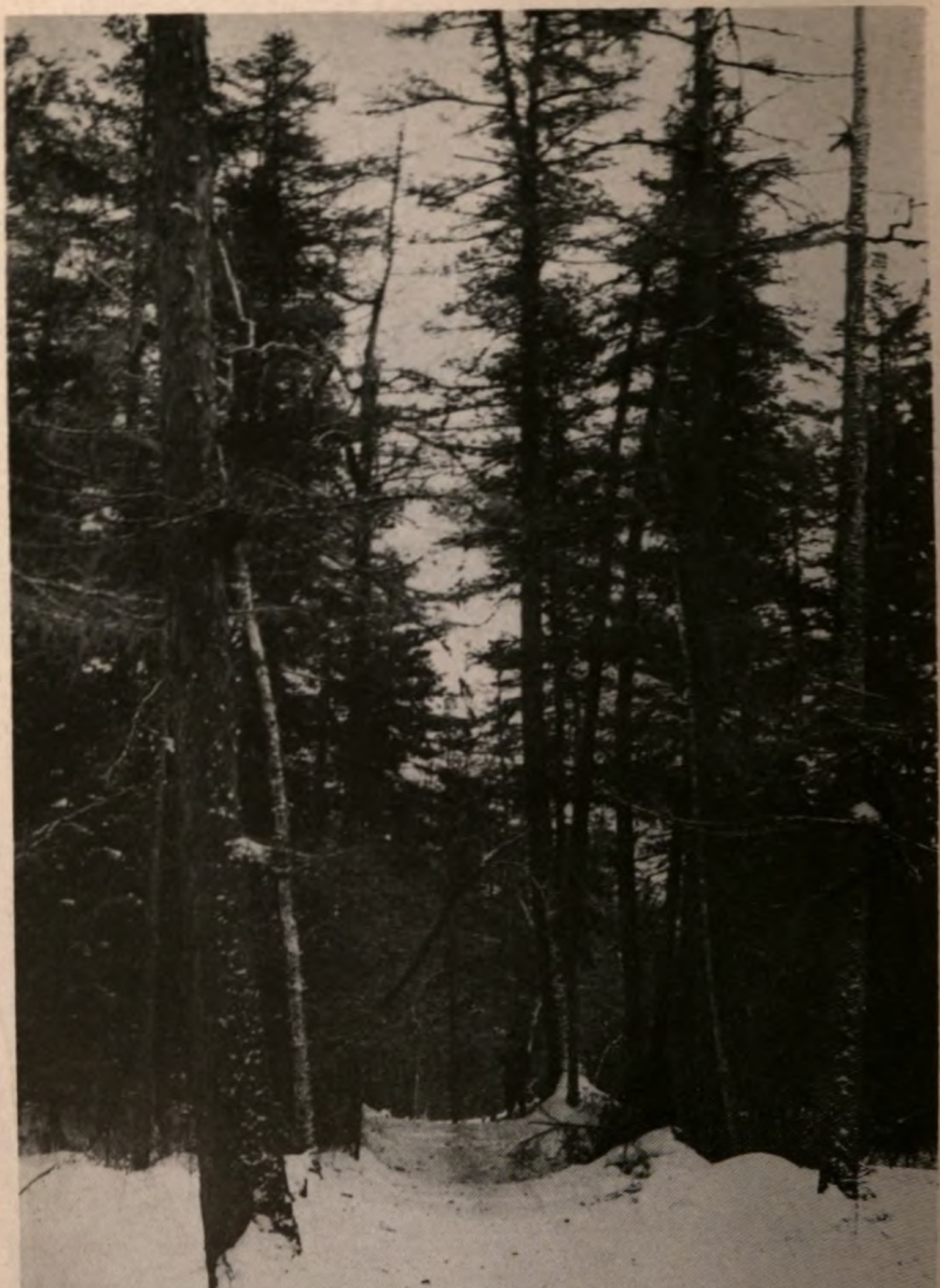
ハルビン日本小學校



吉林省の東華門



松華江彼岸の團子山



吉敦線威虎嶺附近の原始林



白菜と高粱畑



敦化の牡丹江



教化の市街



鮮人の水田耕作



安奉線の鳳凰山

國を去つて三千里　遠く遊ぶ塞外の邊
露重うして毡を屋と作し　砂深うして駱を船と爲す
草驕りて蜃市を現はし　日は春いて龍沙に入る
夷娘は碧瑠珥　鬍僧は紅袈裟
暮色大地を裹み　踽々として何くに之かんと欲す
仰ぎ看れば天寥廓　星斗卮よりも大なり
來り宿す胡人の宅　黿盧槽よりも窄し
篝火に羊肉を煨き　泥碗に濁醪を盛る
會心須ゐず通譯を重ぬるを
笑つて語なきも青眼歡ぶ
帳外風は烈うして萬馬奔る
憶ひ起す當年の仁吉汗

昭和五年春三月　麗水　遲塚金太郎

一、大正十四年十一月、劇職より閑地に就けるの翌、昭和元年の春、江蘇、浙江、廬山、洞庭、長沙、湘潭の諸名區を歴て、三峽を溯り四川の成都に遊ぶ、『新入蜀記』の小著あり。

一、昭和二年の夏、馬來半島、瓜哇、ボルネオ、セレベス、及び交趾支那、カンボヂャ、媽港に遊ぶ、『南洋に遊びて』の小著あり。

一、『滿鮮趣味の旅』は、昭和四年の春より夏に亘りて朝鮮、滿洲、蒙古の遊を記したるもの、余、齢巳に老ひたれど、雄心いまだ全く銷磨せず、今後若し好き機會あらん時は、第四次の遊びを思ふや太だ切なり。

一、この行、畏友米山梅吉氏、上田恭輔氏、石本憲治氏に負ふところ甚だ多し、滿鐵情報課の渡邊諒氏も亦た旅次余が爲めに東道の任に當らる、記して感謝の意を表す。

著　者　識

滿鮮趣味の旅

目次

滿鮮趣味の旅

遲塚麗水

朝鮮の四季

春は連翹

朝鮮の春は、李花でもなく、杏花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない、朗らかに明るい鬱金の花をもつ連翹こそは、げに朝鮮の春を象徵する花である、京城なる李王家秘苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黃金の色麗らかな連翹花の、盈々たる細條輕く軟風に吹き靡いて、嫩き春の光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、始めて春が來たわいといふ和暢の心を催うさせる、この國ではこの花を、迎春花といふ、正しくその名にふさはしい、俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、爾か呼ばれてゐるのであらう、金絲雀は德川幕府の頃朝鮮の信使が携へ還つたものである、この花にケーナリの名を冠するに至つたのは、恐らくは百數十年以來のことであらう、土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒虫にさゝれた時に、塗抹して奇効があると傳へてゐる。

夏は白楊

朝鮮の夏は正に白楊の夏である、水村、山郭、處として丈け高き白楊の、薫風に嘯嗽してゐるのを見ないことはない、枝に鵲の巢を藏してゐるなどは、詩趣あり又た畫趣ありといふべきである、私の始めて朝鮮に渡航したのは、三十餘年前、征淸役に從軍した時である、何處へ行つても童山禿丘、絕へて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今ま來て見れば、到るところ翠阜蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の既に拱するに餘りあるを見る、その白楊の殊に多きことは、この樹の成育、他の木に比すれば最も速やかに、五年にして屋根の垂木となすに足り、十年にして棟梁となすに堪ゆるに見て、併合當初の有司は特にこの木の栽植を奬勵したものであらうと思はれる。

秋は蕃椒

秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と云ふべきである、金風、郊墟に入るの時、一たび城外に訪づれる

と、村家の草葺屋根の上、殷紅、火よりも朱いこの蕃椒の、一面に並べ乾されてあるを見る、支那人が韮、大蒜を嗜むがごとく、朝鮮人は更に尤も蕃椒を嗜好する、料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない、落日、山にあり、反照、雲を爛らす時、水村山郭、一様農家の屋根に乾されたこの蕃椒の、紅酣し、硃燃ゆるの光景は、誠に綺麗な看めである、内地には昔、この物なし、このものあるは豐公の征韓役後より始まるといふ、正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に收めて持ち還つたものであらう、さればこれを唐辛といひ、更に又た高麗胡椒ともいふ。

昔、内地の飛脚が深雪のうちを行く時、この物を足袋のうちに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人達は、この物を食ふて寒氣を攘ふの自然の要求から、その嗜好を就し來たつたのであらうと思はれる。

冬は温突

年毎の明治節時分になると、麥酒が凍つて罎が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心淋しい、強いてこれりるとすれば、彼の温突である、李王

家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずこの温突があつて、冬眠の人に煦々の春を輸するのである、鮮家の床は都べて泥土で築造される、その床を作らうとする當初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴様に、三桝形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた功夫の施設のもとに、遍ねく床の面に温氣の行き度るやうに竇道を設け、竇道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据えた竈の奥に連結させて置くのである、されば日夕炊爨するその火氣は、烟と共に、榮螺の殼のごとき竇道を傳つて土床を温め、やがて屋外の煙突より放散されるのである、床には烟の室内に漏れ出づるを防ぐために紙をもつて目張りをなし、その上に朝鮮油團を敷く、庶民の多くは褥も敷かずに固き床の上に胡坐し、奇寒膚に砭するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被むりて、臥すのみである、移住の內地人は、多くは煖爐又はペーチカを置いて防寒の用意をなせど、中には矢張り朝鮮風の温突室も作つてゐる、京城及びその他の都會の內地人向きの貸家の、その一室には必ず温突の設備があるやうになつたといふ、東京でも、曾つて亡友志賀矧川氏が、代々木の邸の一室を温突式となし、年の暮、その温突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある、私も亦た招かれた客の一人であつたが、折からの徵

雪、窻邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷しい宵ではあつたが、坐間には唯だ喫烟用の煙草盆があるのみで、絶えて火氣のなかつたに拘はらず、和やかな温氣は危坐の膝を煖ためて、人をして覺えず睡りを催うさしむる美慵を感じた、さてくさ〱の料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、温か過ぎて、額に薄汗の泌み出づるを覺えたほどであつた、文筆に携さはる人の讀書述作の室か、若くは閑時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、温突室には久しく居るべからざるものであらうと思ふ、鮮民の懶惰の習性は、或はこの温突あるが爲ならむ、私は曾て平壤大戰を觀ての歸途、黄州から南首陽山を踰へて海州より汽船仁川に歸つたことがある、當時年少、二百五十韓里(邦里二十五里)を一日半をもつて踏破した、夜中、銀波の河を徒渉し、唯ある河畔の客舍を叩き、水に濡れたる服をも脱がず、行旅の鮮人達が雜然として枕籍してゐる温突の室に入つて、夜の明くる間の少睡を取つたが、やがて惡夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸甑の中より出でたる甘藷のごとく、白氣濛々として滿身より立ち昇り、流汗、膚に遍ねく、堪ゆべからざるの奇痒を覺えた、傍へに臥してゐたる鮮人達も立ち騒ぐこの物音に夢を破られ、眼を睜りて訝り看めてゐるも道理こそ、濡れたる衣服

は温突の熱氣に蒸されて斯くの始末となつたのであつた、今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡りて龍井村を訪づれた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈、旅館の主人の親切から温突の室に幾夜を過したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず、襲ねた衾を撤ね除けて、僅に一枚の小夜具を被りて辛うじて眠ることを得たこともある、しかも夜明けて後の心地は、何となく瞢騰として、、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、温突はたしかに邦人の習性には適したものではあるまいと思ふ、さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない、寒威の酷しい朝鮮の、しかも彼の土壁、草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この温突あつて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

絕影島の朝比奈義秀祠

三十餘年の昔、私が始めて筆を載せて朝鮮陣に從軍した時の海路は、馬關から長崎へ、長崎から對島の嚴原に寄港して、しかる後に釜山、仁川とたどり行つたものである、これを今日の、馬關より直ちに美しい聯絡船に載せられて、朝と夜との二回、僅かに七時間にして往來し得るに較べては、殆んど隔世の感がある、當時の新聞記者は、物質的にも亦た精神的にも惠まれてゐる今の新聞記者に較べて、極めて菲薄な待遇を受けては居たが、何れも國士をもつて自から任じて、筆を投じて戎軒を事とするの意氣があつた、成歡の戰爭前一月、私共新聞記者の多くは郵船會社の肥後丸で渡航した、船室は今のやうに一二三等に別れてゐたが、當時は上等、中等、下等と稱せられた、一行は多くその下等を擇んで乘つた、今の內務大臣安達謙藏氏も元の商工次官柵瀨軍之佐氏も亦たその下等の客であつた、中に獨り中等室を占居してゐた人は、畫家久保田米僊氏あるのみであつた、米僊氏は當時齡初老を過ぎて一行中の長者であつたのである、玄海灘から青魚海を過ぐる時、千二三百噸の小さな肥後丸は怒濤の掀飜するところとなつて、下等客は殊に痛く

船暈を感じた、その苦しさに、いづれも客室を脱け出して、蹌踉として陸軍參謀官のゐる上等室や、米僊君などのゐる中等室を襲ふて、そこに鮨詰となつて風波の一夜を過したくらゐ、航海の苦楚を嘗めたが、矢張りその意氣は昂然としてゐた、そして肱を張りて豪語して、朝鮮陣に肥後丸は好箇の妙讖である、肥後の加藤(下等)に乘り得た乃公等には、更に好箇の妙讖であると威張つたものである、私達は烟雨を籠めた釜山埠頭に渡韓の第一靴痕を印して、その夜をいぶせき海邊の旅館に過したことを覺えてゐる、翌朝、雨はいまだ霽れない、欄頭に立つて騁望すると、童禿の山ばかりと思つてゐたその双眸に、欝々蒼々たる松山の映じた時には、皆な歡呼の聲を揚げた、旅館の女中に問へば、山の一つを龍頭山一を龍尾山といひ、龍尾山の麓に見える白亞館が日本領事館であるといつた、棧橋もない貧弱な港であつた當時の釜山に較べて、今は聯絡の巨船が棧橋に橫づけになり、旅客は土を踏むことなく直ちに驛舍のホームに入りて、そこに待つ廣軌の汽車に乘ることを得るその變化に驚嘆される、斯る變化ありしに拘はらず、龍頭、龍尾の兩峯は舊時のごとく、欝々蓊々として萬古の翠を凝らしてゐる、龍頭山には龍頭神社あり、龍尾山には龍尾山神社がある、共に我が延寶六年、朝鮮では李朝の肅宗の四年に、對島の領主宗氏の創建に

係るものである、龍頭山のは、その初め一小石祠を置いて讃岐の金刀比羅神社を勸請し、海路の平安を禱つたもので、其の後、八幡、住吉、天滿の諸神を合祀し、慶應年間には天照大神を齋きまつり、兼ねて素盞雄尊、神功皇后をも奉祀し、龍尾山には最初、武内宿禰を祀り、次いで加藤清正、朝比奈義秀を合祀したものである、兩社とも、創建以來二百五十餘年の星霜を歷て、釜山市民の氏神として崇尊されてゐる、正に朝鮮に於ける我が最古の神社である、その龍尾山祠に朝比奈義秀を合祀したのは、初め、北條時政、幕府の外戚といふをもて大いに權威を振ひ、荏柄平太に些かの過失のあつた時、時政のはからひで搦め取り、繩をかけて鎌倉へ引き出したのを、豫てから時政の專恣に悲憤してゐた和田義盛が、一門の緣につながる平太の爲めに終に堪忍袋の緒を切つて、九十三騎の一黨俄かに賴朝に背きて、由比が濱邊に一日一夜の奮鬪をつゞけ、刀折れ馬斃れて屍を平沙の上にさらした、平太の領地相州玉繩の莊はこれを時政に下し賜ふたが、亂終つて後、和田の一族を索めたところ、義秀一人のみは杳としてその行方が分らない、或は信濃埴科の八代寺に入り、後、木曾の山に隱れ住んで世を終つたともいひ、或は難を海島に遁れて天壽を終つたと傳はるが、水戶の儒者、靑山延于の皇朝史略には、延寶年中、水戶の義公、人をして

朝比奈義秀の事蹟を對島守宗義眞に問はしめた、義眞は更にこれを朝鮮に質し、さて報復して申すやう、釜山の絶影島には、今ま猶ほ義秀の祠があると世人は相傳へてゐる、義秀の高麗に赴いたといふことは亦た妄ならざるなりといふ、延寶は朝鮮の顯宗、肅宗の世に當る、その義秀を祀つたのは、定めて當時の事であらうと思はれる、さりながら朝鮮が、如何なる理由によつて、義秀の祠が、絶影島にあると答へたかが記されてないのは遺憾である、史にその終るところを知らずと記されてある時の三郎義秀は、正さに卅七歳の壯者であつた、私は小供の時から鎭西八郎爲朝とこの三郎義秀が大好であつた、大弓を手挾さんで、海島の荒磯に起つ青鷺の跡を追ひ、一葉の孤舟、千里の洪濤を度つて、遠く琉球に入つた八郎と、額に海老隈とつて、鶴の丸の大紋素袍の袖を飜がへし、角鍔の太刀、疊烏帽子、工藤が前に坂東聲を張りあげて、曾我の二孤の爲めに萬丈の氣焰を吐いた歌舞伎の舞臺の上に觀るその男らしい三郎には、何時も幼な心を躍動させたものである、義秀が建保の亂を遁れて海島に入つたのは爲朝の琉球に赴いたのと數十年を隔てゝその軌を同うす、共に當時に於ける大航海者として、我が海上權發展史の中古の第一頁を飾るの人である。

吾が佛教の朝鮮に弘通したのは、六百五十年の昔、函館から一葉の扁舟に乘じて、北の方靺鞨に渡り、沿海州に沿ふて南下、半島に妙法を敷いた日蓮宗の傑僧月持上人である、憾むらくはその終る處を知られない、その後二百九十餘年を歴て、天正十五年、織田信長の臣奥村掃部といふもの、本願寺十二世敎如上人に就いて僧となり、名を淨信と更めて釜山に航し、高德寺なる伽藍を創建して布敎に努めた、我が寺院を朝鮮に建立したのは、これをもつて嚆矢とする、その後久しからずして豐太閤の征韓役となり、慶長三年我が軍の凱旋と共に、淨信も亦た寺を棄てゝ還り、やがて唐津で入寂した、明治十年、時の外務卿寺島宗則は、朝鮮に布敎すべく本願寺にこの事を謀つた、本願寺では淨信幾代の孫奥村圓心を遣はし、祖先の遺蹟ある釜山に伽藍を剏め起して法輪を轉ぜしめた、今の本願寺別院は則ち是れである。

新羅の古都慶州に遊ぶの記

日韓は一家

慶州は我が奈良である。

青丹よし、故き都の昔のさまは、その面影を今に留めて、古寺あり、古塔あり、古墳あり、古墟あつて、徂春を追ひつゝ汗漫の遊びに幾夜かをこのあたりに過ごした私は、その温雅なる山河たゝづまゐを觀て、恍として奈良郊外の路を行くかの想ひがした、但、憾むらくは、そこに滿地の金を敷いて、徂春の平野を粉粧する大和路の菜種の花を、絕へてこの地に見ることが出來ないことであつた。

太古の日韓兩國、我が出雲地方と朝鮮南部地方との行き交ふ楫の乾はくまもなき頻繁な往來をしてゐたことは、古史に徵しても明かなる事蹟である、素盞雄尊が居たまひし曾尸茂梨は今の江原道の首都春川の牛首山なりと傳へられ、その後御子大國主尊を將て熊成峯に住まれたもふたと

いふは、今の忠淸南道の公州であると傳はつてゐる、崇神朝、辰韓のいまだ崛起せざる以前の、駕洛の國が、新羅と戰つて援を我が國に求めた時、鹽乘津彥を遣はしてこれを保護し、今の金海、その頃の駕洛の都に日本府を置かれたことも日本書記に見えてゐる、後、神功の親征となり、新羅、高麗、百濟の朝貢となり、應神朝には百濟より阿直岐、王仁を遣はして儒教を傳へ、鍛冶、釀造の技術を齎らし、雄畧朝には陶匠、畫家來朝し、欽明朝には同じく經文と佛像とを獻し、更に建築、彫刻、鑄金、機織の術をも傳へて、支那、印度の文學、宗教、美術、工藝は、都べて朝鮮半島を經て、我が文化の發達に貢獻したのである、辰韓六部より出でゝ、年甫めて十三にして干の王位に陞つた新羅の始祖朴氏の赫居世は、正しく出雲族中の名門の出であり、又た昔氏の始祖脫解王と、その帷幕にあつて獻替した大輔の瓠公とは皆な日本から渡來した人である、駕洛國初代の金首露王、これも亦た日本の人であることは、明らかに朝鮮の史書に載せられてある、神武天皇の御兄稻氷命も亦た彼の國の王とならせらる、この時代は恰も新羅史の尼師金朴氏の起れるに相當す、朴は瓠に乘りて海上より來たといふので、瓠の音によりて朴氏と稱し、大輔の瓠公の名も亦た瓠より起つたと記される、皆な倭國、卽ち我が西國より來たのであることを語る、

朴氏に代つて尼師金となつた昔氏は、倭國の東北千里なる多婆那國王が、倭國王の女婿となり、その子の脫解が韓地に來りて昔氏の祖となつたとある、多婆那は思ふに但馬の訛言であう、朴氏の系統が逸聖尼師今の世となつたのは、後漢の順帝の時代に當り、其後桓帝の永壽年中、朴氏の女婿が逸聖に代つて阿達羅尼師今となり、阿達羅は昔氏の子孫伐林に位を讓ると新羅の古史に見える、昔氏が朴氏に代つた頃は、世代をもつて推すに我が孝元朝に相當する、恰も天日槍の歸化した時代である。

天日槍が渡來したのは、先づ新羅の對岸にあつて外國交通を司つてゐた筑紫の倭國に來り、伊覩縣(今の怡土郡)に植民して伊覩縣主五十迹手の祖となり、更に內海を歷て播磨の宍粟に停泊したらしい、當時は室津もその邑內であつたと考へられる、朝廷は宍粟と淡路の出淺とに住居を賜はらんとしたのを、臣自から諸國を視て後、心に協ふ處を賜はれかしと啓上して聽許せられ、宇治川を遡りて近江の吾名邑に暫く停り、更に若狹を經て西、但馬に至り、終に住居を定めたのである、日槍の暫らく開拓した吾名邑は、息長の名に呼び做され、日槍の去つた後には野州にゐた近江の國造家これを收め、日槍の留め置いた從者を鏡山の谷に移して、こゝで陶器を造り初めた、

又た息長はこれを女の水依姫に傳へたが、姫は開化の皇子彦坐王の妃となり、丹波道主を産んだ、崇神朝に四道將軍の一人であつた丹波道主はこの人である、日槍が近江を去つて越前敦賀から若狹の小濱に渡つた時は、恰も丹波の大縣主より殖民し、その女竹野媛は開化天皇の妃となり、やがて丹波道主を迎へた勢力家があつたので、去つて更に但馬の出島(今の出石)に至り、縣主但馬前津耳の女麻多烏を妻とし、子の諸助を生む、是が但馬家の先祖である、今の出石の式內大社一の宮は日槍が齎らし來つた八種の神寶を齋き祀れる社殿と稱せられ、御出石神社も亦た日槍を祀つた社であり、諸杉神社は、子の諸助を祀つたと傳はる、但馬日高の女高額媛は、丹波道主家の息長宿禰に嫁した、是が息長足姫乃ち神功皇后の御母である。

靜かに日韓の史書を繙いて想を三千年の昔に馳すれば、當時の日本海は、浮寶、天磐船、風帆雨蓬、互ひに馳せちがひて、迎日の灣や、出雲の濱は、蠻歌漁唄、いと賑はしい海句であつたであらう、兩國の民が實に一家の親をなしてゐたことは、日本海を庭掾の泉水となして極東の大邦家となるべく合體した明治四十三年を俟つて知ること正に晚しといふべきである。

吐含山の日出と遲櫻

慶尙道の名邑大邱から、東に折れて鐵路は慶州を歷て蔚山に至るの線と、慶州より岐れて迎日灣に近い鶴山に至る線とがある、慶州は大邱を距ること十七里、乃ち新羅の故都である。

大邱の達城公園には、丘の上に天照大神の御社がある、別に七星公園と名づけた一區の平蕪があるが、そこには何等の施設はない、唯だ七箇の大石が、相倚り相離れて數畝の地に錯落しつゝ横はつてゐるがある、李朝の中世、慶尙道の監察使に李泰用といふ人があつた、名門の女を娶つて琴瑟頗る相和してゐたが、いまだ一人の子すら擧げない、或る夜、燦然たる七箇の大星が、相聯ねて天昊のやうな凄ましい音響と共に南門外に隕ちたと夢みた、人を遣りて見せしめたところ、果してここに七箇の大石があつた、泰用は、我にこの隕石の數に當る七人の男子を授けたまへと天に禱つた、夫人はやがて一男を擧げた、泰用はそのうち尤も大きな石上に、その子の名の李泰斗と彫りつけた、翌年、又男子を擧げて、李義斗と命名して石に彫りつけた、それより五年、年每に男子を擧げ、その名に皆な斗の字を呼びて石に鐫つた、北斗七星の祝子といふのであ

る、この石、今も猶ほ深く七星の名を鐫り留めて草萊のうちに橫はるを見る。月に三回、日を期して開かるゝ大市は有名なものである、殊に牛市のごときは、各道中の第一と稱せられる、朝鮮の農家では、牛は畓畑を耕耘する神獸で、人の力は與からずと信仰せられ、その牛を養ふや、これを草野に放牧しないで、邸中若くは屋内に置いてこれを飼つてゐる、牛は自然に人間の言語動作を馴れ親しんで、温和な性質になるのだといふ、朝鮮牛は、食用肉として、最も美味なるものと稱せらるゝ、内地の神戸牛が、肉味の優秀なると世界一との稱あるは、朝鮮牛を移入して、先づこれを但馬地方に送つて放牧し、然る後、更に神戸に輸送し來るからであるといふ、朝鮮牛の毛色は、十中の九分九厘まで、皆な赤褐色である、學者は、赤褐土壤なるこの國に生息してゐる爲に、自然陶冶の理法上、保護色として地方土色になつたものだと說いてゐるが、内地の黑色土壤の地に黑牛を生じ、支那の黃色土壤の地に黃牛の多いと同じ現象であらう、斯くして朝鮮牛は、その生存の必要上自然に赤褐色の毛色となつた結果、その皮革も亦た赤褐色で、革としてこれを韋めして優良なる品質と價値とをもつてゐる、隨つてその體毛も亦た良質であるために、近來その毛を染織して高麗毛織を製出するに至つたといふことである。

慶州の一夜

料峭たる暮春の晩風、襟を侵していと寒むい大邱の黄昏を出でゝ、私は汽車に上つて九時に慶州驛に着いた、慶州驛は、故都の風物に相應はしい朝鮮式の建築で、他のバラツク式ペンキ塗建物とは全くその撰を異にしてゐるのが先づ私を喜ばせた、驛頭に提灯を簇らせて、多くの旅館の若者は爰を先途と喧譟しつゝ旅客の勾引に努めてゐた、私は驛長の案内でS邦人旅館の客となつて、いぶせき一室にこの夜を過した。

新羅の始祖朴赫居世が國を剏めたのは我が崇神朝の四十一年、支那では漢の宣帝の五鳳元年、(西暦紀元前五十七年)の時であつた、その後國運は次第に進展し、第二十九世の武烈王及びその子の文武王の時に至り、唐の力を假りて半島を統一し、王位は朴氏の十世、昔氏の八世、金氏の三十八世、都べて五十六王九百九十二年の長きに及んで、敬順王の高麗に降つたのは我が朱雀朝の承平五年、唐は廢帝の淸泰二年、西暦の九百三十五年の頃であつた、その間、第十九世の訥祇王から、第二十八世の眞德女王の頃まで二百數十年間は、支那南北朝の影響を受け、その後期に

ありては、佛敎の傳來と之れに伴ふ藝術の輸入とによりて文華の進歩を示し、更にこれを吾が邦に轉傳したのであつた、更に又た武烈王の頃からは、新羅統一期に入つて國運の隆興に伴ひ爛熟した唐の文化の移入に努め、民族的個性の發露と相融合して、やがて唐をも凌駕すべき燦然たる文華を發揚するに至り、遙かに我が寧樂朝の文物と相交渉して無比の黄金時代を現出するに至つたのであつた。

私は郡司後藤績氏と共に自動車を驅りて、總督府博物館の慶州分館を訪づれ、渡理文哉翁に導かれて遍ねく陳列品を觀、偶まこの地を訪過した園琢磨男同夫人の一行に伴隨して佛國寺に行ける諸鹿央雄氏の跡を追ひてこれに加はり、男爵同夫人と共に、半月城、氷庫趾、鷄林、瞻星臺、雁鴨池、芬皇寺の石塔、金庾信墓、鮑石亭址、佛國寺の銅佛、多寶塔、釋迦塔、挂陵、武烈王陵及び龜趺、法興王陵、金尺里及び皇南里の古墳群を巡覽し、その夜を佛國寺ホテルに過ごし、翌曉、朝鮮少女に案內させて宿雲いまだ岫を出でざる峯の峡に、思ひかけなく盛りを過ぎた山櫻の、五月の風に誘はれて、時ならぬ雪を飛ばすの岨路を辿つて、石窟庵に、妙相端嚴の石佛を仰ぎ、眼下に披展せる日本海の、千里の洪濤を蹴つて輾り昇るの、日出の大觀を領略することを得

たのである。

慶州郊外の半日

徂く春と嫩い夏、その兩樣の風物が、相持して交綏してゐるこの頃の朝鮮は、九月と十月の秋と共に、正に一年中の好時節と稱せられてゐる、私は、慶州城內や、郊外隨處の山村水郭に、鯉幟の紺碧の空高く踴躍しつゝあるのを觀て、この內地の年中行事も、やがては遍ねく偏陬の土地までに及ぶであらうと嬉しかつた。

慶州分館の温古閣本館には、石器時代の遺品土器、陶器、瓦當、塼、銅像、石佛、石憧の凡ゆる種類を收め、新館內には大正十年九月、慶州邑に近き鳳皇臺の西方なる半壞せる大塚から偶然發掘された黃金の寶冠がある、金冠には五十七箇の硬玉製勾玉を纏め、同じく黃金の瓔絡を懸け、燦然として觀る人の眼を眩射せしめてゐる、同時に發掘した黃金の銙帶、黃金の腰佩、黃金の耳環、釧、指環、碗などその純金の重量のみで、約三貫目に近い寶器が、磊々たる頽石の下に壓せられた漆棺の間より現はれたのである、木骨に靑銅を張りて、七彩絢爛たる玉蟲の翅を挿入して

裝飾した馬鐙のごときは、彼の奈良の法隆寺の金堂にある玉蟲厨子と全くその製を同うして、誠に稀代の珍寶である、瓦塼の文様も、意匠優秀に、一綫一劃、そこに量るべからざる力を籠めて、圖案の變化、眞に驚嘆すべきものがある、臨海殿の趾より出たといふ敷瓦、その紋線の面白さ、何ともいへぬ古趣がある、四天王寺の塔の瓦、瓦の上に玻璃釉をかけたのも美しい、鐘閣内に懸つてゐる梵鐘は、もと久しく鳳皇臺下の鐘閣にあつたのを、大正四年、此處に移したのであるといふ、銘文に據ると新羅第三十五世景德王、その父聖德王の爲めに十二萬斤の銅を捨てゝ大鐘を鑄んことを思ひ立つたが、果さずして世を捐てたのを、その子の惠恭王、父王の志を繼ぎ、その七年、我が光仁朝、寶龜二年、唐の大曆六年、(西曆七七一)の十一月に鑄成したもので、口徑七尺五寸、口周二十三尺四寸、厚さ八寸、龍頭に傍ふて圓筒を有し、肩帶及び口帶に寶相花文を現はし、四面に天人を配し、銘文あり、朝鮮に於ける巨鐘のうちにて最も莊麗なる物である。

鷄林は、槻、槐、榎などの古木の繁げつた二千餘坪に亘れる幽邃なる林である、新羅第四世の脫解王の九年三月(垂仁朝の九十四年)金色の小櫝、大木の枝に懸りて白鷄その下に高く鳴けるを、脫解王取つてその櫝を開けば、容姿奇偉なる小孩ありて現はれ出でた、立てゝ太子となし金

の櫝より出たので金氏を號し名を閼智といひ、初め始林であつたのを鷄林と更め、やがては、新羅の國號となり又た朝鮮の異名となつたのである、朝鮮には鷄林の外に、槿域といふ異名がある、この國では槿花のことを無窮花といふ、內地のムクゲは正しく朝鮮語の轉訛である、槿花は旦に開いて暮に散り、日々に新たに咲き繼ぐ花であるので、その國運の窮りなきを祝する意味で、斯くは呼び倣すのであるといふ。

半月城は蚊川の北岸にある半月形の土城で、もとは瓠公の宅地であつたのを脫解王こゝに居り、第五世の婆娑王の十二年に築いて城を作したと傳はるが、今は荒草離々たる一平丘に過ぎない、そこにある石氷庫は、當時の氷室で、入口の楣石に崇禎紀元後再辛酉秋八月移基改築の刻字あり、李朝の英祖の時に改築したものである、月城の北の隴間には善德王の築いた天文觀測臺の、圓筒形の上に二重の井桁を置いた高さ二十九尺に餘る瞻星臺がある。

黃荻敗荷、漣漪萬疊の愁を皺めた雁鴨池には、白衣の漁翁が汀邊の石に踞して、無心に綸を垂れてゐた、芬皇寺趾の石塔は善德女王の創建で、元と九層であつたので今はその三層を留むるのみである、入口の左右には金剛力士を陽刻し、石階の四隅に石獅子を置いてある、塔に隣りて新

羅十賢の一人薛聰の父なる和諍國師碑の基石がある、私は四天王寺趾の石礎の宛かも彼の筑紫大宰府都府樓の墟址にある石よりも大いなるに驚嘆し、更に又た新羅二十九世の武烈王と三十世の文武王に事へて半島統一の大業を翼賛した名將金庾信の墓の壯大なると、武烈王陵及び陵碑の龜趺と螭首との雄麗なるを、耽觀これを久うした。

鮑石亭趾は、南山の麓を流れる淺沙、僅かに雨後の行潦の痕を留むるに過ぎない細い川に、傍ふ一區の土墻のうちにある、半ば枯れたる喬木の、その蔭の掩ふところ、十數弓の地に曲水の遺蹟がある、窄き石渠、環のごとく繞り帶のごとく伸び、更に蛇のごとく麗透として走れるさま、自から鮑貝の形をなして、その廣さは短徑約十五尺、長徑約十九尺に亘り、世々の文雅の王者達の、此處に曲水の宴を催したるところと傳はり、昔は細流、この石渠のうちを度りて微瀾に羽觴を浮べ、迂餘曲折して或は行き又は留まり、汀邊の石に踞して、吟髭を捻斷しつゝ想を構ふる群詩客の一觴一詠したるところであらう、新羅第五十五世景哀王の十月、妃嬪と共に此に遊びて、置酒管絃、その興正に酣なるの時、後百濟の甄萱、俄かに大兵を率ひて宮闕に入り、王は妃嬪と共に終にこゝに害された史上の慘劇は、茫々一千年、今は唯だ址畔の半死の古木の枝に、鵲の群

れ啼くあるのみである。

私は、新羅王家が、その傳國の璽なる金尺を、唐の帝から徵し上ぐべき勅を受けて、これを城外の山に埋藏し、亡ふこと既に久しく之くところを知らざる旨を傳奏したが、其後、山を發してこれを索めたところ、既にその所在を失つたと傳へらるゝ金尺里、皇南里とに古墳群を觀てその多きに驚嘆した、古墳には漢の封土式あり、又た邦式の瓢型とがあつて、快走する自動車の上で、指を摟へて數えたところ、三十餘箇の多きに上つた、私は最後に、掛陵里の掛陵の、芳草芊々として靑氈を敷くに似たる平蕪のうちに車を停めて、園男爵同夫人の一行と共に降りてその陵の規模を觀た、この陵は傳說定かならず、東京雜記には、何の王の陵なるかを知らず、俗に傳ふ水中に葬り、柩を石上に掛く、因つて土を築いて陵となす、故に名づくとあり、口碑には文武王の陵といふ、封墳は小丘の南にあつて、基邊に護石を繞らし、十二支神像を陽刻した石を立て、東に當る兎神石、西に當る鷄神石、北に當る鼠神石、馬神石は正に中南に向つて立てられてある、坏土式の土饅頭で、上には靑草離々として、中に躑躅花の雜はり咲くのがあつた、護石の上に、昔は石欄があつて圍んでゐたが、今は概ね散落してゐる、獸面人身の護石を墓に用ゆることは、餘

り例のないことであると諸鹿氏は語つた、陵前十數歩を相隔てゝ、石豕、石虎、並びに文官武官の石像が相列んで立つてゐるが、石獣、石人の手法は最も雄渾、瑰奇の氣象を覩せてゐる、この陵は實に新羅朝陵墓の典型を稱すべきであると思ふ。

佛國寺に詣づ

神鑿鬼斧の多寶塔

佛國寺は佛國寺驛を距る東北約一里、吐含山の麓、海拔七百六十八尺の平丘の上にあつて、その前面の斷崕をなせる處に石壇を築き、西東に各々奇巧を極めた兩箇の石橋をつなぎ架け、磴道長く山門に續いてゐる、東の橋磴を靑雲橋、白雲橋といひ、西の橋磴を蓮華橋、七寶橋といひ、東橋を登れば紫霞門に入り、西橋を上れば安養門に入る、紫霞門のうちには金堂、今の大雄殿があり、安養門のうちには極樂殿がある、新羅第二十三世法興王の草創(我が安閑朝)で、その後三十五世景德王(我が天平勝寶年間)の時大いにこれを修築し、規模の雄と輪奐の美をもて稱せられたが、數次の回祿を歷てやがて文祿の兵火に罹り、全く荒頽に歸してゐたのを、李朝英宗の世、故の規模によつて改築したものだといふ、昔は紫霞門より步廊左右に走りて其の端は樓閣となり、更に北に折れて金堂の左右に達してゐたが、今は唯だ西方の一角に、泛影樓なる西樓を存す

るのみである、青雲、白雲、蓮華、七寶の石磴の下は皆な穹窿となりて、昔は崖下の清池に枕んで架せられたものと知られた、更に又た崖に傍つてゐる處には、幾個の石楹並び出でゝ、廡廊を受くるの基礎を成し、二箇の大石樋ありて、その嘴長く匡面に突出しあるのは、丘上なる寺域の雨水を集めて、これを崖下の池に放下したるものであらうと思はれた、その規模の雄大なる、朝鮮に於いて私の親しく觀た伽藍の中で、尤も優れたものであらうと信ずる。

大雄殿の前には、右に多寶塔、左に釋迦塔が相對して立つてゐる、多寶塔は花崗石をもつて造られ、先づ方形の基臺に傍ふて四もに石階を架し、初層には方形の中心柱ありて四隅に方柱を樹て、その上に斗拱あつて方形の屋蓋を擎けてゐる、屋蓋の上に第二層の勾欄があり、是れより更に層を累ぬること三、皆な八角の平面を有し、柱及び勾欄の形狀は、實に技巧の妙を極めてゐる、八角形の屋蓋更にその上を掩ひ、頂に相輪がある、元と基壇の四隅には、石獅子を置いたが、今は散佚して僅かにその一箇を殘すのみである、多寶塔、高さ三十尺、姿態秀麗にして奇想縱横、堅緻なる石材を驅使してさながら木材建築を見るがごとき温籍穆茂の技巧を擅まゝにし、風打雨淋、千有餘年の星霜を歴て、依然として當年の神斲鬼斧の妙趣を傳へたことは、眞に驚嘆すべき

藝術であると思ふ。

左の釋迦塔は一に無影塔と稱せられ、二成の石壇上に立つた三層の石塔で、頂に寶珠露盤を戴いてゐる、塔身の四隅には柱狀を刻し、軒は五層の持送りによりて支へらる、その手法は簡素であるが、各部の權衡は最も中正に、仰ぎ觀て優美暢和の感を起さしめる、高さは二十七尺と註せられ、新羅統一時代に於ける此の種の塔婆の翹楚たるべものである。

大雄殿には高さ一丈の彌陀如來の座像を安置してある、極樂殿の左右にある石猊は奇古愛すべし、殿內の壇上、右なるは盧舍那佛、左なるは阿彌陀如來、共に等身の金銅座像である、姿勢の雄偉にして衣文の優健、妙相の端麗なる、亦た當時の代表的傑作であると思つた、憾むらくは寺僧の俗惡なる、檀那の寄進によつて佛身に粉泥を塗抹し、古色鑑するに堪へたる色澤を埋め去つたことである、但し參詣の善男善女が、手を觸れて摩挲する趺坐の膝頭や足趾のあたり、粉泥漸く剝落して金銅の妙光微かに露出するのが見えた。

殿前の鬱金櫻

大雄殿の前には、盛りを過ぎた山櫻の大樹があつて、幾斗の落花を苔の上に敷いてゐる、昔からある欝金櫻である。

背廣服に茶の中折帽、極めて簡素の服裝をした園男爵は、齢、古稀に近い人には似ず、磴道の登降や堂塔の巡覽に、倦むことを知らざるさまに健歩した、その古建築、古佛、古塔に對する鑑賞眼も、尋常の人に超えてゐるのを看取した、寺の僧房は、安養門の内の湫陋なる一小屋がそれであつた、半ば扃を鎖された隔の邊に、この山で採つた藥草を藥研で磨り卸して、丸め作られた丸藥が、大きな竹籃の上に盛つて日に晒らされてあるのを見た私は、老僧に應はしい閑事業であると思つた、老僧は佛國寺ホテルの支配人から、男爵一行の訪過したといふことを聞いて、倉黃として出迎へた、そして念珠を爪操りながら、その後に伴隨して、案内役なる諸鹿氏の質問に答へてゐた、遍ねく境内を觀終つた男爵は、午後三時、こゝから自動車を驅つて、一路蔚山に赴き、海を傳ふて東萊街道を釜山に出で、この夜埠頭を解纜する聯絡船で門司に還るべく出で立つた、私達は佛國寺の門前まで男爵を見送つた、その袂を分つの時、老僧の合掌頂禮、頗る慇懃であつた、その態度より察するに、定めて莫大な喜捨錢を得たことであらうと微笑まれた。

男爵の一行で、一の虚室もなく占據するところとなつた佛國寺ホテルは、一行の出立の後は、大風の後のやうに靜かになつた、辛うじて三井物產京城支店長の室に同居して、窮屈に午餐をしたゝめた私は、やがて廣い一室を占領することを得た、今が今まで男爵夫妻の居た頭等の部屋であつた、疊三疊敷もある大きな如輪目の桂の卓子に頰杖をつき、女中の擎ぐる芳茗を啜り、悠然として眼下に展開する古都の山村水郭を騁望する、得意ならざるを得ない、ホテル支配人の夫妻は、善く亡友宍戸思無邪氏を識つてゐた、宍戸氏は晩年、朝鮮鐵道の支配人となつて、總督府で買收しない以前の慶蔚鐵道の經營に當つた人である、私の小學時代からの舊友で、苦學、力行、自からその運命を開拓した、酒が好きな男で、醉ふと談論風發する、朝鮮へ來てからは殊に酒量を增し、終に腦溢血で世を捐てた、最も書を善くし、殊に正楷に妙、大正十一年の八月、私の老母が壽をもつて終つた時、私は遠く朝鮮に書を寄せて、その墓碣の字を書かんことを乞ひ、その快諾を得た、現に私の家の菩提所の兆域に立てる墓碣の字は氏の書したものである、ホテルの主人も、夙に亡友から私の名を聞いてゐたので、親切に私を遇してくれた、佛國ホテルは、朝鮮鐵道局の經營に成り、茶代を要せず、唯だその勘定の一割を割いて女中に與ふる組織であるから、

旅客をして商量を費やさしむる煩累なく、客室の雅潔の外に、殊に山の井の水を引いて、電力をもて沸かすその風呂場は、函根の湯本、塔の澤の温泉浴場に優るとも決して劣らぬ設備である、釉彩瓦を積みて作つた廣い浴槽、珠を溶かしたやうな温泉は、玲瓏として些の庾すところなく、日に焦けて眞ッ黒となつた私の身體も、さながら象牙のやうに透けて見える、旅には風呂が第一の御馳走である。

石窟庵の石佛

曉早く吐含峯に上つた私は、齡十六といふ朝鮮の少女を東道者に雇つたのである、髮をお下げに結つて、筒袖に內地の女學生の穿く海老茶の袴をつけ、ズックの靴をはいてゐる、普通學校を卒業してゐるので、言語も動作も內地の少女と同樣である、山上の石窟庵までは二十七町、路は山の峽をうねつて、急坂が多い、倂合以後に栽えられた松の木が、六七尺に伸びてはゐるが、まだ清陰を路に敷くには至らない、外套なしの合著を衣た私は、流汗の背なに浹ねきに堪へなかつた、喘ぎつゝ洋杖を力に登つた、途に盛裝した女人の群に幾度も行き逢ふ、石窟庵の石佛に、子

を投げたまへと禱つて歸る人達だといふ、山の峽に思ひ掛けなく山櫻が、盛りを過ぎて、落花雪のごとく路もせに散り布いてゐる、懷かしい故鄕の山里に啼く羯鼓鳥も、彼方此方に啼き交はしてゐる、老鶯も、法、法華經と啼いてゐる。

急坂はやがてうねつて、一つの峰の頂に出た、山は東南に打ち豁けて洸洋たる靑海原が見える、日本海である、今や正に日出、一髮を拖く水平線の一角から、初めは爪紅の痕のやう、やがては良窯の盃の緣のやう、やがては朱の小櫛の背のやうに、次第〳〵に輾り出てた太陽は、俄かに朱の盆のやうに、眞紅になつて千里の海の彼方に現はれた、私は萬歲を三呼した、朝鮮少女も私に和して三唱した。

路はやがて下り坂になつて自づと人を石窟庵に導くのである、路の盡くるところ、隆然として圓い小丘の下に、石造の洞門を望み見る、それが石窟庵であつた、四邊は雜木林、洞門の下には十數級の石壇があり、石壇の下には、小さな朝鮮家屋があつて、菓子やサイダーやを賣つてゐる、主婦は、私の案內者である少女の姉で、參詣客の爲めに紀念寫眞を撮る技師である、石壇に傍ふた匡の陰から、淸泉濺々として湧き出でゝ石臼のうちに落ちてゐる、藥水であるといふ、私は寫

眞屋の床几に腰かけて、ニュームの碗に其一杯を酌ませて飲んだ、清冽な好い水である、新羅の第四世脱解王は、月城に居を定めてから、日毎にこの吐含山に登つて、遙かに日本海を望み見るのを樂みにしてゐた、或日、例の如く山に登つて海を眺めたが、頻りに渴を覺えたので、その從者の一人に命じて水を汲み來らしめた、しかるにその從者も亦た咽が燒けるやうに渴してゐたので、王樣には內證で、最初に汲んだ沙鉢の一杯をしたゝか飲み乾したところ、不思議にも唇が沙鉢にぴつたり着いたまゝ、力に任せて引き離さうとしたけれど、眼に見えぬ大針で縫ひつけられたやうに離れない、脫解王は、何時まで待つても從者が水を擎げて來ないので、再び人を見せにやると、沙鉢を啣んだまゝ悶えてゐた、從者はやがて王の前に引き据へられ、日を指して今後は決して斯る不埒はいたしませぬと誓つたので、沙鉢は即座に唇を離れて地に墜ちた、石窟庵の藥水には斯ういふ傳說がある、昔は遙乃井といふ、今でも地方の者が長者と同行した時、其の人に先だつて、『先づ一杯』などゝ横著の振舞を愼しむといふ。

石窟庵は、新羅第三十五世景德王の時、佛國寺の重修と共に、國宰金大城が畢生の力を竭して創建したものだといふ、石窟の內部は長さ九尺、幅四尺の花崗岩板十五枚をもて造られ、窟口に

は左右に大圓柱あつてこれを支へてゐる、十五枚の壁面には、四菩薩、十大弟子、及び十一面觀音を、窟口の左右には四天王、八金剛力士を陽刻し、穹窿の天井、その中心に當るところに寶華があつてこれを括約してゐる、中央に趺坐する釋迦佛は、高さ一丈六尺(臺五尺)、妙相端嚴、彼の雲崗龍門の石佛と相較べて些の遜色なき非凡の傑作で、誠に新羅藝術黄金時代の代表的遺品といふべきである、本尊佛を圍む諸佛諸天も亦た精妙の作、中に就いて佛の背後に當る壁板に陽刻された十一面觀音は、殊にその優秀なるを見る、本尊佛の眉間には、元と麻尼寶珠が措入されて、日本海上、朝暾の出づる時には、靈光、四方に映射したと傳はつてゐるが、寶珠いつの世にか亡せ去りて、今は唯だ圓き措嵌の痕を留むるのみである、內壁、諸佛、諸天を陽刻した石板の上部は、別れて十箇の佛龕となり、龕中にも亦た佛像を安置してある。

私は、時の移つるをも忘れて耽觀これを久しうした、去つて再び藥水のほとりに至り、茶亭の床几に憩ふて茶を啜り、更に案內者の少女の姉氏をして紀念撮影をなさしめた。

流を溯つて源に逢ふ

飛花と流鶯とに送られて、私は吐含山を下つて、佛國寺ホテルに還つた、山の路に、淵服をつけた女人の群れに多く逢著した、佛に兒を禱るの人達である、佛國寺を過ぎる時、そこにも多くの女人を見た、墨染の法衣をつけた雛僧達は、飯を杉なりに盛つた大きな眞鍮鉢を手に〳〵擎げて、鷺次雁行して本堂の佛前に供へつゝあつた、大檀那から寄進する供養であらう、鐘は鳴り、香火は燃やされ、背を丸めて膝行する女人達は、頂禮しばらくの後、靜かに起つて佛の膝に双手を加へ、眼をつぶつて禱りの言を白す、兒を投けたまへと禱るのである、白雲、靑雲の橋の下には、いつの間にか玩具や飴菓子の露店も出てゐた、紙鳶を賣る店もあつた、その紙鳶は、內地のそれとは異つて、紙鳶の眞中に大きな丸い孔をあけた四角なものであつた。

慶州二日の旅寢、私は游子の感傷殊に濃やかなる徂春の遊行に於いて、昔を思ひ今を偲びて、殊に蒼凉千古の愁を贏ち得たのであつた。

私は、前に慶州を奈良の舊都に比較した、朝鮮の慶州は內地の奈良、內地の奈良は朝鮮の慶州である、古陵といひ、古寺といふ、古佛といひ、古墟といふ、共に游子の幽懷を惹く、さりながら、その規模をもつて論ずれば、慶州は終に吾が奈良と比儔すべくもない、朝鮮によりて將來さ

れた支那の美術工藝、殊にその佛敎美術に至つては、假令その歸化人の手を假ることがあつたとするも、國風民俗の、和暢と醇厚とに陶冶され化成された外來文明は、更に火のごとき欣求と信仰とを加へて、故土には見ることを得ざりし精神を發揮して、渾然として大成せられたる奈良の藝術は、遙かに遠く慶州藝術を超乘してゐると信ずる。

巍々十六丈の金銅盧遮那佛はいふも更なり、藥師寺の金銅藥師佛、殊に法隆寺畔の中宮寺にある木彫の如意輪觀世音に至つては、天下、何物か、これに匹敵するものがあらうか、その人天の加護によつて千三百年、些も當時の盛觀を失ふことなく、今ま尙ほ昔の如き輪奐を留めてゐる法隆寺と、鮮麗なる丹靑の蹟を存してゐるその壁畫のごときは、誠に中外に誇るべきものである。

さはいへ、流を遡つてその源に逢ふ、朝鮮に遊ぶの人は、この慶州、佛國寺を見殘してはならぬ。

朝鮮神宮に詣づ

幕府の頃、朝鮮の信使に隨つて來朝した詩人の一人が、始めて吾が下の關の旅館の板庇に降りそゝぐ雨を聽いて、『板屋雨聲多』と口吟したことがある、朝鮮では、主もなる通邑大都でも、宮殿や公廨や、四方の城門は瓦で葺いてあるが、その他は都べて一樣の草屋である、烏金の兜、金團紋の黑母衣、金鞘の太刀を佩き、金いろの鞍、虎皮、熊皮、孔雀の羽を馬に飾つて出征した獨眼龍の伊達衆が夜襲の時の軍歌には、さんさ時雨か茅屋の雨かといふのがあるが、茅屋の雨は音もせで來て濡れかゝる、板屋根の多い我が國へ來て、朝鮮の詩人は、始めて雨の妙音を聽いたのである。

私は、明治二十七年の夏、征淸の軍に從ふて、始めて朝鮮に來たのであつた、當時、田舍は勿論、首府の京城でも、王家のある宮殿と、公廨、城門、大官の邸宅が瓦葺である以外には、都べて茅屋根の家のみであつた、しかもそれが湫陋陰濕、誠に形容すべからざる哀れ無殘な有樣であつた、倭城臺の上に登つて瞻望すると、風雨に吹き飛ばさるゝを防ぐために、繩の網を覆せたそ

の草屋が、さながら鐘の一大群落のごとく脚下に披展されるのであつた、爾來、星移り歳回つてこゝに三十有五年、殊に明治四十三年、日韓併合の後に至つて、その草の屋は何時しか亞鉛板の屋根となり、板屋根となり、石造煉瓦作りとなり、鐵筋混凝土の家となる、京城の大玄關なる南大門驛、朝鮮銀行、中央郵便局、朝鮮ホテル、京城市廳、朝鮮統監府をはじめ、幹線道路に沿ふもろ〳〵の商廛は、近代的都市の美觀に急變し、朝鮮神宮のある南山公園から下瞰すれば、高樓傑閣、雲のごとく連なつて、誠に壯麗雄大のながめである。

行李を南大門驛畔の旅館に卸した私は、先づ、朝鮮神宮に參拜した、李朝の盛時に建造せられた南大門は、老rus古香を吹いて高く廣衢の上に立つてゐる、私は門の楣間に揭げられた崇禮門の扁額を仰ぎ瞻て、やがて左に折れて表參道を度る。

石の大華表を潜る、眉を壓して立てる正面の大石段は、都べて三百八十四級と註せられた、滑らかに磨かれた花崗石のこの大石段は、徂く春の和やかな陽光をうけて、そこに纖塵をも留めず、玉を展べたやうに光つてゐる、兩行の石燈籠、石段は都べて五壇、春の曙、秋の夕、この高い石段は、半ばゝ霞、霧の中のうちに藏るゝであらう、登り盡すと廣場となる、こゝにも石の大きな

鳥居があつて瑞垣は左右につゞく、珠砂利の路を行くと、やがて檜の香高く薫る勅使殿と社務所の前に出る、崕に枕む参集所、神符授與所と祭器庫を横に見て、淸泉溌々として湧く手洗舍に口を嗽ぎ手を浄めて、第三鳥居を度ればやがて拜殿、その奥邃遠、千木高しる本殿が拜せられる、天照皇太神、明治天皇の二柱の大神を齋きまつる、をろがみて後宮司高松四郎氏を社務所を訪づれた、私は氏を越後彌彥神社の宮司であつた頃から識つてゐる、二十年の昔である、當時彌彥社は火災に遭ひて社殿は烏有となつた、その復興に氏は努力してゐた、越後に汗漫の遊びを重ねた私は、一日寺泊から舟を艤して浦が濱の勝を探つた、途、日蓮上人の題目波の故蹟と傳はる海上に、ふと前方から扁舟の帆を挂げつゝ過ぐるのに逢つた、舟は次第に相近いた、彼の舟には白衣の人と洋裝の客と、緇衣の僧とを載せてゐた、白衣の人は、相過ぎつゝ手を揭げて余の名を呼んだ、諦視すれば、前夕、災後の彌彥社頭に立つて相語つた高松宮司であつた、洋裝の客は本多靜六氏、僧は柳瀨の某寺の住持であつた、兩舷相接するや、僧は躍つて吾が舟に入り來つた、高松氏の旨を受けて、私の爲めに四近の勝槪を指さし敎へんとするのであつた、この日更に相逢ふ、烟茶、時を移し、語つて午時に至つて疎雨は漸く催した、辭し去る私を、高松氏は送り來つて傘

を緊して、先づ崕邊の參集所に至り、雨烟る京城の大觀を指點した。

官幣大社朝鮮神宮は、古來王城鎭護の靈山と稱せられ、この國には珍らしく松樹の茂生してゐる南山の海拔四百有餘尺の中腹に鎭座ます、內苑十萬坪、社殿は木曾、阿利山の檜材を用ゐ、誠に森嚴幽邃な淨境である、本殿は、正に西北滿蒙の大野に嚮つてゐる、曾つて我が邦は、朝鮮の獨立の爲めに支那と戰ひ、更に復た東洋の平和の爲めに露西亞と戰つて、扶桑と槿域とは同一家となつた、滿蒙は實に我が特殊の權益を有する地境である、我が國たみは畏くも大神の威烈に賴りて、永遠に特殊の位地を保有しなければならぬ。

朝鮮王の故宮と慶會樓

三十有餘年の昔を回顧すれば、誠に夢のやうである、更に今を昔に比較すると、隔世の感に堪えない、當時、我が邦人の居留地は倭城臺の下、今の本町の一部、泥峴といふところにあつた、簇々二三十家、それも草葺の家でなければ板葺の家であつた、旅館に唯一の永禧亭があるばかり、これも內地の下宿屋同様の湫陋なものであつた、雨ふれば泥濘靴を沒するその泥峴も、やがては高莊な家並と平坦な舗裝道路となつて、鈴蘭の花のさまに數燈を並べ懸けた鈴蘭燈は、兩行に立てられて、暗夜も晝を欺く京城第一繁華の町となつたのである。

李王の在ました景福宮、そこに三箇の穹窿門を並べて上に二重屋根の丹樓を置いた正門の光化門は、門前左右に相對してゐた大きな石豸と共に他處に移されて、その趾へ、巍々堂々たる朝鮮總督府の廳舍が建てられた、その廳舍の後方には、故の勤政殿があり、三十六の大石柱をもて華麗な大殿を支ふる慶會樓は、故のごとく蓮花咲く方池のうちに聳えてゐる、博物館もその傍にある、當時、載筆觀戰の客であつた私は、暇ある毎にこの慶會樓を訪づれた、我が大島混成旅團の

一部將卒の舍營となつてゐたからである、樓に近く、圭文閣があつた、宮中の文庫である、規律のない韓國の親衛隊が、我が守備隊と交替して景福宮を去る以前に、黃卷縹帙、手に信せて裂いてこれを焚き、もつて炊爨の燃料としてゐたので、零本殘冊、丘の如く、頽れて泥土に委してゐた、私の慶會樓を訪づれたのは、その零本殘冊を捃集してこれを讀むのにあつた、今にして思へば高麗活字版の素晴らしい書籍も大分あつたやうであるが、私が拾ひ索めて讀んだ本は、多くは詩集、しかもそのうちには、後宮の嬪人の手澤尙ほ新たなる香奩體の詩集が多かつたと記憶する、佛典も亦たあつた、私は、泥土のうちから旬五記といふ隨筆と、楞嚴經とを索め得た、軍紀が非常に嚴しかつたので、半帛一紙の微といへども、携へ去ることを禁じられた、私の此書を獲たのは、當時の中隊副官乃間中尉の允許を得た爲めであつた、私は今も尙ほこれを珍藏してゐる。

私は、繡毬のやうに美しく裝はれた穹窿の大天井と、色とり〳〵の大理石でモザイクされた大床とをもつ莊嚴な總督府のホールを度つて秘書室に詣り、そこで視察に關する示敎と便宜を得たる後、勤政殿を訪づれ、慶會樓に詣り、總督府博物館を觀た。

廣やかな前庭の石疊そこには一品より九品に至る參列官人の位階の位地を示した石標が、昔のごとく整然として立つてゐる、虎頭を鐫つた石の欄干、龍文を繪き刻した石のきざはし、殿內にある王の御座、屛風、御帳、これも亦た昔のごとく看められた、私は步して更に慶會樓の池畔を度つた、岸頭の高麗緋櫻、徂春の風は落花を帶びて鏡なす池の面を吹く、小波漣々、そこに萬疊の愁をしばめて、無心の白鵝、相呼び相譬へて群れ遊んでゐた。

祕苑を觀る

私が李王職にゐる末松熊彦氏によつて、秘苑を參觀したことは、京城に於ける快心の一事であつた、末松氏は、故の末松青萍先生の令弟である、想へば二十有餘年の昔、日露戰爭の當時、青萍氏は倫敦にあつて盛んに我が帝國の宣傳に努めてゐた、その著書はやがて譯出されて江湖に流布した、その譯本の原文に雌黄を加へて、校訂の勞を効したのは實に私であつた、この因緣によつて私は青萍氏に知られ、更に又た新たに令弟熊彦氏を知ることを得たのである。

李王職廳舍の前には、幾多の櫻樹があつて正に落花、そのうちの一本は、昔しからあつたといはれる欝金櫻の大樹である、繽紛として玉砂利の上に布く落花を踏んで、私は案內されて先づ仁政殿を觀た、正に昌德宮の一部である、昌德殿は四百餘年前、成宗の時の離宮であつた、そしてその仁政殿は炎上二回の後、今より百三十餘年の前、仁宗の時に再建されたものであるといふ、その秘苑にある堂閣は、多くは仁宗及び肅宗の時のものである、昌德宮は前の李王殿下が即位の禮を擧げたところ、今は宮中の樂善齋に、大妃獨り寂しく住はせられる。

仁政殿は彼の景福宮の勤政殿と同じ結構の御殿である、御座の左右、及び列び立つ大柱の邊に、勤政殿には見えなかつた寶鼎形の暖爐のあるのが異つてゐるのみであつた、殿後から短い階段を上ると、直ちに常御の御殿に通ずるのであるが、今は誰れ人もこゝには住つてゐられないといふ、深宮邃然として、晝も猶ほ黃昏の時の如しである。

仁政殿を出づれば、小丘につゞく芳草芊々たる廣場がある、廣場の盡頭には、檜の木の香高く薫ずる極めて高雅な平屋作りの建物がある、これが前王の大妃殿下の常住の御殿樂善齋である、苑中にある他の堂閣の、老碧古丹、そこに王居の威儀を飾つてゐるなかで、獨りこの樂善齋は白木作りの、清楚簡淨、誠に奥床しい建築で、しかも際立つて朝鮮在來の形式に捉はれず、丁度由緒ある人の別莊とも思はれて、こゝに居らるゝ大妃殿下の貞淑靜寧の人となりを想望される、平生の大妃殿下には、刺繡の手藝に趣味を有され、侍女と共に綵絲金剪を手にせられ、惓めば庭除に出でゝ漫行數十百歩し、夕には時に琴棊を娛まれ、冲和怡樂にその日を過ごしたまふといふ。

小丘の上には暎花堂といふ建物である、樂善齋のまだ建てられなかつた昔は、武官試擧場で、召された赳々たる武人連は、弓を執り矢を帶びてこの暎花堂の上に立つて、廣場の一端にある金

的に向つて射術を試みたところであるといふ。

檜柏の茂林のうちを度ると、やがて方池の邊へ出る、白い櫻花と欝金色の連翹、落花は地に布いてゐる、池畔の小丘に立つて宙合樓がある、石磴を昇ると魚水門、宙合樓は、階上も階下も皆な温突式で、王の燕居のところである、樓の左に蠶室がある、書香閣といふ、妃の自から蠶を養ふところであるといふ、宙合樓の後に霽月光風觀がある、高い石の柱で屋を支へてゐる、勾欄、紙牖、極めて簡素な建築で誠に面白い、躑躅花今や盛に咲いてゐる、それが四方を圍む老樹と映發して、誠に世遙かに人遠き思がする、宙合樓の前栽には、水を湛へた石盤のうちに幾個の怪石が立つてゐる、怪石は松都の名產で、自から丘山谿谷の姿態をなし、朝鮮の園庭には缺くべからざる物である。

喜雨亭を過ぎて、拱辰門を出ると、路は急坂となつて一泓の池の邊に通ずる、躑躅正に花さき、荇藻繪くがごとき碧い池の水に影を醮してゐる、長樂門を入るとそこに兩斑の大官の邸宅に模して作られた家がある、重たい玉の冕冠を脫却して、野服蕭散たる一個兩斑の人の平生の生活がして見たいといふ王の數寄心から出た建築である、門を入ると、右には舍人の長屋、左には厩、廻

廊これを圍んで母屋を包む、廻廊は日和堂、咸熙堂の二つに別れて、長局の棲むところである、中門の正秋門を入ると演慶堂がある、乃ち主人の居るところ、玄關には『臨事無疑知道力、』『讀書有味覺仙閑』の聯牌が懸けてあつた、董其昌の筆だといふ、門を隔てゝ善香齋がある、乃ち夫人の居る内房である。

屋を繞つて茂林、路は茂林の間を行く、落々たる老松の梢に、靑鷺の巣が見える、雉子の聲、四邊にこだまする、石逕、人を導き、矼懸榭を過ぎて、泉石一區の庭に入る、石を甃みて、自から幽谷の趣きを作つたところである、大石の上に尊德亭がある、老朱古丹、葛蘿は欄にまとひ、薜苔は床を侵して、極めて風雅な建築である、一水涓々として流れて石矼を傳へ、飛泉、磵に落つ、高さは三尺ばかり、磵中の石を抱いて湍となり潭となる、潭や湍や、その深さは尺には盈たず、見て唯だその勢ひをなすのみである、水邊の石上に、

飛流三百尺

落九天來遙

看是白虹起

鬱成萬壑雷

の絶句が鐫まれてある、實に八代前の王肅宗の御詠御筆であるといふ、扇頭の小景にも値らざる這般の景觀に對して、何ぞこの詩の誇大にして溢美なるや、萬機はこれを臣僚に委ねて仁政殿裏蒿萊長ず、永日事なく唯だ燕居、涓滴のごとき泉水を看て白虹の起るといひ、潺湲の聲を聽いて萬壑の雷といふ、誠に天下太平といふべきである。

磵底に一小孔あり、水混々として湧き、科に盈ちて行くのを見た、鮮人の役人あり、これ藥泉なり、一杓を試みたまへと私にいふ、アルミニユームのコツプに汲んでこれを飲む、甘冽な水であつた。

隔ての柵門を出づれば、公開された昌慶園である。

昌慶苑の櫻花

昌慶苑の萬櫻は咲きも誇らず散りも初めぬ風情である、花間には幾百千の電燈雪洞を點じて、夜も亦た光る晩春の京城一の行樂場である、苑內には池あり、動物園あり、植物園、博物館あつて、入場者は群をなし、實に袂を連れて幕、汗を揮つて雨の雜沓であつた。

私は、春の嬉遊を樂しむ人の群をさけて、苑內の故宮を巡覽した、通明殿といふ古い御殿には古畫の展觀があつた、高麗朝から李朝にかけての名匠の筆に成るものである、今から三百七十餘年前の李廣齋の筆『觀月』は、氣品の高邁な繪であつた、五百年前といへば高麗朝の末期の姜希顏の樓閣山水の三圖は、小品ながら筆力重厚、看る人をして襟を正うせしむるものがあつた、筆者不傳の『羊の圖』は寫生眞に迫る、百六十餘年前の崔兆の『山水』、雲烟潑墨の妙いふべからず、水墨畫としては場中第一のものであらうと思つた、三百九十餘年前の李澄の『虛舟』、筆致謹恪にして敦厚、人をして敬意を發せしむる、三百五十餘年前の李霆の『墨竹』、氣韵生動し、風を含んで恍として淅瀝の聲を聽くやうである、金斗梁の『月下淸流』は渴筆をもつて繪いたもので

ある、亦た頗る面白い、百九十年前の沈師丘の『山水』は、淡彩の南宗畫、その筆致は吾が崋山に似て氣品が横溢してゐる、正面に懸げられた『呂洞賓の圖』は何れの世、何人の筆に成つたとも記してはないが、頗る我が探幽の描くところに似てゐる。

去つて又た養和堂に入つた、こゝには平安南道江西の古墳模造と、その玄室にあつた朱雀玄武の壁畫とが陳列されてあつた。

逕は委蛇して靑坡の上に通じてゐる、そこに立つ洋風の館舍は、李王家の博物館である、靴の上にカバーを穿いて、私は館に上つた。

玄關を入つて正面には、高麗時代の遺物と註せられる靑銅鍍金の觀世音像が立つてゐる、寶冠を加へて高さ四尺、その毫光は黄金である、右には勢至菩薩がある、正に一千年前のもの、次には新羅時代の鍍鑄釋迦如來像がある、これも毫光は黄金である、凡そ千二百餘年のもの、石佛の大日如來、これも亦前者とその年代を同うする、私は彷彿として彼の石窟庵の石佛の面影をこの像に觀た、新羅時代より更に二百餘年を遡つて、今から千四百餘年の三國時代の如意輪觀音がある、妙相微妙、私は奈良中宮寺の佛を想はしめた、同じ時代の石扉、金、銀泥、紺、白、黄紙の

古寫經など、人をして應接に遑まあらざらしむ。

樓上は全部、高麗燒の大蒐集室である、各種各様の高麗燒、私は頤に傳ふる垂涎を手繰りながら、靴の踵が膠で床についたやうに、耽看之を久しうして還るを忘れた。

先づ、白磁青磁のかづ〲をはじめとして、天目には鶉斑手、搔落手、三島手のもろ〲、烏天目、繪附天目、花天目、禾天目、これは釉が麥の穗の揃つたやうになつたもの、玳皮天目、油滴天目から、銕沙釉、青釉花紋(壺)、碧の色の殊に鮮やかな交趾釉、かづ〲の繪高麗、私は幾度か玻璃戸に額をつき當てゝ喫驚しながら我を忘れて陳列棚に整列した寶器を貪ぼり看めたのであつた、私は古代の人が、何うして這般の妙器を作り得たかを訝かり且つ怪しむのである、土と釉と、さうして火、その三つの物が融合し渾化して、こゝに一箇の妙器となる、實に人天一如のものでなければならない、正に是れ玲瓏たる摩尼寶珠である、何といふ崇高にして玄妙なる藝術であらう。

別室に古鏡、鏡臺、鞍のかづ〲があつた、青銅鐘もあつた、廣州郡南漢山のものである、高さ一尺五寸、鏽華蒼古にして愛すべきものである、聖居山天興寺の梵鐘は今から八百年前、統和

二十八年庚戌二月の銘がある、これも亦た古銅の色が鏡のやうである、銅劒、曲玉、銅鈴、これは三國時代の出土品である。

私は館を出でゝ後苑を漫歩した、丘の上に成宗大王胎室の石碣がある、胎衣を埋めたところである、斯くて私は末松氏に謝を致して昌慶苑を出た。

電車、行く〳〵鐘路を歴てパコダ公園の傍を過ぎたので入つて見た、パコダとは外國語ではない、支那の白塔の音から轉訛したものである、公園は興福寺といふ廢寺の趾に李朝の世祖が建てた圓覺寺の舊蹟である、儒臣金守温の撰せる『大圓覺寺之碑』は、龜趺螭首の豐碑で、今でも其處に立つてゐるが、多年の雨淋霜打によつて文字は多く剝落磨滅してゐる。

有名な十三層塔も、亦た公園の境内にある、花崗石の臺を疊んで方十四尺四寸、高さは四十尺と註せられ、上部七層、下部三層、更に三層の基壇がある、上部の七層は佛像を、下の三層は十二會を、三層の基壇には龍、獅、牡丹、蓮華、天人、佛陀、宮殿樓閣を彫つてある。

圓覺寺は數代の王を迎へて、十世燕山君の代となり、廢されて聯芳院なる妓生の養成所が建てられた、邸宅を佛寺に喜捨したといふことはあることだが、佛寺を破毀して藝者學校を建てたな

どはまだ聞いた事はない、燕山君は、亡道の暴君であつた、更に又た十一世の中宗の時、王城内に佛寺を置いてはならぬといふことになり、この塔を壞して楊州の檜巖寺に移さうとした、そして上の三層までは取り卸し得たが、役夫に多くの死傷者を出したので、佛の祟りといふことで中止した、取り卸された三層は今も猶ほ塔下の草に埋もれてゐる、壬辰の役、倭將これを毀ち墮すと朝鮮の歷史に書いて、加藤清正の爲すところだなどと言つてゐるのは大いなる誣妄である、石塔の邊、菫の花が優しく咲いてゐた。

去つて私は鐘路の普信閣にその大鐘を見た、昔、私が來た時は、鐘路の町の中ほどにあつて、夜の十時の鐘聲を相圖に、四方の城門を鎖さしたものである、これを人定といふ。

この夜、私は、諸友と共に朝鮮ホテルに晩餐を攝つた、帝國ホテルよりは、セ、ツこましくないのが心地好かつた、後庭の溫室には熱帶地方の花卉もあつた。

庭に、前の李王が卽位の禮を擧げた圜丘壇がある、龍文を鐫つた石階を昇つて牌門を入ると、そこに六稜三層の殿がある、葛蘿はその柱にまとゐ、苔蘚は床を侵す、楹桷の彩色に古い朱碧の落ちつきを見せて、食後の遊息には好箇の閑境である、簷角や殿内には電燈を點じてあるが、夕

方以後は、道士の居ない古い廟にゐるやうで、一寸氣味が好くない、そのうす暗い廊下のあたりに、歩む毎に佩環を珊々と鳴らしながら、美人でも現はれて來なら、正しく剪燈新話物である。

加藤淸正の遺跡を趁ふて

一、一路會寧へ

嫩き夏の京城は、一年中の好時節と稱せられる、如何にも爽やかな心地はしたが、朝な夕なに吹く風の、一味寒冷の氣があつて、脈々として膚に迫るの感じがした、內地ではセルの單衣に薄羽織、初鰹の背のやうな鮮かに靑い淸淨の空を仰いで、初夏の女神の文使といつたやうな紺の法被のつはくらめが、路往く人の袖を掠める頃ではあるが、朝鮮ではまだ風が寒い、季候に慣れない私は、冬洋服の旅の裝ひで、北韓の旅に上つた。

京城から元山、咸興、新北靑、城津、羅南、輸城、鏡城、富寧の諸大驛を過ぎて、會寧についたのは、京城を立つてから三日の後であつた、漢江の濟、往十里、淸涼里、垂楊垂柳の碧流と相映帶するの好風光や、鐵原から元山道中の、山や溪谷や、そこに點綴する晩櫻と山躑躅の花も亦た車窓の無聊を慰め得た、斯くて路は江原道より咸鏡道に入り、咸興から寢臺を買つて一睡し、

嶺の朱乙で醒め、羅南で朝餐し、やがて咸北の會寧に入つたのは、その日の亭午を過ぎてゐた、北靑から端川に至るの間、時に海光を見、鏡城、羅南、淸津の間、時に海に傍ふて危崕の上を庋るところはあるが、景觀勃萃、詩すべく又た繪くべき興趣を捉へ得なかつた。

會寧は加藤肥州が、臨海君、順和君の兩王子を擒へた故蹟であることは、誰れも知らぬものはない。

咸鏡道に兵を進めた加藤肥州の行軍路は、畧ぼ今の京元線及び會寧線の通じてゐるところであらうと思はれる、肥州は日本語の通事咸廷虎を嚮導として鐵嶺の北に出た、小西行長と相別れて京畿道の安城を出發したのは文祿元年六月十日、十七日には安邊に着して、鍋島直茂、相良長每等と會し、兵を合して咸鏡道の永興府に入つたのは、一週日を過ぎた二十四日であつた。

府の城門に、一箇の高札が立つてゐた、曰ふ、高麗の兩王子、此處を通過して奥地に走竄すと、肥州之れを見て大いに喜び、追ひ詰めて生擒らんといふ、鍋島直茂これを止めて、これは詐謀なり、油斷あるべからず、都より十六日、日に炎天百里の路を行きて、人馬は太く疲れてゐる、暫くこゝに逗留して兵馬の休養をなし、徐ろに計をなす方萬全の策であると諫めたが、肥州は頭を

掉つて、此の札を唐人共の立てたるものと貴殿は思召候ぞや、我等は左樣には存ぜず、是れ偏に天照大神、八幡大菩薩の御加護と覺えたり、神慮にまかせ追ひ詰めて王子を生擒らんと、獨り手勢一萬を引卒して、ひた押しに明けても暮れても進んで行つた、とは高麗陣日記の記すところである。

斯くて北道兵使韓克誠は、肥州の軍、既に吉州に向つて進擊しつゝあると聞き、六鎭の兵を指揮して摩天嶺の嶮にこれを防がんとし、七月の十六日、終に兩軍の會戰となつたのである、兩軍は海汀倉の平野で相會つた、懲毖錄の記するところに據ると、北兵は騎射を善くし、左右迭みに出でゝ平野を馳驅し、矢を放つこと雨の如し、肥州の兵、日暮になつて退き休んだ、克誠の軍、隨つて之を圍んだ、肥州の兵は倉中の米俵を列ねて掩堡を作り、矢石を避けつゝ鳥銃を發射した、『我が軍櫛比して立つ、重疊束ぬるがごとし、中れば必ず貫穿し、或は一丸にして三四人を斃す、軍終に潰ゆ』と記されてある、翌曉は大霧、肥州の軍は、大霧に乘じて四方より北軍を包圍し、斬首數百級、克誠、圍を突いて遁れたが、鏡城で擒はれた、咸鏡道監司尹卓然は三水堡に遁れ、前監司柳永立は白雲山に遁れたが、士兵の擒とするところとなり、南道兵使李渾は甲山の

巖窟中に匿れ、亦た土兵の爲めに殺され、甲山の府使は出で降つた。

陣中にある肥州は、攻城野戰の外に土地の產物に就いて精密なる硏究を忘れなかつた、端川には元と銀鑛坑があつた、肥州は試みにこれを採掘し、銀塊三十枚を得、狀を具してこれを太閤に進獻せしめた、地方の民をも善く綏撫した、臨海順和の兩王子は、肥州の追躡ます〳〵急なりと聞いて、疾く馳せて摩天嶺を踰へ、七月の初めには既に會寧府に抵つたのであつた、初め我が軍の威勢に怖れ、負擔奔竄した隨處市邑の民は、山谷より相卒ひて簞食壺漿して肥州の軍を迎へた、糧米、魚肉、酒菓を載せて、その軍を餉ふもの項背相望んだ、韓民は之れを名づけてシンゼウといつた、進上の事である、征淸役の時でも、征露戰の時でも、我が軍規の嚴正にして秋毫も犯すことなきを慕ふて、所在の民人は亦た糧餉魚肉を贈つた、矢張これをシンゼウといつた、シンゼウの邦語は、今や北滿、蒙古、西比利亞の邊まで普及してゐるが、中には與へよといふ反對の意味にもなつて、奉天の乞食共は、掌を出して吾が邦人に、大人、シンゼウと呼びて錢を乞ふに至つた。

兩王子は既に會寧に入つた、一行中には左議政金貴榮、長溪府院君黃廷彧、その子の前承旨黃

赫等の大臣もあつた、會寧の府吏鞠景仁は元と全州の流配人であつた、その謫徒であるが故に、深く國王を怨んでゐた、其の族、鞠世弼と相謀つて、その懐に入つて來た二羽の窮鳥を捉へてこれを籠の中に置き、その從臣、金貴榮、黄廷彧、黄赫、南兵使李英、會寧府使文夢軒、穩城府使李鉄等及び宮女數十人を執らへ、牒を肥州に送つて降を乞ふたのであつた。

二、兩王子との會見は今の商業學校の敷地

七月二十三日、肥州は木綿單の肌衣に縫延の胴丸、草摺長にさゝめかし、銀の長烏帽子の兜の緒をしめ、大菊光の太刀を佩き、羽月毛の愛馬に騎り、妙法の旗を朝風に吹かせつゝ會寧城の大手より參入した、當時肥州と兩王子との會見した館舍は、今の會寧公立商業學校の地であるといふ、館舍の中庭、二箇の臼を並べ置きて、上に門の扉を敷きて東方を二王子の座となし、西には筵を布いて之を肥州の座としたとある、會見の式濟みて後、兩王子、大臣に饗應し、酒既に三獻の頃、肥州の從兵肴を取り出さんとして駈け走るを、王の左右の人々は、すはや謀りて王子を殺さんとするかと立ち騒ぎ、半弓を彎いて、肥州の胸に擬した、肥州はこれを見て、徐かに腰なる

巾着より印章を取り出し、懐紙に捺して觀せしめたので、皆なその異心なきを知り、弓を捨てゝ羅拜したと傳はつてゐる。

肥州は、即日飛脚を淺野長政の許に遣りてこれを報じ、もし陣暇あらば兀良哈へ攻め入つて武を觀めし申さんと言ひ送つたが、その注進狀によれば、肥州は朱明征伐の後の領地を支那國境に得んとしたと想はれる。

八月初旬、肥州は國境豆滿江を渡り、兀良哈討伐に向つた、こは日本の武威を輝かさん爲めの武士的名譽心に出たことには違ひないが、無論圖們江外兀良哈の侵略に惱める國境の鮮民が、其の徵膺を肥州に要請したのが動機となつたのであらう、更に兀良哈攻伐の日數は、僅かに十日の間であつたことは、九月二十日附の肥州の報によりて之を知ることが出來る、その最後に江を渡つて鍾城に入りたるは、朝鮮側の記錄によれば八月十五日頃なるをもつて、肥州の出發は當さに八月初旬なるべしと推定される。

出征當時、加藤家の出兵は約一萬人であつた、上陸後の兵力の減耗は、定めて多かつたことであらう、更に咸鏡進入の後は、要所に配置する守備兵にも、亦た多くの兵力を殺がれたに違ひな

い、清正記に依つて推考すれば、その會寧より北、江を渡つて兀良哈の討伐に隨つた兵力は、朝鮮兵五百、肥州の手兵六百、合して千人内外であらうと思はれる、日本兵を中堅として朝鮮兵を驅使したことは、曾つて歐亞に遠征した蒙古軍の編組と共の揆を一つにするを想はしめる。

三、兀良哈征伐

肥州は江を渡つて、碧城面永綏洞の對岸なる土城峙、漢城峴の諸壘を陷れ、西來洞河に沿ひ杉松背嶺を踰え、今の頭道溝附近の平崗の平野に進出し、兀良哈族の根據地老士部落を攻掠し、軍を回して門巖を過ぎ、八月十四日、鍾城を經て穩城に至り、離散した人民を收めて慶源、慶興を過ぎ、豆滿江に沿ひて下り、西水羅に出で、海を傳ふて鏡城に還つたのである、高麗陣覺書によれば、會寧より四里半程行きて在所あり、更に一里許行けば城十三あり、更に行くこと一日にして兀良哈の都あり、出發の翌日は、曉に早く十三ある城の處に着陣す、異國の習にて前を堅固にかこへども、後は深山高く、石垣を賴み、さのみ防ぐ體に見えず、會寧人を前にせり、日本人は後の山にかゝり、五十人三十人にて引くほどの石を、かなてこにて堀崩し、山より下へ落しかけ、

麓にある家を悉く打ち潰し、鐵砲をうちかけたれば兀良哈人退散す、十三城のうち、川上にある名城は、清正自身に取り懸り乘り崩す、その時貴田孫兵衛といふもの名譽の組打高名して疵を被り、清正、膝の上にて介抱すとあり。

更に清正朝鮮記には、城十三、悉く取つて其の夜は其處の河下に野陣をなす、清正、惣勢へ下知して、兀良哈への都も近し、定めて夜討かけ申すべし、油斷あるべからずといふ、案の如く、夜半の頃夜討に寄せたるを取り合ひて數百人を討留め、その勢に乘じ、夜路を五六里追ひ行けば早天、兀良哈の都に着す、山の岡より見下ろせば、日本の都五つほど合せたる大分家あり、そこにて鐵砲をうち揃へ、大貝吹き立て取り寬け、下知につれて手分をなし、一人して五ヶ所十ヶ所と火をかけたれど、大國の都とて、百が一ほどもかけ申さずとあり、この記事より考察すれば、當時の間島は、その人口の稠密にして民度の發達してゐたことが知れる。

肥州が退却に方りて占領した山上の陣地は、兀良哈の都及び朝鮮國境を距ること約一日程の地點にあつて、敵を瞰制すべき良好の高地であることが想はれる、而もその最後の戰闘は、この戰爭中の最大激戰で、追擊せる敵に逆襲して一大打擊を與へ、今の門巖附近から軍を引いて、豆滿

江を渡り、鍾城に入つたのは八月十五日であつた。

この戰鬪當日は、豪雨俄かに降り來りて兀良哈人の面に吹きかけ、敵の攻擊を頗る困難ならしめたといひ、淸正記には兀良哈人の死屍を算へて九百七十三、味方の死者侍九人、雜兵七十九人とある、肥州掉尾の奮戰は、敵に一大痛棒を加へ、その退却に際して後顧の虞なからしめたのである、肥州は誠に戰巧者の將軍である。

肥州軍の行動地域を考察するに、當時の都なる所在に關して、內藤博士は之を海蘭河流域にある龍井村附近に擬し、池內學士は布爾哈通河の河畔局子街又は城子山附近ならんといふ、城子山は金末及び元明時代に於ける東間島の中心的都邑にして、通路も亦た四方に開けつゝありしより推料すれば、池內氏の說亦た信ずべきである、斯く兀良哈の都を城子山に擬せんか、敵の夜襲を擊退し、即夜直ちに追擊して到達した高地は、恰も布爾哈通河右岸の高地にて、山上より都を俯瞰し射擊した記事と一致するを見る、又た高麗覺書の所謂十三城は、現地硏究の結果、池內學士は之を海蘭河流域に存する幾多の城趾と邑墟なるべしといふ、從つて進軍路も亦た現時の通路たる兀良哈嶺越ではなくて、會寧西方約三里、雲頭城附近で江を渡り、咸朴洞及び五道溝の邊を過

ぎて東古城子附近に到つたのであらうと思はれる、この路は豆滿江畔の雄鎭雲頭城と、海蘭河域の名城古城子とを連結する良好の道路で、現時でも尙ほ牛車を通するに足る、淸正の自から攻略した川上の名城は恐らくこの東古城子であらう、その下流、約二里の龍井村南方土城、更安附近の邑墟、古墳の散在に由つて、その最終攻略した部落であらうと思はる。

淸正の退却に當つて、敵の追擊を擊破した山上の陣地は、局子街、鍾城間の地點に求めねばならぬ、現時の局子街南方約五里の長洞西北方高地は、局子街若くは龍井村方面より、鍾城に通ずる主道路を瞰制し、南進する敵を邀擊する有利の陣地である、恐らく肥州が最後の武威を觀めした古戰場であらう。

四、會寧八賢士の碑

私は會寧の旅館に詩囊を卸して府內を巡覽した。

肅愼、挹婁、穢貊、沃沮、靺鞨、契丹、女眞、及び滿洲の諸民族の陵夷、興亡、許多の事蹟を歷史の上に留めてゐる會寧は、その城壁も既に全く撤去せられて、平和な市に過ぎなかつた、私

は驛前よりつゞく大通りの、兩側に並ぶ內地商人の店廛を見た後、郡廳にその郡守を訪づれて、吏員の案內で先づ八賢士の石碑を見た。

淸正は兀良哈を討伐した後、疾風のごとく兵を還して鍾城に至り、豫て保護を托して置いた兩王子を鍋島軍より受取りて穩城に出で、慶源、慶興を經て沿海路を鏡城に歸り、更に二王子を携へて安邊に滯在した、この時、會寧に吳久廸、許灌、尹岦、崔彥英、吳適禮、李希伯、鄭餘慶、といふ慷慨の士があつた、都訓導の申世俊といふを謀主として、兩王子を淸正の手に渡して己れは會寧守使となつた鞠景仁を殺さうと企てた、一夜、景仁が、その徒の李彥祐、田彥國などと公館に會し、宴を張つてゐるのを諜知して、角を吹き鼓を響らして直ちに城內に入り、兇賊拿捕の命令を發し、力士をして先づ景仁を撲殺せしめ、其徒の彥祐、彥國を斬首した、八賢士とはこの八人の義士をいふのである、其の碑は今の小學校の後庭につゞく小丘の上にあつて、碑亭の內に立つてゐる、高さ八尺ばかりの碑の兩面に、細字に刻された漢文數百千字、白苔旣に封じて仔細にこれを讀むことを得なかつたが、上に顯忠祠碑銘の篆額あり、崇禎紀元後四癸巳八月日立、資憲大夫行刑曹判書兼知經筵義　禁府成鈞館事世孫太副賓客　奎章閣直提學　鄭元容撰するところの

文を勒したものである、傍らに講堂らしき建物あり、常には人の縱覽を禁じてあると見え、私を案內した吏員が鐵柵の錠を鍵にて啓けやうとして、既に全く錆びつきて、容易に啓くことを得なかつたので知られた、鐵扉の上邊には、忠賢の二字が鑄出されてあつた。

五、宋の徽宗の幽居した五國城

私は、會寧の名物男、小池奥吉翁を訪ふた、翁は自から朝鮮の石器王と稱し、この地に移住して既に二十餘年、その圖們江流域の古蹟を踏遍して蒐集した土器石器玉器は萬を超え、大正五年にはその九鏤の珍器なる鷄卵化石、松傘化石を奉献して御嘉納の光榮を荷ひ、各大學にはその蒐集品を提供して少も愛惜するところなく、齡、耳順に垂んとしてその好む所を捨てない、翁の所藏のうちに契丹文古碑一枚あり、文は女眞文と稱せられて讀み難い、別に會寧に近い五國城趾より出でた雲淵の二大字を拓したものがある、字は隷書、筆力豪健、世に傳へて宋の徽宗皇帝の書するところであるといふ、風流文雅、九五の高きに居りて最も後素の事に巧みに、殊に花鳥を描くに妙に、今にその殘帛零紙に數千金の市價を有する徽宗皇帝は、金の天命五年といふに、金將

粘罕兵を提げて大擧、宋の都汴京を陥れ、上皇徽宗、帝欽宗を生擒し、初めは先づ今の長春の南なる韓州の八面城に置き、次いで首上京會寧の北東千里の五國城に幽し、兩帝ともに此處に悲惨な末路を終つたといふ、その五國城こそ今の五國城なるべしと、多くの朝鮮の史家はこの說に左袒した、淸の康熙帝が、國境碑を白頭山に建てしめた使者穆克登は、その歸途豆滿江に沿ふて下り、會寧の雲頭城に至り、城外に許多の墳塚あつて土人がこれを皇帝陵といふをもて、發掘したところ、宋帝之墓といふ四字を刻した短碣が現はれたので、克登は大いにその封築を修めて還り去つた、今の仲秋洞邊には克登の修めた大塚ありといひ、北塞紀略も五國城は會寧府の西二十餘里の山麓によつて、豆滿江上に古城の遺墟あり、俗に游端と稱す、耕すもの往々にして宋錢を發掘す、皇帝塚は行營の西北二十五里なる花豐山の谷中ありと記してゐるが、宋帝の幽閉された五國城はこの雲頭城ではなくて、恐らくは今の吉林省依蘭縣三姓附近ならんといふ說、妥當ならんと思はれる、蓋しその附近は、五國部の故地で、牡丹江の江域に屬すれるからである。

圖們江畔の杏花山

會寧の一夜は、私には雲時の甘睡をも與へなかつた、それは晩春の休暇を利用して遠く豆滿江へと見學に來た京城某學校の生徒達が、節制もなく規律もなく、人の寢靜まる午夜を過ぎても、笑謔し、喧號し、少しも他の旅客の迷惑を顧慮しなかつたためであつた、私は先づこの生徒隊を統卒する教師達の態度を責めたい、彼教師達は、生徒と離れて別室に酒を被つて酣睡して、風雨のやうに荒れさわぐ生徒達の行爲を知らぬ風であつた、旅館の人達は、他の旅客の爲めに、再三ならず生徒達にその鎭靜を哀乞したが、耳をも假さず終に鷄鳴までこの騷はつゞいたのである『旅の耻はかき捨て主義』は、邦人の悪い風儀である、學生等の旅中の放縱は、この傳統的の風儀から出たものであらう、その傳統的の風儀の上に、更に今の世に生み育くまれた憂ふべく悲しむべき重生輕師主義に扇動されて又た一層の增長を加へたものであらう、學藝と道義、二つものは離るべからざるものである、私は師道の衰へたるを嘆ずる。

睡足らぬ眼を揩して私は翌る朝、馬車を賃して會寧驛より上三峰へと向ひ、上三峰より豆滿江

の國際橋を渡つて、豆滿江岸驛から所謂圖們鐵道に搭じて龍井村に向つたのである。

會寧までの鐵路は廣軌であるが、こゝからは狹軌となり、新式ならぬ幾輛の客車は、豆滿江の右岸に沿ふて委蛇して進み行くのである、左岸の支那側は、丘阜平遠、渺として涯も知らず擴がつてゐる、內地では既に初夏の候であるが、こゝは今や仲春の好時節、野邊の八千草やうやく萌え出でゝ、彼の韓文公の遠く望めば草色の碧なるを見れども近づけば却つて無しといふ意味の詩が想ひ出される、その丘ともいはず又た阜ともいはず、白衣の鮮人、靑衿の支那人が、牛馬を扶けて孜々として耕作に努しんでゐる、麥は既に地を抽く寸許、稷、黎、高粱の類も亦た芊々として芽を吹いてゐる、右岸卽ち朝鮮側は、南畫の、披麻や、斧劈の皴をたゝんだ幾座の山が互にその雄を競ふがごとく連り聳え、連峯の杏花は今や正に盛りで、碧みかゝつた白いその花を盛り上げた千樹萬樹は、胡沙吹き荒む國境の空に、爛漫の春を誇つてゐた。

私は曾つて櫻の吉野山で、下、中、上の一目千本の花を賞觀し、又た梅の月が瀨で梅花の盛觀を看たが、今まこの圖們江岸の連峯の杏花を看めた私は、吉野、月が瀨も、これに較ぶれば物の數ならぬものであると思つた、峨々たる岩山、この岩にしつかりと根を卸してゐる杏の樹は、山

に亘り谷に溯りてこの幾千樹なるを知らない、假りにその一つの峯を一目千本として、この江岸十數哩に亘りて起伏する連峯の花は、正に萬をもつて算ふべきである、一體、朝鮮には梅がなく、よし移栽してもやがてそれが杏の木に變化すると傳へられてゐる、しかし梅が昔からあつたことは、この國の學者の詩に梅を詠んだものがある、獨りこの國の學者のみではない、彼の梟雄獨眼龍が、朝鮮役の凱旋の時、一株の梅を載せて來て、これを後園に栽えて花を賞した絶句にも『絶海行軍歸國日、鐵衣袖裏裹芳芽、風流千古餘淸操、幾度閑看異域花』といふのがある、私はこの國境江岸の峯に、萬樹杏花の盛んなるを看たのを悦ぶ。

山又た山、其山毎に幾千段の白地錦の幔幕を張つたやうな杏花を車窓に看め行くまゝに、やがて三峯驛に近づいた、この途中、鶴浦といふ小驛で、一隊の校書連が、花模樣の裾を飜へして車を降りて行くのを見た、會寧の人達の杏の花見を催うしたのである、會寧の人の、花見といへばこの江岸の杏の花見である。

圖們江の流れは闊い、この邊は丁度內地の利根川ぐらゐの川幅であらうと思はれる、揚子江のやうに、涘涘の間、牛馬を辨ぜずといふほどのものではないが、胡沙吹く風の本場である、荒凉

たる四邊の景觀は、江に悽愴、陰慘の氣を添へて、古は知らず、金元以來の許多の梟雄が、起仆興亡した跡が偲ばれるのであつた、漫々として流るゝ江心には、扉形に組んだ大木の筏を下す篙師の欸乃も細々として風に傳はる、岸邊には綸を垂れてゐる漁翁もゐる、水を亂して大きな手網で魚を捉らへてゐるものもある。

上三峯驛から汽車は國境橋を渡つて彼岸の江岸驛に入る、こゝには支那の税關があつて旅客の行李を檢査する、私は會寧出發の際、行李を京城に向つて輸送し、僅かに毛布と雜嚢のみを携帶して來たので、事なく税關を通過することを得た、邦人の運轉士、車掌及び給仕はこゝから去つて、支那側のそれと交替した、支那側車掌は、薄鼠の服に同じ帽子、帽子の鉢卷は黄色に一本の太い金筋を入れたもので、遽かに見れば我が內地の驛長と見紛ひて、しかもそれが卷煙草を啣へながら、短銃を佩び長劍をはき、更に銃をも携へ、彈藥莢の木綿帶を肩よりかけた乘警と稱する巡警並びに鐵道警衛の兵隊五六名と共に、嚴かめしく旅客の車券を檢査する、私は先づその行裝の大業なると、その態度の踞傲なるに一驚を喫したのであつた。

本邦の鐵道は、その草創の當時から一等に白、二等は青、三等に紅とチャンと定つてゐるが、

支那の鐵道は、三等が白色、一等が紅色である、支那では紅色を尊ぶ習慣があるから斯う極めたのかと思はれたが、私も一寸まごついて、始めて異つた國に來たといふことを明亮に覺つたのである、汽車はやがて搖き出した。

清正の觀た間島富士

蓮の葉を覆せたやうな大きな丘の群、その末は青冥に連なつて涯しもない、絶えて樹を見ない、唯だ稗黍、高粱の青きを望むのみである、大地はさながら無壁の波濤、その中に村落が、蟻垤のやうに此處彼處に散在してゐる、馬牛、白衣の人、蠅よりも小さいその馬牛、豆よりも細かなその人達が、鋤を揮ひ鍬を動かして耕作に努めてゐる、私は國境に入つてから、その氣象の雄大なるに驚嘆せざるを得なかつた、獷悍にして亂を好む古來幾多の梟雄が、活躍した天地はこゝだなと考へる、汽車はその無樹の大丘に傍ふて、委蛇しつゝ漫々として行くのである、凡そ上三峯から直路龍井村に行くには僅かに十六哩である、しかも汽車は迂餘曲折して、三十六哩にして初めて達し得らるゝのである、その三十六哩の軌道のうちで、隧道は僅かに一個、しかもそれは東京の四谷見附の隧道よりもまだ短かい、隧道といふよりも、寧ろ丘と丘とをつなぐ穹窿の覆道といふのが適當である。

數日前の一度、雪が降つたといふ此の地方は、料峭たる風の寒さに堪へなかつた、灰を吹きつ

けたやうに汚れ曇つてゐる硝子戸を卸して四方の景趣を看めた、粗くして且つ赭い肌を露はす丘の群には、陽炎もまだ立たない、潤ひのないその赭い土は、風の吹く毎に黄いろい埃を揚げる、栽えられた稗、黍、高粱の碧い芽は灰を浴びたやうに眞白になつてゐる、胡沙吹く風は獨り冬のみではない、この五月から六月にかけて、蒙古の沙漠を吹き捲くる烈風は、こゝまでも餘威を示して、さながら霾ふるやうに天地晦冥の日がつゞくのである。

軌道は八重襷のやうに平原から高原へと丘を繞つて伸びてゐる、汽車はその上を這ひながら登つて行く、私は曾つて石狩と十勝の國境にある狩勝驛の高原から、迂餘曲折してゐる軌道を騁望したことがある。日本新八景の一つがそれである、けふ見たこの間島高原の大觀は、狩勝よりは五倍も七倍も、寧ろ十倍にしたぐらゐの看めである、自分が今し通つて來た軌道は、やがてそれを眼の下に眺め、今少し前、目の下に眺めた軌道を、やがて今度は頭の上に見上げるといふ風に、登頓上下、私をして吾が汽車は、果して進みつゝあるか、或は又た還りつゝあるかを錯惑せしめたのである。

斯く記しつゝあるうちに、私は大切な事を書き落して仕舞つた、間島富士の事である。

上三峯驛から、杏花の連峯の下を過ぎて、江岸驛の此岸を行く時、江を隔てゝ一箇秀麗な山を望むのである、山の高さは目測三百米には足らぬほどではあるが、その山容はさながらの富士の山で、折からの朝日に照りあひて、煥然として紅い馬腦の色に冴えつゝ平原の中に卓立してゐるのであつた、清正が兀良哈討伐の途すがら、海上遙かに富士山を拜して、我れ朝鮮に渡りて日に北に向つて行くとのみ思ひゐしに、今やこの神山を西南に見る、遙る〳〵來つるものかと嗟嘆したといふことが物の本に載つてゐるが、もし左あらば、この間島富士を、我が鎭國の神山にたぐへて禮拜したものであらうと思はれる。

遙かに見る、高原の丘の上、それにつゞく紺碧の空にカッキリと、一列車が烟を吐きつゝ停つてゐる、傍には將棊の駒よりも小さい驛舍が見える、私の汽車は、漫々として蛇行しつゝやがて丘上の驛に達した、彼の汽車は我が汽車の來たのを待つて、徐々として前進した、驛の名は石門子である。

榛柴溝、東盛湧、いづれも小さな驛である、東盛湧は地名でなくて、大きな酒と油の問屋の主人の名で、その豪富は間島地方に聞えてゐる、この有力者のある爲めに、汽車はわざ〳〵路を迂

して大醸造家の傍に驛舍を設けたのであるといふ。

午牌を過ぎて、汽車は龍井村の驛についた、木造ペンキ塗りの驛舍の前は、幾十輛の馬車が屯ろして、馬夫ども喧囂しつゝ旅客の勾引に努めてゐた、折から雨はふり出して、路面の泥濘は車輪を沒するばかりであつた、私は同じ客車に乘つてゐた尾州瀨戶町の某氏と共に一臺の馬車を賃して旅館へと向つた、斜雨、幌を撲つて衣帽は全く濡れ果てた、馬夫に命じて桐油紙で幌を掩はせた、これが爲めに市中の樣子を見るに由なく、少時して旅館に着いたのである。

龍井村の三夜

間島は、外國人の爲めに開放された地域を有する國際的特殊の地帶で、廣袤千六百五十六方里、その西北には人口の密度一平里百人に充たざる寗安、敦化、樺甸、安圖各縣の廣大な沃地を控へ、北方に極東露領の未開拓地に接してゐる、住民は支那人の八萬六千、內地人の二千、朝鮮人の三十五萬六千で、耕地面積四十萬町步のうち、既に開拓されたもの二十萬町步に達し、年々來住する鮮人の數は約一萬、西伯利亞及び滿洲に分布する七十五萬の同胞並びに沿海州にある二十五萬の同胞と共に、朔北の曠野に進展する根深い根柢を作るべくその先驅をつとめてゐる。

私の間島を訪づれたのは、吾が同胞が國境の第一線に立つて如何に努力奮勵してゐるかを見、兼ねて曾つて支那四川の道中に於いて、懇ろに私を視てくれた重慶郵局の福屋正男氏夫妻が、今やその幼兒を提げてこの地の郵政局長としてゐるのを問存する爲めであつた。

旅館より電話をかけると、福屋氏夫妻は直ちに私を訪づれた、相見ざること既に四年、互に久濶を叙して食卓を共にし、語つて終に倦むことを知らなかつた、宵深く夫妻の去つた後、私は温

突の一室に入つて甘睡、曉に達した。

胡沙吹く風の夷國、肅愼、挹婁、勿吉の古は邈たり、降つて支那の隋朝時代、靺鞨人が渤海國を建設して、間島をその版籍のうちに收めたが、西暦九百二十六年、渤海國が遼に亡はれて以來、渤海民族は女眞の名に呼ばれて各部族割據の狀態となり、屢々朝鮮の國境に侵入したが、今から八百餘年前の昔、高麗睿宗の時、尹瓘、大軍を發して各部族を驅逐し、北疆を開拓して圖們江北七百里の地に及び、先春嶺下に公嶮鎭を築き、碑を嶺上に立てゝ高麗の國境と定めたといふ、但し先春嶺及び公嶮鎭の所在の今は何處の地を指すかは判明しない、次いで女眞族再び興つて遼を亡し、大金國を建てゝ四隣に雄長したが、やがて又た元の亡ぼすところとなつた、その後兀良哈起つて斡朶里族と爭鬪しつゝ無主の地となつた、斯くて天聰二年(西暦一六二九)に及び、清の太宗と朝鮮の仁祖との間に間島地方を兩國の間曠地帶とすることを協定した、然しながら肥沃の地境の禁封は、何時までも持續されず、韓民の江を踰へて往き耕すものが年を逐ふて盛になつて來たが、明治三十九年、韓國が我國保護の下に立つに至つて、翌四十年、統監府出張所を間島龍井村に開き、後間島協約の成立と共に、四十二年十一月一日出張所を閉鎖し、同月二日、總領事館

を開設して今日に及んだのである。

海蘭江を西にし、圖們江を南にした間島一帶の山河は何ぞ雄大なる、海蘭は、滿洲語の楡樹といふことである、楡樹は滿洲に於ける代表的の植物である、獨り滿洲のみならず蒙古に於いても多くこの樹を見る、楡樹の花咲く四月頃は、隨處に落花の路もせに散つて行客の靴を沒すを見るのである、さながら鯉魚の鱗のやうに、地に敷いても泥土となることなく、枯び乾いて、風ある時は片々相逐ふて飛ぶ、支那の詩人は、この樹の落花を錢に喩えてゐる、萜の一片は、錢の如く圓いからである、楡錢、貧を補はずなど〻洒落れて詩に詠じた人もある。

山河の形勢は、これを內地のやうな海島に住む我等の眼には、極めて雄大豪宕に映ずる、間島の面積は一千六百五十六方里、そしてその耕作するに堪へたる地域は、約四十萬町步に亘るといふ、しかも旣に十九萬六千餘方里は開墾された土地である、その北西に控ゆる寗安、敦化、樺甸、安圖各縣の面積は更に廣大である、しかもその耕作者の九割九分までは、我が朝鮮人であるといふことは誠に賴母しき次第である。

間島に着いた翌日も、亦た雨である、私は傘を翳して市中の遊目に出た、市街の家屋は、朝鮮

風七分、支那風二分、そして日本風一分と思へば好い、私は朝鮮の一都會が、江を踰へて此處へ飛來したもののやうに思つた、途を行くものゝ多くは白衣の朝鮮人である、店舗を營む人の大概は支那人である以外に、足一たび郊外に出づれば、門巷籬落都べて朝鮮人ならざるはない、昭和元年末の調査に據ると、間島一帶に朝鮮人三十五萬六千人、支那人八萬六千人、內地人二千人、歐米人百五人、計四十四萬四千五百人であるに見ても、支那人は、朝鮮人に簷を借して終に母屋を占領されたといふ觀がある、否、山河の形勢から見れば、什麽しても我が壤土である。

驛の前から我が總領事館に至る廣衢の兩側には支那人の商舗がある、二階若くは平家の支那式家屋である、滿地の春泥、殆んど馬車の輻を沒するほどの惡路を挾んで、やゝ賑殷のさまに見える、支那の郵局は、平家作りの湫陋なる廢屋を改修した貧寒のものである、私は福屋氏が壯大なる三層樓の第一層を占據して、日夕、揚子江の長流に枕んで、塗山の翠嵐に嘯嘯してゐた四川重慶の郵局に居り、出づるに長柄朱塗の大轎あり、親兵喝道して行くの當時を思ふて、官海にも亦た風浪の險危あるを思はしめた、さりながら、氏が四川を辭し去つてこの東邊に來るの時、既に玉のごとき嫡子の生まるゝの喜びに遭ふた、亦た以て自から慰むべきである。

間島の馬賊といへば、曾つて私達の口に膾炙してゐたところであつた、彼等は當時、間島の接壤地なる安圖、樺甸、撫松等の山谷に盤踞して、時に出でゝ掠略を擅ましてゐたが、總頭目の徐鴻奎が大正十三年の秋、奉天に招撫されて歸順するや、張作霖督軍の爲めに誘殺され、次いで總頭目となつた王洪德、亦た奉天軍と間島駐屯軍との爲めに挾擊されて安圖に戰死し、こゝに全く馬賊軍の瓦解となつて、その後占九州といふもの、殘徒を糾合してその頭目となつたが、昭和二年一月、安圖縣の二道溝で戰死し、上山好といふものその後を繼いだが、大頭目を失つた馬賊團は、終に烏合の草賊たるに過ぎない有樣となつた、現在では、占九州の殘黨約九十名、兩廣の百二十名、鐵雷の四十五名、南俠の五十名、双俠の二十三名、上山好の八十八名、野猫の三十名、總督の十九名で、彼等は時に間島平野進出を揚言してゐるが、實は彼等の資源とする阿片の栽培地を官兵の爲めに蹂躪され、若くは阿片を横奪さるゝを恐れて、これを牽制すべく故に聲を大にして呼號するのである、尤も過去に於いて、琿春と頭道溝とを襲擊して來たことはあるが、日支軍警の警備力が充實してゐる今日に於いて、到底長白底を眞向に、鐵蹄胡沙を蹴つて馳驅する勇氣はないのである、更に不逞の鮮人の事であるが、これも大正九年我が軍隊の剿討以來、殆んど

その跡を絶ち、時に寗古塔方面より入り込むものがあるも、日支官憲の峻烈なる取締に遭ふてその踪跡を晦ますのである。

白堊、層樓、鏡のやうに磨かれた花崗岩の穹窿なす大玄關の、頂高く方形の高塔を抽いた總領事館の輪奐は、この荒凉たる胡地にありては實に目を驚かすの莊麗なものである、私の遊歷した吉林、敦化、琿春などでも、これに匹敵する建築はあるまいと思はれた、私はその層樓の一室で警察部長の相場清氏と相語り、更に領事と接見した、館の一室に古器物を陳列してあつた、そこで一箇の鐵の大釜を觀た、徑三尺ばかり、館の人は、これを加藤肥州が兀良哈討伐の時、遺し去つたものだと語つたが、思ふに是れは、女眞族の使用した炊釜であらう、石鏃、鐵鏃、石器、土器の類も亦た多かつた、私は間島教育界の長老なる日高丙子郎氏にも逢つた、二十年來この地に在りて居留民會長である財滿精三氏にも逢つた、更に雨ふる翌日は福屋氏と共にその家に招かれて、牛肉の朝鮮式鋤燒の午餐の饗を受けた、間島新聞、日報、その他の新聞社長と記者にも會見した、皆な私の齡耳順を踰へた老齡で、遠く筆を載せて胡地觀風の壯遊を敢へてするその勇健なるを歎んだ。

海蘭の川、圖們江、高阜、低丘、相倚り相果つて、莽々蒼々として遠く安圖、敦化、寧安に連なる雄大なる山河の形勢を遐望して、私は膽に蒙茸の長毛が生へたやうな豪壯快濶の氣象を領略したのであつた、**私は切に第一線に立つ邦人諸氏の奮勵努力を望むのである。**

龍井村を去る前一夜、官民諸氏は、旗亭に祖道の宴を張つて私を招いた、校書、十數人酒を行る、痛飲淋漓、誠に客中の豪興であつた、宴罷んで旅館に歸れば、巨筆、大硯、氈を敷き紙を展べて、私に字を書けといふ、總べて數十枚、私は敢へて辭せず、醉に乘じて揮灑縱横し、筆を投ずれば腕の脫せんとするを覺えた、衆と亦た淺酌す、睡る時正に鷄鳴、この日財滿氏、私に銅卣一箇を贈る、一昨年五月、敦化縣城の土中より出でたるもの、縣知事徐彬氏これを財滿氏に贈る、財滿氏愛を割いて私に贈つたのである、卣は祭器、高さ三寸、壺狀をなし、龍首、游環を含める弧狀の把手を繫ぐ、卣の兩面に饕餮紋を陽鑄す、思ふに女眞時代のものか、誠に珍器である。

翌朝、私はこの龍井村を去つた、偶ま佛人の稅關長が新たに任地に赴くが爲め、日支の縉紳は多くその別を送つた、私は福屋氏の紹介で龍井村商埠長の高立垣氏と手を握つて語を交へた。

金剛山探勝記

一、九龍淵一帶の大觀

圖們江畔連峯の杏花は、昨雨の爲めに全く零落し盡した、私は雄大なる嫩夏の山河を騁望しつつ、午後、會寧に還り、その夕、更に會寧を出でゝ、一夜を汽車の寢臺に過した。

途に朱乙を過ぎた、朱乙とは女眞語の温泉といふことである、驛を去ること三里、自動車に上れば二十分にて達すといふ、車中に曾つてこの温泉に遊んだ人がゐて、その勝概を說いた、景趣は加賀の山中温泉に似て、斷崖の邊り、一危橋を架すること彼の蟋蟀橋のさまの如く、温泉も亦た豐富、溪流、甚だ透明、鮎あり隊を成して游ぶを見るといふ。

その夕、私は元山の旅館に詩囊を卸した、元山は東海岸の要港で、市街は殷賑に、壯麗な女學校、明媚の公園、稱して朝鮮第一の健康地といふ、私の一夜を過した某旅館は、坐して山海の勝を攬るべく、その施設も亦旅客の心に適ふ、私はこゝで始めて海魚の鮮美なるを味ひ得たのであ

る。

翌日は、乗合自動車を驅つて、金剛山なる温井里に向つたのであつた、慈山から歙谷、沛川、松田、庫底、通川から外濂城を歴て、長箭、沙胡里より温井里に至る、路程二十八里、乗車賃は七圓、丁度一里二十五錢に當るのである。

殘酷に使役されて、僅かに餘喘を保てる老廢のフオードを驅りて、元山郊外、泥海のごとき惡路を行く、やがて沛川、渡すべき橋もない、車を乘り入れ亂して渡る、松田からは路漸く坦、庫底に入りて正午、私達は、飲食店を物色して、支那人の營める蕎麥店に入り憩ふた、例の雲湯、日本酒の一陶を擧つて又た車に上つた、外濂城から沙胡里に至るの間は、路、日本海に臨み、長汀曲浦、翠阜を帶びて、漁戸蜑莊その間に綺錯し、景趣は熱海より伊東に至る伊豆の海岸をドライヴするがごとく、自然の妙畫を披展してゐる、今や軌道の工事中で、温井里まで電車を通ずるの日も遠からずと聞く、若し軌道の開通するあらん曉は、随處に海水浴場、別莊地の開けることであらうと思はれた。

北海の濤驕る多の日には、捕鯨の船の集ひ來る漁港長箭、夏は物靜かな町を過ぎ、車は折れて

西に向つた、金剛山の殘山剩水、こゝに一區靜閑の泉場を抱く、温井里である、私は眉間を壓して高く聳ゆる翠微を仰ぎつゝ、温井里に入り、嶺陽館の一室に行李を卸した、里と名を同うする一道の清溪、瀨に吟じ潭に默して迂餘として流るゝその岸に、或は背き或は向ひ、横に斜に門を構へ籬を繞らす旅館と料亭、雜貨を鬻ぐ家と相交りて正に一區の山郭をなす里の靜かさ、浴室は地の底深く七八尺も掘り下げて石を甃み泉を湛ふ、泉量は豐多とはいひがたけれど、徐かに裸身を浸せば、鏡なす泉は緩やかに環波を揚げて溢れて四もに水晶簾を懸け、初夏の日に焦げた吾身はさながら、象牙で彫られたるかと思はれるまで眞白に透けて見られるのである、温度も熱からず又た冷やかならず、浴罷んで身も心も和暢なるを覺えた、館の主婦、私の酒を好むを猜して、膳に上すもの皆な清鮮、頗る我が意を解す、この朝、元山の濱にて獲たりといふ帆立貝の、その胎の赤く肉の白き刺身に至つては、生來始めて味ひ得たる佳品とて、私をして更に一陶を傾け盡さしめた。

翌早起、飯を終へて私は先づ九龍淵に向つた、草鞋、卷脚半、平生涉濟の具に富めりと誇つてゐる私も、その山遥の崎嶇を思ふて、石楠花の杖を借りて老脚を扶けた、案内者は特に選んで内

地語を善くする一靑年その名を權某といふものであつた、行厨、紅茶を盛つた魔法罎を携へた權某は、忠實に私を案內してくれた、凡そ內外金剛山の勝景を遍ねく看るには、少なくも七日を要する、私は三日にしてその要領を得たいと望んだ、温井里にある警察部長關本氏は、先づ九龍淵を看、次に萬物相を看、更に温井嶺を踰へて新豐里より長安寺に出で、萬瀑洞を看れば、その大景を領略することを得る、この三勝を看る途中に於いて、他の諸勝は行く〳〵これを併せ看ることを得べければなりといふ、私はその說に隨つて、日程を三日に定めたのである。

陰つた空はやがて踈雨を催して來た、雲は湧き嵐は流れる、極樂峴の急坂を上ると、大慈峯、鉢峯、文筆峯、世尊峯、彩霞峯、集仙峯の觀音連峯は、鐵桶のごとく取り圍んでゐる、その峯勢の峻拔にして瑰奇なるには、先づ私の眼を驚かした、やがて路はなだらかに、扶踈たる赤松林のうちに入る、林を過ぎると神溪寺である、新羅法興王六年、普雲禪師の開基と傳へられ、數度の炎上に今や太く荒廢してゐるが、大雄寶殿の前庭にある五重の石塔は、創建當時の物と聞く、白苔深く封して雨淋霜打、千數百年の昔を想はせる、寺僧三十、颯々たる松籟のうち、靜かに梵唄の聲を傳ふ。

松林を過ぎて又た山に入つた、路は常に神溪の流に傍ふてゐる、私は世尊峯の上から落ちる二條の瀑布を仰ぎ見た、雌雄瀑といふのは是れである、その傍に佛像を彫刻した大磐石が立つてゐる、丹を塗り碧を抹して、俗惡厭ふべきものであつた、行き〳〵て溪の右岸を走る、大石、一廳台といふのがある、第一佳境に入るの謂である、仰止臺の上に立つて仰ぎ看ると、觀音峯は、眉を壓して鬼々しくも立つてゐる、峯には寸土なく、露根、岩を攫んで盤舞してゐる老松の姿態は、さながら繪のやうであつた、やがて金剛門なる石門のところに出る、傍らに茶亭があつて、麥湯を侑め、金剛山名物の松の實の羊羹松の花の落雁を侑める、この山から出ると見えて、水晶を鐫つた小さな多寶塔や、觀音像や、念珠なども賣つてゐる、踈雨はやがて少雨となつた、雲は揺曳し、嵐は浮動する、山も溪も、その雲嵐を淡粧濃抹して、景觀は更に一層の奇趣を添えるのである、岩と溪、その間に通ずる一綫の岨路を行く、雲の底からさながら天華の降りくるやうに、はら〳〵と私の衣帽を撲つものがある、見れば山櫻の花である、靄の逕、そこにはほろ〳〵と靜かに散り布く花がある、山躑躅である、櫻、つゝじ、その落花の白を布き紅を點する石のほとりに、その背は綠靑よりも碧くその腹は硃よりも紅い蛙がゐて、人の跫音に驚いて、秋の稻田の稻子の

やうに飛び出す、私は曾て雨の日に大和の大臺が原山に登つて、山蕗のその陰に蟇の群棲してゐるのを見たことがある、山ぐゝである、山ぐゝは昔の山民の食糧であるが、金剛山のこの蛙は、猛烈なる毒を有し、彼の饕餮なる蛇といへども、これを食はぬといふことである。

金剛門を出ると、霧の中に天花峯が見える、下は玉流洞である、巨岩、水を束ねて靜かに深潭の上に落す、玲瓏の水、水晶の簾の如く潭に落つれば、掬べは十指も青からんと思はるゝ碧なす深潭は、呀してこれを呑み、更に溢れて晶簾を懸けて潭に入るのである。幾段の飛瀑、幾泓の碧潭、しかも水の量の豊多にして岩の容の雄偉なる、その四邊の奇峰、雲物と相襯染して、誠に雄偉崇高の大景を成すのである、奔湍の上に架けてある獨木橋を渡りて、私は蝸牛のごとく彼岸の岩にとりついた、鐵鎖と木梯とは、苔蘚厚く封した巨岩の上に渡されてある、下は雷のごとく吼ゆる深溪である、この時私は、蓊勃たる天際の雲の缺けたその間に、閃青、さながら踴躍する飛龍の鱗光を仰ぎ見たのであつた、飛鳳峰の頂上から落下する飛鳳瀑の一片であつた、何等瑰琦幽玄なる光景ぞや、雨やうやく歇み、霧漸く晴る、高さ五百尺の飛瀑、雲を出で叉た雲に入る、その下の連珠潭、雲間を洩れた日光はこれを射つて、一泓は銀、一泓は金、或は紫、或は紅、陰晴

一ならず、私の驚喜と嘆美とはそも什麽であつたであらう。

飛鳳と舞鳳との兩峯は、峭岩群がり立つて、私が曾つて天下の奇峯と讚へた甲州の瑞垣山の奇に倍徙するの看めである、私は、淵潭橋の三大字を彫りつけた巨石の間を狙のやうに跳び越へて、再び溪畔の路を行つた、路は飛鳳瀑の下を過ぎた、瀧しぶきを浴びながら、青のやりな水苔の、脚を著くるに由なき巨石の上を這ひながら、やがて茶屋の木梯に取りついた、茶亭は飛鳳瀑を背にして、この山第一の巨瀑と稱せらるゝ九龍瀑に對してゐるのである。

九龍瀑は、金剛の主峯と稱せらるゝ標高五千尺の毘盧峯から湧く泉の、やがて八個の深潭となり、高さ三百尺の峭厓より落下する巨瀑である、幅は三十尺、藍壺深さ三十尺、呀してこれを呑むのである、瀑側の巨岩の面に彌祿佛の三大字が、一字の大さ二丈ばかりに彫られてある、しかもその佛字の末尾は、引いて三丈の長きに達してゐる、瀑布の姿は、唯だ一氣に落下する巨泉を觀るのみで、雄壯とはいひ得らるゝが、そこに何等の奇趣のないのを憾みとする、殊に瀑側に彫られた三大字は、醜惡厭ふべきものと思はざるを得なかつた、私は深潭に臨める峭壁の面に鑿を揮つて彫り成した彫工が、無用の事を敢へてしてこの勝觀を傷けたことを惜む。

しかはあれど、飛鳳瀑、玉流洞、この神溪を圍繞する諸雄峰は、私の烟霞の痼癖を醫するには十分であつたことを感謝する、私は多年內地を周游したが、この峽谷に匹敵する景觀を、內地に索め得ざることを憾みとする、私は茶亭に床几に踞して、行厨を開きつゝ、群峯を回看し、諸潭を騁望して、時の移るのを忘れて了つた、第一日の日程はこれで終つた。

二、雨中の萬物相

第二日、けふも亦た雨、私は温井里を出でゝ温井嶺の麓を辿つた、路は常に寒霞溪に傍ふて行くのである、私は彼の十和田湖道中、奥入瀬溪畔の道を行くやうな思ひがした、溪を隔てゝ觀音の奇峯が雲嵐のうちに出頭し又た沒頭する、觀音瀑も樹々の間に隱現してゐる、やがて温井嶺に入る、何等の惡路ぞ、私は、疎雨のうちに一斗の汗を流しつゝ辛うじて、萬物相に近い六花亭なる茶店に入り憩ふた。

この時、雨は簷端に簾を成して繁くも降つて來つた、雨を亭中に避けて、老婦の侑むる麥湯を啜りつゝ、靜かに四方を回看した、雲來り、雲去り、嵐徂き、嵐回る、その蒼莽たる雲嵐を透し

て、繞り立つ瑰琦の峯の、或は偃れ或は走るやうに見える、獄ふこと半晌ばかり、偶、彼方から山路を踏み分けて、しとゞの雨にひた濡れた三箇の人の、來つて亭に入つて來たのがあつた、一人は金筋、金釦子の制帽制服をつけてゐる、林務官であると猜した、他の丈高い中年の紳士は、その上司の人と見え、一人はその從者であつた、寂寞たる深山裏の一孤亭に、獨りさびしくゐた私は、この談敵を得て大いに人意を強うしたのであつた、雨はやゝ細くなつた、私は連れ立つて、共に萬物相の小逕を辿つた、深溪に傍ふて行くこと數町、そこに又た萬相亭なる茶亭がある、私達は萎え疲れた脚を引いて更にこゝに入り憩ふた、一斗の汗を揮ひ盡して、私は堪へがたい渇を覺えた、大きな桶に寒泉を湛えて、麥酒を漬けてあるを見て、私達は魚眼蟹眼盛り上る數壺を傾け乾したのである、凉冷の氣、肺髀に透るを覺えた、勇氣を鼓して更に上ること數町、偶、繪に見る蓬萊山そのまゝの一孤峰の雲を抽いて高く峙つてゐるのがあつた、こは萬物相の三仙岩、その奇峯の一個であつた、私達は、既に萬物相と相對する壑頭の一角に立つてゐるのである、傘を收めて、路に傍ふてさながら迦藍の大廡とばかりつき出した巨岩の陰に雨を避けて、當頭の山を看めた、生憎の雨なるかな、雨霽れ雲收まらば、萬笏天に朝すと形容さるゝ萬物相の大觀を飽ま

で眺め貪ぼり看ることを得るものをも嗟嘆しつゝあるほどに、天風、蓬々として上方より吹き來りて、綿を積むかと見えた滿壑の雲嵐は、相披き相靡き、相逐ひ相奔り、相舒び相卷きて、流れ行くそのあとから、現か將た幻か、寶塔のやうな峰、斧鉞のやうな峯、臺閣のやうな峯、玉笏のやうな峯、寒劍のやうな峰、その種々相の峰は朝來の雨に淸く洗はれて、秀を爭ひ、姸を競ふて私達の眼前に霽色、繪かくがごとく現はれたのであつた。

何んといふ瑰琦幽麗な看であらう。

種々相をなすその峰、その岩、皴は茄子紺の色に沈みて見え、稜は朧銀のやうに輝いてゐる、皴の隈の濃紫なるは、常に花崗岩の山に見るその特色で、稜のいぶし銀のやうに灰白に光るのは、そこに芝松の密生してゐるからである、天風又た吹き來つて、雲舂き嵐飛ぶ、萬峰の木魑石鬼、啞然として洪笑するかのやうに思はれた、私は唯だ啞のごとく默しつゝ、この大景を眈り看めた。

由來、朝鮮は大氣が乾燥してゐるので、何時も澄明である、されば若し快晴の日に、金剛山を訪づれたなら、溪の隈、山の奥、隱るゝことなく明亮に見透かされて、崇高幽邃の景趣は、恐ら

くは三分の一を減じたであらうと思はれた、私のこの山に入つて常に雨に逢つたのは、生憎の雨ではなくて、實に好箇の雨であつたのである、風流、緣あり、私は自然が私に與へられた寵光を感謝する。

新萬物相は、こゝより更に數町の上にあつて、路は更に一層の險を加へる、霽れかゝつた空、再び雨を催して來たので、私共は愛を新萬物相に割き、故と來た路を六花亭へと引き返し、更に半里と聞えた嶺頭の岨路を上つた、磊落の石は人の歩みを攔め、雲は深く雨は繁く、老來いまだ嘗つて體驗したことのない艱苦を嘗めつくして一步、一喘、辛うじて嶺頂に達することを得て、僅かに神氣の蘇するを覺えた。

山には松が多い、峰頭に、岩角に、根を露はし石を抱いて盤旋する老松の趣態は、李白ならねど鶴となつてこの枝に宿らんことを思ふ、又た五葉松が多い、所謂朝鮮松である、その實は柏子と稱して四方に輸出せらる、朝鮮ではこの實を料理に用ひ、又た餡に和し、飴に交ぜて、松子羊羹、松子飴、落雁を作る、松花も亦た打つて菓子を作るのである、三十餘年の昔、私は京城なる當時の大臣金嘉鎭の邸に於いて、この松花餅を食ふて異味をたゝえた事があつた、山阿や、溪隈

には、思ひかけなく山櫻の亂れ咲くのを觀た、古來よりある朝鮮櫻で、內地から移栽したものではない、大山蓮花も亦た隨處にあつて、今や握に餘るほどの蕾を著けてゐた、鈴蘭は行くところに群生してゐる、今や正に花時、妙香は人の衣袂を薫殺する、松の外に、樺も多く、楢も亦た多い、山躑躅、落紅、地に委して、靴を入るゝにたゆたふほどである、片栗も亦た崖の陰にその幽冷な花を抽いてゐる。

嶺上より、路は新豊里に通じてゐる、前には登攀の苦楚を嘗め盡したが、これよりは坦路の下り坂である、私は踴躍して路を走つた、やがて新豊里に入り、長安寺から出迎へてゐた自動車の客となつて、茅坪、金剛院、末輝里より折れて古木洞、塔巨里を歷て、薄暮長安寺畔の同じホテルに詩嚢を卸した。

長安寺ホテルは、萬川溪に枕んだ松林のうちにある瀟洒なバンガロ式の旅館である、けふは宛も山開きの當日、私はペンを執つて新らしい宿泊簿の第一頁の筆頭に私の名を記したのである、內地流の風呂を命じて快浴す、開館當日のお客樣として、館の支配人は私達の爲めに膳羞の皿を增したのであつた。

この夕、私は、萬物相の孤亭で知り合ひになつた中老紳士と會談した、李王職林野會議の委員長三浦斧吉氏で、各地の林地巡察の途中であるといふ、氏は旅次江陵郡竹軒面を訪づれて、手に入れた朝鮮の賢儒李栗谷の手書を石版にした擊蒙要訣の一冊と、栗谷の母師任堂夫人の手書した絕句六首の柘本を私に贈つた、栗谷は李朝哲宗の時の人、領議政となる、その著はした擊蒙要訣は、曾つて萬治年間、朝鮮通信使の齎らし來つたものを、吾が接伴の儒士これを得て、京都で複刊したことがある、任堂夫人の六絕句は、筆勢舒暢にして婉麗ながら、絕えて媚嫵の態なく、誠に寧靜貞淑なる賢女の筆蹟といふべく、しかもその詩は穆茂にして誦するに堪へ、陶詩の遺響ありと稱すべきものである、私は謝し受けてこれを詩嚢のうちに收めた。

夜は闌けた、一境靜寂、唯だ萬川溪の瀨聲、雨のごとく枕頭に傳ふるあるのみ。

三、萬瀑洞の諸勝

翌日、けふは快く霽れた日である、朝餐の後、私は案內者なる一靑年を伴ふて、萬瀑洞の勝を探つた、行くこと二三町にして、早や長安寺の門に達する、門前の路を夾んで碑碣が多い、大正

十四年、英國のゴルドン女史が、登山紀念に建てた大秦景敎中國流行碑の模刻の豐碑は、殊に私の目を惹いた、寺門は、表には雲性門、裏には唯一門の匾額が懸つてゐる、門を入ると、長安寺の前溪で、水中の石皆な活きて走るの急瀨である、溪中の石を橋脚として、雅趣ある萬川橋が架つてゐる、橋を渡ると萬水亭、一に水晶門といふ、やがて臨濟宗第一伽藍の額を揭げた樓門を仰ぎ見る、樓下を潛つて顧みると、大廡の下に梵王樓の額を挂けてある、樓の傍には梵鐘門、右は大香閣、左は極樂殿、正面はこの寺の本堂の大雄寶殿である、凡そ六殿七閣、僧侶四十餘名、正に山中四大寺の一に數へられる大梵宮である、この日は宛も佛の賽日と見えて、善男善女群集し、路を夾んでくさ〴〵の露店も出てゐる、大檀那らしいものゝ家族は、樓門の上に、堂閣の中に、群居して午の齋に就いてゐた、一隊の僧侶は、白飯を杉なりに盛つた眞鍮の大鉢を擎げ、香爐を持ち、鷲次雁行して念佛行道しつゝ、大雄寶殿に參入する、人は皆な悅びて相樂しむの色がある、誠に太平の象である。

百川溪の急湍に、滑らかな水苔をつけて露はれた岩角を、蛙のやうに飛び渡つて、雜木林のうちを行くと、路窮つて黃泉江なる溪流の滸りに出た、右の峰を梟峰といふ、峰頭に、梟が江中の

魚を窺ふさまに似た奇岩あるからである、俗傳には、この梟がゐるため、これより上游に溪魚の隻影をも見ないといふ、日に輝く青葉の連峯その影倒まに碧潭に蘸して、尤も高きものは明鏡臺、そこには形の鏡に似てゐる一大平巖が立つてゐる、潭を繞つて、牛頭峰、罪人峰、使者峰、判官峰、地藏峰相並び、潭も亦た黃泉潭と名づけられる、明鏡臺の鏡岩を、地獄の淨玻璃の鏡に擬し、この地一帶を冥府と稱せられる、景趣頗る凡、徒らに婦女子の歡笑に値ひするのみである。

鳴淵潭を過ぎて三佛岩、二丈五尺くらゐの大岩の面に彌陀立像を鐫り、その背面に六十體の佛像を刻してある、彌陀佛は懶翁禪師が法力をもつて之を彫り、六十佛は金同居士が術力をもつて刻したものと傳はつてゐる、小兒數人、礫を彌陀の佛頭に投げ上げて、留まりて落ちないのを戲として戲れ遊んでゐた、萬川の溪、こゝに到つて水は大いに肥えて來た、私は溪中の石を踏んで彼岸に上つた、そこに表訓寺がある、寺の凌波樓は、その溪の滸にあつて、昨雨の爲めに半篙の碧を增した水は床下を洗つてゐる、正面の般若寶殿には、丈六の法起菩薩の像がある、この山四大寺の一で、長安寺に亞ぐ大伽藍である、新綠日に燦く青鶴峰を背にして五寶、七星、法起の諸

峯は寺を圍んで、まことに閑寂なる景趣である、後庭から、石逕を辿つて放光臺の半腹に行くと正陽寺がある、八角堂には丈餘の石藥師佛があり、般若殿には大般若經を藏してゐる、堂前の古塔は、塔巨里及び神溪寺のものと共に、山中三古塔の一と稱せられて、構造精妙、好古の客をして垂涎三尺せしむる逸品である、歇性樓の上に立てば、遠紫近碧、双眸のうちに收まり、內金剛の諸峰を横披一幅の妙畫のごとく摠攬することが出來るのである、更に天際に一片の尖青、劍のごときを仰ぎ見る、これは毘盧峯である。

表訓寺から清流に傍ふて上ると、青鶴峰下に金剛門がある、自然の石門である、左右の峭壁は忽ち豁げて、萬瀑洞となるのである。

萬瀑洞は、萬峰の懐から湧く水の强大なる力をもて、路に當る巖をも石をも排し分けて、奔湍となり深潭となつて突貫し去る雄壯なる景趣である、水の力の斫り開いたこの洞は、一枚石をもつて成る大溪で、深潭は上游から下流へと、さながら玉の階のごとく相續ぎ、潭と潭との間には飛瀑があつて、これを繫いでゐる、潭は先づ洗頭盤、映蛾池、この映蛾池は觀音の化身が髮を洗ひ姿をうつしたところだといひ傳ふ、黑龍潭、琵琶潭、碧波潭、噴雪潭、眞珠潭、龜潭、船潭、

火龍潭、凡そ八潭、呀して萬斛の水を吸ふて後、復た靜かにこれを吐いて下流の潭に送るのである、そのうちで、最も壯大なものは眞珠潭である、次は黑龍、次は碧波、潭に枕む大石は、いづれも數千人を坐せしめて餘りあるほどの雄偉なるものである、その石面には支那でもこの地でも常にする名士の題字を勒してある、その中に殊に勝れて見える數十丈の大盤石には、仙人揚子彥の筆に成れる、蓬萊楓嶽、元化洞天の八大字が深く石膚に彫られてあつた、石の面に棊盤目を刻した四仙棊盤石といふのもある、溪頭の石は水苔が刺繡したやうについてゐる、趾を受けるために、人の歩度を計つてノ字乀字に鐫り凹ませてある、當面の穎嵐峭壁、その法起峯の中腹には、一本の銅柱をもて支へられた普德庵が、空外に懸つてゐるやうに仰ぎ見られる、

水の色は鴨頭綠

山の光は佛頂靑

私は仙工揚子彥の書いた蓬萊楓嶽の大文字の上に、毛布を敷き、箕踞して行厨を開いた、天風、翠微を吹き送つて、靜潭に影を蘸す雲物皆な搖く、何といふ幽妙な景趣であらう。

溪を傍ふて獅子峯の下に行くこと數町にして摩訶衍がある、新羅文武王の元年、僧義相の創建

で、現在の堂字は、李朝純祖の時、月松禪師の重修であるといふ、私はこの幽境を討尋するの老**脚を惜み、終に愛を割いて、表訓寺へと踵を回した。**

九龍淵、萬物相、萬瀑洞、私は遍ねく金剛山の三代表的佳境を觀ることを得た、私が多年看來つた山水に比較してこれをいへば、金剛山の諸勝は、御嶽昇仙峡、同じく瑞墻山、耶馬溪、寢覺床、猊鼻溪、五串、小豆島、豪溪、長門峡、鞍馬峡、伊那峡、保津峡、津川溪谷の、大處、佳處、好處、妙處を集めてこれを大成したものだと言ひ得ると思ふ、中に就いて萬物相、尤も勝り、九龍淵中の玉流洞これに次ぎ、その次は萬瀑洞である、但しその奇峯をもつて論ずれば、支那江西の廬山の五老峯に比して遜色あり、溪谷としては巫山並びに四川の嘉陵江上游に較べて、數籌を輸するのは當然であるが、その諸勝を併せ收めてゐる點に於いて、金剛山は東海の名山として、大いに天下に誇るに足るべきものであると思ふ。

安東から大連へ

五月央ばの京城には、はや夏の暑さが訪づれて來た、朝鮮にある內地の人は、綿入から、一足飛びに單衣に、冬服から背拔きの服となる、莊麗な朝鮮ホテル、料理は無味いがサービスは上、ベランダから中庭に降り立つて、李王が即位の式を擧げたといふ圜丘壇、丹も碧も老ひ寂びた朝鮮式の建物を取り入れた晩凉の庭の風趣は、人をして安南か廣東へでも旅したやうな閑愁を催さしむる、ホテルを出てから、鈴蘭燈の光まばゆき本町通を逍遙して、露店の花屋で買つた一束二錢の鈴蘭の香を嗅ぎつゝ、旅の鞄は先刻驛に預けてあり、急行券や寢臺券も買つてあるので、草帽短靴の輕裝で、南大門驛から奉天行きの汽車に上る。

寢臺車のクツションに腰を卸して、先づ一服と落ちついたが、ふと心づいて下肚の處に手を中てゝ見ると、何うやら腹卷をして來なかつたやうである、胴衣の釦子を外して探つて見ても、腹卷はしてこなかつた、私は我れ知らずオヤと叫んで座を起つた、腹卷の中には、奉天から大連、滿鐵沿線、支那鐵道の遼源、通遼、姚南から昻々溪、齊々哈爾から東支線の哈爾賓、長春、長春から又た支那鐵道の吉林、敦化と歷巡つて、若し金が餘つたら、奉天から更に北平、濟南、南京、

上海へも行かうと思ふ大事の〳〵旅費が入れてあるのである、私は仔細に尋思して、昨夜寢る前に夜具戸棚の中に置いたことを思ひ出した。

急用を思ひ出したから私は次の驛で車を下りると給仕にいつた、給仕は怪訝な顏をして、この汽車は急行ですから、松都までは停りませんといふ、時計を見ると、松都著は十一時五十分、早や眞夜半だ、どうしても松都に半夜を過ごさねばならぬ、輕い蟇口を檢べると、半圓銀貨が三枚と、白銅が七八枚、宿屋へ宿れなかつたなら、驛のベンチで夜を明かさう、パスは幸ひ總督府から贈られたものがある、これさへあればと觀念して、叉たぐつたりと腰をかける。

午夜少し前、汽車は開城驛に着いた、汽車から降りたのは私一人であつた、孤影悄然として改札口を出ると、驛の前には人ツ子一人も見えない、遙かに廣場の盡頭に旅人宿の軒燈が見えた、煤けて淡い軒燈の下に佇んで、早や鎖された扃を叩くと、若い女の睡むさうな聲が答へて、ガタピシと鳴居に跌づく破扃の脚を無理に啓けて耳隱の女が顏を出した、型のごとく湫陋極まる宿屋であるので、これならば先づ安心と胸を撫でゝ、歩むごとに黠鼠の啼く音を立てる階子を昇り、釘の頭の星ときらめく狹い廊下を導かれて、破襖子を開けると三疊の小座敷、五燭のランプの淡

い光の下には澁紙色の破疊、桁のとれた角火鉢、汚れた駱菊の座蒲團、情けないとは思ひながら儘よ半夜の辛抱と覺悟して、先づその女中に吩咐して京城へ、晝間なら三十錢のところを夜半の至急報といふので九十錢を奮發して電報を打つた後、明朝は一番、飯は不要と斷つてシャツ、づぼん下のまゝで煎餅蒲團のうちに入つた。

高麗の鄭夢周が濺いだ忠義の碧血、今にも夜は青燐を飛ばすといふ善竹橋や、滿月臺などある開城は征清役の當時、私が二た夜を過したところである、當時、行を共にした久保田米仙、堀江松華、高木藍軒などの諸士は、早や既に鬼籍に上つて、殘るは僅かに柵瀬軍之佐、野間伍造の諸氏あるのみである、在りし昔を回想しつゝ、うと〳〵と睡るほどに、やがて鷄鳴やがて朝、番茶に梅干、宿賃はといふと僅かに一圓、やれ〳〵助かつたと白銅三個を女中に與へて殘るは只の白銅一個、命から〴〵逃げ出して開城發の上りに乘り、京城著は朝の七時、晏起の友を叩き起して仔細を語れば腹を抱へて笑ひ轉げる、誠に旅中の一大失策である、茶漬サラ〳〵朝餐を濟まして、さながら燕の來り雁の去るやう、八時の汽車に間に合はせんと咄嗟に車を命じたのであつた。

坡州、汶山、峯阜、起伏して遠く連るところ、そこに碧蹄館の故戰場がある、行軍一夜、碧蹄

館に雨を聽いた昔を想ひ、臨津江の鐵橋を渡つては、露の繁き一と夜を、蟋蟀のごとく彼岸の素沙の中に睡つたことを憶ふ、開城附近は、今や桒の花の眞盛りであつた、蘿蔔の白い花も繚亂として咲いてゐた、滿地金、又た滿地銀、葭簀の屋根に掩はれた人參圃も隨處に見られた、鷄井驛に近い青石關、平山驛の右に峙つ大白山城、葱秀、興水、劍水驛、瑞興、鳳山、舍人關、皆な私が月に醒め露に睡つた陳迹である、黃州赤壁、その城頭の一角に聳えてゐる撫劍亭に、三夜の旅寢を重ねて、北、平壤に向つて進發したその前夜、燭を燃やし筆を執つて太柱に字を題した三十餘年前の私の筆の蹟は、今も猶ほ殘つてゐるであらう、中和から力浦、一水、横さまに流れて、某在りし昔の水滸橋の面影を留めてゐる、某の丘は、私達の平壤の酣戰を觀てゐた丘であらう、某の丘は、平壤攻陷の前一夜、我が軍背進、松林の陰に忠勇なる我が負傷者を、終夜看護してゐたところであらう、私は大同江を渡つて遙かに大同門、練光亭、乙密臺のあたりを騁望した、昔は黃蘆と素沙のみであつた羊角島が、一望菲蕪の水田と變り、崖樹幽深なる乙密臺の、今は青葉若葉に埋み殘された赤瓦白堊の家を見る、驚くべきは時の力である、肅川を過ぎてやがて定州に至れば漸く夕陽、車韋館に至つて黃昏、山村水郭、燈火を催す、午前八時、鴨綠江の鐵橋を渡りて

彼岸の安東縣に汽車は少時停まりて、支那稅關吏の檢査を受けたのである。
釣魚臺、鳳凰山、安奉線の沿道は、これを景趣の殺風景なる朝鮮鐵道に比ぶれば變化があつて旅客を喜ばすと聞いてゐたが、月のなき夜の汽車なれば、食堂に微醉を買つて後、酣睡、曉に達したのであつた、翌る朝の六時半、私は奉天驛のホームに降り立つた。
驛長室に大連行きの汽車を俟つこと一時間、やがて長春から來た汽車に上る、渾河、沙河、遼陽、首山、過ぐるところの驛は、皆な征露の戰役で、私達の耳に熟してゐる名である、見渡すかぎり莽々蒼々たる大平野、そこに空を蹴る波濤のやうに起伏する翠阜、蒼丘、皆な忠勇義烈なる我が將卒の血を濺いだところである、斯る曠野に身を風日に暴露して酣戰した我が軍の悲壯なる殉國的精神を憶ふ時は、感激して淚の双頰に傳ふを覺ゆるのである、鞍山、大石橋、得利寺、普蘭店、路は金州半島に入つて、右に渤海を見、左に黃海を望む、やがて金州、大房身を歷て、こゝ我が特殊地域なる滿蒙の大玄關、大連驛に我が汽車は、その大汽關車に裝置された大きな警鐸を鳴らしながら、徐かに〳〵進み入るのであつた。

盛大なる大連市

嫩い夏の日を受けて、瑞々しい若葉の枝もたわはに咲いたアカシヤの花、その香に包まれた大連の市街は、殖民都市としての動かしがたい根深い基礎と、國際都市として欣賞すべき清新な元氣の潑剌さとを有つてゐる、雨の少ない上に手入れの行き屆いたタール、マガダムの鏡のやうな道路を夾んで、大小六個の廣場から、蜘蛛の巣形の放射線に、競ひ立つ大厦高樓、私は東洋に於ける大埠頭都市に較べ見て、上海にはこの整美がなく、香港にはこの清新がなく、新嘉坡にはこの高閑がない、市の心臟に當る大廣場の周圍には、民政署、市役所、地方法院、警察署、遞信局、英國領事館、ヤマト、ホテル、正金、鮮銀、及び支那の中國銀行があり、少し離れて勞農領事館、大連醫院があつて、芊々たる芝生と、蒼翳たる常磐樹と、紅紫繚亂する四季の花卉とをもつこの大廣場は、正に一箇の大公園といひ得らるゝ、この大市の包擁する民口は、昭和元年の統計では、邦人一萬九千戶の八萬五千、支那人二萬五千戶の十四萬五千、諸外國人百戶の四百、合計四百四十戶の二十三萬人を容れ、その郊外一帶の山村水郭を合算すると、戶數は六萬、三十二萬人を超

えてゐる、少時も伸展を停めない其擴大力は、今や光風臺、桃源臺一帶の文化住宅を連ねて南は老虎灘に及び、西は聖德街と相並んで潭家屯に達し、沙河口から馬蘭河を越へて臺山屯の工業區域に及び、更に臺山の麓を傳ふて次第に別莊地なる星が浦に迫つてゐる。

自動車に又た馬車に、梭のごとく徠往する驛前に立ち迷ふた私は、僅かに自動車を傭ひ得て星が浦なるヤマト、ホテルに向つた、砥のごとき坦途を度つて、やがて敷妙の波穩やかに長汀曲浦を洗ふ星が浦の別莊地、翠樹の陰に隱見する紅瓦白壁の瀟洒たる一大宅は私の今宵の夢を托するヤマト、ホテルである、背には鈴が丘、大連富士の麓に廣い青蕪烟むるがごときゴルフ場を見渡し、前には曙が濱、霞が丘、黄昏の濱、遠く黑石礁の亂礁に對す、私は海を望むに近い一室を賃してそこに詩嚢を安頓した。

大連では、先づ何を觀やうか、何を措いても一年中に七百二十萬噸の尨大なる貨物を呑吐する大埠頭の大觀に接せねばならぬ、私は埠頭事務所の雄大なる七層閣の上に立つて、一里餘の防波堤に包擁された九十餘萬坪の海面に、五千噸級の船舶を同時に三十七隻を聯ね繫ぐべき三道の長き大岸壁と、そこに繫泊し來往する許多の船舶とを驕望し、更に又た埠頭に城のごとく横はる船

客待合所を觀たのであつた。

二十年の昔、露西亞が遺した規模に據つて、更に擴大された我が大連は、滿蒙開發の鴻圖に順應すべく我が家國と民人との努力によりて、更にます〳〵進展しつゝあるのである。

熱鬧な小盜兒市

埠頭の各種荷役作業に從事する支那苦力、都べて一萬六千人を收容して常住安居の樂しみを享けさせる碧山莊、身に一絲も着けない裸身の人が、恒河沙の熱霧の噴迫する油房にあつて、豆油豆粕を造りつゝある日清製油會社の作業や、一枚の重さ七貫と稱せらるゝ豆粕の、十四枚を肩に擔ふて大踏步し、些の苦勞の色もない埠頭の苦力の作業などを觀た私は、市の西南に當る一區の支那街にある小盜兒市場に自動車を走らせた。

幾條の細い露路、その狹い路を隔てゝ都べて穢陋なる雜具店である、私は先づ最初の店頭に、猛火に燬かれ爛れたと思はるゝ大金庫の簷を壓して立つてゐるのに驚いた、脚の跛となつてゐる椅子、卓子、クッション年故りてはや摩擦し、肚は裂けて綿絮を露出してゐる寢椅子、游環の落ちた瓶子、水銀はや剝け去つた硝子鏡、右と左とその形を異にしてゐる長靴短靴は、雜然として店頭に並べられてあつた、その隣りの古着屋の店頭には、支那前朝の大官が着たと見える丸龍の紋を胸に刺繡した官服が吊され、詰襟の羅紗服、夏袴、冬襖、猫が見たら飛びつきさうな赤鰯の

偃月刀、その他一切の家具什器、それが皆な滿足なものもない雜物が、うち陳べられた一大市場である。

露地の盡頭は廣場になつてゐる、饅頭、餛飩、肉の煎込おでんなどの露店がある、人相見、膏藥賣、野天講談、いづれも人を集めてゐる、私は、群がる人の背後から趾てゝ一軒の小屋を窺いて見た、英雄大力丸といふ丸藥を賣つてゐた、虎髯をくひそらした赭ら顔の男、聲を揚げて藥の功能をわめけば、その傍に蹲る小孩子は、聲に和してこれに應ずる、今は東京に影を潜めたやうであるが、その昔はあつた蟇の油の膏藥賣り永井兵助を想はしめた、その隣にある群衆團は、油紙に火のついたやうにペラ〳〵饒舌る妙齡の女講談師の話說を樂しみ聽いてゐるのであつた、次には滄州鶴寶山追風治血膏と横さまに太く書いた暖簾を懸け渡して、蛇鉾、龍刀を背に飾り立て、一とわたりその藥の功能を述べ終つて、エイヤと一と聲猿臂を伸ばして、傍にあつた三段つなぎの木挺をひつ握むや、鳥居立ちに立ちはだかれば、一人の少年、これは龍刀を打ち揮つて斫つてかゝる、一昴一落、虛々實々の秘術をつくして、少時しは奮鬪してあるうちに、三段の木挺、一と揮りふれば眞つすぐに、風に吼えつゝ一條の棒となつて少年の双脛を拂ふ、その一刹那、少年

は躍り上つて身は三尺の空に飛び、龍刀閃白、横さまに棒を打つ、急霰のごとき拍手のうちに、主翁は笑つて挺を收め、少年も亦た疲れて刀を引いて立つ、その打つや電光石火、今、內地に流行る劍劇は物の數かは、斯うして彼れは滄州鶴寶山追風治血膏といふ永々しい名の膏藥を賣るのである、この他、琵琶を彈じて錢を乞ふ盲女もあれば、蛇皮線の音につれて、いたいけの少女が舞踊して纏頭を貰ふものもある、おかしいのは吳越合戰の覗き機關、言葉こそ解らないが、機關の緣を引くその男のいふ節廻しが、矢張り私達の小供の時に觀た機關師の、ストトンカラリと渡るのが日本橋といふその節廻しに似てゐるやうに思はれて、坐ろに昔が懷しかつた。

滿鐵經營の硝子工場を訪づれて、切子玻璃器を造る作業を視て後、私は中央公園をドライブし、更に老虎灘の丘に登つた、下には危礁亂立し、黃海の波、寄せ來つて雪を噴く、岬角に稻荷社あり、朱の鳥居の並び立つさま、羽田の穴守を思はしめる、草を籍きて眺望しばらくするほどに、忽ち大霧の蓬々として海上に起ると思ふまに、山を裹み市を掩ふて、咫尺の外に物も見えない、仰げば一條の虹現はれて、星が濱から黃昏の濱かけて彎々として長く懸つてゐた、綺麗な虹だ、しかし怖ろしい濃霧であると友にいへば、大連は常にこれですよ、霧はこの地の名物ですと

いふ、霧の晴れ間に突兀として奇峯が露はれた、眉間に迫まるほどの近さである、對岸桃源臺の突角である。

旅順の戰蹟を弔ふ

一、木下長官邸の午餐

旅大道路には名物の霧が、萬斛の灰をふりまいたやうに降つてゐる、自動車はその霧の中をかけぬける、眼鏡は曇る、服の釦子は汗をかいたやうに濡れてゐる、突き貫いて霧を出ると、海は碧く山は青い旅順の町に入る、二十餘年前百戰の跡、その攻圍十箇月の間に十六萬七千八百十三發の重砲彈と、十二萬一千七百五十發の野山砲彈と、四千五百九十萬五千三百發の小銃彈と、一萬四千四百七十八名の戰死者と、三萬九千六百二十九名の戰傷者の、測るべからざるの犧牲を出した禿山白草、滿目荒凉たる古戰場も、その忠烈な人の子の濺いだ血潮に培かはれて、栽えられた松は早や既に拱するまでに長じ、草も亦た欣々として榮に向ひ、翠阜蒼丘、欝々として燃き夏の日に燦いてゐる。

私は關東長官木下謙次郎氏に敬意を表するため、老虎山の隧道を過ぎ、龍王塘の水源池より流

れ來る晴れやかな川に架けた橋を渡り、玉の浦を歴、再び白華山の隧道を過ぎて、海に沿ふて穹窿なす東洋橋を渡り、躑躅花、砌に咲き、アカシャの花、路に散り布く長官官邸の門を訪づれた、官邸は白玉山を背にして新公園に隣り、小高い丘の上に構へられ、大路を隔てゝ西港の漣漪をながめ、黄金山と、老虎尾半島の沙嘴のさながら一つ巴の様を描いて相嚮ふ港口に對して、如何にも高閑に、品の好い建築である、聞けば露西亞の陸軍司令官の官邸であつたといふ、私は先づこの官邸に棲む木下長官の清福を健羨するの情に堪へない。

木下長官とは昔から熟面の間柄である、私は曾つて長官が述作した美味求眞が、洛陽の紙價を高からしめた時、その披露の招宴に築地の錦水に行つたことがある、當時の木下君は、政事家としての坎坷不遇の身境から、餘技の述作にその滿腔の不平を吐露せんとしたものであつた、その席でも木下君は、野服蕭散、はや念を世事に絕ち、、隱居放言の境に遊ばんと思ふやうにも看取された、乾坤輾旋して木下君には春が再び訪れ來つた、舊誼に篤い大將田中首相は、君を布衣から拔擢して、關東長官の榮冠をその双鬢霜を置く頭上に戴せたのであつた。

私は朗らかに明るい大廳で、木下長官に見えて、先づ一別以來の久濶を謝した、縞絽の羽織、

紹袴の長官は、相變らず洒々落々たる態度をもつて在りし昔のごとく私を遇してくれた、大廳から更にその書齋に席を移して相語つた、書齋は西鷄冠山から老虎尾を瞰下して、殘花猶ほ宿る窓邊のアカシヤの木隱れに、亭午の日を受けた一灣の漣漪は、チラ〳〵、チラ〳〵と蛟龍の姿を淺葱綾絹の窓帷の上に反映した、この室は書齋といふよりも、長官として事務を視るオフィスの一房と見るのが適當であつた、壁に傍ふて置かれた大きな朱檀の戸棚の中には、宋、元、明の時代に亘る精妙な陶瓷器の珍品が陳列されてあつた、私は長官が此館の主となつて僅かに二年にして、斯くの如き許多の奇品を蒐集したのを心竊かに驚いた、平生自から人に清貧を誇つてゐた木下君は、その錢を乞はんと門前に沓至する張三李四を避くる爲めの、清貧はその標榜に過ぎなかつたのであるかとも猜した、長官となつた木下君は、この高貴の骨董を貪り買ふの多錢漢となつたのを怪しんだ。」

二、豚肉が一番旨い

折から午時、長官は少時その席を去つたと思ふと、今度は瀟洒なモーニングに衣を更へて、私

を食堂に導いた、食卓には、令夫人もゐられた、秘書の某氏も席を列ねた、肉汁、魚肉、鷄肉、蔬菜、皆な精美にして新鮮なものであつた、珍饌の外に、鯖鮨を添へてあつた、鯖は今が脊が乗つてゐる旬だからと、長官は先づ箸を執つて試み食べて後私に侑めた、美味求眞の著者なる長官邸の午餐は、汗漫の游び既に一月半に及んで、旅館の飯に飽き果てゝゐた私には、誠に無上の美饌であつた、私はこの事を長官に語つて謝辭を述べると、長官は笑つて美しい夫人を顧みて、先達來た下村海南と杉村楚人冠も、君と同じ樣なことをいつて、頻りに讃辭を呈してゐたが、司厨夫は前代からの家附者で、別に御馳走しやうと思ふて特に注文したものではない、尋常一樣毎家の茶飯さ、この地に來て先づ美味だと嘆稱するに足るのは、豚肉だよ、けふは生憎豚がないので遺憾であるといふ、話頭一轉、公務の事に及ぶ、長官は民政を管掌し、兼ね滿鐵社長の職務を監督するとあるから、非常に忙務であられませうと問ふと、權限こそ重大だが、唯だ位倒れに過ぎないよ、丁度、德川幕府と京都の公卿のやうなものだ、幕府は滿鐵、莫大なる資力をもつて雄大なる施設をなす、位ゐこそ高いか知れぬが、公卿は唯だ盲判を捺するに止まる、時には監督權を振り廻すこともあるが、實權のない監督は、稻田に立つてゐる案山子も同樣だと大いに笑ふ、澤山

に骨董を蒐集してゐられますなど問ふと、イヤ、あの書齋の戸棚にある珍品かい、あれは先頃宮様が戰蹟御視察に見えられた時、御慰みに御覽に入れやうと、旅順博物館から、秘藏の陶瓷十數點を借りて來て、まだ還へさずにあつたのだ、あの宋窯の青磁游環の香爐などは、誠に稀覯の逸品であるが、借物だから失敬するといふことも出來ないよと、洒々落々、心に城府を置かずに打ち語る木下君は、野人の風丰が、躍如として露はれてゐる。

三、悽慘なる東鷄冠山の戰蹟

長官邸を出でた私は、自動車を驅つて先づ舊市街の東端の丘上にある旅順要塞戰記念品陳列場を觀た、こゝは元と露西亞陸軍下士の集會所であつたといふ、その玄關に隣る一室の天井を穿つて、我が砲彈が炸裂した當年の慘狀を、まざ〳〵見せてゐたといふことは、先づ私の心を躍らせた、陳列してあるさま〴〵の兵器の中に、私は我が工兵が彈丸雨注の下に立つて坑道を掘穿したその長い鶴嘴が、次第に摩幣して鍋よりも短かくなつてゐるのを觀て、いかに肉を裂き骨を咼するの慘鬪を重ねてゐたかを想はしめた、敵の掃射に薙ぎ倒さるゝ機關銃の狠雨のやうな彈丸を避

くるため、新たに作られた鐵盾に、大小無數の彈痕を留めてゐるのも、私の心を寒からしめた、楣間に掛けた大額面は、明治三十七年八月二十二日、歩兵第十二聯隊第三大隊の猛將勇士が、東鷄冠山の北堡壘を突撃した時の悽酸なる光景を撮影したものである。

私は數ある旅順背面の防禦堡壘のうちに就いて、先づ足を東鷄冠山の北砲臺に向けた、歴史的に著名にして且つ典型的である點に於いて、先づ鷄冠山の戰跡を憑吊すべく、出發前、同人會の席上に於いて、畏友上田恭輔氏から勸められた爲めである。

我が包圍軍が幾度も敢へてした肉彈的總攻擊を頑强に防戰し、二十八珊の巨彈六百發を撲ちつけられながら、ビクとも動かず、終に開城當日に至つて、露軍自から爆破し去つた東鷄冠山は、實に近世的科學の精髓を集めて作られた永久砲臺であり、之に隣接せる北堡壘も亦た殆んど前者と同じく永久的築城本位の堅固無比の砲臺である、その北堡臺は、前面二重に三丈餘尺の深い塹壕を繞らし、内部の胸壁、外岸側防等、誠に至れり盡せるものといふべく、堡内には、完全なる地下道があつて、敵の砲火には一切暴露しない構造になつてゐる、八珊の野砲六門、陸海軍の大小各種の大砲二十門をもてこれを防備し、更に壕内に機關銃五門を置いて、その側防に備へたも

のである、我が歩兵第四十四聯隊が、この砲臺に向つて攻撃を開始したのは、實に八月の十九日であつた、攻撃部隊は先づ砲臺下に蜘蛛の巢のやうに張つた鐵條網に一跌し、辛くも工兵の援助によつて鐵條網を破壞して外壕の胸墻に躍進すれば、猛烈なる砲火に逢ふて鏖殺された、こは獨り北堡壘のみ然るにあらず、東鷄冠山も、二龍山も、二〇三高地も亦た全滅に全滅を重ねてゐたのである、二十二日に至り、終に全軍總攻撃中止の命令が出た。

第一回總攻撃の失敗以來、戰術は更められて、專ら坑道を開鑿することゝなり、九月の下旬には多大の犧牲の下に北堡壘に向つて約四千米突の塹壕が開鑿された、十月初旬、作業が五千米突に達した時、地盤が硬度の硅石岩となり、敵の猛射、日に加つたので、壕道より更に隧道に作業を變へ、三十二米突の地下道が鑿穿された時、露軍も亦た地下道を開鑿して、恰も我が地下道の頭上三米突の地點まで掘り來り、我が隧道を封鎖すべく爆破したが、我には大いなる損害なく、却つて堡壘の外廓胸墻の一部を破壞した、勇敢なる我が兵はその胸墻の缺所より爆彈を投じて砲臺の胸壁を破壞し、石油を濺ぎて火を放ち、終に砲壘の外廓東隅部を占領した。

その翌日以來擲彈戰、白兵戰は虛日なく打ち續いた、我軍は胸墻の底部に向つて坑道を進め、

十一月二十六日の午後一時、大爆發を行つたが功果なく、廿八日午後二時、更に八個の地雷を爆發して東北隅の胸墻を粉碎し、その夜の十一時五十分に、完全に此砲臺を皇軍の手に收めたのであつた。

一樹一石、皆な我が忠義の碧血を濺いだところである、私は想ふ、若し夜闌けてこの山を訪づれ來たらば、滿山の青燐、月に燃えるであらうことを、當年の崎嶇たる險難の逕は、今や夷げ擴げられて、坦々として自動車をその頂邊まで驅り得らるゝのである、遠山、近山、波濤のごとく連なりて、遙かに青冥に入る、總べて皆な舊時の砲臺である、私は我軍の且つ鬪ひ且つ穿鑿した電光形の壕道を顧みつゝ、胸墻より地下道に入つた、混凝土掩蓋の厚さ十尺ばかり、その岩よりも堅い壁面に無數の砲彈炸裂の痕を留め、血肉紛々たる白兵戰を想はしめる、その掩蓋の缺くところの坪處には、コンドラテンコ將軍戰死の所と勒された記念碑が立つてゐる、將軍は防禦軍の主將、露軍に聲望の高かつた人である、十一月十五日、我が二十八珊の巨彈、この掩蓋の下に炸裂して、十人の幕僚と共に壯烈な戰死を遂げたところである、將軍逝いて後、露軍の士氣は大いに阻喪し、怯弱なるフオーク中將、代つて指導に任じたが、爾來一回も我が軍の突貫を擊退し得

す、各砲臺もつゞいて陷落し、終に開城となつたのである。

四、水師營の會見所

山を下つて私は水師營會見所を訪づれた、左に白玉山の紀念塔を仰ぎ、松樹の砲臺を右に見て、鐵道線路に沿ひ北に進めば、左に折れて寂しい一區の村に入つた、水師營とはこゝである、やがて會見所の前に車は停る、土の壁の門を入ると、中庭に盾の形に積み成された花崗石の、その中央に水師營會見所の六字を鐫つたのが掛られてある、正面にある四個の窓をもつ草葺屋根の一民家は、明治三十八年の一月五日、攻圍軍の總司令官乃木大將と、防禦軍の總司令ステツセル中將とが、會見したところである、入口を入ると、右が露國委員の控所、左が我が委員の控所で、共に十六疊敷ばかり、左右室とも其半分が暖房の坑となり、房隅の屋を穿つて烟突が屋根の上に出てゐる、中央の土間は當年の會見室で、廣さは八疊敷ぐらゐ、楣間に乃木、ステツセル兩司令を中心にその幕僚が肩を駢べて撮影した紀念寫眞が懸つてゐる。

私はこの湫穢なる水師營の一民家に於ける一月五日の歷史的光景を想ひ浮べた、旅順戰記に錄

された當日の記事を讀むに、嚴肅にして宏量なる乃木將軍の襟度と、辭禮謙遜なる敗殘のステッセル將軍の衷情とを、その言動によりてさながら名匠の描いた繪卷を披き看たやうに思はせる。

當日の午前十時四十分、ス將軍は先づ水師營についた、續いて十一時三十分、乃木將軍も亦た到着した、この日は天氣晴朗、日頃は呼氣も髭に凍つて霜を成すの烈寒であるが、この朝は風も吹かず春のやうに温かつた、ス將軍は先づ乃木將軍に對して一昨三日、特に人を遣はされて敗殘の自分に對して親切なる慰問を辱うし、心盡しの厚貺をさへ寄せられたことを感謝し、更に又た貴國陛下より優渥なる聖旨を賜はり、敗殘の老生この上の面目あらず、深く感激いたしをると告げた、心盡しの厚貺とは葡萄酒一打、三鞭酒一打、及び鷄三十羽を贈られたことである、乃木大將は之に答へて、久しい間の籠城に夫人や子女の困難さこそと推料したので、心ばかりの慰問を致したるに過ぎずと答ふ。

ス將軍は兩眼に涙を湛へつゝ、老生は、この戰鬪の爲めに父母を失ひて孤兒となつた十一歲より六歲までの女四人男二人を、その兩親に代つて扶養してゐる、仄かに承はれば、閣下には、今次の戰鬪に二令息を亡ひたまひしと、閣下の胸中を忖度して、老生は涙の自から兩頰に傳ふを禁

ばならない、たる者は假令貧しくとも、孤兒、寡婦の爲めに救濟の道を講じ得ないといふ、將軍曰ふ、一昨日、貴邸に遣はしたる者より、將軍は父母なき孤兒を慈しみ養ひ、孤兒も亦た將軍と夫人の傍に在りて、腰に縈り手に縋りて、眞の父母のごとく馴れ親めるさまを聞きて、幾たびか嗟嘆したりき、老生の二兒のごときは、代々武士の家に生れたることなれば、國家の爲めに命を致すは當然の事であるといふ。

ス將軍は言葉をつぎて、さりとは健氣なお言葉かな、國家の爲めに凡ての福祉を捧げて一家一身を顧みざるは、眞に大人の道である、噫、貴國將士の勇敢なるは實に之に由るといへば、大將は勇敢とは貴國將士の事なり、健氣なりとは將軍の言行なり、さて今次の戰爭中、將軍の痛く感じられたるものは如何なることなりやと問へば、ス將軍、二十八珊の巨彈の飛び來りて、市街といはず砲臺といはず、爆烈するには驚愕せり、大將、そは貴國將士が餘りに勇敢なりし爲めに二十八珊砲を用ゆるの已むを得ざるに至れるなり、貴軍が魚形水雷を陸上に發射されたることも、實に吾等が膽を寒からしめたりと語る、折から午餐の用意は成つて、大將、將軍相携へ、幕僚と共に卓に就く、酒酣、將軍起ちて大將の武勇をたゝえ、盃を擧げてその健康を祝福すれば、大將も亦杯を揚げて將軍の健康を祝福した。

午餐の後、寫眞班は大將と將軍とを中心とした彼我將校を外庭に撮影した、將軍は大將に對ひ、老生、馬を愛す、今駿馬四頭を養ふ、二頭は純阿拉比亞種、今日騎し來れるものはその一である、今や老生故國に歸る應さに日あるべし、既に志を征戎に絶つ、請ふ我が馬を閣下に獻ぜんといふ、大將曰く、厚意は謝するに餘りあり、さりながら、馬は閣下の物なれども、亦た兵器の一種なり、貴官、請ふこれを他の武器と同じ我が委員に交付せられよ、但し我が軍これを收めたる曉に於いて、余は貴官に代つて永くこれを愛撫せん、希くば先づ貴官の颯爽たる鞍上の勇姿を見んと、將軍快諾、鬣を把るよと見れば、忽ち馬上の人となり、葉卷煙草を啣みつゝ優容として外庭を三匝す、大將、手を揚げて馬首を叩いて曰ふ、誠に逸物なりと。

午後一時、ス將軍は旅順に還つた、越へて一月十一日、將軍は鼠色の外套を被り、黑毛の軍帽を戴きて、夫人小兒六人、レーンス參謀長ゴルバトスキー將軍と共に、午後二時半、長嶺子驛を出發して歸國の途に就いたのである。

約半歳の永きに亙つて旅順の金城湯池を嬰守し、力竭きて開城したス將軍は、敵ながら天晴れな人物であることは否めない、しかもこの戰敗將軍は、何といふ數奇の運命であつたであらう、

本國に歸つた將軍は、やがて軍法會議に附せられて重刑に處せられ、大赦の後は、落魄して茶舗の番頭となり、次いで革命の動亂に遭ふて難を國外に避け、終に放浪の途に客死し、一介の無籍行路の死屍となつて、何處とも知られざる寒驛の荒草裡に瘞められ了つたのである。

私は、會見所の中庭を徘徊顧望しつゝ、當年の事を追懷した、庭隅に一株の棗の樹の、枝葉扶疎として立つてゐるのがあつた、まさに當時の物である、土墻を隣る民家の庭から、油搾り機械の軋り鳴る音に似た快からぬ驢馬の、聲を引いて長く啼くのが聞えて來た。

會見所を觀た私は更に小案子山砲臺丘下にある露軍弔魂碑を觀るべく車を走らせた、この地は元來在留露人の公設墓地であつたが、我が當局者は特にこの隣接の地を相してこゝに旅順籠城軍の戰歿者の骨を瘞め、その中央に御影石を基壇とした大理石の大墓標を建立し、もつてその冥福を祈ることにしたのである、長さ五十間、幅二十間の墓地の周圍には、鐵柵煉瓦塀を繞らし、門を入ると露國風の禮拜堂さへ立てられ、墓を守る露人あつて、香華を賣つてゐる、一歩塋域に入ると、幾多の土饅頭の上に或は大理石、或は鋼鐵、或は御影石で、各樣各種の十字架墓標が整然として排列せられ、故人生前の閱歷が鐫られてある。

五、旅順戰歿露軍將卒の碑

敵愾心の熾烈なる邦人は、一旦戈を戢めて手を握つた時、恩讐こゝに相忘るゝの邦人である、私は曾つて高野山に於いて高麗陣に於ける彼我戰歿者の供養塔を觀た、不倶戴天の怨敵と戰つた後、その怨敵の亡魂の爲めその冥福を祈るといふことは、これを佛敎の感化といふよりも、深くこれを考察すれば、我が邦人の心境には、死をもつて贖はれた敵人に對して、更にその塚を發きその屍に笞つといふやうな根深き殘忍さを有つてゐないのみならず、曩日の夜叉の面は、さながら雷雨の晴れた後のやうな菩薩面となつて、その亡魂を弔慰するのである、彼の征淸の役の當時にも、皇軍第二軍の司令官大山大將は、金州に淸國軍人戰亡碑を建てゝ、敵の戰死者を弔慰し、その冥福を祈つた、更にこの旅順の露軍弔魂碑は、我が官民の醵金に依つて建てられたもので、平和と莊嚴との氣分の横溢した紀念碑である、その正面の白色大理石面には、金屬性の花輪の下に、旅順陣歿者露軍將卒之碑と露文で深く銘刻され、更にその側面には、端麗な楷書で、明治四十年十月大日本政府建之と大書し、その背面には中楷の漢文で、不幸にして戰場に一命を隕す、

たとへ仇敵といへども之を掩ひ之を埋むるをもつて本務とすべきことである、蓋しこれによつて一は忠義を勵まし、一は仁愛之道を弘むればなり、況や昨は仇讐たりといへども、今や友邦たるに於いてをや、玆に日本帝國政府は、旅順要塞司令官に令を下し、露國殉難の將卒にして、各所に假瘞しあるものを査索せしめ、禮を厚うして之を案子山麓にある舊露國軍民の墓地內に改葬せしむ、仍て玆に碑表を樹て以つて英靈を百世に弔し、その義烈を千載に揭ぐと勒された、この忠魂碑を取り圍んで、無名戰士の墓が列んでゐる、總て一萬四千三十一名、中に就いて最も多いのは二〇三高地の六千五百五十名である。

この紀念碑の除幕に當つて、乃木將軍は、特に勅命に依つてその儀式に參列した、露國皇帝も亦た侍從武官長海軍大將、ゲルグロス及び陸軍大將ムチヤコフを旅順に差遣し、大僧正インノケンチは十數名の僧侶を卒いて同じく除幕式に參列することになつたのみならず、皇帝はその名代をして先づ白玉山に參詣して、皇帝の御名を記した二個の大花輪を擧げしめた、爾來二十餘年、その每年の招魂祭には、恒例のごとく東京の露大使館又は北京の露公使館の武官が白玉山に參詣し、納骨堂に花環を捧げ、更に我旅順の官憲と共に、露軍戰歿者表忠碑に參拜することゝなつて

ゐる。

禮拜堂の正面には十字架にかけられた基督の塑像がある、これを繞つて數ある花輪の新陳相並んでゐる、香爐の烟は何來の風に絹絲を撒くさまに低迷す、傍の卓上にある憑弔簿には、漢字、蟹行字の或は淡く或は濃く題されてあるのを見た。

六、老虎尾の閉塞隊紀念碑

露軍表忠碑に、一瓣香を捧げた私は、今宵宿るべき新市街のヤマトホテルを指して車を回した、途、旅順博物館の門を過ぎて、日のまだ高かいので入つて觀た、滿蒙の物產土宜、工藝品、陶磁品、出土品その他歷史的參考品を陳列してあつた、私は許多の石器、銅鐵器、磁器古錢の多くの蒐集物に就いて多大の興味を感じ、耽看して時の移つるのを忘れてゐた、館に隣る後樂園、ライラックの花正に盛り、妙香は人の衣袂を薰殺した、竹樹清新、幽邃その間に通ず、逍遙すること半晌、終に車を回した、博物館は占領當時、半ば成りつゝあつた家屋に依つて、その規模を擴張したもので、後樂園は當時の植物園である、後樂園後の大馬路を走れば、海灣晶々然として

明鏡を開いてゐる、嶸嶸たる老虎尾半島の沙嘴長く出でゝ、黃金山砲臺の危崖と相距ること僅かに數町、潮汐の吐呑は、唯だこの口あるのみである、もし一たびこの灣口を閉鎖すれば、東港西港の灣内にある艦船は嚢の中の鼠となるのである、我勇敢なる海軍々人の、壯烈鬼神を泣かしむるの三次の閉塞作業は、實にこの缺所に向つて行はれたものである、老虎尾の一角に、當年の功を勒する閉塞除紀念碑がある、白い寒水石を基壇して、上に巨錨を安置したものである。

ホテルに詩嚢を卸して、入浴の後、物靜かな食堂に入つた、大連の熱閙と殷賑とに比べると、旅順はまことに靜寂にして閑雅な市街である、昭和元年、劇職を去つて東洋諸國に汗漫の遊びをなすを得た以來、私は、香港、新嘉坡の大埠頭、及び數度の游蹤を上海の土に印し得たが、今玆、始めて親しく大連を觀るに及んで、私は竊にこの四つの港を比較すると、上海はまことに熱閙なる開港場であるけれど、そこには支那一流の、何やら放漫蕪雜な空氣が彌漫してゐるやうに思はれる、即ち落ちついてゐない處である、香港は、その海山の明麗はあるが、せゝこましい感じがするところである、新嘉坡は、熱帶地だけあつて、開放的の氣分が溢れてゐるが、何となく尻のしまりがついてゐないやうな感じのする處である、獨り我が大連は、海山の明麗といひ、市街の整

美といひ、その熱鬧の度合こそ上海には一籌を輸するにせよ、私は東洋に於ける諸大埠頭の第一として讃美するのを吝まぬのである、よしこの港の草創が露の青泥窪の規模に由るとはいへ、これを粉飾し、これを擴大し、これを整美し、これを大成したのは我が邦人であることを思へば、誠に頼母しい次第である、大連に隣れる旅順、私は、その靜閑にして温雅な市街として、亦たこれを愛するの念に堪へない、二十餘年前には、東洋の和平の爲めに、敵國との公戰に現世に修羅道を現じたが、樹肥え草茂りて陳跡はやうやく亡び、造兵の進歩は、こゝを樞要機密の關塞とする價値を消滅し、今は唯だ怖ろしい昔話となり了つた當年の有樣を、山紫に水明かなる處に偲ぶのみとなつたのである、滿蒙の第一線に立ちて活動する邦人の、暑さに、寒さに、慰樂を享けるその行樂地は、正しくこの旅順であらう、その山海の好風景は、私をして一と歳、遠く遊んだ葡萄牙領媽港を憶ひ起さしめる。

夜、出でゝ新市街を散歩した、町並に點した鈴蘭燈の、その一箇にのみ點火して、幽かに路を照らす物靜かさ、路を行く人もいと稀れに、月暗く星繁げきこの夕べを、唯だ潮の高鳴るを聞くのみである、多くの家の戸を鎖ざしてある中に、燈明るい一軒の店頭に、五六箇の人の佇みある

のを近づけば、蓄音器を聽いてゐるのであつた、歌曲は誰れやらのジプシーの歌であつた、私は徐かに踵を回へした。

牧羊城の遺墟を探る

翌る日は、自動車で、老虎尾山の背にある牧羊城の故蹟を探りに出懸けた、鹽田の畔を過ぎて、五つ六つの丘を越え、やがて南山裡の部落に入つた、途中で、荷馬車の上に小學校へ行く童男童女を乘せて、老ひた馬夫が鞭を鳴らして踽々として來るに幾度も逢つた、村毎に兒童を一つの馬車に收めて、學校へ送り屆けるのである、支那人の小兒は皆な愛らしい顏をしてゐる、その馬車は幾つもつゞく、車上の兒等は轍から起つ濛々の沙煙を浴びながら、後車前車、顧望して相喚ひ相語つて行くのである。

南山裡の丘の前には巡査駐在所がある、訪づれると、一人の巡査が現はれた、牧羊城の遺墟のある處を尋ねると、快よく領いて自分が案内するといつて先に立つ、一緒に自動車に乘れといふと、頭を掉つて辭退する、腕を執つて強いて乘せて、幾つの丘を踰えてやがて路の窮まる處で車を捨てた、夷らな丘陵の斜面、そこには大きな葉を有つ濶葉樹の大木一株と、楡の二三本が立つてゐる外は都べて麥畠で、麥ははや穗を抽いてゐた、牧羊城の墟はこゝである、胸壁は、早や全

くその跡を亡くしてゐるが、東方の一角には、時に殘壞した塼瓦が見える、畠の中に入つて見ると、土器の破片もある、丘の蔭には、四五軒の穢い支那家宅が、相欟ひ、相背いて、低い藁屋根を見せてゐた。

牧羊城は、漢の末期時代の要塞である、丁度彼の魏、呉、蜀の三國が鼎立してゐた時、遼東半島から、いまの營口、遼河の河口を扼してゐた公孫淵などの豪族に備ふるために、魏の軍隊が、遠くこゝまで出征して、守備し屯田したところである、世の好事家が、往々にして牧羊城から採收したといふ銅鏃や石鏃を珍藏してゐるので、私も亦た旅順訪問のついでに、その遺蹟を討尋したのである、私は巡査に、部落の人に銅鏃や石鏃を拾ひ獲た者があるかを尋ねた、巡査は丘の上に立つて、支那語で何にやら喚めき立てた、その聲を聞いて、そこここの民家の扃は啓けられ、腰の曲つた老女や、赤い帛を掛けた娘や、藜の杖をついた老爺など數人の男女は、私の身邊を圍繞した、最初の少女の示したものは、磨製の小さい石鏃であつた、私は白銅一箇を彼に與へてこれを購つた、次の老爺の掌に持つものは打製の石鏃であつた、白銅一箇をもてこれに換えた、次の老女の手にしてゐたのは、鉾形の青銅鏃であつた、既に久しく、垢たらけの掌で摩挲してゐたも

のと見え、さながら碧琅玕のごとく、老蒼にして奇古まことに愛すべきものであつた、私は二箇の白銅をもて換えんとしたが、老女は頭を掉つてこれを拒んだ、私は更に一個を増し、その不平の色あるを察して、更に又た二個を與へて、蒼黒い垢をためた爪をもつ皺だらけの掌からそれを摘み上げて、料らざる好箇の獲物に鷲喜したのであつた、丘上より見渡せば、東南に老銕山を仰ぎ、南西は黄海の蒼波に對し、まさに形勝の地と思はれた、私は車を警官詰所に回して、辭し去る時、その姓名を問へば、帽子の廂に掌をかざして李某と答へた、正しく支那人であつた、その風貌から言語、動作まで、些しも邦人と異らない、彼は關東廳に雇はれてゐるものである。

鴻臚井の故址

歸途、私は爾靈山に登つて、その紀念塔を仰ぎ、更に白玉山に納骨堂並びに表忠碑に賽した、爾靈山が旅順の死命を制するその鎖鑰、その戰鬪の慘烈を極めたことは私はこれを筆にするに忍びない、白玉山の納骨堂には我が陸海軍の戰死病歿者二萬六百九十六名の遺骨を納め、明治三十八年十一月工を起し四十一年三月工を竣つたものである、表忠碑は四十年六月工を創め四十二年

その工を終はる、塔の高さ實に二百十八尺、塔身は圓檣形で、鐵筋混凝土をもつて構成し、塔内には鐵製螺旋形の階段があつて、塔頭の廻廊に達する、頂邊に立つて騁望すれば、海山環のごとく匝りて遙かに山東の遙青を見る、眞に一世を蟷視し百代に虎歩するの槪がある。

車を回へして黃金山の下、造船所の構內に鴻臚井の古址を觀た、東港の波靜かに磯邊に寄するところ、夏草しげる平蕪に傍ふて、看守の人の住む小さき家の背に、その古井があつた、花崗石の井桁を甃みて、水際深く赤煉瓦を疊んだ、磯に近いところとて、海潮のさし入りて、鹹からいと想はれたが、水味は甘冽にして量も多い、舊記の誌るすところを讀むに、この井戶は、唐の鴻臚卿崔忻の鑿るところであるといふ、開元二年五月十八日、崔忻は勅持節宣勞統靺鞨使鴻臚卿となり、靺鞨に使したその歸途、この地を歷て兩口の井を鑿つたといふ、思ふに現在のこの井戶は、この故の井ではないのであらう、但し後の人がその名跡の堙滅したのを惜んで、故趾に據つて、この井を鑿つたのであらうと思ふ、井の邊に、海軍中將男爵富岡定恭氏の選文の鴻臚井の石碑が、明治四十四年十二月に建てられてある、故の鴻臚井の碑は當時に建立され、實に千三百餘年を歷過した貴重の石碑で、黑板勝美氏に依つて發見され、遠く內地に齎らし還り、今は宮中に收められ

てあるといふことである。」

旅順から遼陽へ

一、閻半城氏の家に宿る

旅順の陣跡を憑弔した私は、その夜を金州城内の閻傳紱氏の西廂に過した。

金州驛から、垂柳垂楊、路は迷はず、私を乘せた自動車は斜陽の坦路に風埃を飛ばしつゝその南門から城内に入つたのである、東は黃海、西は渤海、その間に伸びた地頸を扼して、正に旅順、大連の鎖鑰をなす第一要鬪の南山古戰場の蒼翠も、大和尙山の孱顏も、をぼろ〳〵と夕霞のうちに消えて行く、金州は、唐代以前は正に海港であり、今の停車場のあるところは昔の海峽、南山は古の扇子島で、大和尙山も一箇の島嶼であつたのである、沙塵の多いその大道には馬車の歸へる、牛車の往く、そのむながひに結び懸けた鈴の音も、近く又た遠くに聞え渡つて、彼の乃木大將が、馬を立てゝ低個顧望しつゝ口吟したる金州城外立斜陽の詩を思はしめるほど、靜かに暮れて行くのであつた。

閻氏、字は紱韜、滿洲旗人の家に生れて、素封家である、その邸宅の、この半島の古城の一角を占據してゐるといふので、人は半城先生といふ、夙にその夫人と共に日本に遊學し、先づ仙臺の高等學校を歷て、業を東京帝大に卒へ、白面長身、巧みに邦語を操り、溫雅な紳士である、夜は路を照す街燈の稀れなれば、城内のさまは車上よりは定かに見えず、唯だ物靜かに落ついた城の中央路を、右に折れ更に左に折れると、門巷蕭條として高い土墻に圍まれた幾個の邸宅、そのうちの唯ある門前に車は停まる、水を濺ちたる樹石、左右より石だゝみを夾みて、長くつゞくほどにやがて第二門、門前の照墻には、壽福と篆書でかゝれた堆朱牌かけられ、簷長く奥深い儀門の楣間には、家風長揚と顏眞卿流の正楷で書いた匾額の紺地金文字が、私を出で迎へた閻氏の家僮の揭げてゐた玻璃燈の火を受けて、きらゝかに眺められた、門を入ると、左右に皂莢の老樹がある、その枝は車蓋のごとく、高く門の簷を掩ふてゐた、右なるは雌木、左なるは雄樹であると閻氏は語る。

廣い中庭、その中庭の左右は、東廂と西廂とが相對してゐる、賓客の應接や、烟茶の閑晤、夜遲くして宿を乞ふの客を留め宿さしむるところである、正面は則ち主人の居る母屋、母屋の後に

支那古來の家作の規模である、所謂一明兩暗の結構とは、この兩廂と母屋とを有する内房がある、夫人の居るところである。私は既にこの家の主人と共に、金州公署の森茂氏の邸で、晩餐の饗をうけて來たので、その西廂の客房で、上海から取り寄せたといふ龍井の新茶を喫して醒を解いた後、辭してその臥房のうちに入つた、青い石甃床、朱檀の椅子、卓子、書棚には四五冊の縹帙を置き、柱には自鳴鍾を懸け、壁間には書畫の幅を挂け、房の入口とその窓とには、凝つて流れざる烟とばかり訝からるゝ碧紗を垂れた、四隣寂寥、人定つて後のその物靜かさ言はん方もない、殊に臥房の床は、支那流の炕になつてゐて、藍田日暖かにして玉を蒸すかと思はるゝその温たかさ、私は恍として西廂記中の人となつたやうな心地がした。

二、金州城壁を一匝す

翌る朝、私は早く起きて盥漱し、中庭を漫歩した、中庭には石塘の中に、蘆牙の抽き出でゝゐるのを見、母屋に近く一架の藤花の、珊々として紫瓔珞を垂るるある外、他に一箇の木石もない、主人もやがて起き出でゝ、茶となり朝餐となる、膳の上には閻家自醸の酒一壺を添へてあつ

た、色は濃褐、これを飮むに甚だ甘い、主人は說明して、蜜を加へて釀したものであるといふ、
飯後、所藏の古書畫を展看した、畫の主なるものは渾南田の仙人圖、書には左棠相のものがあつた、曩年、この地を訪過した漫畫家一行の畫を收めた畫帖は、奇趣横生し、殊に頤を解くものがあつた、南金書院の岩間達也氏も見えたので、主人と共に連れ立つて、先づ城の北門から、その城壁を半周した。
金州は、既に漢代に沓氏縣と稱した地方の主都で、別に楡林城の稱がある、有史以前には、深く海底にあつたことは今の地形から推料して爾か思はれる、西晋から南北朝、隋、唐の頃までは高句麗に屬し、隋の煬帝や唐の太宗の高句麗征伐に名の著はれてゐる南蘇城といふのが、この地であるといふ史家もあるが、それは信を措くには足ちない、遼代には東蘇縣が此の地に置かれ、金時代には化成縣となり、やがて金州となつた、元から明、明には金州衛が置かれた、和寇の爲である、清初には寧海縣となり、後、金州廳となり、明治二十七年の役には一時日本軍の占領するところとなり、北清事件の時には露軍が占領し、三十七年五月二十六日、日本軍の手に歸し、爾來我が治下にあり、戰後には租借地となつて今に至つたものである。

されば金州の名が史上に見えたのは、金代から始つてゐる、その以前の城郭は、土城であつたか、塼城であつたかは判然しないが、遼東誌には、舊、土城であつたのを、洪武四年都指揮馬雲葉旺が增築し、十年に指揮韋富が包砌すとある、周圍六里、高さ三丈五尺、池の深さ一丈七尺、濶さ六丈五尺、城門、四あり、東は春和、西は寧海、南は承恩、北は永安といひ、角樓四座ありと記してあるから、明初までは土城であつたのを、洪武十年にこれを塼城として現在の城廓の基礎を定めたものであると思はれる、現在の城壁は東西四百三十六間、南北五百十五間、周圍三十一町四十二間、面積は二十二萬四千五百四十坪であるから、これを明代の規模に比べると、やゝ狹少のやうなれど、明代の六里といふも正確な尺度の上から記したものでないと思ふ、四門には樓を置き、下に甕城、若くは月城といつて、我邦の築城法の桝形のやうなものを作つてゐる、城壁の廣さは二間に餘り、その凸凹した垜口は、三十七年の役後に取り去られたが、先づ〳〵完全に近い城廓の標本である、芊々たる荒草、生ひ茂り、馬蘭の花、蘚はひ上る壁の小逕に憐れげに咲いてゐる、その夏草に埋め殘された赤錆した昔の大砲がある、大砲のうち、乾隆帝當時北京に來た白耳義國の宣敎師で、支那に歸化した南懷仁といふ人が鑄金の技にも長けゐて、時の政府の爲

めに大砲を鑄たことがある、その砲は、後に、遼東に輸ばれて通邑大都の城壁に頒かち置かれた、金州城の城壁にも、この大砲があつたのを、やがて鹵獲されて今は九州筥崎の八幡宮境内に安置されてあるのも面白い。

三、地獄極樂のお寺と三崎山

北西方の城壁の上を逍遙して、再び北門下の甕城を出て、城外の天齊廟に向つた、埃沙の深さ三尺に達する甕城から北小門を出る路は、折からの南風を吹き溜めて、漫天の風沙は霾ふるごとく私達の衣帽に萬斛の黃名粉を撒きちらした、天齊廟の前に鐵牛がある、深く土中に埋もれて、僅かに十字形に隆起したその背を露はしてゐる、元と西の海濱にあつたものが、何時とは知らず歩み來つて、此處に留つたものだといふ、鞭うてども步まない鐵牛が、此處まで來たといふ傳說は、此處が當年の海濱であつたことを物語る、鐵牛は大船を繫ぐの柯杙であると私は思つた、ここより數町にして釣鯨臺といふ處がある、唐宋時代にあつた釣魚臺の遺跡であらう、今は唯だ平野の中にある一小丘に過ぎないのである。

天齊廟は、地獄極樂のお寺として四方に著聞してゐる、境内に明の正德二年（今から四百十餘年）の古碑があるところから察するに、四五百年前の草創であらうと思はれる、元は東岳廟といひ、道教に屬してゐたが、何時しか佛敎潙仰宗雲棲派の寺と同居してゐる、正殿には泰山東嶽天齊帝を主神として祭り、その左右に文武官の像を置き、寢殿には天齊帝と景明后の夫妻の像と侍女八人の像を祭り、老母殿には泰山聖母と藥王とを祀つてあるが、その東西の兩廡には冥府の十王と八大地獄變相の像を安置して剉炙舂磨の慘刑を寫し出し、人をして正視するに堪ざらしめる、更に又たその正門の左右に立つて呵護する四箇の神將は、その足下に龜、蟇、鯉魚、猿猴、蛤貝、婦人の像を踏みつけてゐる、それ等のものは皆な塑製ながら、朱金の粉彩を加へて、誠に俗眼を眩射するものがある、福を祈り壽を乞ふ信仰の對象なる主神の容儀の莊嚴なるは當然であるが、その主神が端麗なる皇妃とに相對して、八人の侍女の音樂を奏するを聽いて靄然として和樂する家庭的の光景を現はした寢殿などは、誠に面白い事である、天齊廟に近く又た永慶寺といふのがある、これも潙仰宗に屬してゐる禪院で、近く發見された石經幢によつて四五百年前の開基と分つた、彌陀如來と觀世音とを安置し、十八羅漢を配してあるが、十八羅漢は曩年城内に棲

める塑工某が、一身の力をもつて、敬虔の信念を傾瀉した制作であるといふ。

寺を出でた私は、更に車を驅つて三崎山頭に殉節三士の紀念碑に參詣した、南山の麓の路を行くほどに、路傍の民家の庭こめて、低迷する窯の烟が見える、この邊の土は陶器に適し、燒いて日用の雜器を作つてゐるのである、高家窰、西南窰などの村の名で、昔から此の地に陶家のあつたことが知れる、北大河の磧の沙は黃に、兩岸の白楊、風にそよぐのところ、櫻並木の一路、邐迤として人を導いて自から山の頂に到るのである、征淸の役、福岡の人山崎羔三郞(享年三十一)同じく鐘崎三郞(享年二十六)鹿兒島の人藤崎秀(享年二十三)は我が第二軍の通譯となつて、明治二十七年十月二十三日花園口より上陸し、金復二州の敵情を探るために變裝して碧河の邊まで進入したが、淸軍の爲めに擒はれ、同月三十日の薄暮、西門外なる刑場の露と消えた、翌年二月七日、その遺骸を索めてこの岡の上に葬り、大日本志士某捨生取義之碑三基を建てたが、還遼の事あるに及んで、その碑を東京高輪の泉岳寺に移し、後大正二年に現在の殉節三烈士碑が建立されたのである、石柵、碑を繞つて鐵鎖を繫ぎ、花崗石の標石高さ丈餘、山麓よりこれを仰げば、屹として靑冥を挿してゐる、私は野花を折つてこれを碑前に捧げ、低徊して終に山を降つた。

四、殷代の龜卜文字と古銅器の鑑賞

文廟を觀て一と先づ閻氏の邸に歸ると、閻氏の夫人はエプロンかひ〲しく家婢を指揮して午餐の用意をいそしんでゐた、食堂は母屋の中央、窓を啓けると花正に盛りなる中庭の藤架を見る、公署長も夫人と共に招かれて團欒した、几案の上に陳ねられた食饌は、名に負ふ金州料理、皆な閻家の庖廚で作られたものである、温めた蜜酒も出る、邦人の嗜好を商量して料理に大韮、蒜を用ゐなかつた解意の主婦の周到な注意に感服した、飯後、復た閻氏の邸を出でゝ、岩間氏と共にその南金書院を觀、諸生の音樂合唱を聽いて後、岩間氏の邸に赴いて、氏が多年蒐集した殷代文字を鐫つた骨器、龜卜に用ゐた龜甲並びに古錢數百點を觀ることを得た、岩間氏は金州に居ること既に三十餘年、教育に身を委ねて德望半島に洽ねく、城に入りて岩間先生の宅を問へば、行路の人も直ちに歩を枉げてその家に導くほどの有名な人である、氏の說によれば龜卜のトの字は、龜甲に留まる龜裂の痕の形象文字であるといふ、吉凶禍福をトふに當つて、先づその龜甲の上に、鑿若くは鑽をもつて淺い線を鐫り、然る後に、荊の一端を尖らせたものに火をつけて、そ

の鑄り描いた一線の中央に置いてこれを吹く、龜甲、その火熱の爲めに微かに音を發しながら割れ裂ける、その割れ裂けた線の方面に依つて、吉福若くは凶禍を判するのである、その莿火をもつて燒いた一線の中ほどには一箇の、字を印す、卜の字の起る所以であると、氏は亦た銅劍、銅鏃、數十百種を藏してゐる、私は咋日、旅順の牧羊城址の民家から購ひ獲た銅鏃と同型のものを物色して、その數箇を見出し得た、白銅數枚をもて購ひ得たと語つたら、珍品なり、秘藏されよと岩間氏は私に告げた、岩間氏は不幸にして一人の子女もない、支那人の孤兒を養ふ、齢十二三、容貌雋敏、私を迎送するに、辭令慇懃、善く禮儀に嫻れてゐた。

南山の古戰蹟を觀て後、更に八里庄に乃木保典中尉の墓を憑弔し、森茂公署長の邸に還つて、閻氏、岩間氏等と共に會食し、送られて汽車に上つた。

金州は果樹の栽培に適する處と見ゆ、苹果園が多い、四方の城壁の外面にある閑處には、皆な苹果樹を栽てゐる、更にその城壁には、さながら翠帳を懸けたやうに、葡萄が一面にはひまつはつてゐた、金州城は、古典的の地方的色彩をもつてゐる都である、柔かい楊柳の街路樹の下に、町家の多くはこの地方に產する硅岩を建築材料に用ゐてゐる、人情も閑雅、風俗も淳朴であるら

しい、昔も今も、著名な政事家、實業家の出るところである、假へば閻家街、曹家街、范家街、趙家街など、いづれもその同族の分布を物語つてゐる、この中で私の宿つた閻氏は前朝までは金州に於ける政事方面の名家、曹氏は實業方面の大族である、閻半城、曹半城は、その巨富を謠はれたものである、城内には三千戸、一萬七千の民が棲んでゐる、城内を十字に區劃する南北西東の四街は商業區として賑つてゐる。

五、熊岳城温泉の一夜

鹽の都の普蘭店、汽車は左窓に鹽田を見て過ぎる、廣い黃沙の鹽田のうちに、近くは丘のごとく、遠くは蟻垤のやうに盛られた鹽は、將さに春づかんとする夕陽に紅く燦いてゐるのであつた、大きな布帆を幾枚も聯ね結びて、世の常の縱に動くのとは異りて、水平に廻轉してゐる一種の風車は、鹹水を鹽田に汲み上げる裝置である、その布帆の風車は、夕日に嚮ふ半面は紅く、背ける半面は黑く、徐々として廻轉するさまに、私は面白い畫趣を見た。

征露の戰場であつた得利寺を夕靄の彼方に看めて、夜遲く熊岳城驛に入つた、私は今宵をこの

温泉ホテルに過ごすのである。

夜闌の驛に降りたつた私は、我が跫音に驚かされつゝホームを出た、民家は早や戸を卸して軌道馬車は既に車庫に眠つてゐる、折から來かゝる自動車を喚び留めて辛くも乗る、アカシヤの一路、花今や盛りと見えて、栗花の匂を思はせる温か味のある香は闇の四邊に漲つて、人をして眠を催うさしめる、交ぜ栽えた柳の樹からも、寒からぬ雪とばかり、柳絮が飛ぶ、ヘッドライトの照すあたり、地には有明の月の色とばかりうつすりと白く敷いてゐる、熊岳城の温泉ホテルは、流石に設備が整美してゐた、快浴、淺く醉ひを買つて、直ちに黒甜郷裡の人となつた。

無賴の柳絮は、白蛾の群れ飛ぶさまに風前に舞ふてゐる、地にあるものは滾々として、手毬のやうに相逐ふて行くのである、その柳絮を浴びその柳絮を踏んで、私は熊岳河の滸を漫歩した、赭い河床から混々として温泉は湧いてゐる、無色透明のアルカリ泉であるといふ、湛へて方池を作つて、そこには沙湯が設けられてある、貸浴衣を脱いで、路傍の木に懸けて、私は一浴を試みた、肩まで身を沈ませて箕踞しながら、兩掌で沙を掬つては腰や脚のあたりに載せる、煦々として美酒に酣暢したやうな心地がする、氣輕るな柳絮や、アカシヤの花が、人戀ひしやといふ風情

に、吹く風に誘はれて、はら〳〵と池の面に散り敷く、私はこゝにも畫趣と詩趣とを見たのであつた、この邊りの風光は、頗る彼の伊豆の下賀茂に似てゐると思つた、海に近い河の温泉、果樹園、川柳、如何にも下賀茂そのまゝの景色である。

驛の東に望兒山といふ奇岩がある、高さは百尺を超え、峯脚は創り立ちて一株の木すらなく、さながら素燒の盆栽鉢を覆せたやうに、平野の中に聳えてゐる、昔、老ひたる寡婦の、家を出て久しく歸らざる孤兒があつた、寡婦はその兒を思ふの情に堪へず、日夕、この巖の頂に登つて兒の歸り來るのを望見してゐたが、その終に歸り來らざるや、哀哭してこの巖上に死すといふ傳說は、今にこの地の人の口碑に殘つてゐる、名產には紅梨と黃花魚といふのがある、共に季節が早かつた爲めに、兩つながら之を味ひ得なかつたことを遺憾とする、紅梨は元と露西亞が移植したもので、梨と甘棠とを接木したものであるといふ、その色は林檎に似て鮮紅喜ぶべく、その味は梨のごとく、甘脆にして齒牙の香ばしきを覺ゆるといふことである、驛に近く滿鐵經營の試驗所があつて、園藝、養蠶、林業に關する廣大なる施設がある。

驛の西、二十餘町のところにある熊岳城市の東街に火神廟といふのがある、神前には勅封火德

星之神位と題した金地碧字の牌位を置き、狀貌莊厲にして身に彩服をつけた塑造の神體を祀つてゐる、左右には、或は劍を揮ひ、我は戟を執つて喑啞叱咤してゐる六位の神將を配した、火神の創始は乾隆三十八年に原まると壁に書いてある記文を讀んで、古廟でないことだけは知れたが、火星を祀つたことは恐くは城市に火災なからしむるやう、これを祀つて神慮を和げたものと思はれる、斯うした例は他の地方には絕無のことであらうと信する。

温泉氣分に浸りながら、愉快な半日を過ごした後、午過ぎの汽車で大石橋に行く、この日から始まるといふ迷鎭山の娘々祭を見物する爲めであつた、途に蓋平を過ぎた、著名な柞蠶市場で、絹綢の名產地である、左方に海を傳へて廣い鹽田が見渡される、處々に白銀の小山がある、渾べて鹽である、例の蒲帆を聯ね結びて、水平に旋回する風車があつて、鹹水を鹽田に汲み入れてゐた、けふは朦かに暑い、壁間の寒暑鍼を檢すると、正に八十度に上つてゐた。

六、遼河を溯る

漫天の黃埃は、大石橋の城市を掩ふてゐた、驛頭に降り立つた私は、その萬丈の黃埃裡に、依

稀として薄れ行く無數の大衆を見た、この人達は、迷鎭山の娘々廟へ參詣するもののみである、帽子の廂に、肩に、襟に、降り濺ぐ沙塵は、瞬く間に私を黄名粉餅のやうにしてしまつた、何といふ怖ろしい風沙であらう、私は手帕で頭から顏を包んで、風沙の眼に入り、耳に入り、口に入るのを拒いだ、さて迷鎭山までの臨時列車に上らうとすると、偶、私の肩を叩いた人があつた、振りむくと滿鐵の營口地方事務所長の永尾龍造氏であつた、けふは孫文の移靈祭で、歌舞音曲は禁止とあつて、祭の餘興は取り止められた、日程を變更して、先づ營口へ遊びに來たまへといふ、誘はるゝまゝに、次の汽車に上る。

營口は、遼河の河口にあつて、元は蒙古地方の物資を吐呑する大埠頭であつたが、打通鐵路が開通してからは、繁榮は昔のやうではないやうに思はれた、驛から降りて、永尾氏の自動車に載せられ遼河々畔へと走らせた、舊時の繁華は觀ることが出來ないけれど、殷賑の海埠であつた當年のさまは猶ほ隨處に觀取される、中にも老爺廟の邊りは、袖を連ねて幕となし、汗を揮つて雨となすといふ繁華のさまを見せてゐた、やがて眼の前に開展された遼河の流れは涘渚の間牛馬を辨じ難い程に廣い、例の味噌汁のやうな濁流の漫々として流るゝさまを見た私には、始めて支那

大陸の河らしい感じがした、私は小蒸氣に載せられて、先づ上游に溯つた、流域の曲折が激しいために、埠頭の岸壁は、絶えず洗はれ壞されるので、その左岸の一地角に、現に護岸工事が營まれてゐた、先づ柴を沈積して河流の衝動を緩和し、その上に石を置きて、舖裝するのである、蒲帆を挂けた大小の戎克は、悠々としてその間に往來する、その流域の、さながらS字を幾個も繋いだやうに、迂回し曲折してゐるので、今しがた私達の乘つてゐる汽船とすれ違つた蒲帆の戎克に、少時すると蘆荻の洲渚を隔てゝ、突如として又た行き逢ふのである、下流の右岸には、河北驛がある、滿鐵に對抗すべく、支那側で敷設した鐵路の起點である、滙海樓飯莊に夜宴は張られて私達は招かれた、この飯莊は滿蒙第一の料理店で、その割烹の妙技は、夙に人口に膾炙してゐる、私は、この飯莊に於いて、鮮美なる許多の盛饌を飽喫したのであつた、征露役の當時、營口は實に我が滿洲軍の兵站の大元締となり、兵器彈藥衣糧の倉庫は、野を掩ふて棊布してゐた、明治三十八年一月五日、旅順は開城し、乃木軍は疾風の如く一齊に北、沙河方面を指して進んで行つた、當時の營口には、守備兵と輪重隊とを合せて、僅かに三百餘名を剩すのみであつた、敵將ミスチエンコは、早くも諜してこれを知り、同じ月の十七日、五千の選兵を提げ、曉霧に乘じて

來り襲ふた、守備兵は輸重部隊と共に殊死して十數倍の大敵を邀擊し、血戰數時にして終にこれを擊退することを得たのであつた、當時、もし萬が一にもこの大敵の奇襲を擊破し得なかつたならば、我が滿洲軍の兵器彈藥衣糧を收めた倉庫は渾て兵火の燬くところとなり、軍需續かず、衣糧給せず、我が軍は朔風骨を砭する胡地の沙磧に暴露して、終に總退却の否運に際會するもいまだ知るべからざる大事に到つたのである、天祐は常に正義の師に與みすとはいふが、寡兵をもつてこの大敵に當つた我が將卒の偉大なる功績は、誠に感激に勝へざるものである、營口の我が官民は、近く營口紀念日としてこの一月十七日を制定し、年每に大祝賀會を催すといふ。

その夜を營口の旅館に過ごした翌日、私は諸友に別れて汽車に上つた、大石橋驛に近づくと、左方の山は、娘々廟のある迷鎭山である、さながら金字塔の形をした五六百尺の、一株の樹も一莖の草もない禿山の、その頂にある碧瓦紅壁の一字は娘々廟である、無數の群衆がその頂上の廟を望んで、山を掩ふて攀ぢ登つてゐるさまは、さながら巨大なる赤砂糖の團塊に、蟻の群れ集つてゐるやうた見える、何といふ盛んな祭禮であらう、私は、先づ大石橋驛に降りて、更に馬車を僦ふて迷鎭山に向つた。

七、大石橋の娘々祭

娘々廟は、三人の天女を祀つてある、何時の代とは知らず、大石橋に棲む一人の若者は、或る日の黄昏、鹽を載せた車を曳いて家路を指して急いでゐた、と、路傍の石の上に、眉目端麗な三人の若い娘が憩ふてゐた、疲れて歩るかれないのであつた、若者は憐れんで車に三人の娘を載せてやつた、迷鎭山の麓まで來ると、娘達は車を停めさせて降り立つた、慇懃に禮を述べて若者を餉つたが、數十歩にして若者が、娘の行く方をふり向くと、不思議にも、一朶の彩雲が空から舞ひ下つて、三人の娘を載せて山の上へと昇つて行つた、娘の體からは、妙光が燦然として四方にかがやいてゐた、若者はその奇瑞に隨喜渇仰して、歸つてこれを隣人に告げ、隣人から郷閭に聞え、やがて喜捨の金を集めて山に廟宇が立てられたのであるといふ、三人の神女、その一人は福運を司り、一人は病を治することを司り、他の一人は兒を授けることを司どる、毎年四月の二十五日より三日間、その祭典を行ひ、近郷近在の人はいふも更らなり、二十里三十里を距てた田舍の人が、アンペラの幌をかけた大八車に、一家眷族を載せて遠くより來り賽する、支那には、城

市あれば必ずそこに城湟廟ある以外に、北地にはこの娘々廟あり、南地には天后廟若くは媽后廟があつて、共にその信仰の對象となつてゐる、南地は常に海に親しんでゐる、天后廟若くは媽后廟は、航海者の尊信する神であるが、何の時代から祭られた神であるかは知られてない、但しその姓は林氏、瀛中の島に住んでゐた娘で、或る時雲に乘つて昇天したといふ傳説がある、何故に航海者の神と崇められたといふことは、附會癖に富んでゐる支那人も書き漏らしてゐるが、宋時代には、朝廷から靈惠夫人といふ封號が上げられ、次第に累加されて、今では護國庇民妙靈昭應宏仁普濟天后といふ尊號をつけられ、その父は公爵を追贈されて、靈感嘉佑衍澤公、母は顯慶衍澤夫人と稱せられてゐる、娘々廟に祀られてある三神女も、何の代からは知らず、いつの間にか嚴めしい尊號までつけられて、北地の通邑大都には皆なこの廟があるやうになつた、福を與へ病を攘ひ、兒を授けるといふその司命は、誠に善く支那人の願望に協ふがために、斯くは繁昌するのである、幸運にめぐり遭ひたいといふその願望、病を攘ふて健康でありたいといふその願望、子孫繁昌でありたいといふその願望、義理人情を缺いても金が欲しい、長生が欲しい、性慾の滿足が得たい、この三つは實に支那人の三大慾望である、その慾望を與ふるといふ娘々神の繁昌す

るのは當然の事である、そのうちで第二の神女が司どる萬病を攘ふといふ功力は、やがて漸く縮少されて、今では眼疾を癒すといふことになつてゐるのは、滿洲は風沙の激しい土地である、五六月の交は、沙漠の沙を吹き帶びた西北風で、天地晦冥、晝ながら燈を呼ぶほどである、隨つて眼を疾むものが多いからである。

私は、馬車を傭ふて迷鎭山に向つた、滿地の高粱畠は、その苗すでに寸餘を抽いてゐるが、車も人も、その畠の中を行くのである、內地にあつては耕主の叱咤を浴びることであらう、しかもこの地にあつてはその畝を踏みその苗を蹂ぢつても、人は些の顧慮を須ゐないし、耕主も亦た平氣の平左である、既に迷鎭山の麓近く進み行くと、例のアンペラを幌とした大八車は、山を十重にも二十重にも蜂屯してゐる、その間を魚貫して行く參詣人の大衆があり、櫛比してゐる露店がある、烈風は漫天の沙を簸つてこの大衆の上を一掃して去る、東の間に迷鎭の山容も偷却されて、眼には唯だ漠々たる黃霧を見るのみで、寂として人なき里かと訝かられる、風去り沙うすれて再び元の熱鬧となる。

八、香龕裡の三神女像

私はあらゆる各種各樣の物を賣る露店と大衆との間を過ぎて、山に登つた、犖确たる岩山である、頂にある廟門、門を入つて更に石階を登ると娘々廟の本殿である、廟の內、廟の外、參詣人は香至して立錐の餘地もない、廟に賽する人は、長さ三尺もある線香の束を購ふて、これを神前に燃して祈願するのである、神前の香臺は、幾千百とも數へられぬ線香が、さながら炬火のごとく燃え立つてゐる、燃えて一二寸のところになると、黑い衣をつけてゐる道士達は、線香を拔き去りて、傍の水鉢に浸してその火を消す、消された線香は薪を積むやうに壁に傍ふて堆かく置かれるのである、誰が家の富媼か、仔豚の丸煮、鷄の蒸燒などの盛饌を齎らし來り、これを神前に捧げて拜跪して後、徐かに又た之を食盤の中に收め容れて提げ去るものもあつた、凡そ香を捧げ饌を供へ、錢を上る人がある每に、道士は神前の鉦を叩くのである。

人に隔てられて、禮盤の邊りに近くことが出來なかつた私は、後より押し來る人の爲めに、次第に神前に進み行くことを得た、濛々たる香烟の立ち迷ふ寶龕のうちに、翠玉の簪、雲彩の衣、

容姿の豐盈にして端麗なる三神女の像の並び立つのを看めた、像は等身よりやゝ高く、七尺はあらうと思はれた、堂中無數の線香に薫されながら、煤け故びたさまもなく、鮮麗人の眼を喜ばしめたところを見ると、像は今年か若くは昨年あたり、新たに制作されたものであらうと猜した。

廟前に、淸の太宗の時に建てた重修の碑があり、大金天聰九年歲次乙亥五冬吉旦立の十五字が碑文の末に勒されあるといふ、普く物色して僅かにその碑石を索ね得たが、何者の惡戲ぞ、肝腎の大金天聰九年の六字は無殘にも毀損し盡されて讀むことを得なかつた、天聰九年は金が淸と國號を改めたその前年である、明は思宗の崇禎八年に當る、世は兵馬倥偬の際ながら、その滿洲各地の寺觀を重修したといふことは、顧ふに民心收攬の策に出でゝ、單純なる敬神崇佛の趣旨ではなかつたのであらうと思はれる、それは兎もあれ、大金の國號ある碑碣は餘りに多くは覩られないものであるのに、これを毀損したといふことは憎むべき所業である、私は今次の旅行で、隨處に古碑を物色し得たが、一として其の勒された年號を破毀してなかつたものはなかつた、こは革命後の民人が、その前朝の紀年を留むるのを惡みて、眼に觸ふるゝ石碑は皆な鐵鎚をもつて之を擅損したのであると聞いた、度しがたい民である。

九、活美人の扮する人形山車

山を下つて私は復た熱鬧の市を過ぎた、と、雪崩うつ人波のその中に、支那古代の服裝をまとゐ、額に粉黛を彩どつた髩瞼蛾眉の美少女が、一列凡そ十二三人、大衆の頭上から三尺も高い空に身を露はして、蹮々として舞ひつゝ練り來るのであつた、こは高脚跳といひこの祭禮になくてはならぬ餘興の一つで、人毎にその兩脚に三尺ばかりの木梃を結びつけてゐるのである、私は我が足利時代の中頃から始まつた田樂法師の田樂舞は、この高脚跳が傳はつて、服裝こそ異なれ、正しくその變形したものであらうと思つた。

高脚跳の行列が過ぎ去つて、いまだ久しからずして、又た佳麗な人形行列が練り來つた、雲髩花顏、繪に描いたやうな窈窕たる美人連が、手に彩旗や青龍刀などを持ちながら、綾羅の袂を飜へして、雲集する大衆の頭上を抽くこと四五尺ばかり、騷がしい鼓笛の音につれてさながら空中に舞ひつゝあるのであつた、人形の行列と見たのは私の僻目であつた、漸く近いて凝視すれば、正しくそれが活きた人であることが分つた、この人達は、彼の高脚跳の人と同じく、鄉閭の少娘

の中より豫め尤も佳麗なもののみを撰擇し、祭の前日より流動體の飲食物を禁じて下水の出づるを防ぎ、粉黛を施し繡衣をきせ、鐵棒の上に下半身を緊縛し、さながら花車のごとく祭の當日、これを牽き歩くのであるといふ。

路傍の演劇舞臺では、今や儒冕道服の孔明と、朱面黒衣の司馬仲達との空城琴の演戯正に酣なるがあれば、高粱畠の上では金創に効くといふ膏藥を賣る長井兵助もあり、これを繞る無數の大八車の幌の中からは、飴を咬み果を嚼じる老弱男女の顏を鈴生らせ、滿洲風の婦人の風俗、元祿美人の高兵庫、明治風俗の大銀杏返、さまぐ\に結ねたその髮容に、私は殊に好奇の眼を瞬つたのである、斯くて私は、再び馬車を賃して大石橋の驛に還つた、風沙は殊に猛烈、町に入ると沙の深さ三尺に達し、車輪の半ばを埋め去つて、一馬と二驢とで牽いてゐる私の馬車も、時に濛沙の裡に立ち窘む、息もつぎがたい、辛くも驛に入り、衣帽に積る沙を掃ひ、更に洗臉室に入つて盥漱したが、耳の孔さへ一杯の沙で閉塞してゐた、怖ろしいことである。

遼陽の白塔

私は汽車の食堂で晝餐をしたゝめた、滿鐵の汽車は、いつ乘つても心地が好い、その驛に入る毎に、汽關車の當頭につけた鐸を鳴らして進む、その朗らかに高い音が、殊に私を喜ばせた、眼の力の盡くるところは靑冥の天であつて、限りない曠野は大海のごとく汽車の窓から見渡される、その間に起伏し陵夷する高皐平丘は、無聲の波濤である、食堂には妙齢の婦人が給仕をして旅人の心を和やかならしめる、私は內地の汽車の食堂にも、晝間だけは女給仕を置いて欲しいと思ふ。

名高い白塔を仰ぎつゝ、午後二時過ぎ私は遼陽驛に着き、遼塔ホテルの客となつた、圓錐形に剪り込まれた附屬地の街路樹テリハドロ、若葉さながら銀のごとく燦いて、淸陰をアスファルトの路に敷いてゐた。

詩囊をホテルの一室に卸してから、私は馬車を倩ふて遼陽圖書館に宮地元治氏を訪ひ、連れ立つて舊の廣祐寺趾にその白塔を觀る、廣祐寺の伽藍の跡は早や殘りなく取り拂はれて、新樹、嫩

き夏に驕るの公園となつてゐる、中央の廣場、そこに八稜十三層の白塔は、亭々として空に抽いてゐるのである、寺は漢の時から創まつて、唐の尉遲恭が重修したものと傳はる、明の世に至り、更に補修を加へ、淸となつて康熙二十一年、車駕この寺に幸し、本尊の自來佛に袈裟を賜ふたと傳はつてゐるが、この塔の創立は、恐らくは遼金の間に在りといふことが、學者の間の定論となつてゐる。

廣祐寺の堂宇は、今は全く廢滅して、唯だこの一基の白塔を留むるのみである、遍ねく地形を踏査するに、塔の南に堂の趾らしき處あり、又た塔の北に當つてやゝ丘を成してゐるところに大殿の遺趾らしきものがある、殿趾の前には、一基の斷碑があれど、文字は既に風化の爲めに剝落して讀みがたいが、その周邊に刻された花紋によりて、明らかにこの碑の明末に建てられたことが知れる。

八角十三層のこの白塔は、高い基壇の上に建てられて、全部磚で築造されてある、中は實にして内に虛室を設けてないことも、他の普通の塔と同じである、その下成壇は一邊の長さ七十三尺で、上成壇は更に數層の帶によりて區分せられ、その中帶には八面に八卦の象を嵌し、上に各面

五箇所に小龕子の列を穿ちて、中に佛像を入れ、龕の間には二手先の枓栱を出し、その上に蓮座を置く、蓮座の上に塔身があり、八角の一面は實に二十六尺、各稜には圓き柱を立て、中央に深い龕を作り、略ぼ半圓形の栱を架し、内に佛像を置き、左右には脇持佛の立像がある、その上部の天蓋や天女などの配置は、彼の析木城にある金塔と同じである、學者の説によると、金塔のは莊重古雅の風があれど、この白塔のそれは品位に於いて大いに遜色があるといふことである、更に上つて軒、軒には二手先の枓栱三具を納れてある、枓栱の手法は頗る勇健にして潑剌の氣が溢れてゐる、垂木も隅木も木材で、その末端に風鐸が懸けてある、屋蓋は、本葺きの瓦を用ゐて掩ふてある。

第二層以上は、その壁面の狹いために、何等の裝飾を施すの餘地がない、軒は枓栱を用ゆることなく、單に磚を突き出してあるが、その磚の帶のごとく連結せられた曲線は、仰ぎ見る人をして妙趣を感ぜしむる、相輪の形式は支那本部や我が邦では、いまだ曾つて睹たことのない特殊のものである、その最下部には、低い八角の臺があり、各面に一種の格狹間を穿刻してある、その上に一條の帶を繞らし、又たその上に、空に向つて開展してゐる八葉の蓮臺を置いてある、球體

に似た部分があるが、甚しく殘壞してゐるのでその手法を見ることが出來ない、球體の上には中央に細い銅柱を立て、その脚部には水煙の意味をもつ一種の紋樣を彫刻した四枚の銅板を附してある、銅板の外周には火焰があつて空に向つて迸出し、水煙の上部から垂下した八條の鎖は、八角の屋蓋を連結してこれを支へてゐる。

水煙の上には第一の球がある、支那本部及び我邦の塔の輪に當るものであらう、次に第二の球があり、次に傘蓋の意味をもつ八角の小盤がある、次に第三、四、五球に至り、五球の上には更に高い銅柱があり、その頂上には筍形の寶頂を冠して、偉容を空外に抽いてゐるのである。

塔の高さは地上から相輪の頂まで約二百五十尺で、相輪の高さは約六十尺と註せられてゐる、その基壇、塔身、層屋、相輪の四部より成り、層屋の上部に至るに隨ひて次第に側成するその程度の著しくないことは、この塔の創建が、餘り遠くない時代にあつたことを語るものであり、殊に塔身に置いてある佛像の彫刻に見ても、この建築が、唐若くは渤海等の遺物でないことは明かであるとはいへ、滿洲に於ける大塔第一といふを得べく、又た支那本土に於いても一流に伍すべき巨塔であるともいへる。

私は塔邊を徘徊してその偉客を飽まで眺めた、塔身以上には宿り樹があつて、そこに無數の烏鵲が棲んでゐる、鳥糞斑白、もし放慢なる支那人の手に委して置いたなら、數十百年の後には、壞崩してその趾のやがて湮滅すべきこと、彼の杭州西湖々畔に立つてゐた雷峯塔の運命と同じかるべきを虞るゝのである。

關帝廟の照墻と壁畫

白塔の下を去つて、更に關帝廟を觀た、廟は西門の外にあつて高丘の上に立ち、近く白塔を望み見られる、昔は輪奐の美をもて稱せられてゐたが、今は全く荒廢し、盤龍及び仙人を彫刻した有名なる照墻の邊は、糞尿滿地、足を入れがたきまでに不潔汚穢のさまであつた。

正門に附屬してゐる馬殿には、關羽が常に騎つて千軍のうちを馳騁したといふ赤兎馬の塑像を置いてゐると聞いたが、唯だ土塊の狼籍してゐるのみでその片影もなく、摛錦樓の匾額ある戯樓も奢傾き床敗れて徒らに乞食の棲處となつてゐる、中門のうちにある福海亭には乾隆六年の重修碑があり、更に武成門を入る、正殿は南門して立つてゐる、額には武成殿とある、殿內には康熙

以後の匾額、楣間に掩ひ挂りて、宛がら一種の額堂の觀をなし、蜘蛛は甍に蹈り、その網には何來の風の帶びて來た枯葉や胡蝶の屍などを懸けてゐた、中央には袞冠綵服、圭を持した偉大な關羽の像があり、左右に周倉以下の臣僚の四像を置いてあつた、關羽の像と相列んで岳武侯の像もある、四圍の壁には、極彩色の精緻な三國志の繪が描かれてあるが、壁土は早や大方は剝落して、山水人物の形象も看るに由なく、無殘にも荒廢してゐる、關廟の遍く支那の都邑に立てられたのは、元代に始まつたものである、思ふにこの廟も當時創建されたものであらう、廟の隣りに酒仙祠といふのがある、祀つてある白髯童面の塑像は酒星神であらう、又た廟の東西兩廡には、張飛と玄德とを祀り、こゝにも極彩色の壁畫があるが、これも早や見る影もなく剝落してゐた。

　有名なる正門內の照墻は、高さ一丈ばかり横さま三丈に餘る塼瓦の墻壁の中央に、双龍珠を爭ふの圖を現はし、左に許由、右に左慈の像を現はしたものである、その圖像は全部塼瓦より成り、虬龍の飛躍、波濤の洶湧、鯉に騎つた左慈、樹枝に瓢を懸け簡を手にしてゐる許由の風貌は、實に一柄の鏝子に依る塑匠の手に成つたもので、方一尺ぐらゐの方瓦塼に、その圖樣を分解して塑成し、全部の工を竣つた後に、これを結合して雄渾なる照墻を作つたものである、私は今

次の旅行に、奉天北陵の山門で、無數のタイルを繼ぎ合せて偉大なる蟠龍の紋樣を形成したものを見たが、これに較べてこの昭墻は、更に尤も偉大なるものとして驚嘆せざるを得なかつた、滿地の汚物、溂穢鼻を撲つて、容易に近づきがたいこの昭墻は、今や文字通り糞土の墻と化してゐるが、遼陽の人も玆に大いに覺るところがあつて、近ごろ廟宇の修理に着手し、境内を淸掃して士民遊息の處とするといふ、亦た甚だ喜ぶべきことである。

私は、城壁の一角に立つ魁星樓に登つて四方を騁望した、上層の樓に登ると、右手に筆を執り、左手に墨斗を提げ、巨鰲の頭上に踴躍してゐる魁星の像があつた、樓下には碑碣があり、その字を拓してゐる人もあつた。

私は遼塔ホテルに一夜を過した後、急行車に上つて奉天に入り、更に撫順行きの汽車に搭じた、滿目皆な高粱畠、蒼々莽として遠く天際に連なる、皆な是れ二十餘年の昔、皇軍百戰の場である、陳跡茫々、畔に立つぱら〳〵柳や楡樹の陰に、耕牛と耕夫と相依つて日午の睡を貪つてゐるのが見える。

煤都撫順

煤都撫順、私は露天掘の壯觀に驚嘆した、更に又た東郷坑に入つて驚嘆した、壯大なるオイル、シエールの工場やモンド瓦斯發生爐を觀て驚嘆し、市街の地下に埋藏された石炭を發掘するために、新たに莊麗な市街を立てゝ人を移し、舊街を擧げて廢墟となしたのに驚嘆した。

撫順の鑛區は、約千八百二十萬坪に亘り、東西に約四里、南北に約一里の地を占めてゐる、炭層は第三紀に屬し、その厚さは平均百三十尺、最厚は實に四百二十尺と註せられる、質は瀝靑質長焔で、その埋藏量は無慮十億噸と稱せられる、今を距ること約六百年前から高麗人によりて採掘され、陶窯の燃料として用ゐられたやうであるが、淸の乾隆年間に、時の政府はその祖宗の墳塋たる永陵及び東陵に近いといふ古來より傳承する風水說に障るところあるとして、その採掘を禁止した、後、光緖年間、その禁は漸く緩みて再び採掘を許し、やがてその採掘權は露國極東森林會社の有となつたが、事業いまだその緖に就かざるうちに日露戰役となり、明治四十年の四月から滿鐵がこれを繼承して今日に至つたのである、昭和三年度に於ける出炭量は實に六百萬噸に

上つてゐるといふ。

私は今ま崖の上に立つてゐる、崖の下は、深い〳〵大きな壑谷である、遙かに見ると、前方の崖に、緩やかに傾斜を成してゐる逕路が、ノヽとして谷底に向つて流れ下つてゐる、その逕路を傳ひつゝ、さながら玩具のやうな汽關車が、數十臺の貨車を牽いて、此處からも彼處からも、數島一喫の烟よりも細い煤烟を揚げながら登つて行く、壑谷の壁面も、その奥底も、若い婦人の髮の毛のやうな漆黑な土塊、その都べてが石炭であるのである、その谷底に働いてゐる人は、蟻よりも小さく見える、これが有名なる露天掘である、その露頭の石炭を掩ふてゐるオイルシエールも、隨つて無盡藏で、五十億噸と稱せられてゐる、四百二十尺の鑛層の六パーセントとしても、千八百萬噸の油を出し得るのである、滿鐵では近くその採油事業を始めるといふことである、もろ〳〵の機械を動かす電力は、現に二箇所で四萬九千吉魯を出し、奉天と遼陽とにその餘力を送電してゐるが、近く更に擴張して十萬吉魯の電力を作るといふ、竣工の曉は實に東洋第一の發電所となる譯で、奉天、撫順の汽車は皆な電化する筈である。

茶褐色の入坑服に突盔形の帽子を被つた私は、東鄕坑の鐵扉の前に立つたのである、案內者の

某技師は、鳥打帽子の眞額に、さながら山伏がする兜巾のやうな形をした電燈を著けてゐる、電流は背に負はれた電池から、送られるのである、佛さまの毫光のやうな、技師の額から光る電燈は、漆のやうな闇を數歩の外に推し退けて、私達は忽ち鐵扉のうちに吸ひ込まれた、エレベーターの扉を鎖す音は戞然として二千尺の地底に反響して、私の心を怯えさせた、大きな鐵の箱の中にゐる私は、流星よりも疾く滑り行く青黑い岩壁を、箱の隙間から看めてゐた、秋草にすだき啼く蟲の音のやうな、一種の細音を引きながら一秒時に三十米突を下るの疾さである、降りてその半ばに及んだと思はるゝ頃、地の奥深く降りて行く私は、今度は逆に地上に近く登つて行くやうな心地がした、私は一種の困惑を感じた、昇降機はやがて地底に達した。

地底は、廣い路が四方に擴つてゐた、鶴嘴の痕を鬼々しく留めた岩壁の間を通じて、電燈は明かに夜を晝と照してゐた、軌道はその間に走つてゐる、消魂ましい鈴鐸の響を立てゝ、一つ目小僧のやうな黑い怪物が、彼方からやつて來たので、私は壁虎のやうに岩壁を抱いた、それは石炭を山と積んだ電車であつた、事務所もあつて、多くの人々のペンを執つて帳簿に何にやら記入してゐるが見えた、坑道の盡頭に行くと、次第に身を屈めなければならない窄さとなつた、安全燈

の薄暗い奥の方で、鶴嘴を揮つて石炭を採掘してゐる多くの支那苦力を見た、坑内の空氣が水銀のやうに重く肩に感じた、耳の鼓膜に一種の壓迫を覺えて、靜かな秋の夜に遠くの農家で催された念佛講の伏鉦の音を聞いてゐるやうに、沈んだ幽かな聲が聞えて來た、私は再び地上の人となるべく昇降機の中に入つた、今度は降りる時とは反對に、途中まで昇つて來た私は、再び地下へ引き卸ろされるやうな心地を感じた、やがて昇降機は地上に達した、扉を啓けて外へ出ると、さながら熔鑛爐の傍を歩むやうな熱風は面を吹いて、掛けてゐた近眼鏡を曇らせてしまつた。

案内者の技師は更に電氣ショベルの作業や機械工場やモンド瓦斯發生爐やオイルシエール工場や撫順醫院や觀樂園や、その他各處の諸設備を私に見せてくれた、科學の智識に貧弱な私は、その壯大な諸設備について、唯だ讃嘆するのみであつた、最後に私は、廢墟の舊市街から、整美した新市街や、文化式の社員の舍宅の群落を觀て、技師と袂を別つたのであつた。

奉天の北陵と法輪寺の天地佛

撫順から奉天へ入つた私は、この夜、北行の汽車に上らねばならぬ日程になつてゐる、觀光はこれを歸途に讓ることにしたが、その半日を空しく旅館に過ごすことを、勿體ないと思つたのであつた、この地には昔馴染の佐原篤介君もゐるが、その歡晤もこれを歸途に廻して、私は自動車を喚んで先づ北陵へと走らせた。

滿鐵線路の下を交叉してゐる京奉線路、時はいつ昭和三年六月四日の曉天に、北京から歸つて來た張作霖氏が、曉夢いまだ醒めざるその一刹那、突如天地を震撼させた所謂某重大事件の跡を度つて、私の車は北へ〳〵と走つた、やがて滿洲には珍らしい茂林の一區、午後の日は、今ま新樹のしげみを透して、銀の雨を降らしつゝ甃石路の上にふり濺ぐあたり、そこに老硃古碧の大殿堂をさながら蜃氣の樓のやうに浮かせてゐた、大きな石獅子に呵護された牌樓門を入ると、やがて三箇の穹窿を開いた樓門、穹窿每に石階がある、左右の高い塼墻には蟠龍模樣を彫り出してある、壇あれば石獅子、階あれば龍壇、正門を入ると、甃石路は砥の如く平らに敷かれて、左右に相

對して象、駱駝、馬などの石像が並んでゐる、こゝを過ぎると隆恩門の三層樓となるのである、そこに相嚮つて立つ双石馬の左の一つは、前清の第二世太宗文皇帝が常に騎つて戰場を馳騁した愛馬の太白を模刻したものであるといふ、隆恩殿、殿前に架けた三道の石階、欄干、殿柱、皆な麟鳳寶花を鐫りちりばめたものである、中央の玉階を上ると、大廡の下に碧い大きな敷石がある、泥や沙に塗れてゐるが、その數尺の一枚石は、翡翠玉であるといふ、隆恩殿を過ぐれば、やがて兆域、塼をたゝんだ墻壁四方に繞つて、その四隅には、屋上に法輪を載せ四簷に風鐸を懸け、繪欄畫楹、綺麗人の眼を奪ふの角樓を置き、人はその廣い墻壁の上を廻り歩して、中央に隆然として高く築かれた寶域を觀るのである、墻壁の下にも、墻壁の上にも、無名の雜草は夏に榮え、寶域にも亦た草葎生ひ茂りて、その頂邊には何時の代か鳥の種子を啄み來りて落したのであらう、兩掌を環にしたほどの太い楡の樹が、枝を張り葉を重ね、花は全く零ちてはゐるが、支那の詩人が錢に喩へたその落花の黄に萎えて、敗魚の鱗を撒いたやうに、雜草の上に散つてゐた、

この坏土の下には、文皇帝と文皇后の長へに眠つてゐる佳城であるが、その寶壙の孔端に築かれてある龍文を鏤刻した大盤壁の、處々に剝落した發掘の跡を留めてゐるのを見れば、寶壙の中に

あつた珍寶は、早や時の權勢家の爲めに掠め去られたものであらうと思はれる、陵の上に、無作法にも上るものがあると見えて、猥登寶鼎、違者嚴罰といふ制札が立てゝあつた。

北陵は今や公園となつてゐて、二十錢の入場料を拂へば何人も入ることを得るのである、この日は宛も日曜に値つてゐたので、入園者は多數であつた、膏で光る撫でつけのオールバックに、新らしい麥稈帽子を戴き、派手な間服にエナメルの半靴、華奢な洋杖を持つた支那のモボ君が、頬を燕賦で暈し、黛で描いたやうに眉を細く剃りつけた斷髮の、肉色のストッキングに立鼓踵の白靴をはいたモガと睦まじく手を組んで歩いてゐるものもあつた、時に高女などの女學生隊が、教師につれられてやつて來る、髪を組んで垂げてゐるのは百人に一人ぐらゐ、大多數は皆な斷髪である、女隊を引率する女教師連は、何れも洋裝、左の手にハンドバック、右には鞭、日南に乾した雪駄のやうに、反つくり返へつて歩いてゐる、張作霖が女子の斷髪嚴禁のお觸れを出したのは、去年の春、その人歿して一年ならずしてこの有樣である、新奇を迎趣する支那人根性は、法の力をもつてしても奈何ともしがたいのである。

滿洲に入つてから、絶えて茂林を見ることを得なかつた私は、この奉天の北陵に於いて、欝蓊

たる新綠の森林に逢着して、頗る快適した、木の間を漏るゝ日午の晷影が、さながら白玉錢を撒くやうに青苔の路に散落するその淸陰に、淸凉水を賣る店の床几に踞して、私は眼前に徂徠する人の群集を眺めた、私達と同じく床几に腰かけてサイダーを飲んでゐた一支那人はそのコップ一杯のものに、五圓の奉天票を置いて行つた、大盡と思ふことなかれ、奉天票は一圓に僅か二錢の價値を有つてゐるに過ぎない、五圓票は實に銀十錢であるのである、奉天票を用意してゐなかつた私は、邦貨の十錢白銅を與へたが、店の老女は掌を額に加へて多謝といつた、邦貨の十錢は、その時の相場で銀十三錢である。

私は歸途、喇嘛の法輪寺に賽詣して、有名なる天地佛を觀た、本殿のうち、丈け八尺ばかりの金色の偉丈夫が、藍面の女人を抱擁する木像である、筋肉の隆々たる丈夫の双腕は、女人の細腰を擁し、豐滿なる女人の双臂は丈夫の頸邊に纒ひ、丈夫はやゝ俯し、女人はやゝ仰いで、その顏相距ること一寸ばかり、龕上に天地渡化の四字を書いた扁額が挂けてある、常には幕を垂れて人の觀ることを許さない、錢を僧に與へると、鉦を鳴らすこと一聲、綱を引いて開帳する、紱紼の婆娑、瓔珞の搖曳、まことに摩訶不思議な像である、境內には喇嘛塔がある、高さは五十尺ばか

り、基壇は四角、その一面を三つに區劃して、一劃のうちに各佛像を彫刻し、壇上には逆蓮座を載せ、圓蓋の上に圓き塔身がある、上は豐かにして下は削げてゐる、塔身の上に筍を立てたやうな圓錐形の相輪あつて、日輪月輪を穿つて高く天を指し、その寶頂には火炎があつてこれを圍んでゐる、風打雨淋幾百年の星霜を歷てゐるので、基壇も塔身も、多く霉爛し、宿鳥の齎らす木の實は何時しか芽ばへて灌木は寄生し、雜草は茂生し、鏤刻された佛像の、眉目混沌として苺苔の中に埋もれてゐる、奉天には、城外、門邊に近く四方に各喇嘛寺があり、東の撫近門外にある永光寺、西の外攘門外に在る延壽寺、南の德盛門外にある廣慈寺、北の地載門外にあるこの法輪寺とである、この四つの寺のうち南の廣慈寺は、日露の兵燹に燒けて、僅かに塔と碑閣のみを存すといふ、碑は龜趺の上に立ちて高さ一丈五尺、幅三尺、表面には西藏文字、裏面には蒙古の叭思哈文字を彫刻し、他の碑閣にある碑石には、表に滿文、背に漢文を彫刻してあるといふことである。

奉天驛から北行の汽車に上つたのは、その夜の十一時を過ぎてゐた、滿員の客車に弓臥の夢を載せた私は、車の滿井驛を過ぐるころほひに眼覺めたのであつた、青磁の色に晴れた曉、見はる

かす曠野の水平線から、さし昇る朝日は、さながら良窯から取り出した紅い辰砂の壺の色よりまだ紅い、圖們江のあたり、龍井の野では寸許の芽を抽いてゐた高粱畠は、こゝでは半尺の碧を疊んで、朝風に波たつあたり、耕夫の多くは早くもその業に努しんでゐた、洗面所で盥漱して席に返ると、會意の給仕は、新たに茶を淪して私達に飲ましめた、汽車は北へ〳〵と走つて行く、今までは、土壤の色が黃褐色であつたが、次第にそれが黑味を帶びて來た、肥沃の土であることが分る、思ひなしか路傍の草の色も鮮美を加へて、處々に白楊の、朝風に戰ぎ立つてゐるのが見える、地角に見る公主嶺の連峯は、大きなうねりをなして、天を蹴るさまである、正に遼河と松花江との分水嶺である、鐵路の傍にあるレベルの識標は次第に仰度を增して行つた。

胡沙吹く風

一、沙の中の都、鄭家屯

朝の七時、四平街の驛に入つて車を下りた、支那鐵道の四洮線の起點である、驛舍は、滿鐵と支那側の合同で、日本側は驛長一人に助役二人、今日は驛長の休日とて、佐藤助役に會ふ、けぬき合せに接續するといふ四洮線は、何うしたものかまだ發車する氣色もない、日本側驛長室と、廊下を隔てゝ、車站長と白く書いた黑札が、三つの部屋に一枚づゝ掛かつてゐる、支那側の驛長は、三人もゐるのである、驛長以外に、助役は六人、雜夫の人數も日本側の三倍もゐるといふ、鐵道の大官は、いづれもその緣故關係から、鐵道智識の有無を論ぜず、親類緣者を吹擧して登用する、隨つて人件費の膨脹から、收支が償はれないのは當然である、この日も放漫なる支那側の從業員は、接續時刻を忘却し、滿鐵汽車が進入して來たのに喫驚し、慌てゝ發車の用意を始めたので、終に二十餘分時を遲れて、私は僅かに出發することを得たのであつた、暢氣な事である。

この四洮鐵道といふのは、所謂滿蒙五鐵道のうち、我が邦の資金を借り入れて敷設さるべき三鐵道の一で、交通部直轄の國有鐵道である、滿鐵の四平街驛から洮南までの本線百九十四哩、遼源（鄭家屯）から分岐して通遼まで行く通遼支線七十一哩、合せて長さ二百六十五哩で、大正十三年七月に全部の開通を見たのである、遼河西域一帶の大生產地を控へ、洮昂線と結んで北滿よりの貨物輸送に大きな役目を有する鐵道で、洮昂鐵道は奉天政府が管理し、洮南と東支鐵道の昂々溪とを結びつけて百四十二哩、大正十五年七月に開通し、更に又た今年に入つて、昂々溪を縱斷して、汽車は齊々哈爾城外に延びて行つた、別に昂々溪から齊々哈爾の郊外までの輕便鐵道もある。

汽車は一路、西に向つて平原のうちを行くのであつた、何處までも際涯のない曠野のうちを、汽車は唯だ走りに走る、風沙を防ぐ爲めと、薪を採る爲めの林が、その野の處々に立つてゐる、傳家屯あたりからは楊柳の叢林がある、低い丘がいくつも見える、放牧の牛や馬や羊の群の、黑や茶色や白いのが集團となつてその白草原頭を彩つてゐる、民家のうちでも豪族達は、邸の周圍に高い土壘を築き繞らし、四隅には嚴めしい望樓を設け、その銃眼から覗いてゐる銃口は、星の

やうに光つてゐる、一たび滿鐵を離れて支那鐵道に入ると、四圍の風物は忽ち一變して、荒凉たる景趣となる。

朝から吹いてゐた西北風は、やがて漫天の黃沙を簇つて橫なぐりに襲つて來た、窓外は唯だ濛々茫々として、高い土壘を繞らした豪族の家も、胡麻鹽を撒いたやうな放牧の馬牛の群も、最早私の眼には映らなかつた、玻璃窓を搖り動す烈しい風沙は、その間隙から車房のうちにまで吹き込んで來て、支那給仕が克明に濺いで廻る熱茶の湯呑は、束の間に黃に濁り、顏を拭くべく須たるゝ掌を火傷するほど熱いタオルも、眞黑に汚れてしまつた、私は、朝の食事を攝るべく食堂へ行かうとして、車房の扉を啓けて、一步その廊下を踏んだ時、驀地の烈風は私を襲つて來た、咄嗟といふまに私の身體は中心を失つた、風沙のうちに喘ぎながら私の右手は無意識に廊下の柱を緊く攫んだ、斯くして私は僅かに車外に吹き飛ばされることを免れたのである。

二、徽宗帝の幽置された八面城

遙かに八面城の城市が驛の西南に見える、城内の關帝廟に八面石なる石碣があるので、やがて

この城市の名となつたのである、宋の徽宗皇帝がその子の哲宗と共に金の爲めに擒はれて北方に拉致せられ、一時その城内に幽置されたところである、大地は漸く砂を交え、畠に栽えられた高粱も、痩せて碧りなすその葉もこゝでは蒼白く見られ、烈風に簸られた沙はさながら水の流るゝやうに、淙々として畠を埋め草を沒するのであつた、三江口は、鄭家屯方面から流るゝ西遼河と、懷德縣方面から來る東遼河と、西北から注ぐ小淸河の合流する地點である、光緒三十二年、博旗族がこゝに埠頭を開いて以來、遼河の最も上游の埠頭として一時は榮えたが、宣統二年達旗族が鄭家屯までの航行を許してからは頓て衰へて再び元の寒村となつた、この地は一帶の低地で常に遼河が氾濫する、朝の九時半、私は鄭家屯の驛についた、驛の前には一尺にも餘る風沙の吹き溜りがあつた、濛々として起つその黄埃のうちに、二馬三馬、若くは五六馬に牽かせた幌馬車が、屯集しつゝ乘客を爭ひつゝあつた、その馭者の持つ長鞭は白や紅の獸毛を總のやうに束ねたものを五つ六つも結びつけてある、正しく支那劇場に見る馬鞭そのものであつた、何故に一臺の馬車を斯く多くの馬匹に牽かせるかといふと、深沙の路では多くの馬を使用しなければならぬのである、殊に雨の日になると、路上の沙は泥と化して、數馬の力を假りなければ、牽引すること

が出來ないからである。

私は二馬と一驢とに牽かせた馬車を傭ふて深沙の路をホテルまで走らせた、風は勁く、沙は飆る、更に馬蹄の蹴揚ぐる沙塵の渦卷は、濛々と馬車を裹んで、車上の私は呼吸もつけない苦しさであつた、土塀に圍まれた蒲鉾形の泥屋根の並ぶ寂しい町を過ぎて、やがてホテルとは名ばかり、黒煉瓦の二階建の門邊につき、玻璃扉あけて飛び込んだ、初め、私が驛を出た時、齡は四十五六、數人の從者を連れた赭ら顔の品格ある一人の蒙古人が、馬車を傭ふてゐるのに出會つた、私が旅館を出でゝ滿鐵公所に菊竹實藏氏を訪づれた時、その公所の玄關口で、再びその辭し去るのに逢着した、菊竹氏の語るところによれば、件の蒙古人は晉土魯王で、その愛孃豫て恭親王の子と婚約あり、やうやく嫁期に近づいたので、近く天津なる恭親王邸に輿入れすることゝなり、その奩粧の諸具を輸送する爲め客車と貨車を假りたいと賴みに來たのであるといふ。

三、鄂博山に登る

公所の人は、私を東道して、鄭家屯を距ること西二里の沙漠を觀せてくれた、鄭家屯すら、は

や一樹の蔭もない荒涼たる瘠土である、私は馬車、公所の人は騎、齢若いその人は、馬を馭するに慣れて、馳驅意のまゝに、常に馬車と數十歩を距てゝ先導する、風は例によつて勁烈、滿地の沙の、活きて走ることゝ急湍の石を劉つて流れ下るかのさまである、私は始めて流沙の意義を覺つた、この流沙に會つて、車は行くに艱み、馬は歩むに艱んだ、見渡すかぎり、荒莽として、唯だ天際に連らなる黄沙の大海原の展開するあるのみである、風沙の中、遙かに金字塔のやうな丘陵が見える、私の車はやがてその丘陵に近づいた、高さは七八十尺、拳のやうな小石、甕のやうな大石、そのかづ幾萬千を積み重ねたものである、蒙古人はこれを鄂博と稱してゐる、蓋し旗領と旗領との境界標である、一望際涯のない蒙古にあつては、丘山江河の境界を劃定すべきものがない、それで鄂博を作り成して、自他の領地を認識すべく定められたのである、私は車を捨てゝ鄂博の山に攀ぢ登つた、風尤も烈、面を向けがたい、蒲伏して辛うじてその頂に上つた。

山の頂には、長さ三尺ばかりの一箇の木牌が立つてゐた、その面には朱と青と黄土とで彩色された魔鬼の繪が極めて古拙のさまに描かれてある、裸形にして腰邊に布を纏ふたこの鬼物は、右手に鐵棒を提げ、左手に髑髏を持ち、足に一箇の人間を踏み、火炎、四もに燃えてゐる、木牌の

周邊には、寶珠と電光の模様があつた、私は風に背いて騁望を擅まにした、水平線の彼方に數個の黑點を認めた、瞳を定めて視てゐるうちに、次第にそれが大きくなつて、やがて三頭の駱駝と五箇の人となつた、沙漠の彼方の草地に棲む蒙古人が、羊乳で造つたチーズの壺を駱駝に載せて、日用品と交易すべく鄭家屯へ行くその途中であつたのである、沙平かにして寛きこと海に似、鵰遠くして立つこと人の如し、私は鄂博の頂邊に立ち盡して唐人邊塞の詩を憶つた。

四、沙の都に泥の家

この鄂博は、達爾罕旗と科爾沁左翼旗との境界標である、滿人はこれを鄂博と稱してゐるが、蒙古名では蒙古兒陀羅海（モンゴルトルカイ）といひ、蒙古人の被る頭被の意義である、この邊一帶の地は砂垞子と呼ばれてゐる、鄭家屯、昔は蒙古旗下の領地として、一寨村に過ぎなかつたが、同治年間、漢人の爲めに開放されたものである、爾來百年、法庫門から進出した漢人の植民都市として、蒙古貿易の中心市場となり、宣統二年、遼河航路の終點地として埠頭が置かれたので更に繁榮を加へ、民國六年四鄭鐵道の開通によつて、三萬の人口は一躍して六萬となり、殷賑

舊に倍するに至つたが、その後四洮鐵道が完成され、次いで通遼や洮南の發展となつたので、蒙古貿易上の地位はやゝその權威を殺がれたが、仲繼市場として、又た洮昌道の政治的並びに軍事的中心地として、市中の幹線道路を夾んで、堂々たる糧棧や雜貨商舗が多く、こゝを故鄕とする支那人も可なり多い、現に滿鐵公所の隣りには、昨年の春、張作霖氏の奇變に殉じた吳俊陞氏の邸宅がある、市街は東西に八支里、南北に四支里、支那の他の都會にあるやうな城壁もなく、一寒村から發展し來つたところであるが爲めに、市街は不規則に延びてゐるが、その南大街と北大街とには洮昌道尹公署、遼源縣公署、東北第十四師司令部や、蒙古旗の地租を徵收する福長地局や、日本側には鄭家屯領事館、居留民會、滿鐵公所、試作農場や邦人小學校などがある、中にも南大街は繁華の地區で、魚市場や貨物市場があり、大きな商店もあつて、曾ては蒙古貿易の中心であつたその面影を留めてゐる、皮革を賣る店、馬具や農具を賣る店、蒙古の佛畫を賣る店、巨木の一端を刳つた大俎に羊や牛の腿を載せ、鉈のやうな大きな庖刀でこれを割いてゐる肉店などの町中を、紫や黃いろの衣服を裾長に着た蒙古人が、荷物を載せた駱駝を牽いて往徠するさまは尤も遠來の旅客の興趣を惹いた。

五、雨が降らない

四平街から岐れて四洮線に乘ると、四圍の風物が次第に蒙古臭を帶びて來るのを看取する、普通南滿地方の農家は、黑煉瓦を積んで瓦若くは高粱稈、茅茨で葺いた屋根をもつものであるが、この邊の農家は曹達を含む泥土をもつて構築され、屋蓋も亦た同じ曹達の泥土をもつて掩はれてゐるのである、穹廬とは善くも名づけた、その屋根が、丁度蒲鉾なりに、棟もなく軒もなく、僅かに勾配をもつ穹窿狀になつてゐるからである、正しく泥の家である、もし霖雨でもあつたなら崩壞するであらうと思はれるが、蒙古地方は、雨雪量が極めて僅少であるが爲めに、家を造るに晴をのみトして、雨をトするの懸念が全くないのである、床には炕を作つて寒さを防ぎ、窓の戶を二重にして風沙の侵入するのを禦ぐのである。

滿洲でも蒙古でも、雨雪の量が少ないばかりでなく、雨乾兩季の存在が甚だ著しい、日本の各地では、一年の半は雨か雪かを見るが普通であるが、南滿地方では一年平均七十日、即ち一年の五分の一に過ぎない、それも六七八の三ケ月の雨季に、一年の降雨雪量六〇〇粍の四分の三は降

つて、殘りの九ケ月にあとの四分の一が降る、斯の雨雪の少ないことは、北に行くに隨つていよいよ劇しく、鄭家屯、通遼、齊々哈爾の如きは、その量は南滿の半ばにも達してゐない、洮南、通遼、鄭家屯などの沙漠に接する地方は殊に爾うである、ゴビの發達する最大原因もこゝに在る、因にいふゴビの沙漠といふのは、固有名詞ではない、蒙古語の沙漠といふことである。

雨雪の少量なることは、惹いて大氣中に含まるゝ濕度の低下を意味する、北滿に於いては、四月と十月とが殊に甚しい、その平均濕度は、南部でさへ六五%内外で、之を日本の平均四乃至八三%に比すれば一割以上の乾燥度を示すことになる、殊に室内は、家屋の構造と冬季暖房法とに由つて驚くべく乾燥度を示し、濡れたタオルが一時間を歷ないうちにカラ〱になつたり、濕つた砂糖や菓子は容器の蓋を取り去つて置くと、忽ちにして乾いてしまふといふ現象が見られる、更に氣象上の特徴としては、大氣中に含まるゝ細塵が、比較的多いことである、靄が多い、その靄も、日本の春霞や暮靄とは違つて、多くは蒙古地方から風の爲めに吹き送られる沙漠の沙塵である、滿洲の四五月頃は、西北風が多いので、黃塵萬丈を見ることが多い、天地晦冥、白晝、猶ほ燈火を喚ぶのは珍らしいことではない、日本でも、時にこの蒙古風の影響をうけて、晴れた日

でも、日光が黄いろく暈されて見えることがある、九州の北邊の平戶などでは、黑西とさへ呼ばれてゐる。

六、夜話

菊竹氏は在滿二十年、殊に蒙古の事情に通じてゐる人である、この夕、私は菊竹氏を訪づれて夜の闌けるまで歡談した、蒙古のモンゴリーは銀の意で、愛親覺羅のそのアイシンの金の意義であるのと對照されてゐるが、モンゴリーは窮迫されたる人といふ意義であるといふ、白鳥博士やシミット氏は勇敢の意であると說いてゐるが、萎縮し、窮迫した人といふことである、又たバートル、ビートル、支那の書物にある拔圖は、英雄の義である、蒙犬の一種に、狼に似た痩せた犬がある、蒙人はこれをネリンノへといふ、細い狗の義である、支那人はこれを西狗若くは細狗といふ、思ふに西域から渡來したものであらう、遼の慶州城（今の巴林旗）にある皇后の陵から發掘した副葬物の細狗の泥像は、現に菊竹氏の秘藏のものである、思ふにセバート種の犬であらう、蒙古には八碑がある、遼の陀羅尼寺の緣起碑、元の碑、元の最後に逃竄した應昌路城內の碑、

その外に五つの碑である、蒙古は地質學上、火山のない處であると稱せられてゐるが、應昌路附近には現に噴火口の跡もあり、隨つて居民が穀物を磨礱するに、熔岩製の磨棒を使つてゐる、遼の首都に就いては古來諸説あれど、今の林東縣地方であることは確かである、蒙古の文字はネストリアンが齎らし來つたシリヤ文字に基いて作られたものである、菊竹氏の秘藏の一つの開魯から發掘した鐵の釜は、私が今次の旅行中、龍井村の領事館で見た加藤清正陣中の釜とその制を同じしてゐる、遼、金時代に使用して、今は亡んでしまつた釜であることが始めて領かれたのであつた。

滿洲なるその語源は彼の文珠師利から出てゐる、佛名を人名に用ゐることは寨外民族の間に行はれた古代の習慣であつた、文珠師利が山西省の五臺山の上に跡を垂れたといふ傳説は、やがて東方民族の間に普ねく信ぜられたのである、五臺山が喇嘛教の手に落ちたのは元代であつたであらう、女眞の名酋李滿住、滿答失里、金の太祖の尊稱である滿住は、皆な文珠崇拜の影響であることは、學者の定説である。

七、無邊黃沙のうちの糞堆

翌る朝、私は風沙を衝いて、通遼行きの汽車に上つた、鄭家屯驛をはづれると、茫々たる荒原の彼方に、駱駝の背のやうな高い丘陵が見える、博克頭兒山といふ、蒙古語の傴僂（せむし）の義である、白市驛からは再び曠い荒原となる、波濤のやうに起伏する砂丘、そこには牛や馬や羊の群が、さながら胡麻を撒いたやうに見える、汽車の沿道には、時に例の泥の家が、廢墟のやうに風沙の中に荒れ寂びて立つのもあつた、大罕からはまだ開放されない白草離々たる曠野である、そこには蒙古沙漠を徵象する糞堆がある、牛馬の糞を採り集めて一箇の高い丘を築きあげ、群を離れて迷ひ去る牛や羊の行方を覓め搜すべく作られた展望臺である、大林驛の南方には、犢の背のやうな小山が見える、伊克圖虎爾吉（イクトホルヂ）といふ、大きな犢といふ義である、斯くて私は終驛通遼に入つたのである。

通遼は元の白音大來（バインタライ）の地である、蒙古語の「富める耕地」の義である、巴林旗の蒙古人が耕作してゐたことに基因し、附近一帶、西遼河の流域に當り、東蒙第一肥沃の平野

で、西の方茂林廟を歴て開魯、魯北、天山、林東、林西の諸縣に聯絡し、興安嶺から遠く陰山地方の蒙古各旗に通ずる要路となつてゐるので、民國十年、鄭通線の開通した爲め、急激の發展を致し、對蒙貿易の一大中心市場として、農産物、牛馬羊、獸毛皮がその主要な物である。

風沙はさながら霾雨のやうに通遼を掩ふてゐて、例の泥の家の毎戸では、洋燈を點して靜まり返つてゐるのであつた、私はこゝで始めて懐かしい洋燈の火影に接した、馬車を傭ふて滿鐵公所の出張所へと急いだ、やうやくその家を物色して門前に車を捨て、馬車賃を拂はうとして多少錢と訊ねると、十圓を與れといふ、私は奉天票の反故紙よりもその價の慘落してゐることを知つてはゐるが、咄嗟の際とてそれを忘れて、驛より僅かに數町の距離であるのに、十圓とは法外、俺を外國人と輕侮して、不當の金を要求するものと思つた、遠來の客を出で迎へた出張所の横尾君は、その衣兜から皺くちやに揉まれた汚ない紙幣を取り出し、その中から一枚の十圓紙幣を抽いて馬夫に與へた、私は始めて奉天票の一圓が、僅かに我が一錢餘厘の値であつたことを思ひ出した、奉票十圓の馬車賃は、我が十四五錢であつたのである。

八、自動車で砂漠へ

通遼まで來た私の目的は、斑禪喇嘛の居る茂林廟を訪づれて、喇嘛と會談し、喇嘛僧と一夜を沙漠の中に過ごさうとするのであつた、大連を立つた時、私は豫めこの由を通遼の出張所に通じて置いたのである、横尾君は、この町にある唯一無二の自動車を傭ふて、郊外六里の沙漠の泉地にある茂林廟に私を東道すべく既に用意を整へてゐたのであつた、横尾氏は厨夫に命じて午餐を作らしめて、支那料理を私に侑めてくれた、箸を擱くと、是れから直ぐに行かうといふのである。

この時、風力はやゝ凪いだ、門前には自動車の警笛がする、案内者として頼んで置いた屈強な一人の蒙古人が、門に候して侯つてゐた、裾長の紅い服をつけ、頭にも紅い頭巾を戴いてゐる、眉太く、眼大きく、鼻は猶太人のやうな鈎鼻で、色の赭黒い四十ばかりの男であつた、横尾氏は私にこの男を紹介して、喇嘛僧であるといつた、この町に斑禪喇嘛の別荘があつて、喇嘛は大抵其處に起臥してゐるが、數日前から奉天に行つてまだ還らない、茂林廟は今ま副貫主といふ資格

の僧侶のみしか居ない、沙漠の中の六里の路は、時に匪族の出沒することもあるが、喇嘛僧を同伴すれば爾うした疑慮は少しもないといふ、私は喇嘛僧と手を握つて、宜しく賴むといふ意を表した、この喇嘛僧を帶同すれば一路は頗る平安であらうが、さて問題はその自動車である。

何と無殘にも虐待され、酷使されたフォードであらう、車臺や幌の矢骨に塗られた漆黏は、早や全く剝落して、さながら瘡を病める野良犬のやうな赤い膚を露はしてゐる、前方の泥除も歪み潰れて、汽笛を包む鐵板の橫腹には大きな孔が明いてゐた、正に半死の病車である、私は乘らんとして躊躇した、支那人の運轉手と蒙古人の助手とは、大きな聲で橫尾君に語つた、何をいつたのかと聞くと、この車でも大丈夫であるといふのであつた、私は意を決して自動車に乘つた、橫尾氏も、途中の危險お守りの蒙古僧も乘つた、自動車は、深さ一尺もある沙の路を走り出し、深い車轍の痕を引いてやがて郊外へ出た。

漫々たる黃沙の曠野、そこには唯だ沙丘の起伏するのみであつた、路はない、唯だ沙の上を、目的の茂林廟の方向を指して走るのみである、何等の目標もなく、また磁石をも持つてゐない運轉手が、路に迷ふことなく行きつくことが、私には疑問であつた、しかし運轉手は沙を蹴りつゝ

車を走らすのであつた、一里ばかり行くと、太赭の繪の具で塗りつぶされたやうな沙漠の彼方から、コバルト色の一綫の寛やかに彎曲しつゝ流れて來るのがあつた、水である、遼河である、遼河の上游であるのである、河幅は四五十尺もあらう、汀には蘆もなければ水底にも石はない、唯だ沙の中を流れる淺い水である、私達は、そこにある渡舟で河を庋り、自動車は水を亂して渡つた、河を渡ると一箇の蒙古包がある、開魯の方面から來た牛車の數輛と、十二三人の蒙古人が沙の上に團欒して、茶を呑んでゐた。

九、糞火で煮た茶の御馳走

蒙古包、私はこゝで始めて蒙古包を見ることを得た、蒙古包とは、純蒙古人が、水草を追ふて移轉するに都合好く作られた天幕形の家である、天幕といふことから想像して、私は布で作られたものであらうと猜したが、天幕でも仲々金の掛つた馬鹿にならぬものである、中央に長さ七八尺の木材の柱を建てる、材は多く楡の木である、沙漠にある肥沃の地でも、樹らしい木は楡である、しかも風沙の爲めに次第に枯槁して、今では生氣あるものがない、その一本の楡を得るに

も、羊の五頭や十頭を償はねばならぬのである、その柱を中心にして、帳を四方に垂るゝのである、毳帳、毳幕、私は唐人の邊塞の詩の中に、善くこの字を見掛けるが、圓錐形に張り下げられるその屋根も、屋根から四方を取り圍むその壁も、都べて毡と稱する厚い羊毛氈をもて作られるのである、我國で若い婦人の好んで穿くものにフエルト草履といふのがある、あの厚い羊毛毡、それがその毳帳である、厚さ三四分、羊毛を厭縮して一丈も二丈も廣く長く作られたその毡である、一枚の毡ですら、廉い金ではない、幾十頭の羊の毛である、包全體としては實に數百頭の羊の毛を要するのである。

包の內部には、中央に爐が穿がたれてある、爐を繞つて、入口の正面が主人の席である、主人の座の背には、その家の寶物と什器とが置かれてある、右が賓客の席、左が細君の席、その他、長幼の序によつた座席が定つてゐる、帳幕の周圍には、燃料及び家具、炊事用のものが雜陳されてある、床は板を敷いて、上に毡が展べられてある、燃料は牛糞（若くは馬糞）である、糞を丸めて之を墻壁などの面に打ちつけて日に晒らす、乾いた牛糞は、丸くして平たい、丁度厚燒煎餅の形をしてゐる、これをへし折つて爐に投する、非常に脂肪分があると見えて、火を點すると、

菊の花のやうな炎を、四方に迸らして熾んに燃える、隨つて火力も盛んである、宋の世、時の天子が山中に棲む高僧の許に宣使を派した、山上の精舍に入ると、老僧は爐を擁して芋を煨いてゐた、宣使は勅命を傳へると、老僧は豁然として眼も呉れない、唯だ火箸で灰をかき廻し、糞火のうちから煨芋を摘み上げ、鼻から垂れ下つてゐる寒洟をすゝりながら芋を食つたといふ昔譚がある、その糞火といふのは私の今ま見たその牛の糞火である、樹木の乏しく燃料の少ない支那の各地では、多くこの糞團を燃してゐる、私は曾つて泰山の絶頂でも、糞火を焚いて暖を取つたことを覺えてゐる。

十、風沙車輪を埋む

包の主人も細君も、その子供等も、程遠からぬ草地に羊を放牧すべく留守であつたが、私は喇嘛僧によつて仔細にその包内を觀ることを得たのである、牛車を牽いて來た蒙人等も、熟面の喇嘛僧に對して挨拶した、私もそこで牛糞を燃して煮いた塼茶をふるまはれた、私は再び自動車に乗つて走つた、一としきり凪ぎた風沙は、遂河の滸を去つた時から再び猛烈になつて來た、さな

がら荒波の寄せるやうに、流砂は自動車を目がけて奔つて來る、車輪は忽ち深沙の中に沒して、動かなくなつた、運轉手と助手とは、車から飛び降りて、車輪を攔む沙をかきのけて、一條の路を開き、フルスピードを出して車を行る、一二町も走るうちに、車輪は再び沙に埋まる、更に車輪を停むる深沙をかき分けて車を行る、凡そ路程一哩ばかりの中に、車の動かざること十數回に及んだのである、辛うじて、私は、漢人が開拓してゐる或る耕地のところまで來た、幾畝の高粱畠、畠の四方には高粱の稈を束ねた墻垣を結び繞らして風沙を拒ぎ、そこに高粱を栽えてゐるのである、私の自動車は、やがて又た深沙の中に車輪を埋めて、動かなくなつた、私は運轉手等と力を合せて、車輪を埋めた沙を掘り除けた、私は車輪の輻に兩手を掛けて引き出した、突如、車は走り出した、私の兩脚は咄嗟といふまに車輪の下になつた、右の大腿骨が、弓なりに曲るのを感じた、骨が挫折するなと思つた、車輪が私の股の骨の上を轢り過ぎるのを覺えた、驚き騷ぐ人々のうちに、私は深沙のうちからオケラの如く這ひ出した、自動車に脚を轢かれて跛者にならなかつたのは、深い沙地であつたからである、若しそれが、甃石路かアスフハルトの補裝道路であつたならば、私は既に兩脚を轢挫してゐる筈である、私は左の手首に、一條の擦過傷を負ふた

のみであつた、造化妙と支那運轉手はいつた、仕合が好かつたといふことである。
この時風沙は更に一段の猛烈を加へて來た、天地晦冥、懐中時計を見れば二時を過ぐること二十分であるが、黄昏よりもまだ暗らかつた、六里の路程、その三分の一にも來ないうちに、疲憊してゐる我が自動車が、深沙を度つて行くことは不可能である、私は横尾氏に告げて、車を回へすべきことを命じたが、運轉手は、大丈夫、茂林廟へ行けると頭を掉つて肯ぜない、その意を忖度するに、茂林廟へ行くべく雇つた車だから、若し到達しないで引き還すと、その勞銀を貰へないからである、運轉手は、消魂しい警笛を鳴らして、驀然として車を走らせた、困憊を極めた自動車の鳴らす警笛は、さながら悲鳴と聞きなされた、少時して車輪は又も深沙のうちに沒してしまつた、剛情な運轉手は、終に車首を通遼に嚮けなければならないのである。

一一、成吉思汗料理

歸途、自動車は終に深沙に擱められて、動かなくなつてしまつた、私も横尾氏も、自動車を捨てゝ歩んだ、身長六尺を踰えてゐる喇嘛僧のコンパスは長い、僧は私達の深沙に行き艱みつゝあ

るを冷やかに一瞥して、大踏歩をなして疾く〳〵歩み去つた、漫地の沙漠、そこには一條の路すらない、路に迷はんことを虞れて、大聲揚げて喇嘛僧を喚ぶ、僧は回顧して手を抗げて疾く來よといふ、喘へぎながら後を趁ふ、その影は豆の如く、やがて一黑點のごとくなつて遙か〳〵彼方へと歩み去る、茫々たる大天大地、そこに孑然として踽歩する私等二人のあるのみである。

辛うじて私達は、遼河の滸にたどりついた、往路に訪づれた蒙古包もあつた、日は既に晡してゐた、風も歇んで來た、私は蒙古包を訪づれて茶を乞ふた、主人も細君もその子供等に既に歸つてゐて、細君は晩餐の用意に忙しかつた。

包の主人は、橫尾氏を識つてゐた、日本の東京から萬里の山海を踰えて遠くこの蒙古に來た私の事を聞いて、私の爲めに羊を屠つて晩餐を共にしやうと言つてくれた、蒙古人が、常に遠來の珍客に誇りがに饗まふ成吉思汗料理である、私は喜んで之を受けた。

胡沙吹く風は次第に歇んで來た、果てしも知らぬ平沙の天に連らぬあたり、舂きつゝある落日の莊嚴さは、人間の言葉をもつて形容することが出來ないものであつた、深い海の色を湛へた大空、そこには蒼狗となり、白衣となつて浮動する雲があつた、沈みつゝある夕陽は櫛の背の半規

を黄沙の涯に眞紅の色に燦いた、その反照は虹のごとく飛んで、雲を燒き爛らしたのであつた、一轉瞬の間に日は落ちた、爛れた雲の色もやうやく褪せて、蒼然たる暮色は、遠くより來つて千里の平野を掩ふた、鄂博も糞堆も、何時しかその影を收めて、大地は唯だ廣大無邊の大鐵板を展べたやうに黑くなつてゐる、風の勁い日中でも、八十度を踰したらしいその暑さも、俄かに凉しく、凉しいといふよりもうそ寒むく、我れ知らず上衣の釦子を合せたりした、天を仰ぐと、北斗七星は、日本で見るより、ずつと低く見渡され、是れ箕、是れ昴、是れ畢、是れ井、何れか織女、何れか牽牛、象緯周環して、私の指顧の中にあつた、小大錯落し、低高映發し、紫金の光を射るものもあれば、鮮碧の芒を飛ばすものもある、その色彩の潤美にも豐盈なる、正しく城市の間にありて暮夜に仰ぎ見るものとは、全くその觀を異にしてゐるのであつた、私は唯だ啞のごとく默して靜かに沙の上に箕踞してゐた。

包の主人は、大きな鐵の圓盤を、兩手に抱へて沙の上に昇き卸した、赤銹びのした分厚の鐵器は、龍井で見た加藤肥州の釜と趣を同したものであつた、火を盛るの器である、子供等は籃に盛つた牛糞を割つて鐵盤の中に積み重ね、火を點ずると、やがて烈々と燃えさかつた、牛糞を丸め

て壁に打ちつけて日に乾したもので、厚燒煎餅のやうなものが燃料であるのである、脂肪分があるると見えて、紅い炎を迸ばしらして熾んに燃える、更にその盤上に、平らな鐵條を組み合せた半圓形の網を載せた、やがてそれが灼熱して紅くなつた。

主人も、私も、横尾君も、子供達も、細君も、五郎八茶碗と箸とを持つてその周圍に團欒した、大きな鉢のうちには、蟹の油、鰕の油、胡麻油と、野芹と韮と、唐辛とを混ぜた汁に浸して、羊の肉は盛られてあつた、火の加減を視てゐた主人は、その肉の一塊を取つて鐵網の上に打ちつけた、香はしい匂を漲らして肉は炙られた、私達も、手に〳〵その肉塊を鐵網の上に投げかけた、炙られた肉を取つて、黃いろい岩鹽をつけてこれを食べるのである、何んと豪快なる食事の作法ではないか、五郎八茶碗には、高粱の粥が盛られた、小さな茶碗にはこれも高粱の酒が濺がれた、私は拳のごとき炙肉塊を啖ふて高粱酒を飮んだ、一代の梟雄成吉思汗が、沙場に夜營した時に、毎に好んで將士と共に炙肉を肴に酒盛をしたのであるといふ、私は痛快に飮み、痛快に食らつた、遼河の上流、白草原頭、滿天の風露、秋のごとき靜夜の中に催されたこの原始的豪快な酒盛は、世を終るまで忘れることの出來ない思出である。

二、大雷一過

私はその夜遲く通遼から鄭家屯へ歸つて來た、汽車は唯だ黑暗々の裏を走るのみである、車窓から見渡すと、一箇の燈火さへ見えなかつた、旅館に歸つて臥戶に入ると、殷々として遠雷の聲を聞いた、雷やうやく近づき、紫電、暗を劈いで、耳を掩ふに遑もなき大雷一聲、但し雨を伴はない空雷である、夜中、しば〳〵銃聲を聞く、夜警の兵士が盜匪を攘ふためであつた。

翌る朝、私は洮南に行くべく鄭家屯驛に入つた、四平街からの汽車はやがてホームに停つた、小學生徒の男女隊、凡そ三百人ばかり、敎師に伴はれて驛から出て來た、男童は詰襟の制服、女子は十中の九まで斷髮で、洋裝のものが多い、女敎師の多くは又た斷髮洋裝であつた、一隊每に斑旗を擎げ、先頭には少年樂手が、大皷と笛とで行進曲を奏して行く、鎭撫使の張海鳳も、この日、奉天から歸つて來た、驛前には、一少隊ばかりの騎兵が出迎へた、馬はすべて驄馬であつた、馬上で吹奏する喇叭は、我が陸軍のに較べると細くして且つ長い、唐の詩にある紫髯綠眼の胡人の吹いたその胡笳は、その聲尤も悲しいとあるが、今ま馬上の騎手の吹いてゐる長管喇叭

も、亦た頗る哀調を帶びて響いてゐた、小學生徒の樂手が奏する樂の音も、亦た一種の悲哀を催うさしめた。」

鄭洮道中

一、無邊の曠野に蜃氣樓

汽車は洮南さして鄭家屯を發した、曠野の西、遙かに白鹿山が見える、小さな驛や、數家の寒村、そこには例の泥屋が、廢墟のさまに見られるが、やがて又その間に高い土堡に圍まれ、銃眼のある角櫓に取り圍まれた嚴めしい大農豪家の邸もある、地は曠く、雲は遠い、放牧の馬や牛や羊の群が遊んでゐる、けふは風もなく麗らかに晴れてゐた、偶、荒茫たる地平線の一角に、岸樹汀蒲、碧なす水を湛へた平湖が見える、斯る原始的の沙漠のうちに、繪のやうな美しい湖水があると、始めて旅する人は訝かり看める、何ぞ料らん、これはこの邊の曠野に見る蜃氣樓である、武藏野には逃水といふのがある、草原の旅に疲れた旅人が淸泉を思ふ時、遙かに水を見て驚喜して近づけば、唯だ草原を見て水を見ない、武藏野の幾千萬倍もある滿蒙大野の逃水は、まことに人を驚かすに足るのである。

邊昭は達爾罕、札薩克圖、南郭爾羅斯の三旗の境界で、旗を立てた鄂博がある、開通は土城を繞らした鄭洮線の大驛である、やがて大野の中に立つ泥の都、洮南驛に私を載せた汽車は停る。

二、泥の都洮南

泥の都の洮南は、無邊際につゞく曠野の中に立つ楡の老樹のその蔭から發展して來た城市であると傳はつてゐる、大野を行く旅人はその楡の老樹がこよなき目標であつた、自づとその蔭に集り憩ひて、物々交換が始まつた、晩になると無數の鵲がその枝に宿つてゐた、何時とはなくその地を薩鷄街茅土（シャチガイマオトオ）と呼び做された、蒙古語の鵲の樹といふ義である、この木、今は全く枯槁して、その殘骸を泥の都の小北門に近く遺してゐる。

この土地は札薩克圖旗に屬し、光緒二十八年に開放されて雙流鎭と呼ばれた、民國十二年に鄭洮線が、十五年に洮昂線が開通してから、やがて交通、行政、產業の中心地となつたのである、曠野のうちに、斯うした城市の起つたことは、蜃氣の市ではないかと旅人は驚異する、私は例の馬車を驅つて、深い沙の路を城門さして走らせた、洮南驛は二階建の煉瓦造で、その玄關の頂邊

に三層樓を抽き出した蒙古としては莊麗なものであつた。

廣い沙原、その中を貫ぬく大路を行くこと十二三町にして、私は車頭に大きな城門の峙つのを見た、高さは一丈五尺、横さまに四丈ばかり、黒赭い煉瓦を積んで頂邊は凹形の堞口をもつ、上に啓文門の文字があり、左右の壁には支那煙草の哈德門の大繪比羅をはりつけ、門の頂邊には、我が仁丹の廣告比羅が左右相並んで貼られてある、門につゞいて四方に土城を築き立てゝ、何にさま堂々たるものである、この門は東門で、西に普庫、南には喜樂、北には誠和の三門がある、その門を廣告板にして怪まないのは、一面暢氣な支那人の心境が看取される、私は、馬車を驅つて門を潜つた、市街は、整然として、井桁のやうに區劃されてゐるが、軒を並べた商家は例の穹廬式の蒲鉾形で、宛然貨車を聯ね並べたやうである、建築材料は何れも泥土、皆この地方に産せる曹達土を積み上げたものである、道路も家屋も一様に鼠色で、そこに新らしい城市を粉飾する何等の色彩もなく、殊には市街はまだ半分ぐらゐしか出來てはゐず、處々に廣い空地もあり、極めて粗野の氣分に滿ちてゐた、目貫の町は富通大街、そこには製靴、製鞍、毯子、毡子の大商店や、甘草を賣る舗などが目立つて見える、町を行く牛車の多くは楡の木で作つたもので、蒙古人

が索倫の山中から材木を載せて來て、牛車ぐるみそれを賣つて、歸途は懷手をして還つて行く、馬車も二馬三馬、若くは四五馬、中には驢馬を加へて牽かせるのもある。

私は滿鐵公所の觀望臺に登つて、泥の都を騁した、城の西部に淸眞寺なる尼僧寺があり、又た淸眞學校がある、張作霖の爆死に殉じた吳俊陞夫人と鎭守使の張海鳳夫人とが相謀つて立てたものだといふ、高塔の空に抽くは回々敎の會堂で、煙突の天を摩するは電燈廠である、日は旣に晡して、騎兵遊擊隊の兵營から笳聲が哀調を帶びて聞えてゐる、公所の庭には、實物の蒙古包がある、庭には芍藥が栽えてあつた、沿道各地に野生の芍藥が多いといふ、公所を出でゝ市街を見物した、富通大街には二階建の百貨店もあつて甚だ賑はしい、その百貨店の門口の左右には、丈餘の眞紅の大瓢簞が高い簷から懸けられてあつた。

三、開放地には漢人の農村

私は、通遼や洮南で、僅かに蒙古の氣分に接觸することを得たが、大體に於いて、四洮鐵路の本支線二百六十哩の沿線は、蒙古といふよりは寧ろ漢人の農村であるといへる、これ等一帶の土

地は、既に蒙古の自治から離れて支那の行政管下に屬してゐる開放地であるからである、先づ滿洲の地圖を披いて見ると、山海關から起つて西に走る萬里の長城と、東の方に走つて、開原の北で滿鐵本線と交り、更に線路に沿ふて北上し、長春の東方まで延びてゐる邊墻がある、その柳の樹を栽えてあるが爲めに、柳條邊城ともいふのである、西に走る長城、北に走る邊墻、これが蒙古と滿洲や支那本部との界境をなすものである、滿鐵本線でも、昌圖と開原の中間驛である馬仲河以北は、全部蒙古の地域内で、四洮線は勿論、東蒙古の中心を走つてゐる。

四、蒙古旗の起原

愛親覺羅氏が清國を建てた時は、蒙古は淸に臣從して征戰に從つた、淸が今の奉天から北京へ都を遷した後、蒙人は再び部落に游牧した、清朝は各部落に游牧地を與へ、軍制に由つて部落に「旗」を組織させた、滿洲には元と八旗があつた、これを滿洲八旗と稱した、蒙古にも蒙古八旗があつた、この外部落を統率してゐる酋長を旗民とし、旗民中の平民を兵とした、蒙古の旗の起原である、長城によつて支那本部に、邊墻によつて滿洲に接壤してゐる蒙古は、幾多の旗で區分

されてゐる、最初、清朝は、蒙古の土地に漢人の移住を嚴禁してゐた、旗民の生活を脅かすといふ理由の外に、安住の地を與へて清朝の恩義を感謝させ、永久に忠良であらせたい政略上から發したものである、漢人移住の禁令はやがて破れた、官憲がその潜入移民を發見した時は、奈何ともしがたい情勢となつてゐた、已むを得ず既墾地域だけその住居を認むることゝなつた、然し流民の移住は蒙古の竊かに喜ぶところであつた、土地より地租として得る利益は、畜産物のそれよりも多いからである、昌圖も、懷德も、康平も法庫の一部も、鄭家屯も亦た漢人の移住地となつて支那の行政が伸展して來た。

やがて露國も日清戰後から南下して來た、清朝は終に邊疆の充實を第一國策として禁令を廢止し、漢人の移住を奬勵した、土地を開放することを、支那では、放荒、若くは放丈、出荒といひ、いまゝで開放してない土地を草地といふ、興安嶺の東南一帶の地の、肥沃の耕地は早晩漢人に占有さるゝ運命に到達することは火を睹るよりも瞭かである。蒙古は既に蒙古人の蒙古でなくて漢人の蒙古である、漢人の蒙古とは農業の蒙古である、農業を基礎として蒙古を視なければ、眞の蒙古は解釋されない。

五、蒙古の社會制度

私は更に蒙古の社會といふことに就いて書いて見る、蒙古の社會は、宗族と平民と賤民との三階級に分れてゐる、宗族には、成吉思汗又はその血族の後裔で、台吉(タイチ)と呼ぶ階級と、成吉思汗や元朝の功臣の子孫なる塔布嚢(タブナン)と呼ばれる階級とがある、塔布嚢とは駙馬、即ち婿殿といふ義で、台吉とは、漢語の太子を訛つたもので、恐らくは汗の子息を呼んだのに始まり、やがて貴族の名號となつたのである、塔布嚢を宗族とする旗は、東部蒙古の四十旗中、喀喇沁三旗、土默特一旗、及び伊克明安旗がそれである、前者の四旗は成吉思汗の四狗と呼ばれた勇者の一人、者勒蔑の後裔で、後者は元朝の功臣札巴甘墨爾根の子孫である、伊克明安旗は齊々哈爾の東方、東支鐵道の北にあり、清朝時代には黒龍將軍の直轄であつたのを、民國二年に旗として獨立させたのである、東部內蒙古では、この五旗を除く他の各旗は、全部成吉思汗の血族たる台吉を宗族としてゐる、奉天省蒙古の科爾沁部六旗、吉林省蒙古の郭爾羅斯前旗一旗、黒龍省蒙古の郭爾羅斯後旗と札賚特、杜爾伯特の兩旗も亦た成吉思汗の弟哈薩兒の子孫だから、隨つてその宗族は台吉であ

る、台吉を貴族の稱號としたのは、獨り蒙古のみではない、契丹も女眞も亦たその稱號を用ゐてゐる、太極といひ、太石といふも、皆なこの太子の訛である、淸朝ではこの台吉に親王、郡王、貝勒、貝子、鎭國公、輔國公などの爵位を授けた、更に台吉の稱號を位階名とし、頭等台吉、二等台吉、三等台吉、四等台吉と呼ぶ、塔布嚢も亦た四階の等差をつけてゐる。

宗族の下に平民がある、蒙古語でハラチユといふ、黔首と同意義で、黑人といふことである、別に黑い人といふ言葉で、ハラフンといふのがある、出家に對する俗人を指すのである、平民は宗族一門の家人として隨從した者の子孫である、蒙古の軍制は家の子を兵としたのである、平民は宗族の家人であり、更に又た貢を納るゝものである、これをアルバトといふ、宗族でも、又た平民でも十八歳をもつて成年となる、五年に一回戶籍調査を歷て、宗族に登錄されて始めて位階による頂子を附することが許される、頂子とは位階を表示する帽子の頂邊の飾玉である。

賤民は蒙古語でホヤツクといふ、平民の家にあつて勞役に服する階級である、幾代も主家と苦樂を共にして來た爲め、今では全く家族のやうになつてゐる、中には他民族を攻略して得た捕虜もある。

六、洮南の一夜

私はこの夜をいぶせき泥の家の一室に過ごした、洮南にある支那の官憲は、在留してゐる我が邦人に、旅館を開業することを許さないのである、裏町にある汚ない泥の家、身を側だて、肩を萎めなければ通ることができない窄い露地を抜けると、十坪ばかりの庭がある、庭とは名ばかりで、亜鉛の板で圍まれた外高架と、同じ物置と、水瓶や味噌甕が置かれてある一箇の明き地に過ぎないのである、糞土にまみれてゐる大豚小豚も遊んでゐる、瘡癬を病んで全身白い痂ぶたに掩はれてゐる蒙古狗もゐる。

明き地を前にして、そこに低い泥の家がある、その家を賃借してゐる邦人某が、その家主の支那人名義で、僅かに官憲の諒解の下に宿屋を開いてゐるのである、公所の人は私をその宿屋へ案内してくれた。

湫陋なるこの泥の家は、入口を入ると庖厨と帳場とを兼ねた土間、土間から薄暗い板敷を渡つて、窄い三箇の部屋が並んでゐる、部屋の廣さは六疊敷ぐらゐで、各々明き地に向つて一箇の牖

を開いてゐる、部屋の入口には扉もなく、白木綿の黄いろくなつた暖簾が懸つてゐるだけであつた、それでも一番奥の私の部屋だけは、公所のお客様だといふことで、澁紙色の疊の上に、青い毛布が敷かれ、更紗の褞が置かれてあつた、五分心の洋燈が、蟹の爪のやうに赤く燃えて、薄昏く座を照らしてゐた。

斯うした陋隘な宿屋でも、板圍ゐの風呂場だけはあつた、小さな鐵砲風呂である、私はそこで風沙に吹き晒らされた身體を洗つて、豆の漏るやうな貸浴衣に着換え、宿屋の主人から丹前を借りて被つた。

物好きにもこんな邊境に汗漫の旅を重ねて來た私を、主人も、たつた一人の若い女中も忠實にもてなしてくれたのは嬉しかつた、母國の人なればである、晩の食事には、遼河で漁れたといふ魚の刺身も膳に上つた、鱸であるといふ、日本酒も瓶詰だが、旨い不味いの贅澤はいへた筈ではないのである、私は大いに醉つて臥床に入つた、夜闌けて因夢は驚き覺めた、窓の硝子戸を透して、向ふの家の屋根の上に缺けた月が懸つてゐる、蒙古の群犬、豹のごとく遠く近くに吠えてゐる、物凄い夜半であつた。

昂々溪から齊々哈爾へ

泥の都に一夜を過した私は、翌朝、北站から齊々哈爾行の汽車に上つた、一望際涯なき荒野原、そこに白や黄や紫の、無名の野花が亂れ咲いてゐる、その花の群叢の、むら〳〵と起つ陽炎のうちに遠く遙かに濆れて行くあたりには、天津乙女が懐鏡を落したかと思はるゝ光る碧の湖が、此處に一泓、彼處に一泓、車窓の左右に指點せられる、いふまでもなく例の遁水である、白城子は、洮安縣公署のあるところで、遼時代の泰州の故趾であるといふ、鎭東には、鎭東縣公署があり、泰來には泰來縣公署がある、城市の三面に山を繞らし、市街はその窪地にあつて、驛からは唯だその民家の屋根を望み得るのである、五廟子驛からは、遁水ならぬ眞個の沼澤が、處々に見られる、左方の平原の彼方に白堊の大屋のあるのが見える、喇嘛廟である、大きな沼の中を貫いて汽車が走ると、やがて蒙東の巨流嫩江が西北から流れ來つて道を斷つのである、さゝ濁る春の水、漫々として草野のうちを行くその洸洋たる風物は、氣宇の遙かに恢やかに暢やかなる心地がする、中洲には楊柳が茂り、江に沿ふて、漁莊は絕えては又た續き、樹色水光、綺錯して新

舞の日に媚びてゐる、嫩江に架けた長い木橋を渡ると、再び故の曠原となつて、草の海は天を蹴る、興隆は、その昔、植民した滿洲族の子孫が今に殘つてゐる、古風な村落である、古の名を一里八屯といふ、民家は兩面葺卸しの草房子ばかりで、嚴めしい望臺をつけた土壁が村の周圍を繞り、老樹の蔭には曾つて旌表された孝子の牌門が立つてゐるなど、傳說氣分の漂ふてゐるところである、江橋までは沿道に散在する民家が皆例の泥土で作つた平房子のみであつたが、やがて次第に兩面を葺卸しにした茅葺屋根の草房子となつてゐるのが、殊に旅客の目を惹いた。

滿鐵の汽車を捨てゝ、四平街から支那側經營の汽車の客となつた私は、不快を感ずることが多くなつた、車掌は彼の圖們鐵道と同じく金筋入りの制帽に、金釦子の制服、我邦の驛長を遙かに凌ぐ服裝で、口に卷煙草を啣へながら、傲然と肩を張り手を伸べて、乘車券の提示を命令するやうに言ふのである、車掌の周圍には、乘警と稱する巡査や、鐵道取締りの兵士三四人が眼を睜つて控へてゐる、巡査は例の淺葱の木綿服、偃月刀のやうな長い劍をつきたて、腰には大きな拳銃を佩びてゐるその物々しさ、兵士は煙草色の是れも木綿服に、左の腰に長い劍、右には木匣のサックに入れた拳銃を佩び、左の肩から右の腋へ彈藥を入れた莢囊を帶び、爪垢の青い手に握つてゐ

るのは、赤錆びした鐵砲である、その七つ道具で武裝した是れ等の人達の不遜なる振舞は、土地柄と人柄だけに、旅客に尠なからぬ不安と不快とを感ぜしめる、列車ボーイが旅客に熱布や茶を提供することだけは、假令、チップを得んとする下心からするものだとはいへ、我が邦には見られない好い奉仕であると思つたが、支那旅客の無作法なる、給仕の頒ち與へる熱布を取つて、顔や手を拭ふて後、更に涕泗を熱布でかみ、痰を吐いて後これを給仕に返へすのである、老人などはその濺がれた茶碗の中で、齒糞だらけの義齒を外して、洗ひ淸めるものもあつた、これは獨り四洮、洮昻線のみでなく、その後、吉敦線に乘つた時も、亦た眼のあたりその公德を無視する亡狀を視たのである、この事あつて以來、私は給仕の配る熱布には絕對に手を觸れず、茶を喫むことをもしなかつたのである。

私は食堂で食事を攝つた、代價の一元四角に對して大洋二箇を與へ、奉天票三十圓の剩錢を受け取つた、奉天票の一圓は金貨の二錢に當る、卽ち六十錢の剩錢を返して來たのである。

昻々溪驛は、東支鐵道の停車場である、こゝから北方十八哩にして齊々哈爾城があるのである、昨年までは、洮昻線の終點で、齊々哈爾城へ行く旅客はこゝから更に輕便鐵道に由るか、乘

合自動車に乘らねばならぬのであつたが、この春から、洮昂線は東支鐵道とクロスして、直ちに齊々哈爾驛に入ることが出來るのであつた。

私は汽車に乘つたまゝ、露西亞風の嚴めしい昂々溪の驛舍を看めた、昂々溪の驛舍の上には、支那の靑天白日滿地紅旗と、露西亞の鎚と鎌を染め出した赤旗とを繫ぎ合せて、一旒の旗に作つたものを揭揚してゐた、獨り昂々溪驛のみならず、東支線一帶の驛舍には都べてこの旗が揭げられてあつた、昂々溪驛の西の富拉爾吉驛は嫩江に臨んでゐる風光明媚の避暑地として、更に馬乳による肺結核患者の療養地としてその名が高いが、私は征露の役、我が橫川、沖等の六烈士の鐵橋爆發を企てたところとして、想を當時に馳せたのであつた。

古風な齊々哈爾

齊々哈爾驛に降り立つた私は、その驛頭に蝟集する馬車や乘合自動車が、旅客を勾引すべく喚めき、號び、罵り、ひしめき合ふ混亂のその渦卷から脫することが出來なかつた、赭顏の一支那人は、私の旅行鞄を引つ攫むや、走り去つて乘合自動車の中に投り込んだ、私はその後を趁ふて、無我夢中でその自動車に乘つてしまつた、後から後から旅客は狹い車內に詰めこまれた、私は先づ滿鐵公所を訪づれる豫定であつたが、地理の豫備智識もなく、又た支那語をも話せない私は、車の停まるところまで行かうと觀念したのであつた、遼源、洮南にも劣らぬ沙の深い街である、濛々たる沙塵を揚げて自動車は走り出した、廣場を過ぎて、煉瓦造りの商廛の軒を並べた賑やかな街に入る、途端に、車は忽ち停まつた、車の前後には、例の淺葱服の二人の巡警が立ち塞がつてゐるのであつた、巡警は、頭を幌の中へさし入れて乘客を一とわたり見渡してから、私の胸先に大きな掌をさしつけて何やらいふ、支那語を知らない私は、何の意なるかを解するに苦しんだ、躊躇してゐる私の樣子を見た件の巡警は、もどかしげに聲を勵ましつゝ、衣兜から一枚の

名刺を出し示して、更に掌をさし出した、名刺を呉れとの事であつた、如何なる必要があるのかと疑ひつゝ私はそれを與へた、走了と巡警は手を揮つた、自動車は再び走り出した。

私は仔細に車内を回看した、乘客の多くは他郷からこの地に來た旅客であると猜した、そしてこの自動車は、旅客を我が家へ載せ行く旅館の自動車であることを覺つた、手眞似で停車を運轉手に迫つた、嚏つて應じない、車から降してくれといふ意味を手帖に書いて示した、彼は靑盲であつた、幸ひに乘客の一人に字を識るものがあつた爲め、運轉手は漸くにして車を停めた、私は奉天票の十圓紙幣を運轉手に與へて車を降りた、重い鞄を提げた私は、町の辻に立つて、本邦人を物色しつゝ待つてゐた、やがて邦人らしい人が來た、正しく日本人であつた、私の爲めに馬車を僦つて、滿鐵公所に送り屆けてくれた。

齊々哈爾は、內城と外城とに分れてゐる、內城は城市の核心で、昔は土城であつたのを、光緖の末年に、磚城に改修されたのである、高さ丈餘、厚さ八尺、銃眼を穿ち、六町四方を取り圍んでゐる、南に迎恩、西に平定、北に懷遠、東に承暉の四門を開き、東南廓には孔子廟がある、外城は東西十八町、南北三十町の土城であるが、今は全く取り壞たれてゐる、磚城の北門外は、官

吏や富豪の邸宅が多くて至極閑靜な所、南門外は城市の大きな部分を占めてゐる繁華な町、財神廟街は之に次いで賑やかな街である、大きな商店の店頭には、美しい看版が懸け聯ねられ、車道の兩側には幅三尺ばかりの板を敷いた歩道があり、毎家の軒下には太平水桶と名づけられた撒水用の貯水桶があつて、沙の深い路上へ間斷なく水を撒く、街の中央、數十歩を隔てゝ佇立してゐる交通巡査は車馬の通行を整理する、黑龍省江督軍の駐劄してゐる軍事的の城市だけに、軍人の往來も繁く、他の支那の城市に比して規律の整つてゐるやうに見られた。

私は公所に早川正雄氏を訪ふて、晩餐の饗をうけた、彼の張作霖の奇變に殉じた吳俊陞氏は、曾つてこの地の督軍であつたのである、早川氏と吳氏とは莫逆で、肝膽相照してゐたといふ、その勇氣と果斷と情熱と常識とに富んでゐたことは、當代稀に見るの人であると早川氏は推稱してゐた、督軍時代、五十餘名の馬賊の頭目が部下八百名を率ひて投降し、適當の地位を強要したことがある、氏は之を諾し、頭目各自に新式武器を與へんと欺きてその銃劍を解かしめ、厩舍に愛馬を看せしむるに假り、誘ひ縛して之を銃殺し、更に部下八百名を圍みて之を鏖殺したことがある、體軀傀偉、五尺七寸、三十貫を超へ、その常に馬に騎るが爲めに、兩脚は彎曲して蟹股とな

り、顔色は宛然澁紙を張つたやうであつた、滿身渾べて刀瘢と銃創のみ、その左手は銃創の爲めに高く抗ぐることが出來ない、日本語は、曾つて奉天の赤十字病院に入つた時習ひ覺えて、僅かに「難有」と「お掛けなさい」と「馬鹿野郎」の三語を知るのみであつた、或時、日本領事館の夜宴に招かれ、宴罷みて辭し去るの際、人毎に手を握つて「馬鹿野郎」と挨拶したが、歸邸の後その誤まれるを知つて慚愧し、夜中、馬を馳せて領事館の門を叩き、領事に逢ふて陳謝したといふ逸事がある、又曾つて微なる時、兵士となつて蒙古に行つた、一日、鷄卵を徵發すべく一蒙古包の門に立ち、そこにゐた妙齡の娘に向ひ「ウードロ、ウードロ」と呼んだ、娘は驚き怖れて殆んど氣死せんとした、ウードロとは蒙古語の女陰の事である、吳は鷄卵のウンドロなる言葉を忘れたのであつた、馬を愛して千金を吝まずに良馬を購つた、厩には常に十數頭の駿を養つてゐたといふ。

私は永安里の朝日旅館に一夜を過した、桃中軒如燕と名乘る怪しげな浪花節語が、旅館の廣間に演藝會を催し、居留の邦人二十餘名が集り聽いてゐた、早川氏も亦た斡旋甚だ勉めてゐた、下拙な浪花節を隣室に聽きながら酣睡既を覺えなかつた、翌る朝は自動車で市中を見物した、外城

「より內城、その南門は迎恩と呼ばれ、屋根を茶褐色に、棟を青色に塗つた穹窿門で、傍の小樓に高く鐘を釣るした異樣な門であつた、督軍公署や省長公署、第十八師の司令部や省議會など、仲仲に立派である、誦讀の聲の漏るゝ裏町の古風な私塾にも、泰山石敢當の立石にも、二百年來の士族町の氣分が流れてゐた、私は公園に入つて見た、芝居小屋があつて盛に鼓笛で囃し立て、雜貨の露店や大道賣卜、丁度昔の淺草の奧山といつたところである、望江樓とある木造の樓に上ると、蒼茫たる廣野のうちに、大きな巴字を描く嫩江の清流が見渡される、公園の入口に「厚給募兵」の小旗を立てた軍曹が一名の兵士を隨へて、無職の徒らしきものと見れば近づいて兵になれと勸說してゐるのを見た、やがて群衆中の二三名は、進んでその募に應じた、支那ほど兵隊を募るに容易な國はない、兵になるか、苦力になるか、この二つのうちの一つを擇べば、祿は自から來るのである、但し兵士は徵發や掠奪によつて食を得、苦力はその筋肉を役して食を得るの違ひがあるだけだ、兵士は働かないでも食へるといふから怠け者には適當な商賣である、しかし、募入されることは容易であるが、一旦兵士となつた上は、歸休することは絕對に難かしい、脫走すれば直ちに銃殺されるのである、私は兵士と連れ立つて行くこの路上の人の後影を見送つて、憐

みいたむの情に堪えなかつた。

龍沙公園を去つた私は、直ちに自動車を驅りて東支鐵道の昂々溪驛に向つた、行程十八哩、城門を出づる時、私は復た巡警の攔むるところとなつて名刺を乞はれた、昨夕、途上で遭遇した名刺の一件を早川氏に語つたところ、外人の此の地を過ぎる者に、不虞の事があるのを懸念して、豫めその氏名を長官に報告し、且つ保護に任ずる爲めで、他意あるにあらずといふことであつたので、私は快よく又た名刺を彼に渡した、巡警は擧手の禮を作して立ち去つた。

私の自動車は、曠野の中を貫ぬく大道を五十哩の速力を出して走つてゐる、時に村落の間を過ぎつた、高い土の墻に圍まれた土の家は、曹達質を多量に含んでゐる周圍の土をもつて築造されたものである、城壁のやうな土墻の四隅には、銃眼をもつた望樓が立つてゐる、私は古城の裡を通つて行くやうな心地がした、豪族の邸宅の外に、幾多の農家も軒を並べてゐた、入口には左右に圓柱を建て、兩柱の頂には長き圓木とやゝ短かき圓木を架して、さながら我が鳥居の如き格好である、家も亦た草を前後に葺き卸し、棟には高く千木を立て、鰹木を横へたさまは、我が邦の神社建築に彷彿たるものである、沙深い村の道を、爆音高く走せ行く私の自動車目蒐けて、勇敢

なる蒙古狗は、眼を瞋らし牙を露はして猛烈に襲ひ吠えた、豚は走り、野羊は逃げる。
正午少し前、昂々溪の町に入つた、今までの荒凉たる風光は、忽ち瀟洒淸麗な景趣と變つた、紅や黃や碧の美しい瓦を載せた家、路を夾んで緣したゝる街路樹、路を行く人の多くは黃髮綠眼の露西亞人で、殊に旅客の眼に珍らしく映じたのは、甕ほどの栗石で舖裝したその街路であつた、私はこの後、哈爾賓でも、車道がこの栗石で甃まれてあつたのを見て、是れが露西亞式であるのだと覺つた、但し步道は木煉瓦か、煉瓦か、若くはアスフハルトで舖裝されてあつた、昂々溪の驛舍は、四平街や鄭家屯、洮南の驛舍に較べて、誠に堂々たるものであつた。
私は旅行鞄を露西亞人の赤帽君に托して、待つま程なく滿洲里から來つた汽車に乘り込んだ、一等客車は、窓に傍ふて長い廊下が通じてゐて、客房は幾個も仕切られ、扉あつて外間からの窺窬を遮つてゐること、我が東海線のものと同じけれど、美しい壁布の模樣、淸らかな電燈、机案、行き屆いてゐるその設備は旅客の心を和やかに慰めた、六尺ゆたかの露人の赤帽、私の鞄を肩にしつゝ、オ、重いと日本語を操りながら、わざと重きを擔ふらしき風情に蹌めきて、大きな靴を踏み鳴らし、髭達磨のやうなその顏に無邪氣な笑を湛へたる、私をして快よき笑ひを催うさ

せた。

私は食堂に入つて食事を攝つた、食堂は中間の扉によつて二つに區別され、一は禁煙、他は自由に煙草が喫めるのである、給仕は鬚の中から顏を出してゐるやうな大男、たらば蟹の爪のやうな太い毛を生やした掌で、麥酒の酌などしてくれる、個人としては露西亞人ほど愛すべき民族はないと豫てから聞いてゐたが、今まこの汽車に乘つた私は、誠に然うだと點頭いた、窓の外は相變らずの曠野である、麗らかな嫩い夏の日の光は、四方に立つ陽炎の中を、珊々として狐の嫁入の雨のやうに濺いでゐる、此方に一泓、彼方に一泓、例の蜃氣の市が立つて、無邊の草の海に明澄なる湖水を幻出する、日本ならば、燕と雲雀とが横に縱に飛び交ふ時節であるが、そこには一隻の鵲さへ見られない。

松花江畔の大都哈爾賓

一、驛廊三本目の太柱

松花江の長い鐵橋を渡る、聞きしに優る廣い河である、中洲の上にも別莊風の家が綠樹の間に見える、凹字の頂、四角な窓、嚴めしい橋頭堡が、橋の兩の袂に立つてゐる、有事の時、橋梁破壞を企てる匪徒を監視するのであるといふ、橋を渡ると簇々數萬家、夕陽、今しも萬甍の中を抽いて、高く聳ゆる敎會堂の圓蓋頂邊の十字架に映ずる頃、私は北滿の大都會、哈爾賓驛についたのである。

哈爾賓の驛舍は、流石に堂々たるものであつた、ホームを出でゝ改札口に近き大廊にある列柱の、右より數へて第三に當る太柱のあるところは、明治四十二年十月二十六日、我が伊藤博文公が、兇竪の爲めに命を殞したところである、公の胸像は、今の驛前なる哈府商工會館の階上に安置されてある、驛を出でた私は、馬車を賃して名古屋館に詩囊を卸した、馬車は露西亞風の、轡

曲した大きな椈木をつけ、馭者は虎髭をくひ反らした露西亞人であつた、大馬路は、路に丸栗石を甃むであつた。

二、兩志士の方錐碑に賽す

翌る朝、自動車に迎へられて先づ滿鐵公所に古澤條作氏を訪ふて敬意を表し、更に郊外二里の地に横川沖兩烈士の紀念碑に詣る、一面の平蕪、兩行の疎樹、その下自から蹊を作す、碑は石を甃みて基壇方六間ばかり、數段の石磴を登りて、中央花崗石の方基の上に巍々三丈の方錐碑が立つてゐる、碑面に勒して志士之碑の四字がある、碑壇の後、一双の楡樹がある、横川、沖の兩烈士、この楡樹を背にして立ち、眼の覆布を斥けて、從容として笑つて丸を受けたところといふ、私は横川氏が曾つて操觚の業に從つてゐた故をもつて、夙に相知ることを得た、明治二十五年二月の紀元節當日、報効義會の郡司大尉が、その部下の健兒を率ゐて壘堤を發するの時、私はその送客の中に伍して艇を共にして浦賀に至つた、横川氏は實に朝日新聞社の特派員として大尉に從ひ窮北占守に赴いたのであつた、癯せて高く、微髭を蓄へ、風骨稜々、狀貌は今猶ほ眼前に彷彿

するを覺える、私は沖氏を識らないが、亦た倜儻の風貌を想像してゐた、料ざりき二十有餘年の星霜を歴て、玆にこの北滿の野に幽明を隔てゝ相對す、誠に感懷の無量なるを覺える、野花を折り取りて恭しく碑前に捧げ、默禱之を久うした。

三、東支倶樂部の午餐會

猶太敎や新敎、回々敎などの莊麗な寺院を巡覽してから、私は東支鐵道倶樂部に古澤氏の招宴に赴いた、大理石の廣い階壇、同じく嚴めしい勾欄、典雅といふよりも寧ろ莊重、そのガッシリとした三層樓建ての輪奐は、正しく哈爾賓に於ける建築物中の王者と稱するも、決して溢美ではないと思はれた、私は先づ喫烟室に少憩して後、食堂に入つた、小指の肚ほどの小さな菌、黑馬腦の細珠をつゞつたやうなカビヤ、翡翠の色鮮やかな長い胡瓜、皆な強烈、さながら火のごときオーツカ酒を媒するに妙なる好下物であつた、しかもその豐盛なる前菜と、大きな壺に盛られた肉汁の盈滿なるには、饕餮、私のやうなものでも避易せざるを得なかつた、一壇高いステーヂの上には、三人の樂手が、提琴と、ギタと、マンドリンとを合奏して、興を助けてゐるのであつた、妙

手、妙音、覺えず心醉した、中にも提琴の樂手は、齡三十ばかり、眉とばかり胸を張り、手を戟にして奏するその態度の、如何にも熱心に、又た如何にも眞摯に、更にその樂音の、莊重にして雄大に、大絃は急雨に似、小絃は私語のごとく、緩急錯落し、高低飄搖し、その妙はいふべからず、彈く人自からも我を忘れて恍惚として夢幻の境に逍遙してゐるやうに見られた、誠に妙手といふべきである、聞くところによると、毎歳の秋、東京の帝劇で招聘する露西亞の樂手は、皆なこの東支鐵道倶樂部に屬するもので、而かもその二三流以下のものであるといふ、樂壇に近い食卓で食事をしてゐた若い母と八九歲の少女とがあつた、樂人、一曲を奏し終つた時、少女は卓を離れて樂壇に駈け上り、柔荑の手に紅い手帕を持ちて樂手を抱擁しつゝその額の汗を拭ひやり、樂手も亦た笑顏を傾けて少女の額に接吻した、その麗はしい情趣を看た私は、正しく父子であることを猜した、食後、中庭に散步した、白樺の疎林、楡の木は旣に落花して、楡錢を徑に撒き布いてゐた、中央に花壇があつて、紅紫の細花は自から文字を現はしてゐる、古澤氏は私に語つた、この庭を漫步してゐると、露西亞に行つたやうな心地がすると。

四、哀れむべし白系露人

陸橋を度つて埠頭區を過ぎ、やがて松華江の江畔に出た、烟を吐いて往來する大小汽船、その中に蒲帆を掛けた支那の戎克も多く見た、岸邊には、許多の游舫がある、露西亞婦人や小兒などが、巧みに櫂を把つて游んでゐる、身は支那にありながら、私は西洋の那邊にか旅びしてゐるのではないかと疑つた。

路を行く馬車の挽馬のその偉大さ、彎曲した大きなくび木をもつてゐる異様な馬車、その馭者の多くは露西亞人である、自動車の運轉手も、乘合自動車の運轉手も、殊に車掌は、短かいスカート、長い靴下、立皺形の踵をつけた靴をはいた綠眼金髪の妙齢婦人である、銀行や會社の門番は、これも亦た露西亞人である、トルストイ型の老人、アレキセーフ型の中老、ゴルキー型やレニン型の若者、ヤスプーシン型の壯者、それが皆な一樣に、金釦子の制服をつけ、マドロス煙管を咬へながら、暢氣な顏をして門の石段の邊に立つてゐる、猶太教會の門を入らうとした時、汚ない服をつけた六尺豐かなの髭男に、大きな掌をさしつけられたこともあつた、彼は、私の爲め

に扉を啓いた報酬として錢を要求したのであつた、或る百貨店の入口の扉の陰には、身の長け三尺ばかりの侏儒がゐて、出入の人から錢を貰つてゐるのもあつた、二人連れの乞食で、一人はバラライカを彈き、一人はタンブリンを叩いて往來の人に錢を乞ふものもあつた、これ等の人達は皆な白系の露西亞人である、故國を逐はれて遠くこの地に來り、悲慘なる安住の境に落ちついてゐるのである、松花江の對岸には、此等白系露人の部落もある、富める人も多いが、貧乏してゐるものも亦た多い、白系露人が市中を歩いて、時に支那人と衝突することがあると、支那巡警は理非を問はず露西亞人を輪として壓迫する、哀れなる露西亞人は、怨を呑んでその屈辱に甘んぜざるを得ないのである、一時は全盛であつた露西亞人も、實に悲慘なものである、今は支那人の天下である、肩を怒らし大手を振つて濶歩する、殊に、私の哈爾賓に來た時は、支那官憲が、露西亞領事館に向つて、第二回目の手入を敢てした數日の後で、東支鐵道回收の計劃の正に熟せんとした時であつた、支那人の增長慢はやうやくに嵩つて來た、官憲も、商人も、苦力も、一樣に白眼をもつて露西亞人を視てゐるのである。

埠頭區に有名な大市場の熱閙を視てから、私は再び自動車を回へした、哈爾賓市に於いて、尤

も綺麗で繁華な街はキタイスカヤ街である、大廈軒を並べて、歩道に傍ふ街路樹の蔭には、共同の露床があつて、人の休息に供してゐる、露西人婦人、若きも老ひたるも、皆なその蔭に憩ふてゐる、支那巡警は、大道の中央に鳥居立になつて、車馬の往來を整理してゐる、大きな百貨商店のうちには、邦人松浦氏の經營する松浦商店の高壯な建物もあつた、哈爾賓市に隣接して、支那街傅家甸がある、暖簾に、金看版に、彩旗に、電燈飾に、汗を揮つて雨を作し、袂を連ねて幕となす底の支那氣分は、この一區に横溢してゐる、他の都邑では餘り見かけたことのない人力車も、この一區にだけは横行してゐる。

哈爾賓には二夜を過した、一日の夜は北滿ホテルに午後の十一時から開かれるダンスホールに行つて觀た、膩粉と音樂と酒肉と交錯した歡樂場であつた、他に又た一種の戯畫を映寫して觀せる處があると聞いてゐたが、今は既に禁止されてゐるといふ、私はダンスホールを觀て、索然として何の興趣をも覺えなかつた、夜遲く、私は旅館に歸つた、滿街寂寥、月は天心に懸つて清光は水のごとく布いて、地上の霜と疑はれた、斯る晴夜は希有の事であるといふ。

五、高科査斯の羊肉料理

翌る日も、晝は、遊覽に過ごし、夜は亦た市街を散歩した、繁華の町なるキタイスカヤの一角に、通人連の行く料理店にロゴウジンスクの家がある、狭い地下室で、高科査斯料理を供するのであるといふ、この日、滿鐵の石本憲治氏は事をもつて哈爾賓に入つた、晩に北滿ホテルに同氏を訪ひ、數人相伴ふてロゴウジンスクの家に行つた、支那名は羅郭金司吉酒莊といふのである。

石壇を降りて地下室に入る、麁木の卓子が並べてあつて、酒樽が腰掛になつてゐる、私達は好き處に陣取つた、把手のついた大きな壺に、溢るゝばかりに湛へられた酒が出る、コーカシアンの農婦が、黒パンを裂きて酵母を加へ、手から釀したクワスといふ酒である、色はビールに似てやゝ淡く、少しく酸味はあるが、和らかに輕くて酒精分もすくなく、微醉を買ふに足りるものであつた、私は、大きなコツプに灑いで幾度も滿を引いた、下物には例の蝶鮫の胎卵カビヤ、これは柚子を手で絞り、その液をかけて食べるのである、次は或る香料を加へた液につけた丸漬胡瓜、いかにも旨い、次には生葱、これは食鹽をつけて食べるのである、最後に卓上に現はれたの

はこの店の自慢の羊肉の串燒卽ちシャリークである、羊肉の大塊を、團子のやうに幾個も眞鍮の串に貫いて炙つたものである、山と盛られた羊肉は、陽炎のやうな、淡い白氣を揚げながら、香はしい匂を振り撒いてゐる、私は食指の動くを覺えた、その肉味の香膩にしてしかも脆美なる、私は旨しとして貪り食つた、料理は是れで終りである、私は煙草を欲した、私のケースには一本の卷煙草もなかつた、ボーイは卷煙草を持つて來た、細卷きのその三分の一だけが煙草で、三分の二が吸口になつてゐるものであつた、露西亞の紙卷煙草は、何ういふ理由で吸口が長いかといふことが話題になつた、冬になると襟卷を卷いたり、外套の襟を立てたりするので、吸口の長い方が煙草をふかすに便利であるからといふ說と、髭の深い人が多いから、卷煙草の吸口が長くないと鼻の下に火事を起すといふ說もあつた、私は兩說に贊成した、卓上の燐寸を把つて火を摩つた、取上げて見ると、小型な函で、その軸は赤かつた、函に貼られたレッテルは、赤い色で緣を取つて、中は黃ろく、そこに雄鹿が背に角を伏せながら、三稜角の山の上を馳けてゐる繪を描き、左右に蘇維埃社會主義聯合共和國洋火公司の文字がある、上と下とには露西亞文字で同じ意味が書かれてあつた。

六、羊肉を咬みつゝ漫談

談は時事に移つて行つた、洋の東西で、支那と米國とは一對の駄々ッ兒である、米國は富んでゐて、支那は貧乏、共に我意を振舞つてゐる、殊に支那は、革命以來、殆んど國際的信義などには頓着せずに、恬然として耻づることなく、租借地は强奪する、借欵は帳消しにする、日本に對しては時を擇ばず處を嫌はず抵貨する、口を赤化の宣傳に假りて、今又た東支鐵道をその手中に收めやうとする、誠に無法千萬な振舞ひであるとの議論も出た、我が政府は、臆病である、腫物に觸らぬ主義を執つてゐる、斯うした國際信義を無視してゐる國民は、何の遠慮、何の會釋が要るものか、ぐづ〱してゐるうちには尻の毛まで脫かれてしまふ、緊褌一番、今に於いて鐵拳を飛ばさなかつたら臍を咬むの悔があるといふ議論も出た、しかしその支那の此の種の連中は、生學問の學生か、革命に逆上せかへつてゐる軍閥連か、職業的愛國志士だけの事である、全般を通じて支那國民は、唯だ金と、性慾とに生きてゐる暢氣な民族である、遠く開港場を離れた田舍に行つて見ると、その質朴さと暢氣さは誠に愛すべきものがある、旅客に親切で、排外的の氣分が

の人民であるといふことになる。

私の哈爾賓にゐたのは六月の初旬であつた、此の紀行を書いてゐるのが十一月の中旬である、支那は今ま、馮玉祥と蔣介石とが中原でその輸贏を決しつゝある、西比利亞國境地方では、是も露支兩軍が互ひに勝つたり負けたりして、交戰最中である、然し一般の支那人は、中原の戰爭にも、國境の交鬪にも、別に心配してゐるやうな氣色が見えない、その一勝一敗は、さながら秦人の越人の肥瘠を視ると同じやうに、何の關心するところがないやうである、これが若し我が國であつたら、一國緊張、須臾も寧居を許さないほどの騷ぎであるのに違ひない、國の大きいせいでもあらう、人の衆い故でもあらう、地は濶く人は多い、性來の暢氣はやがてこの邊から生じて來たのではあるまいか、支那人はいよ〳〵不可解な民族であるわいと思はざるを得ない、支那人は阿片を吸ふ、その精力の衰耗は、昔のやうな大學者も、大詩人も、今後は絕對に出現しない、大いなる藝術家も出て來る筈はないとの說も出る、いや爾うとも限らない、吸烟家はその恍惚境界に天來の妙想を捉へることがあるものだ、詩人や藝術家は出るかも知れないといふ說も出る、今

の支那樂は、胡樂が大分雜つてゐる、唐代に於ける音樂の雄大にして莊重典雅なる、それが獨り我が國に傳つて雅樂になつてゐる、といふやうな話をしあつて賑やかに夜を鬧かした。

風光明媚の吉林省城

哈爾賓に二夜を過した私は、朝、驛を出でゝ長春に向つた、曠野のうち高粱、麥、菽、穣々として遠く天際に連る、展望車の安樂椅子に靠れながら、茶を啜りて遐望を擅まゝにする、鐵路は矢のごとし、驛舍のうち、双城堡の、簷牙高く喙める支那風の建築は平板な景趣に飽きた旅客の眼を喜ばしめた、各驛の庭、多くの楡樹が栽えてある、萬貫の楡錢は地に敷いて人の踏むに任せてある。

長春は我が滿鐵の終點驛、正に日露の勢力の相撞きて交も綏するところである、附屬地及び商埠には、日本七分、露國二分、支那一分の氣分が交錯してゐるのを感ずる、私は支那人馭者の馬車を馳つて、附屬地の公園に詣つた、公園の入口には、浄瓶を提げた裸婦の塑像がある、恐らくは露國時代の遺物であらう、茂林と浄池とあり、樹蔭と汀邊には露床を置いて人の憩ふに信せてある、偶ま大雨、雨を長春の驛舍に避けて晡時、吉敦線の汽車に上つた、斜日、亦た人に媚び、沿道の楡樹や楊柳や、その影は塔のごとく高粱の翠浪のうちに長く延くのである、唐の太宗が、

遠く北征して馬に飲ひたりと傳ふる飲馬河の邊に來ると、一道の土壁の、或は斷え或はつゞき、透邐として北に向ふて走るのが見える、壁は高さ一丈ばかり、上に柳楊を栽えてある、曾て日比谷公園の南、内幸町の大道に並べて栽えられた古柳樹に比すれば更に太くして且つ高い、車窓に最も近い柳樹を見ると、幹圍の太さは三抱四抱へもあるらしい、しかしその老木も今は早や朽ちて幹を留むるものもある、衰條扶疎として、宛ながら老女の黃髮を思はせるやうに、僵れてゐるものも、僅かに生氣を存するのみであるが、こは是れその昔、山海關から岐れ東北に向つて數百里、蒙古と滿洲との間を剖割した柳條邊牆の趾である、涯りも知らぬ大野原も、黃昏過ぎてやがて漸く山に入り、處々の山廓、次第に燈火を催し來り、暮靄蒼茫、風趣はさながら内地の田家のやうに思はれた。

午後十時、漆のやうな曠野を走る汽車の窓から、遙かに東方に燈火の簇がり燦きつゝあるを望み見た、いふまでもなく張作相氏の膝下の吉林省城である、やがて車站に汽車は停つた、夜更けて人は稀に、市街は皆な戶を鎖してゐた、私は驛前から馬車を驅つて日淸旅館に入つた。

翌朝、馬車を驅りて滿鐵公所に栗野俊一氏と會談した、公所は松花江の畔にあつて、前に園子

山の蒼翠に對し、ベランダに登ると、江山の勝を一望のうちに收められる、漫々として流るゝ大江の水、兩岸には柳樹と楡樹とあつて、その蔭に綸を垂るゝ漁翁もあつた、公所の應接所に、滿洲貴族の擐した甲冑一領と、日本武士の着た紺糸縅の大鎧とが飾つてあつた、所長粟野氏は慷慨の士であつた、會談これを久しうした。

督軍張作相氏のお膝下だけあつて、吉林は省城らしい繁華の市であつた、道路の兩側に、爼ほどの厚い木板を惜しげもなく架け渡して歩道としてゐるなどは、材木の豐富な土地柄とはいひながら他の地方に比して贅澤であると思つた、江邊に近い住宅地では、厚さ三寸もある版材を横に並べて塀を作り、二た抱え三抱へもある太い材木で門を作り、丹碧で彩られてあつた、門の棟から兩側に垂るゝ懸魚にも圖案的に面白いものがあつた、河岸には、材木の山を築いてゐた、美しく彩色された棺を二十も三十も積重ねてあつたところもあつた、私がその金碧で繪かれた雲彩花紋を看めながら水濱を歩いてゐると、棺を買ふべく點檢してゐるとでも思つたのか、黑い紋純子の長袗をつけた中老の人が現はれて、私の袂を引いて最も華麗に彩色した一箇の棺の前に導びいて、大人の住宅はこれより善きはなしといふ風情に、手眞似で私に買へと勸めた、私を富翁と思

つたのであらう。

私は公所の人に導かれて、繁華な街を過ぎて、北山の關帝廟と娘々廟とに賽した、龍や、鳳凰や、蝙蝠の招牌が軒並に懸つてゐた、何れも金碧燦爛たるものである、交通巡警は、殆んど一町毎に路の中央に立つて車馬を整理してゐる、折から今日は娘々廟の祭日といふので、往來の人は織るやうであつた、立兵庫や大きな銀杏返しに髮を結つて、金銀紅紫色とり〴〵に麗はしい笄簪を翳し、粉黛を粧ひ靚服を着飾つた滿洲美人も多く見かけた、やがて路は高粱畠や豆圃のうちに入つて交通巡警は車馬の往來を停めてゐた、沙埃の路を山に登る、先づ關帝廟に賽し、更に急坂を登つて女神像のある朶雲殿に詣つた、『天下第一江山』の門を入ると、長さ三尺もある線香を賣る露店や、ちまき屋、豆餅屋、飴屋、青龍刀や蛇鉾や人形などを賣る玩具店、造花屋、氷屋、駄菓子屋などが、雜然として並んでゐる、こゝにも例の立兵庫や銀杏返の滿洲美人、纒足の步みは楚々と群集の中に揉まれながら、濛々と立つ線香の烟の中を龕前に近づいて、禮盤の上に双膝ついて神に愛兒を投げたまへと祈るのを見た、殿後には玉皇閣がある、泰山府君を祀るのであつた、小屋掛けの戲場も到るところにあつた、圍ゐもアンペラ、屋根もアンペラ、そのアンペラの

緣を巧みに折り變んで、牙のやうに反り返へつた簷を作り、破風作りや入母家風に作られた土俗的の技巧を私は面白く看めたのであつた、玩具のうちで、人形やキューピーや、護謨毬や、セルロイド製の各種の玩具は、何れも本邦製のものと見られた、關帝廟に通する坂路の兩側には、張子の虎を賣る店が櫛比してゐた、黄膚、黑紋、その髭を白にしその睛を金にし、額に大きく王の字を描いたその古拙の趣きは又た私を喜ばせた、路傍の物賣る人のうちに、破れ衣を纏ふた露西亞人の、竹籃の上に黑麵包を並べて賣つてゐるのがあつた、この町には白系の露人凡そ百人が種々の勞役に服してゐるといふ、馬車の多くは例の彎曲した大きな首木をつけたもので、馭者も亦た露人が多い。

吉林は、西北に九峯を負ひ、東南、松花江に沿ひ、山河襟帶、風光の明媚な地である、省城は明治三十九年、日淸條約によつて開市場となり、翌四十年一月、商埠地として外人の居住し營業するために市街の一部が開放さるゝに至つたのである、昭和四年三月の調査によると、本邦人の城內にあるもの四十戸、百三十七人、商埠地にあるもの二百四十二戸、八百二十七人、朝鮮人、五十九戸、二百六十二人、外人主として露西亞人、十四戸、九十一人で、支那人は、一萬八千

百九十二戸、十萬三千餘人である、主要の官衙には、吉林省政府、東北邊防副司令部、民政廳、財政、建設、農鑛、教育の各廳、全省公安管理處、保衛團管理處、田賦、木税、印花の税處、法院、官銀號、鐵路工程局などがある。

松花江畔を逍遙した私は、その景趣の酷だ近江の石山寺附近に似てゐると思つた、但し宇治川の瀬田に注ぐところに比べると、漫々たる大江は正にその三倍もあるらしい、水の色も春のさゝ濁りを見せて、深さは筏を流すに適する三四尺であるといふ、江に白魚を産する、前朝のころには北京宮廷へ毎年献上したものだといふ、口は巨く鱗細かに、長さ一尺三四寸、吾が邦の鱸に似た魚である、又た扁花魚といふのがある、扁たい一尺ばかりの魚である、内地にこの種のものあるか否やを知らない、冬に至つて江は全く凍合し、氷上に市を作るといふことである、吉林、一に琵琶城といふ、松花江上流の材木は、皆な此地に集る、木の都である、その胡桃の材は、銃臺として尤も良好なものであるといふ。

威虎嶺を踰へて一路敦化へ

汽車は松花江に架けた長い鐵橋を度り、對岸の龍潭山の車站に少留して更に敦化に向つた、江密江、額絲穆を歷て六道河の小さい隧道を度りて漸く山に入り、更に老爺嶺の隧道を過ぎた、長さは千八百二十米突と註せられ、車行、四分時と十五秒を費した、汽車はやがて嶺の鞍部を下る、見渡すかぎりは一面の樹海、その林の中を行く、電柱は白樺の立木を利用し、車站は多く丸木を構へた露西亞風のものである、森林のうちに、鈴蘭の群落、その花今や眞盛り、淸香は窓より入り來りて人を薫殺する、凡そ車站のあるところ、巨木の山のやうに積まれてゐないところはない、時々行き逢ふ貨車の上には、二た抱へも三抱へもある大きな材木が滿載されてあつた、小姑家を過ぎて眺望廣濶、陸田遠く連る、白衣を着けた耕夫が多い、蓋し鮮人である、處々の村落、家は皆な草葺屋根で、景趣は內地の田舍と異らない、拉法の車站、こゝも材木の山である、やがて蛟河の車站に入る、蛟河は、吉敦沿線中の大市邑で、驛前に鐵道市街の計劃があり、別に省政府では商埠地を設けて、諸處に新築の家屋が見える、目測百米突ばかりの蛟河には筏が多く浮ん

てゐた、水の深さは五六尺、鯰に似た小さな魚が隊を成して泳いでゐる、車站には昇降客が可なり多かつた、凡そ老爺嶺以東の耕地は多く大豆を栽えてゐる、次には高粱である、水田も亦た多い、朝鮮人は稻作に長じてゐて、土人の捨てゝ顧みない甸子、即ち低濕の地を相して田を作り、小畦を設け、附近の河流から水を引いて灌漑する、播種の方法には、散播と條播との二種がある、散播とは種子を播き散すことで、條播とに列をなして播くことである、毫も肥料を施すことなしに、相當の收穫を見てゐるのである、この邊には、四百戶の鮮人農家がある、多くは歸化したものである。

二道河車站から黃松甸に至る、針葉樹が多く、その林相も亦た美しい、威虎嶺を度ると一面の甸子となり、正に山背の草の海である、この地もやがては鮮人の田となるであらう、その廣い綠の原野を彩つて、金鳳花の大群落が、今や盛りに咲き誇つて、萬斛の金粉を撒いてゐた、私は我が晩春の大和路に旅びして、彌望の菜花を看むるやうな心地がした。

蛟河の驛から、一外國人が一人の支那通譯を隨へて汽車に上つた、大きなトランクを携へてゐた、席を私のゐる榻の隣りに占め、地圖を披いて某の山、某の水を指點しつゝ通譯と語つてゐ

る、その容貌が、英吉利の現皇帝に善く肖てゐるので、私は英國人と猜した、今夜は何處へ宿らるゝかと問へば、敦化の日本宿屋へ行くといふ、彼は哈爾賓に住む土木技師で、この數日を吉敦線の視察に送るのであるといふ、威虎嶺を過ぎればはや黄昏、月もない暗の夜闇けに、私を載せた汽車は吉敦線の最終驛なる敦化に入つた、驛は野中の一軒屋で、極めて寒貧なものであつた、秋のやうに風は冷たい、私は外套の襟を立てゝ驛を出た、一箇の燈火すらない暗中に叫喚する馬夫の群があつた、私も彼の英人技師も、その勾引するところとなつて、馬車の客となつた、馬車とは名ばかりで、彈機なしの材木車、上にアンペラの幌が掛けてある、その中へ私達と他の數人の旅客とは、踈木の板を敷いた上に、竹行李やトランクと共に雜然として蹲踞せざるを得なかつた、曳馬は三頭の馬と二頭の驢馬とであつた、馬夫は長い鞭を揮り鳴らし、口笛を吹きつゝ馬を驅つた、路もない高粱畠をまつしぐらに走るのである、車中の人の肩は相擊ち膝は相撞く、その搖り上げ搖り下げられる時は、正しく鼻端に火を生じ耳輪に風を起すの苦痛であつた、斯くして暗中を走ること三十分、一箇の低い城門を入ると、始めて燈火を見た、やがて私達は湫陋な裏町の唯ある家の前に馬車を停めた、こゝは滿鐵の公所であつた、公所は一支那人の家に賃居してゐ

には肥沃な農耕地、無盡藏の大森林、大小幾多の各種鑛山等があつて、所謂滿洲の寶庫と稱せらるゝ吉林省の中樞地域を開發するに至大な貢献をなすものと期待されてゐる、更に近き將來に於いて、敦化より東南に延長されて既設の天圖鐵道と連絡し、所謂吉會鐵道を完成するに至らば、實に我が日本と歐洲との連絡する最捷徑路となるであらう。

牡丹江畔

一、清室發祥の地俄朶里城

翌る朝、私は公所の人に導かれて敦化の城内を散歩した、城市は方六町の塼城の中にあつて、支那の邊境にある寂しい町である、井字形に區劃された中心街頭に立つと、西東北南の四門は洞然として隱るゝところなく見通うされる、城門は、高さ一丈五尺ばかり、上に屋を置いてあるが極めて簡素なものであつた、兩側の市廛も二三階のものは尠なく、低屋軒を連ねて、普通支那町の様な繁華なさまは見られなかつた、城を出でゝ牡丹江畔を行く、汀には蘆荻生ひ茂り、水は漫々と流れてゐた、濶さ六七十米突はあるらしいが、さゝ濁る水の面に、翠阜影を蘸して、物靜かな景色であつた、江畔にある廣い高粱畠は、元と土城のあつたところと傳へられ、缺けた劍や錆びた鏃が時には農夫の耒鋤に掘り起されるといふことである。

前朝、清の發祥地なる俄朶里城は、阿克敦城の東南三淸里の牡丹江の北岸にあつて、周圍四淸

るのである。

公所の人は、私を旅館へと案内してくれた、邦人の旅館ではあるが、これも支那家屋を僑りて、風露を凌ぐだけに設備したものである、福岡辯を操れる若い邦人夫妻、別府温泉にゐたといふ十四五の少娘一人、それが一切を處理してゐる、彼の英國人は、私より先に既にその一室を領してゐた、煤け黄ばんだ破障子を堺にして、私の部屋はその隣である、廣さは疊四枚ぐらゐ、支那流の炕の上に毛氈を敷き、駱菊の模樣ある薄い座蒲團、一閑張の飾臺、火奴のやうな煤の垂れてゐる天井から、丸心の洋燈が淡く私の影法師を板壁にうつしてゐた、主人夫妻と少女とは、私が千里を遠しとせずしてこの僻遠の地に來たといふので、忠めやかに私を視てくれた、二た坪ばかりの厨房を過ぎて風呂場へ行くと、小さな鐵砲風呂が沸いてゐる、終日の塵垢を洗つて座に返へると、珍らしや西洋皿の上に盛られた白い刺身、この魚はと少女に尋ねると、今日牡丹江で釣つて來た鮒だといふ、やがて一陶の麒麟ビールに、鮒のフライ、その鮒は頭が小さく、額のところに瘤のある、肥え太つて私の掌ほどあるものであつた、鮒の刺身は私の好物、上方へ行つた時は、よく石山の柳屋で、琵琶湖のものを賞味したものだが、こんな支那の邊境で、思ひがけなくその

好物を下物にして、ビールの滿を引いたのである、床の炕は、早や温められて、坐つてゐる裀の下から、温氣は春のやうに蒸して來る、やがて鮒の味噌汁に白い熱飯、鮒責めにはやゝ閉口したが、家の人のまめやか振りに心地よく飯を終れば、煎餅蒲團に薄い小夜具、身體は土の床で痛くはあれ、炕の温氣に納々と足を伸して、豆をつめた括枕に親しめば、障子一重の隣の室の英國人の猛鼾雷をとゞろかせて、眠られず、洋燈の心の油を吸ふ音も、慈々として竈馬の啼くかと聞きなされ、町の彼方で、夜警の兵士の折り〳〵放つ空鐵砲も聞えわたつて、鄕愁やうやく胸に攅まり、曉の色縹く壁の隙より訪づるゝ頃まで、終に眠ることを得なかつた。

吉敦鐵道は、吉林省の首府吉林省城を基點として、東方敦化に至る二百十五吉羅の間に敷かれたもので、明治四十年日淸條約、同四十三年の日淸協約に由り、我國が投資優先權を得て寺內內閣時代に、西原借款の名で既に一千萬圓の前渡してある吉會鐵道の一部であるが、大正十五年の春、北京の交通部では、我が滿鐵會社に對し、請負の形式で敷設工事一切を委託、滿鐵は審さに調査測量の結果、全線を四工務段十五工區に分ち、技師長以下の役員を派遣してその工を督し、同年六月一日起工式を擧げ、昭和三年十月をもつて、全線の開通を見るに至つたのである、沿線

には肥沃な農耕地、無盡藏の大森林、大小幾多の各種鑛山等があつて、所謂滿洲の寶庫と稱せらるゝ吉林省の中樞地域を開發するに至大な貢献をなすものと期待されてゐる、更に近き將來に於いて、敦化より東南に延長されて既設の天圖鐵道と連絡し、所謂吉會鐵道を完成するに至らば、實に我が日本と歐洲との連絡する最捷徑路となるであらう。

牡丹江畔

一、清室發祥の地俄朶里城

翌る朝、私は公所の人に導かれて敦化の城内を散歩した、城市は方六町の塼城の中にあつて、支那の邊境にある寂しい町である、井字形に區劃された中心街頭に立つと、西東北南の四門は洞然として隱るゝところなく見通うされる、城門は、高さ一丈五尺ばかり、上に屋を置いてあるが極めて簡素なものであつた、兩側の市廛も二三階のものは尠なく、低屋軒を連ねて、普通支那町の樣な繁華なさまは見られなかつた、城を出でゝ牡丹江畔を行く、汀には蘆荻生ひ茂り、水は漫々と流れてゐた、濶さ六七十米突はあるらしいが、さゝ濁る水の面に、翠阜影を蘸して、物靜かな景色であつた、江畔にある廣い高粱畠は、元と土城のあつたところと傳へられ、缺けた劍や錆びた鏃が時には農夫の耒鋤に掘り起されるといふことである。

前朝、清の發祥地なる俄朶里城は、阿克敦城の東南三清里の牡丹江の北岸にあつて、周圍四清

里の土基があると傳はつてゐる、その俄朶里城は正にこの地であるといふ歷史家がある、淸の第四世康熙帝勅選の皇輿表には、俄朶里城、興京東千五百里、四至考ふるところなし、本城より京師に至る三千三百里とあり、帝の孫、乾隆帝は俄朶里城を敎化なりといつてゐる、地方の人はこの牡丹江畔の土基の跡を敖東又は阿克敦と稱してゐる、私が、滿洲へ來る前一月、會寧から圖們鐵道の客となつて吉林省の龍井村を訪づれた時、土紳財滿精三氏は、その秘藏の銅器一個を私に割愛した、氏が曾つて敎化の縣令徐彬氏から贈られたものである、双龍の把手をつけた饕餮紋の、壺のやうな器で、正しく神前に酒を盛りて供ふる卣といふものである、徐彬氏は之を牡丹江畔の土中より得たものであるといふ、思ふに今ま私の踏んでゐる土の下から掘り獲たものであらう、私は模樣の古拙で、しかも厚手の鑄物であるより推して、金時代のものであると斷定した、康熙、乾隆の兩帝が、その我が家の發祥を俄朶里城とし、その城を牡丹江の北岸にありとしたならば、愛親覺羅の發祥地は、正しくこゝであるらしく思はれる、龍井村と敎化とは、その距離は邦里三十里に過ぎないのである、冬時、雪橇の往來するころになれば、僅かに半日にして達することを得るのである、滿洲、蒙古、遠くは支那の邊境に汗漫の旅を重ねて後、私は又た、前に三日の遊

蹤を留めた龍井村と相距る僅かに三十里の敎化に來たのである。

俄朶里城趾は、この牡丹江畔にあらずして、實に我が朝鮮咸鏡北道の會寧府であるといふ說をなす人に、內藤湖南博士がある、その說に由ると、朝鮮の李朝太宗の時、斡朶里の首童孟哥帖木兒といふもの、其地の空虛に乘じて會寧に入り居るとは東國輿地勝覽に記するところである、孟哥帖木兒は、淸の肇祖孟穆といふのに符合し、斡朶里は女眞の種名である、孟哥帖木兒は、其後兀狄哈に襲殺され、その弟の凡察と兒の童山が、遼東に竄逃したことは、明と朝鮮の記錄と、共にその事が記してある、俄莫惠の野といふのは、會寧を指して爾か呼れたのである、會寧の土名は、女眞は之を斡木河（オモホ）吾音會（オ、イム、ホイ）ともいひ、太宗の時、斡朶里の首哥帖木兒が、會寧の無主の地となつてゐたので、入り居つたことは明かである、果して然らば淸室發祥地は我が朝鮮の會寧である筈であるといふのである、淸室の肇祖孟哥帖木兒より充善、錫寶齊篇古、都督福滿（興祖直皇帝）覺昌安（景祖翼皇帝）塔克世（顯祖宣皇帝）弩爾哈齊と相傳へて太祖武皇帝となつたのである、私は湖南博士の孟哥帖木兒の淸の肇祖孟穆帖木兒と同一人であるとの說に左袒する。

河岸は一面の青蘆、無數の行々子がその間に亂囀してゐる、遙岸は一帶の垂楊垂柳、夏霞棚引いて、遙かに蒼茫たる海繭、圖們の天際に連なつてゐる、流筏あり、泊舟あり、筏の上では人あり江水を汲んで朝餉の用意すると見えて、炊烟、輕く颺り、その烟の末は數峯の青となる、岸に釣する人も亦た多い、清淺の水に浸した魚籃のうちには、疇昔の夜、私の膳を賑はした掌大の鮒が喚喁してゐる、漁歌、棹唱、まことに閑靜な嫩き夏の朝であつた、私は牡丹江の名を愛する、詩を思ひながら江畔の路を行けば、やがて巨材を山と積んだ鐵道の構內に入つた、半里を距てた敦化驛から、材木を運搬するため、こゝまで軌道が延長されてゐるのである。

二、曳馬善く人語を解す

朝の潮の汀邊の蘆と私語めくあたり、合拖、三拖、四拖、五拖の大きな材木が、早や筏を解かれて清淺の水に横はつてゐる、數名の馬夫は、杏のやうな巨釘を亂れ打つた頑丈な車輪をつけた低い龜木の車毎に、五六頭の馬を駢べ連ねて、三段五段と繋ぎ合せ、一車を牽くに尠なくとも十五六頭、多きは二十七八頭の馬の力で、水中の巨材を陸上に牽き上ぐるのである、先づ大きな掛

矢で巨材に鈎を打ち込み、これに綱をかけて車後に結び、長鞭、宙を截つて、さながら帛を裂くやうな音と共に、何にやら高くさけべば、數段の馬群は脚を揃へ鬣を振つて、一氣にこれを引き上げる、その綱の短かくして、水上の材木に屆かない時などは、馬夫の鞭の振り方で、群馬は一齊に歩調を揃えて後退し、右、左、唯だ馬夫の口號一つにて、素直に群れる馬共が、さながら一本の止り木に群棲する繡眼兒の身を搖り合せてメジロ押しをするごとく、左に右に自由に歩趨するそのさまは、看る人をして驚嘆せしむる、滿人は馬を馴すの天才なりと豫て聞いてはゐるが、私は始めて然りと覺つたのであつた。

三、雷雨のうちに貨車脫線

旅行鞄は、宿の主人が驛まで屆けてくれたので、朝の七時半、私は汽車の客となつて吉林への歸途に就いた、私と旅宿を共にした英人も亦た私と車を同うした、十一時、蛟河驛まで來た時、汽車は動かなくなつた、驛の吏員に筆談で問ひ糺すと、拉法と小姑家との中間の旬子の爲めに、前往の汽闘車貨車が顚覆したのであるといふ、午時になつても停つたまゝ、一時を過ぎても依然

として動かない、晴れた空は、俄かに陰つて、唐紙に墨の滲み行くごとく、雨雲はやがて空に瀰漫して、四野は陰慘として黄昏よりも暗く、朱電雲を擘くかと見れば雷鼓悽まじく鳴り轟き、烈風猛雨を引いて車窓を撲つのであつた、旅宿の主人は、豫め私の爲めに午飯の用意として數箇の掬飯を作つてくれた、私はこれを咬みつゝ一向ら雷雨の歇んで汽車の疾く〳〵動けかしと俟つてゐるのであつた、汽車は四時半に至つて僅かに動き出した、幸にして雷雨も歇んだ、しかしこの時ならぬ猛雨の爲めに、更に線路に故障の箇所を加へたらしい、野水は暴漲して線路の上を亂流してゐる、汽車の過ぐる時、軋々として心地好からぬ響きを發する、汽車は人の歩むよりもまだ遲い、往路には高粱の翠浪、風に披靡する田舍の景趣を美しと看めた私は、そこに平湖の開展せられて、千頃の稻禾さながら荇藻のごとく浮動するを眼のあたりに見たのであつた、漸くにして汽車の顚覆した場所に來た、枕木の流失したのを知らずしてそれに乘りかけたのである、汽關車は無殘にも赤錆びた太肚を露はして、車輪の高く水上に抽き出でゝあるのを見た、蜜柑の皮を滌水に投げたやうに、五彩のきらゝは四邊に浮動してゐる、數十人の苦力達は、鋤に、鍬に水を低地に導かんと叫喚しつゝ働らいてゐる、數町の彼方には、吉林から迎への汽車が待つてゐた、私

達は徒歩連絡することゝなつた、廣軌の車臺は地上から七八尺の上にある、私は飛び降りかけて躊躇した、丈けの高い彼の英國技師は、身軽に先づ飛び降りて、私の手を執つて扶け降ろしてくれた、亂水のうちを渉つて私は辛うじて別車に乗ることを得た、斯くして汽車は又た走り出した、車中の人々は、鷲定まつて始めて眉を開いたのであつた、小姑家の驛に入つて、私は香油蛋糕の一片を買ひ得て僅かに拐腹を醫することを得た、カステーラの事である、支那の鐵道では、車内に酒や煙草や菓子を賣る男がゐて、大きな提籃を肩にしてボギー車の端から端へと徘徊してゐるのである、夕陽、紅酣、山村水廓その間に綺錯す。

夜十時、吉林驛に入る、市廛は皆な戸を卸してゐるが、街燈明るく路を照す、さすがは省城である、驛の前から二頭立ての箱馬車に乗つて、日清旅館に投じ、風呂に入り食事を終つたのは十二時を過ぎてゐた、こゝでも終夜、銃聲を聞く、賊匪を威嚇すべく夜警兵士の空鐵砲を放つのである。

公主嶺の半日

公主嶺には滿鐵の農事試驗場がある。

今から二百餘年の昔、前朝淸の太宗の王女、蒙古科爾沁部の達爾罕王に尙し、帝都から蒙古へ行く途すがら、病を獲てこの地に薨去した、乃ちこゝに葬つて陵と作す、公主嶺の名は之に基くとあるもの是れである。

翠帳香閨のうちに珠とめでられ花といつくしまれた姬君が、胡沙吹く北地の婿かねがり行く途すがら、病にかゝりて寒驛の土となつたことは慘むべきことであるが、實は綠髮やうやく霜を置く春秋五十といふ齡に病死したのであるとすれば、この傳說は情趣の七分を減ずることになる、公主は名を固倫雍穆といひ、奉天北陵の佳城に眠れる太宗文皇帝の女で、世祖章皇帝の姉にあたる人である、天聰三年正月初八日の午時に產まれ、康熙十七年閏三月十八日の未の時に薨じたとすれば、齡は正に五十である、公主嶺にある墓の、東西相隣りて並び立つてゐるところを見ると、公主、先づ死して此處に葬られ、繼いで達爾罕氏亦た死して此處に瘞められたのか、或は先

づ達爾罕氏死し、後れて公主の逝いて此處に葬られたのであらうと思ふ、兩墓、共に高さ五尺餘、灰色の煉瓦で心を包み、漆喰塗りとした上を赤色にて彩られたものであるが、風雨に暴露してゐるため、漆喰は早や既に剝落して、灰色の煉瓦を露はし、傍に兩三株の楡樹と八重葎の茂れるのみである、元來、科爾沁部の達爾罕王は最初清の太祖と干戈を執つて相見えたこともあつたが、一旦その敵すべからざるを覺つて、明の萬曆二十二年の正月に、部下を卒いて降を乞ひ、尋てその女を納れて太祖の妃となし、爾來、互に婚嫁を通じてゐた、清室の結婚政略の上からいへば、彼の王昭君の故事のやうに、假りに公主と名づけて降嫁せしめたものであるかも知れないが、その播遷の旅次に病をもつて逝いたのでないことは明かであり、殊にこの邊は、元と達爾沁部の旗領であつたのである。

公主嶺の農事試驗場は、滿洲の主要產物である大豆、小麥、陸稻、高粱、大麥、燕麥、黍、稗、玉蜀黍、粟豆、綠豆、豌豆、豇豆や、馬鈴薯、向日葵、胡麻、蓖麻、大麻、亞麻、煙草、をはじめ、緬羊、仔羊毛皮、豚、馬を栽培、飼養して、改良種を無償で頒布して大いに生產に資してゐる、在來の農產物は、その耕作法の、尙ほ原始的の方式にのみ據つてゐたものであるが、この農

事試驗場から頒たれた改良種によつて、農民は、その作物に適する土壤、肥料、耕作の方式を覺り、何れも皆なこれに習ひ、純良にして且つ豐穰なる收獲を得て、その恩惠を感謝してゐるといふ、家畜類にあつては、試驗場から頒與される改良種によつて、在來の豚は肥滿し、昔年の馬は長大に、舊時の緬羊は豐滿に、牧家は都べてその慶福に賴つてゐるのである。

この試驗場は、農事に四十町歩、畜產に百六十町歩の地を供してゐる、私は試驗場の主事に導かれて、欣々として榮に向ふ各種の農場を看、更に滿眸の苜蓿、靑うして烟らんとするところ、豚や、羊や牛や馬やがその自然の生活に愉悅するさまを觀た、粟のうち、御穀と種類はその顆粒が大きくして且つ甘い、元と淸室の御料となつたのでこの名がある、又た穀子（クーズ）といふ、滿洲に於ける大豆の一年產額は無量三千二百萬石、その半ばゝ油となり、他は食糧となる、その種類には四粒黃あり、奉天白眉あり、雙梅子あり、小黑臍あり、下二臺がある、高粱の年額も亦た大豆と伯仲の間にある、老鵠坐、黑榕雙心半、黃粘、黑心棒、黑穀蛇眼紅の品種がある、高粱の精白したものは一斗我が七十錢に當る、これを釀した高粱酒は滿蒙の人の最も嗜み好む飲料である、その酒を買ふのを觀るに、數枚の皿を並べて、皿毎に各種の酒を盛り、燐寸の火を點じて

酒を燃やし、仔細に炎の色を看て後價を定むるのであるといふ、試作種目のうちに日向葵がある、日向葵の種子は、露西亞人の嗜好物で、輕く前齒で咬み、巧みに表皮を剝いで食ふ、猶ほ支那人が西瓜の種子を嗜むと同樣であるが、西瓜の種子に較べて更に一種の甜味がある。

蒙古種の緬羊は、善く風土に慣れて體軀は頗る强健であるが、從來肉と毛とを目的とし、毛質に就いては關心を缺いてゐたので、品質不良、量も亦た少なかつたのであるが、毛皮の利用が次第に毛織に進みつゝある今日にありては、粗毛の多くして緬毛の少ない蒙古種は、製絲製布に適しない、そこで在來の種羊にメリノー種を配して、改良し得た緬羊は、毛質は全くメリノー種に同じく、毛量こそ稍や劣れども、猶且つ從來のものに比すれば三倍に達する成績を得、米國から優良なメリノー種を購入して、公主嶺の外に林西縣の黑山屯にも種羊場を設けてその改良種を無償で頒布してゐるといふ、滿蒙にある羊は今ま凡そ二百萬頭、これを盡く改良種と作し終るには尙ほ二十年を要する、成功の曉は東洋に於ける莫大の需要に對して、多大の貢献をなすであらうと思はれる。

豚は肉を食用とし又た肥料を作る爲めに、重要な産物である、農家では每戶に數頭乃至數十頭

を飼養してゐる、滿蒙を通じて、無慮六百萬頭の豚があり、隨つて屠殺さるゝもの三百萬頭に達するといふ、肉の供給を豐富にする上より見るも、他方牛肉の輸出を增加する上より見ても、その豚を改良して、肉質の向上と生體量の增加を計らねばならぬといふ見地から、バークシヤ種を交配して得た改良豚は、生後一箇年にして成熟し、從來の豚より成熟期間に半歲を減ずると共に、生體量一割を增加するの成績を得たといふ、若しこれによつて改良されたなら、成熟期間の短縮によつて產肉約二割、千四百萬貫を增加することを得て、これが爲めに一頭三十二貫の牛約四十萬頭の消費を減少せしめ、從つて這等の肉牛を、今日最も必要とされる內地に向つて輸出し得る豫定であるといふ。

滿畦の苜蓿、昨雨に肥えた濃やかな綠に圍まれた大き厩舍には、近ごろ新たに歐洲から購入した亞刺比亞の駿足が繫かれてあつた、私は良馬の前に立つて、その美しさに看惚れてしまつた、主事は馬の平首を撫でながら、上品な顏ではありませんか、まるで內裏雛のやうな顏をしてゐます、これに較べると內地の馬は、醜婦ですな、お福の面のやうな顏ですなといつた。

青蕪のうちに、灰色の一群團が、右に左に游動し跳躍してゐるのが見えた、締視すれば緬羊群

であつた、緬羊のうちに、カラクールといふものがある、帽子若くは外套の襟として、珍重するアストラカンがそれである、漆よりも黑い澤ある柔毛が渦紋を卷いてゐるこの皮は、實にカラクールのその胎内より地上に墮つるや否や、屠りてこれを製鞣するのである、米國では、母羊から墮胎せしむるといふことである。

私は、公主嶺の試驗場に半日を過ごして後、長春から來た汽車を捉へて、奉天に向つた、車中の客に邦人が多かつた、夜食を食堂で攝つた、四もに聞ゆる鄕音のうちに坐した私は故鄕に歸つたやうな心地がした、一陶の麥酒、三皿の肉魚、私は微醉を帶びて臥榻に身を橫へた。

午後十時、滿鐵と、京奉線の交叉する鐵路を度つた、昨年の前月六日、張作霖氏爆死のところである、車中の人が火事よく\と立ち騷ぐ、望み見れば、奉天市街の方に當つて、萬斛の金沙子を撒きちらしたやうな猛火が夜雲を爛らしつゝ燃えてゐた。

奉天城内の觀光

一、吉順絲房樓上の騁望

奉天の瀋陽館に一夜を過ごした私は、翌日を市内の游目に費した、翠樹、噴泉、瀟洒な廣場や公園を包含する滿鐵附屬地の近代的市街の莊麗さと、商埠地の繁華とを見てから、やがて各國の領事館街を度り、小西邊門を過ぎて支那街を歷、窄まい甕城の入口から小西門の樓門を仰いだ時、私は夙くからその名を聞いてその莊觀を想像してゐた奉天城の、規模の極めて狹隘なるのに一驚を喫したのである。

內城は方形で、その一面が一里半と註せられる、我が九町ばかりである、四面を總べて三十六町、そこに高さ三丈の城壁を繞らし、東方には、小東、大東、南には小南、大南、西に小西、大西、北に小北、大北の八門が開かれ、二條の幹線が四方から通してゐるので、さながら井字の形を成し、市區は九箇に區劃されてゐることになる、南方の一角、巽に當る一廓に、孔子廟のある

ことは、支那一般の城市の通りで、井字の中央の一廓には清室の故宮金鑾殿といふのがある、外城と滿鐵附屬地、高埠地とを合せて戸數は五萬、人口は三十萬と稱してゐるから、內城に棲む人は精々五萬か六萬ぐらゐ、これを北京は除いて他の城市に較べて見ると、山東省の濟南に劣り、江蘇省の南京とは比較にならず、安徽の安慶、江西の九江にも勿論劣り、四川の重慶にも遙かに劣り、成都とも比較にならない、それもその筈、この城は淸の太祖弩爾哈赤が崇德二年、今からざつと二百九十年前、都を遼陽から此處に移して盛京と稱したのだから、その築城は比較的新らしいものである、しかし遼河や渾河を襟帶とした雄大な形勝だけは、帝王の都として耻かしからぬものである、奉天の名の瀋陽は、渾河卽ち瀋水の北にあるからである、四方一帶の平野は渤海時代の瀋州で、奉天城の東にある淸の太祖の寢陵のある福陵は、渤海太宗大祚榮が築いた東牟山であるといふ、その昔唐の太宗が東征の後、安東都護府を此處に置いたといふことだが、唐以前には高勾麗の版圖であり、瀋陽の名は元朝に始まり、明代には瀋陽中衞を置いたといふから、經略の上に必要の地點であつたに相違ない、順治元年、都を北京に遷すに及んで、この地に將軍を置いて、留都又は陪都と稱した、更に同じく十四年、奉天府を設けてから始めて奉天と稱するに

至つたのである、後、滿洲を奉天、吉林、黑龍の三省に分ち、奉天は省行政の首府となつた、一代の梟雄張作霖氏の起るに及んで、東三省を統轄し、北京にまで押し出して大元帥府に盤踞したが、やがて失脚、奉天に歸る途中、不慮の奇禍に死してから、長子張學良代りて父の遺業を繼ぎ、弱冠の身をもつて、內政外交、幾多難關の衝に當つてゐる。

小西門から入つた私は、先づ四平街の繁華なるに驚嘆した、洋館と舊式の家屋とが、參差として並んでゐる市街ではあるが、その雜沓は、滿洲の他の都市に見られないものであつた、こゝにも交通巡警があつて、頻りに車馬の往來を整理してゐるが、その熱鬧は丁度四萬六千日の淺草の仲見世のやうである、私は四つ辻の中央に踏み跨つてゐる鼓樓を潜つて、先づ城內唯一の百貨商店、吉順絲房の五層樓の前で車を停めて、その內に入つて見た、商品には別に變つたものも面白いものもなかつたが、エレベーターで五層樓の頂邊に登り、そこにある喫茶店の床几に凭つて騁望すると、奉天城內は双眸のうちに落ちて、遙かに郊外の丘山、林樾が指點される、一條の路を隔てゝ、南方には黃瓦丹墀の簇がり立つてゐるのが俯瞰される、前淸の故宮、金鑾殿のある一廓である、その南、城壁の蜿蜒として走るあたりに、三層樓の白堊館が、四方を壓して高く立つて

ゐる、張學良氏の棲んでゐる將軍府である、この日は朝から烈風で、風沙は靄ぶるやうに捲いてゐた、その濛々として起つ黃塵の外に、遠く綠青色の高塔が見える、北小門邊の白塔であらう、大東門、大南門、唯だ風沙のうちに、蜃氣樓のやうに或は隱れ或は現はれるのが見える、若し私が例のガラ金一流の聲を張り揚げて、詩でも吟じたなら、恐らくは滿城の人を驚かすであらうと思はれるほど、奉天城は窄いものであつた。

二、博物館となつた崇政殿

私は四庫全書が秘藏されてある文溯閣の四つ辻を折れて、西華門を潜つた、こゝまで來ると奉天の本色が出て來る、並ぶ家宅は何れも支那古來の建築で、往來の人も少なく、極めて閑靜典雅な趣きがある、私は車を棄てゝ故宮の東轅門を入つた、先年から開放されて、博物館となつてゐるのである、黃瓦、紅壁、藻繪の楹桷、昔ながらの輪奐は、早や全く荒廢してゐるが、その規模は、朝鮮の昌慶宮や景福宮と酷似したものである、正門を入つて甃石の路を進むと鳳凰樓の三層樓がある、その樓門の中に乾隆十九年阿將軍献ずるところの黑熊の大皮二枚が陳列されてある、

正面は崇政殿、三道の石階、その中央の石階には龍文の彫刻があり、勾欄に獅子を配してあることは例のごとく、殿内には正面に金龍の寶座が飾られ、乾隆帝御筆の匾額、同じ楹聯、屏風などがある、左右の列架には、鎛鐘や特磬などの祭具や、天子の乘る鑾車の架座や、鹵簿に用ゐた大駕の五色花蓋や、朱緞で作られた鑾鳳扇や、信の一字を金絲で繡つた紅緞製の信旛や、朱旄を貫いた金節や、竹を攅め朱を塗り金龍を繪いた吾杖や戯竹や、龍口、刄を啣んだ金柄の大戟や、木を雕つて作つた鉞や、五色の金小旗杆や、纛旗杆や、紅旗、大旗、黄絨を編み雜寶を飾つた仗馬鞍などの、清室鹵簿に用ゐたものが陳列されてあつた、崇政殿の前には、右に燈籠、左に日時計がある。

三、初祖の甲に日本の冑

崇政殿を出で東廂に移る、こゝに永福宮にあつたといふ各種の樂器や、宋、明の天子や皇后の畫像がある、樂器のうちには箜篌や、畫角や銅角や大杖鼓、箏、琴、瑟、排簫、雲鑼、奚琴、管笛、三絃、三絃は檀を切つてこれを作り修柄にして方槽、その角を刓る、冐すに虺皮を以てす、

燕饗用と記してある、我が三絃とその製は同じである、琵琶、拍板、笙、金、銅鼓、大銅角、蒙古角、棕毬など、主として宮廷燕樂の具である、更に第二の東廂に入ると、宋歷代の天子や皇后の畫像數十幀が懸け聯ねられてある、彼の金軍に擒へられて胡地に幽死した文雅風流の徽宗帝と同じく皇后の畫像もある、輿圖の銅版も陳列されてあつた、乾隆年間、敕して繪かしめた皇朝輿地圖の原版もある、西廂には元代天子や皇后の畫像が掛けられてある、西廂第二舍、こゝには清室の初祖が擐たといふ鎖子甲や、鐵盔がある、鎖子甲は鐵で作られ、五環相互に組み合せてあるので、その一環に矢を受けても、諸環が拱護してゐる爲めに、鏃が入らないと記されてある、いかさま精鐵の上に金を鍍した、大將軍の戰具としては威儀あるものであると思ふが、私はその鎖子甲の上に置かれた鐵盔を一見して、思はずアッと驚き且つ呆れざるを得なかつた、一枚の精鐵を鍛錬して作つたこの盔こそは、實に清初の太祖や太宗御用のものであると目錄には書いてあるが、正しくそれが日本製の兜であつた、しかも大將の頭に戴く龍頭の兜でなくて、平侍の被つた兜であるに至つては、驚き且つ呆れざるを得ないのである、思ふにその舊物は、疾く旣に何人かの竊み去るところとなり、何處からかこの兜を求め來り、糊塗して置いたものであらう、私は

横着千萬な支那人の心境を憎むの情に堪えない、この外、鐵製の馬鐙、紅衣砲がある、清初の製で紅衣大將軍と名づけられてある、去つて西廂第三舍に入ると、清の太祖や、康熙、乾隆や道光の馬上の畫像がある、別に乾隆の御容を繪いた畫像もある、その顏は寫生だが、衣服は彩絲で刺繡されてあつた、更に又た雍正御容茶を賜ふの圖と、乾隆御容春原に駿を閱するの圖の長い卷物が披展されてあつた、前に看た諸畫像は、何れも尋常一様のものであつたが、この二卷の繪畫だけは、構圖といひ着色といひ、殿閣、林苑、人物の布置や、駿馬の或は趨り、或は騁し、或は臥し、或は行くその姿態などは、何人の手に成つたものかは知らず、誠に精妙なものであると思つた。

四、香妃の畫像

最後に、乾隆の寵姫、香妃の甲を擐し寶冠を戴いた畫像が懸けてあつた、香妃は土耳古の出、容姿の艷婉、身體から自然に妙香を發すといふをもて、香妃の名を得たと傳はつてゐる、齡若うして父に伴はれて西域に來り、天成の麗質自から捨てがたく、一朝選ばれて天子の後宮に入つた

ものである、その郷愁を懷ける妃の爲めに、帝は宮苑の中に土耳古風の樓臺を作り、例の土耳古風呂の浴殿をさへ作つて之を慰めたといふ、歐米の人には狐臭が多い、香妃の身から妙香を發するといふことは、或はその狐臭の一種ではなからうかと思ふ、輕淡な狐臭は、我國でも意氣なものと稱せられてゐる、ことに閨房のうちに於いて、悅樂を促がし進めるものであると聞いてゐる、古稀の天子も亦た蠱惑的臭氣に魅せられたものであらう。

五、郞世寧の乾隆閲駿の圖卷

私は第三廂の前で、一冊の陳列器目錄を購ひ得た、披いて讀むと、乾隆御容春原駿を閲する圖卷は、長三丈、卷を捲けば高さ尺五、郞世寧、唐岱の合作と記してあつた、如何さま妙畫であることが分つた、世寧は伊太利の人で、ヨセフ、カスチリョーネといひ、支那に歸化して郞世寧と稱し、繪畫に巧みであつたとは人の知るところである、雍正御容茶を賜ふの圖卷は長さ二丈餘、卷を卷けば高さ二尺、朝賀、茶を賜ふの典禮を繪いたもので、紅頂花翎、群臣の跪拜するもの約千人の大群を描き、しかもその面貌は一々異つてゐると記してあつた、これも郞世寧の繪くとこ

ろ、補景は王石谷諸大家の筆に成るといふ、康熙御容南巡の圖卷に至つては、長さは實に十丈、卷けば四尺に餘り、北京の永定門から大淸門に至る南巡回蹕の鹵簿を繪いたもので、樓閣宮殿皆な全景を繪き、鑾輿や旂仗や、いづれもその實物を寫生して、舊制を考察する唯一の參考物である、その前門大街の景物繁華は、當時の朝市の盛大であつたことが想像される、當時の巨匠王石谷その他の大家が畫院に於いて繪いたものであるといふ。

私は更に別殿に於いて御璽の各類を看ることを得た、廣運之寶と篆刻された靑玉の御璽、順治御筆とある靑玉御璽、龍首、氣を吐いて雲を成す康熙宸翰の牙印、碧玉、双龍紐、方五寸もある乾隆帝の古稀天子寶、雲龍靈動して活けるがごとき八徵耄念之寶の壽山石印、孝恭仁后玉寶の滿漢合篆の碧玉印、外に明代の舊璽と稱せらるゝ體和殿鑑賞の石印があつた。

私は中庭に立つて四方を回看した、深殿杳として連つてゐる、崇政殿は皇帝が政を聽いたところ、飛龍、翔鳳の二閣は文武官の溜所、日華樓は皇子、霞綺樓は皇女達の勸學のところである、師善齋、協中齋は厨房と食堂で、永福、行慶、關睢、麟趾の四宮は皇后、皇子、皇女の居殿である、淸寧宮は皇帝の便殿で、淸室第二世の文皇帝の崩じたところである。

博物館を出で、大南門を過ぎて小河沿を觀た、池塘の末は流れて渾河に注いでゐる、池畔には花樹あり、臺樹あり、酒家と茶亭と相接して市民の遊息の場である、去つて城壁の外を傳ふて、昔の士族屋敷らしい靜かな街を通つた、そこには楊宇霆や、呉俊陞の邸宅があつた、その名聲は聞えてゐるが、屋敷は極めて狹少なもので、尋常一樣の鄉紳の住宅と大差はなかつた、露地のやうな狹い陋巷の入口で車を捨てゝ、數ある骨董店を素見して、小南門から復た車に上つて瀋陽館へ還つた。

此夕、私は佐原篤介氏等の諸友に迎へられて交通飯店に愉快な晩餐の饗を受けた、更に八田厚志氏の邸に詣つて、その秘藏の寳器を觀ることを得た、氏は尤も刀劍の鑑識に長じてゐる、許多の刀劍、許多の裝劍具、そのうちで私は松平不昧公が燕居の時に佩用したといふ小刀の風雅なるに心醉した、古銅器にも亦た珍品が多い、精巧な天地佛もあつた。

六、奉天大會戰の回顧

夜は靜かに更けて行つた、夢覺めて燈下に奉天大會戰の當時を憶ふ。

奉天の大會戰は、實に乾坤一擲の大快戰であつた、その戰線は、東、撫順馬群丹から西は黑溝臺、遼河に至る實に二十餘里の長きに亘り、渾河を前にして奉天東西の線に據れる露軍の三十二萬に對し、我が軍は實に二十五萬であつた、明治三十八年の二月下旬、沙河の冬營にあつた我軍は、大山總司令官の總攻擊命令を受けて、川村大將の率ゆる鴨綠江軍、黑木大將の率ゆる第一軍、野津大將の率ゆる第四軍、奥大將の率ゆる第二軍、乃木大將の率ゆる第三軍は二月二十六日をもつて前進し、奉天を包圍して一擧に露軍を殲滅せんとした、我軍の策戰はその圖に當つて、先づ鴨綠江軍の進軍によりて敵を東方に牽制し、その間に乘じて、旅順より晝夜兼行して來た乃木第三軍の精銳を奉天西方なる露軍の側背部に迂廻せしめ、しかる後、黑木、野津、奥軍の正面攻擊となつたのである、露軍總司令官クロパトキン大將は、乃木軍進出に對する判斷を誤まり、鴨綠江軍の東方進出を乃木軍或は滿洲軍の主力と思ひて、兵團の配置とその他の機宜の指揮に大いなる錯誤があつたのである。

越へて三月九日は、南風吹き荒んで天地晦冥、咫尺を辨ぜざる日であつた、これぞ伊勢の神風なりと各軍は踴躍して、この大風沙に乘じ第一、第四、第二の三軍は猛烈なる進軍を開始して渾

河の左岸に押し寄せ、氷上渡河を決行したのである、野津第四軍は、午後八時先づ渡河して翌十日の拂曉には、奉天城の東郊を北進し、黑木軍亦た渾河を渡つて天柱山の松林より右へ高地線を占領し、西方よりする乃木軍の攻擊進展を俟つて露軍の退路に迫つた、乃木軍は三月八日以來再三旋回運動を行ひて露軍の右側背に迫り、九日は風沙のうちに進擊し、十日、愈々鐵嶺街道に迫り露軍の退路を斷たんとした、第二軍奧大將の率ゆる精銳は、第四軍の左に連り現在の鐵道線路並びにその西方の地區より敵正面に迫つたが、露軍は必死に防戰した、斯くて十日の拂曉、友軍の戰況發展と共に、奮戰して敵を驅逐しつゝ渾河を渡り奉天城下に肉薄し、我立見旅團に屬する山崎中佐の後備步兵第五十一聯隊は午後二時二十分に至り、遂に奉天停車場を占領し、更に西門より北門に進み、奉天城頭旭日旗高く揚りて占領第一の名譽を得、次いで本隊は南門を突破して城內に進入した。

斯くて囊中の鼠の如く包圍された露軍は、その主力辛うじて鐵嶺方面に退却することを得たが、後衛の二軍團は、十一日、數萬の兵を擁しながら、終に白旗を揭げて降伏したのである、この大會戰に於いて、我軍の死傷は將校以下七萬餘人、露軍は九萬人に達し、奉天城の四方數里の

地は全く日露戰士の碧血をもて彩られたのである、爾來、春風秋雨二十幾年、當時その大山總司令官帷幕諸將、並びに諸軍の奉天入城式行列の、如何に莊重にして嚴粛であつたことを想ふと、私は心の躍り動くに勝えない。

高麗山城に登る

夜、遲く奉天驛から寢臺車に搭して、安奉線を走り、曉七時、高麗門驛に降りて、驛長の家を叩いた。

昔の高麗城の遺跡を討尋する爲である、驛長渡邊さんは、滿洲日報が滿洲に於ける名勝の投票を募集した時、高麗山城の奇勝を安奉線中第一のものとなし、その幽光を天下に發揚すべく努めた人である。

驛長の家では、時ならぬ剝啄に怪しみて扃を啓き、思ひ設けざる遠來の珍客に驚喜して、炭を熾し茶を煎じ、暖かき味噌汁、淺草海苔、卵燒などにて熱飯を侑めた、私は快よくその厚意を受けた後、助役と支那人驛夫三人を伴ふて、山城さして出發した、當面の山は鳳凰山である、石骨稜々たる群峯は、さながら寒劍の叢がり立つたやうである、私は竊かにその異趣ある山の姿に心を寄せた。

高麗門は、一個の寒驛に過ぎなかつた、驛舍から一道の義州路を挾んで、一軒の支那宿屋と數

軒の商家と、二三十戸の農家とが、蕭條たる一部落をなしてゐた、斯る寂しい驛ではあるが、今まに傳ふる石碑に依れば、この地は古來大孤山及び九連城方面より京師に通ずる本道の集點に當つてゐるので、淸の世になつて、驛の西北約五町のところに大門を設け、門官を置き、朝鮮よりの進貢物を査閱し、兼ねて總ての輸入品を檢査し徵稅してゐたのである、當時、この地は釣魚臺の名に呼ばれてゐたが、この門のあつた以來、何時しか高麗門と稱するに至つたのであるといふ、爾來支那各地の商民相踵ぎて來り、毎月、日を期して朝鮮との互市場を開き、一時は東邊に於ける貿易の中心地となり、市街は當時の營口にも勝りて殷盛なる時代もあつたが、光緖八年、門官衙門を九連城に移したので俄に衰微し、兩大戰後、安東、奉天の交通がやうやく繁くなつて來た爲め、やゝ復活の曙光を見るに至つたといふ、その營口にも勝つて賑盛した時の遺物としては、高麗門驛から靑峯山に向つて行く人家の右側に娘々廟、九聖祠、財神廟があり、驛の北には、又た關帝廟がある、その商民の群居して殷賑を致したのは、恐らくは咸豐前後の事であらう、その廟宇は今やいたく荒廢して、中には小學校の教舍となつてゐるのもある。

村を出てから足指は漸く仰ぐ、沙川を涉る、沙肥え水は瘦せてゐた、左には鳳凰山の奇峯、眉

を壓して峙ち、右には小鳳凰山がある、兩山さながら大環の合はざるさまに、一郭の村を抱き、才かに一車を通ずるに足るほどの路を開いてゐる、その路の隘口に、巨石の半ば土に埋もれて横つてゐるのがある、石の上に大きな孔が穿たれてあるところから見ると、蓋し門の礎石であらう、居民は多く煙草を栽えてゐた、寒冷紗の幕を張つてその苗圃の上を掩ふてあるのは、風沙を防ぐのである、農家の周圍には、石を六七尺も積み上げて墻壁を作つてゐる、さながら堡壘のやうである、何處よりこの石を運び來たりしかと問へば、山に行きて、その山城の石を取り來つたものであるといふ、こゝは高麗山城の南門のあつたところである、門趾の隘路を入ると、まことに壺中の天地である、處々に農家の草屋根が見えて、鷄犬の聲が聞えてゐた、山に包まれて嚢のやうなこの土地には、十萬の兵を容れて餘りありと故い書物に記してあることが肯かれる、鶻鼓鳥が啼く、老鶯が啼く、野薔薇の花、螢草の花も多い、居民は多く柞蠶を作つてゐる、機杼の音、遠近に聞えてゐるのは、村の乙女等がその絲を布に織つてゐるのであらう、丘には柏の木が多く茂つてゐる、柞蠶はこの木に宿り、この葉を食べて繭となるのである。

路窮まつて攢雲巖がある、高さ三丈ばかりの一大岩塊である、唐の薛仁貴が高麗を征伐した時、

その將軍温沙門と熊山に戰つて善く射る者を石城に擒にしたと史書に記された、その仁貴がこの岩の上に立つて戰士を指揮した處であると傳はる、石の上に大人の跡があるといふ、見れば石上に凹處がある、土民は薛仁貴の箕踞して軍を指揮した時に印した兩脚、睾丸、左手の痕だといふ、石城とはこの高麗山城の事である、石には攅雲巖の三大字が彫つてある、路はこれより山に入つて、その峻嶮は言語に絕した、所謂高麗山城の石壁は、谷を度り嶺を絕ちて蜒蜿としてつゞいてゐる、高さは三丈餘、廣さは六尺ばかり、土を運び石を搬して遠く山谷に溯りて、築き成した當時には、定めて千萬人の力を役したことであらうと思はれて、私は驚嘆した。

私は眺勝臺なる絕壁の上に立つた、鳳凰城は近く脚下にあつて、さながら几案の盆景を見るやうである、私は頻りに渴を覺えた、支那人驛夫は草萊を押し分けてそこに一泓の泉を索め得て私を導いた、掬へば十指もしびるゝばかり、寒冽、脾肝に徹するを覺えた、驛夫は石を撥して淺沙の中を捜つた、小さな蝦がゐた、捉へてこれを食ふ、山鰕といふのである。

私は谷を斷つて峙てる城壁の上を度つて、摩雲嶺から仙人峯へと上つた、峯は披麻皴を疊み、石は斧劈の皺を成し、根を露はすの古樹、氈を布ける老苔、雲ありて洩々として脚下の石から湧

き出でゝ浮游するなど、誠に人迢かに世の遠き想ひがあつた、やがて鈴蘭平に入つた、廣さ五六町、瀰望皆な鈴蘭の花である、私は香世界のうちを過ぎて、終に最上峯なる杜鵑越の絶壁の上に立つた、峭壁直下數十丈、俯し瞰て氣魄の動くを覺えた。

私はその頂邊の草を籍いて、前日奉天から用意して來た行厨を開いて、助役と驛夫に頒ち與へて午餐をしたゝめた。

昨夜を寢臺車に過したため、頗る疲憊を感じてゐた私は、平夷な歸路を望んだが、この數十丈の峭壁を降る外には、再び往路の險難を踏破しなければならないのであつた、私は勇を鼓して峭壁を下つた、杜鵑越の嶮は鴨越に十倍してゐる、木を攫み、岩を抱き、魚貫し、蝸附し、狙攀して、辛うじて峭壁の半ばまで降つて來た私は、甕の如く裂けた危崕の上に身を竦めて蹰躇した、矯捷なる驛夫は先づ飛び降りて、私の脚を肩に戴せて徐かに苔の岩を滑べり降りた、一尺、二尺、私は壁虎のごとく岩を抱いて僅かに降ることを得た、崖の下には又た長け高い山菅が生ひ茂つてゐる、先導して排け行く驛夫等の、唯だ山菅の披靡するを見て人を見ない、心細くも辿り〳〵て、やがて民家のあるところへ出た。

驛長のいふ如く、高麗山城は安奉道中の一名區であるには違ひない、惜むらくはその路や甚だ嶮しい、平生濟渉の具に富んでゐると誇る私でも、壯健な驛夫の扶けを得なかつたなら、恐らくは中途で愛を割いて踵を回したであらうと思ふ。

遼東志に、遼陽城の東二百六十里、卽ち今の鳳凰山堡なり、四面石崖峭壁、東北二門あり、城は山に隨ひて舖砌し、十萬の衆を容るべし、唐の太宗此に駐蹕す、とあるに見れば、明代にはこの山城を鳳凰山堡と稱したといふことが分る、又た盛京通志には、開州、卽ち今の鳳凰城にて本は濊貊の地なり、東京に屬し、高麗では慶州である、渤海の時、東京龍原府となし、慶、鹽、穆、賀の四州の事を都督す、石を疊んで城となす、周圍二十里、とあるのを見れば、昔は開州とも呼んだと見える、私は、峯巒の奇趣を看たよりも、昔から名高かつた山城を、靴の底の摩敝するまで踏破し得たことを愉快とする。

往復三邦里の山路を、八時間で踏破した私は、跛をひきつゝ辛くも驛に辿りつき、驛長と語るも少時、偶ま驛に停つた東行の汽車に搭じて、桔梗の花とばかり紫濃かなる五龍山を望みつゝ、その山の後なる五龍背驛を下り、暮れ殘る水樹の邊、黃に咲く燕子花の中を貫く逕を過ぎて、そ

の温泉旅館に詩嚢を卸し、快浴一番、月を迎へて風前の涼篁に麥酒の滿を引き、心神のはじめて蘇するを覺えたのであつた。」

鴨綠江畔の統軍亭

日程やうやくちゞまりて忙しい旅となつたのである、五龍背温泉に一夜を過した私は、朝早く飯を終へて、箸を擱く手に筆にとりて、色紙短冊の幾枚を塗鴉ノ乀の墨の痕を留めて主人に與へ、驛から東行の汽車に乘つて安東縣の驛に入り、ホテルに詩囊を置いて後、先づ國境の鐵橋へと自動車を走らせた。

漫々たる鴨綠の流を絶つて、架け渡した長さ九町の國境橋は、午前と午後との兩度を限つて、中央の橋桁は廻轉し、帆を卸ろさず檣をも倒さずして船の往來に便してゐる、上游より流し來たる大筏小筏は皆なこの河の滸に屯在して、町はこの爲めに賑ふのである、橋の中央は汽車路、左右は步道と車道とを兼ねた路で、幅は九尺と註せられ、自動車の行く時は、徒步の人は肩を竦めてその過ぎ去を俟たねばならぬほどに窄い、右岸の支那人は淺葱の綿服、左岸の朝鮮人は白の金巾服、白と淺葱が入り交りて、橋上の往來は織るがごとし、私の自動車は橋を渡つて新義州に入り、白楊の並木の間の、砥よりも夷らけく矢より直ぐな街道を、やがて左に折れて鴨綠の左岸に

沿ひ、義州の統軍亭さして行くのである、今日は舊暦の五月五日とて、朝鮮の子女は、紅、黄、紫、いろさまざまの衣裳をつけて盛粧し、胸紐高く結んだのが、新衣を纏ふ男どもと打ち連れて、統軍亭のある山の公園へと行く、そこには野天芝居があり、見世物もあり、くさぐさの露店も出でゝ甚だ賑やかであつた、道に傍ふ民家の籬のうちで、笑ひさゞめく聲がするので窺へば、高い木の枝に太綱を投げ掛けて鞦韆を作り、黄髪の老婆が紅い布を髪にかけた少女と交り、小兒に還つたやうに若やぎて、その鞦韆に乘り、薫風に裳を飜へして空外に飄揺して遊ぶのであつた、更に又た、木の株の上に長い板を横に架し、その兩端に立ちながら、互に身を跳らせて遊ぶ高跳の戯をなすものもある、鞦韆は内地では、童男少女の遊戯のやうに思はれてゐるが、朝鮮では成男でも、成女でも、鬢髪霜を置く翁媼まで、皆な一様にこの遊戯を樂むのである。

統軍亭は、鵬の鳥の翼を張つたやうに、高丘の上に立つてゐる、前は鴨緑の大江、九連城、鳳凰山は指顧の中にある、征清の役、我が第一軍が敵前渡河を敢行したのはこゝである、征露の役の時に、黒木軍が氷上を渡渉して蛤蟆塘の敵を撃攘したのもこゝである、共に敵地に於ける劈頭第一の快勝を獲た愛でたきところはこの義州の統軍亭である、亭の楣間には、山縣、大山、野津、

を深めながら、日本文の大體は漢字で、動詞が下についてゐるに過ぎない、その意味だけは善く解ると答へたのであつた。支那の學生は、日本文を讀むに斯る便宜があることを私は思つた。
鐵嶺驛には、滿鐵所長の藻刈氏が箱馬車で出迎へてくれた、私はその馬車に同乘して、土地の富豪權太親吉氏を訪づれた、家屋の外觀は支那風だが、內部は總べて日本式で、二間の床の間には明晝らしい樓閣山水の畫幅を挂け、古銅尊式の花瓶には、その葉が松の葉に似て尖青に、その花が車百合で蕋絲長く出てゐるのを挿してある、白磁の香猊より立つ烟は絹絲のやうに何來の風に靡き亂れて低迷する、欞子窓には青簾を垂れて、高麗緣の青疊廣やかに纖塵をも留めずに掃き淸められ、朱壇の案に赤豆革の夏褥を配したる心憎いほど瀟洒たるその部屋の有樣に、私は我が鄕國に歸つたやうな心地になつた、一碗の玉露を啜つて、主翁と款晤これを久うした、花瓶に挿されたその花は、朝鮮の北部からこの邊の山に生えてゐる松葉百合といふ花で、內地に移し栽えたことはあるが、皆な成育しなかつたといふことである。
先づ李成梁の看花樓を看に行く、看花樓は市の東端、看花樓街の商家の構內にある、泥濘、車輻を沒するほどの惡路をたどつて、陋巷のうちを過ぎり、やがてその門に詣つた、李成梁は鐵嶺

衞の人、明の萬曆年中に寧遠伯に封せられた、始めは鐵嶺の總兵となり、王杲が裨將裴承祖を誘殺するに及びて、督撫の張學顏と共に鼓行して進み、勝に乘じて直ちに紅方砦を搗いて牲畜を獲ること算なし、萬曆十年、大將軍の印を挂けて彝古を鎭すとある、成梁は獨り滿洲に於いて戰功を建てたのみでなく、曾つては出でゝ西域を征し、伊犂を擊つて還つたこともある、豐太閤征韓の役に、明の總大將として朝鮮に來り、碧蹄館の會戰に一敗地に塗れた彼の李如松は、この成梁の長子で、李如梅といふのも亦た成梁の子である。

二、萬曆時代に西洋館

李成梁の故宅看花樓は、その名から推して支那樣式の建築であるべく想はれたが、これを觀るに及びて、純然たる今の洋風の家なるに一驚した、商家の門を入つて、その前庭から低い土墻を過ぎた隣地の一郭に、黯青色の煉瓦作の二階建が、看花樓であつた、高さ二丈五尺もあるべく、横は五間もあるべし、南に向いて建てられ、二階には前面に長方形の三箇の窓あり、一間ばかりの入口、上部が穹窿形をなすさま、尋常一樣の洋館と露違ふところなく、入口の半分は、埋もれ

黒木各大將の紀念額が懸けてあつた。

私は車を回して再び鴨綠江を度り、安東縣に入り、鎭江山に登つた、太神宮の御社がある、茂林薈蓊として眺望も亦た快濶であつた、公所の井上信翁氏を社宅に訪ひ、秘藏の古畫、新畫及び銅器、陶器の骨董を觀た、百八顆の古銅丸を集めて念珠としたもの、古色蒼潤、人をして覺えず垂涎三尺たらしめた、但しその念珠の珠であるか否かは、今遽かに判斷することは難いと思はれた、壁には露西亞の名家の畫を多く懸けてあつた、レキン氏の裸婦、これは水彩畫である、クレーブエル氏の深林、ボゴリーホフ氏の港、共に油繪である、シラジミル、マコウスキ氏の人物、この畫家は父と二人の子と共に皆な名聲はあるが、この繪は中に就いて尤も著聞した長子の畫くところであるといふ。

夜、本場の鴨綠江節を聽く。

李成梁の看花樓

一、鐵嶺の一日一夜

翌る日は、朝早く安東發の急行列車に搭じ、三百四十八哩を走つて、鐵嶺驛に降りたのが午後の三時、奉天驛を通過したのがこれで四度目、奉天驛から綾純子の長衫をつけた富家の子らしい若い學生が乘り込んで、私の前の榻に腰をかけた、蒼く黃いろい顏の筋肉が弛緩して、如何にも活氣が乏しいに拘はらず、眼睛には異彩があつて、人を見つめたその眼光には、剃刀の刄のやうな悽味があつた、私はこの人を阿片の癮者であると猜した、若いこの學生は、懶うげに身を榻上に橫へて、手にせる洋綴の本を讀んでゐた、覘いて見ると日本文の考古學に關する書物であつた、私は先づ邦語で、貴下は日本語を話しますかと訊ねた、學生は悽い眼で私を凝視してゐたが、手を揮つて日本語を知らないといふ意味を示した、私は、貴下の讀んでゐるのは日本文ではないか、日本語を知らないで如何にして日本文を讀み得らるゝかと筆談で問ふた、學生は頰の皺

を深めながら、日本文の大體は漢字で、動詞が下についてゐるに過ぎない、その意味だけは善く解ると答へたのであつた。支那の學生は、日本文を讀むに斯る便宜があることを私は思つた。

鐵嶺驛には、滿鐵所長の藻刈氏が箱馬車で出迎へてくれた、私はその馬車に同乘して、土地の富豪權太親吉氏を訪づれた、家屋の外觀は支那風だが、內部は總べて日本式で、二間の床の間には明畫らしい樓閣山水の畫幅を挂け、古銅尊式の花瓶には、その葉が松の葉に似て尖靑に、その花が車百合で蕊絲長く出てゐるのを挿してある、白磁の香猊より立つ烟は絹絲のやうに何來の風に靡き亂れて低迷する、櫺子窓には靑簾を垂れて、高麗緣の靑疊廣やかに纎塵をも留めずに掃き淸められ、朱壇の案に赤豆革の夏袴を配したる心憎いほど瀟洒たるその部屋の有樣に、私は我が鄉國に歸つたやうな心地になつた、一碗の玉露を啜つて、主翁と款晤これを久うした、花瓶に挿されたその花は、朝鮮の北部からこの邊の山に生えてゐる松葉百合といふ花で、內地に移し栽えたことはあるが、皆な成育しなかつたといふことである。

先づ李成梁の看花樓を看に行く、看花樓は市の東端、看花樓街の商家の構內にある、泥濘、車輻を沒するほどの惡路をたどつて、陋巷のうちを過ぎり、やがてその門に詣つた、李成梁は鐵嶺

衞の人、明の萬曆年中に寧遠伯に封せられた、始めは鐵嶺の總兵となり、王杲が裨將裴承祖を誘殺するに及びて、督撫の張學顏と共に鼓行して進み、勝に乘じて直ちに紅方砦を擣いて牲畜を獲ること算なし、萬曆十年、大將軍の印を挂けて彝古を鎭すとある、成梁は獨り滿洲に於いて戰功を建てたのみでなく、曾つては出でゝ西域を征し、伊犁を擊つて還つたこともある、豐太閤征韓の役に、明の總大將として朝鮮に來り、碧蹄館の會戰に一敗地に塗れた彼の李如松は、この成梁の長子で、李如梅といふのも亦た成梁の子である。

二、萬曆時代に西洋館

李成梁の故宅看花樓は、その名から推して支那樣式の建築であるべく想はれたが、これを觀るに及びて、純然たる今の洋風の家なるに一驚した、商家の門を入つて、その前庭から低い土墻を過ぎた隣地の一郭に、黯青色の煉瓦作の二階建が、看花樓であつた、高さ二丈五尺もあるべく、橫は五間もあるべし、南に向いて建てられ、二階には前面に長方形の三箇の窓あり、一間ばかりの入口、上部が穹窿形をなすさま、尋常一樣の洋館と露違ふところなく、入口の半分は、埋もれ

て地中にあり、地形工事の惡いために陷沒したるにはあらずして、久しく廢宅となれる爲め、棄き捨てられた塵土に埋められたのであらう。入口の左右にも二個の窓があつたらしいが、これも土中に隱れてゐた、屋根は全く無く、入口から入つて見ると、四壁矗々として立ちて、直ちに碧落を仰ぐのである、その壁土の赭くなつてゐるところから察するに、一と年、火災に罹りて、燒け拔けたものと思はれる、入口の上には、縱三尺、幅一尺ばかりの梅花石を揷入してある、色は淡黃色で紫色の面白い斑文があり、そこに隱々として、花を着けた一朶の梅の枝が露はれてゐる、梅花石は、一種の大理石で、この地より北、開原の西五里を距てた法庫門の附近の双樓臺邊門から產出するもので、紫色のもの丶外に、黃と淡紅色のものもあり、好事家は往々この石で作つた硯を珍重してゐる、その質の潤軟を缺くために、墨を磨するに適當とはいひ難いが、文房具としては誠に綺麗な物である。

三、東洋ハイカラの開山

李成梁の故宅のこの看花樓が、明代に於いて、西洋風の建築であることは、誠に面白い、思ふ

に成桀が伊犁を征した時、洋風の建物を見て、鄕里に還つてから、その規模を取つて、老後棲遲の隱宅として建築したものであらう、萬曆年間といへば、彼のザビエルが九州の大友家へ來てゐた頃である、鄕里の父老は、定めてこの豆腐形をしてゐる不思議な建物を見て、夷狄の棲む家を作つた物數寄な男であると、蔭口を言つたことであらうと思ふ、或る意味に於いて、李成桀は、東洋のハイカラの開山ともいつて好い、當時の記錄には、樓の周圍に花園があつて、四季の花が不斷の香を吹いてゐたといふ、私は故宅の邊を淸掃して、花木を栽え、小公園のやうなものを拵へて、長くこの珍らしい建物を保存するやうに土地の紳士に望む。

鐵嶺の市街は、我が旅團司令部の在るところとて、附屬地は賑はしかつた、電燈會社もあり水道會社もあり、製油場もあり、その他の工場もあり、邦字新聞は小さいながら二社もある、料理屋もあるから隨つて花柳の人もある、賑やかな町を過ぎて、私は龍首山に登つた、そこには慈淸寺といふ、道敎ともつかず佛敎ともつかない一箇の寺院があり、堂內には金色の釋迦の座像と左右に迦葉阿難の像を置き、脇侍には文珠と普賢とを配し、更に左に觀音、右に地藏を安置してあるが、その地藏は女體藏冠のものであつた、壁に沿ふて塑像十六羅漢の像があり、堂の楣間には

西天眞諦の金字の横額が挂けてある。

寺に隣つて層樓の倶樂部がある、楣間に醉翁樓の匾額を掛けてある、庭を隔てた懸崖の上には衆山一覽と書いた茶亭がある、蒼茫たる平野のうちに、鉛色の柴河の水が、東から流れて北に折れ、遙かに遼河に注いでゐる、昔は茂林欝蓊として頗る景趣に富んでゐたが、今は殆んど伐り盡されてある。

四、白塔、今は鼠色塔

所謂、龍首山の白塔は、慈淸寺を距る數十歩の頂邊に立つてゐる、甎瓦を疊んで築き成した八角九層のもので、臺上には民安國泰風雨順調などの文字を露し、各面に坐佛を置いた淺龕を穿ち、椽木の端に素燒の龍首を附した高さ十丈餘のものであつたが、私の往き觀た時には塔身全部をセメントで塗り隱して、昔ながらの白塔は今は黯灰いろの鼠色塔となり了つたのである、記録には李成梁の夫人が資金を喜捨して重修せしめたことがあるから、この塔の創立は、恐らくは明の初代のものなるべく、しかもその製作は優美な觀に乏しいものである、山のつゞきの龍尾山

は、唐太宗が驛を駐めたところと傳へられ、一の名は駐驛山、その山にもこの鼠塔と形の相似て小なる浮屠がある。

五、駐驛山の懷古

駐驛山の戰爭は、流石の唐の太宗も手に汗を握つたやうであつた、漢の高祖は、兎に角も、唐の太宗李世民は支那數千年の中に就いて、傑出した人物であつた、弱冠から兵革のうちに成長して、股肱には智略の良臣あり、その將士は精練無比と稱せられてゐるが、その遼東を征した時には、非常の苦戰であつたやうである、當時の敵は高勾麗と稱すれども、今の朝鮮のやうなものではなかつた、遼陽、奉天から吉林の西北までの領土を有し所謂亞細亞大陸の西北に最も勇敢なる民族を結合してゐた、駐驛山の役には、高勾麗軍は、靺鞨の軍と共に、野を掩ふて眞黑に進擊して來たのである、太宗は、山の上に馬を立てゝこれを望見し、その潮のやうな大軍を見て、怖るる色があつたといふ、戰ひ數合、唐軍は屢々高麗軍の乘ずるところとなつて、負色が見えて來た、太宗は、傍にゐた大將軍李靖に向つて、我れ天下の兵を擧げて東夷を征し、その苦しまさる

る所となるのは如何なる譯かといひ、齒を切して憤つた、唐軍は次第に敵軍に壓せられて頽れ立つた、太宗、斥候に命じて黑旗李勣の麾を見せしめた、馬を回して黑旗今や圍まれたりと奏した、太宗は敗軍を豫期して顏色を變へた、須臾にして再び奏して曰ふ、圍は解けたりと、高勾麗軍の哭聲は山谷を動かすばかり、勣の軍は大いに勝ち、斬首數萬、方四十里の間、野草は皆な赤くなつた、太宗は斯くして僅かに高勾麗軍に勝つたのであつた、征麗軍を興さんとした時、謀臣魏徵は、これを不可として大いに諫めたが、太宗は肯かなかつた、駐驆の役の終るや、太宗は遽かに使を馳せてその墓に祭らしめたと傳ふ、この役の如何に苦戰にして危かつたことであるか知られる。

六、笹龍膽と蓮華の紋

鐵嶺、開原、昌圖は昔しから支那から胡地に入るの要衝に當つてゐた、渤海國へ使した唐の崔忻は今の登州邊から廟島列島を飛石傳ひに傳はつて、旅順に取りつき遼東半島を歷て鐵嶺の北にある昌圖に來り、更に北に指して行つたのである、古くは開原から昌圖、哈爾賓に通ずるもの、

開原から輝發江流域、寗古塔へ出るもの、やゝ新らしい時代には開原から伊通州を歴て吉林に至る街道もあつた、日露役當時、露國はこゝを兵站の本部として龍首山一帶の高地に、幾重の塹壕を繞らし砲臺を築きて、その防備を嚴重にした、その敗殘した塹壕砲壘は、今も猶ほ明かにその蹟を留めてゐる、城市の中央に當る繁華の街を歩いて見ると、商舗の簷端から、龍鳳を彫り金碧に彩られた異様なる看版が、丁度我が東京の歳暮大賣出しの時のやう、門並にその美觀を競ふさまに高く路を壓して飾り立てられてあるのを見る。

鳥居龍藏氏は、この邊一帶の地を滿洲に於ける考古學上の中心地なりといつてゐる、邦人の鉢卷山と稱する龍首山の支脈には、その遺蹟が尤も多いといふ、發見せられた墓碣のうちに、往々笹龍膽の紋が彫まれてあるといはれて、我が清和源氏と滿洲の大族との間に、何等かの關係あるべしと說く學者もあるが、仔細にその笹龍膽を點檢すると、三枚の蓮の卷葉を下に置き、上に三本の蓮華を抽き出してゐる圖案的紋章で、清和源氏の紋所なる笹龍膽でないといふことが分つたといふ、但し、私は親しくその現物を睹ることを得なかつたので、その孰れが是なるを知らないのである。

七、小學校に青天白日旗

私は支那側の小學校をも參觀することを得た、繪畫の時間で、男童女童は鉛筆を甜めつゝお手本の中の富士の山や、茅葺家屋の百姓家を描いてゐた、女子の都ては斷髮で、髮を編んで背に垂げたものを見ない、祭日でもないのに校門には靑天白日滿地紅の國旗が掲揚されてあつた。

私は松華ホテルに一夜を過した、曉夢濛騰のうちに、さながら帛を裂くやうな人の叫喚の聲を聞いて驚き醒めた、聲は正しく隣の房から起つて來るのであつた、耳を欹てるとやがて寂寞として靜かになつた、盥漱の時、私は頤に黑い髯を蓄へた中老の人に遭つた、曾つて相見て識つてゐる人のやうだ、飯の時、女中に訊して、濱口熊岳であるとわかつた、熊岳は當時、この地にある高野山出張所で、盛んにその氣合術を宣傳してゐるのであつた、曉間の喚聲は、旅宿にゐる一病者に、その術を施してゐたのであつた。

火の田、火の瀧

（鞍山製鐵所の大熔爐を觀る）

朝の汽車で、私は南に走つた、豆畠、高粱畠は海のやうに天際までつゞいてゐた、そこに柳條邊墻が或は絶え或は續いて北の方、開原、昌圖の邊りに走つてゐた。

この邊墻は、前にも記したごとく、明初に創まり、更に淸の康熙年間に補修したものである、始め明の永樂帝が南京の首都を攻陷して都を北京に移した靖難の役に、元の降卒の力を借ることが多かつた、帝崩後、北族の勢力は山海關の東西に通ずる遼東街道を侵犯するの情勢となつたので、邊牆築造の急務を感じ、英宗の正統年間、都鄉史王翺、遼東の守將畢恭等が主として築造したもので、遼西は大虹螺山脈に屬する寧遠から錦州に至り更に東北に走つて義州の西北を過ぎ、廣寧の北から白土廠邊門の地を歷て牛莊の對岸なる三岔關に達し、遼東の分は牛莊附近の馬圈子邊に起りて、渾河の左岸から遼陽の西方黃泥窪に出で、長灘より渾河を涉り、彰義站、沙嶺、老邊を過ぎて十方寺より復た遼河を越え、舊門老邊を經て鐵嶺の北方、中固を過ぎて遼河の右岸に

出で、開原の西を走つて今の昌圖に北方まで延びて居る、但し是等遼東遼西の邊墻は、遼河左岸の地を除いて、そこに空地を存し、全く邊墻以外に置かれてあつたので、蒙族の侵入は年毎に多くなつた、その最初の邊墻は、木を編んで垣を作つたもので、やがて易るに版築をもつてし、墩臺城堡を添へたものと見える、更に又た今の遺蹟には柳の半死の古木を見るが、創始の當時は楡樹を栽えて楡寨と稱したのであつた、清朝の興つた當時は、この邊墻が元來自己乃ち女眞族及び蒙古族を防禦するためのものとして一時はこれを破壞せしめたことはあるが、蒙古との限界を示すに至便なるが爲めに之を再築すると共に、更に大いに北方に向つて延長したのであるといふ。

奉天を過ぎ、遼陽を過ぎ、製鐵所の大煙突から噴き出す煤烟が、やゝ激しい西北風に吹き靡いて、碧い空に巨大な一文字を描き成す壯觀を仰ぎ看ながら鞍山驛に降り、馬車を貸して鞍山製鐵所を訪づれた、製鐵所を中心として十五吉羅の半圓形を描いたそのうちに點在する櫻桃園、王家堡子、大孤山、鐵石山、東鞍山、西鞍山など十數箇の鑛區がある、現に採掘しつゝあるは大孤山で、その鐵礦の埋藏量は、實に三億噸を超ゆると稱せられるが、概して四〇%以下の貧鑛で、富鑛は僅かに一局部に過ぎないといふ、その貧鑛の處理法として、採掘した鑛石を粉碎して之を熔

解する還元熔燒法といふ獨特の方法を發明し、二基の大鎔鑛爐とこれに附隨する諸般の設備を完成して、一ヶ年銑鐵百萬噸を出すの計畫を立て、今や盛んにその作業に努めてゐる。
私は技師長の案内で、猛烈にふり來る粉鐵の狼雨のうちを冒かして、その第一熔鑛の臺に上つた、鐵板で掩はれた廣い臺の上には、細沙をもつて幾十畦の畝が作られてある、經三十尺と註せられる巨大な大熔爐は、さながら地獄にありといふ炮烙の、その肚を茱萸の實のやうに眞紅に燒け爛らせて、頂邊の大煙突からは萬斛の煤烟を漲らせてゐた、時到れりと見た工夫の一人は、重い大きな鐵槌を擔つて熔爐の前に立ち、數十人の工夫等は、手に〳〵丁字形の長い鍬を執つて、沙畦の要所の位置に就いた、皆な顏を包み手足を褁みて、熾烈な熔鐵の惡氣に觸れることを防いでゐるのであつた、迦倶土の神の業に、荒金の煮え爛れて洶湧する物悽き鳴動は、四邊の物の音を鎭めて、人は啞のごとく默してゐる。
やがて大熔爐の前に鳥居立ちに立つてゐた若い工夫は、矢聲と共に重い鐵槌を打ち卸した、戛然一聲、熔爐の底邊にある孔道に、塡め固めてあつた大泥塊は、その鐵槌の一撃を受けて脆くも破れた、露はれた孔道の口は、牡丹を吐く閻羅王の口とばかり朱金色に眞ン圓く見えたのも束の

間、どく、どく、どくと、白氣を噴きつゝ飴のごとく緩やかに流れ出たのは、その熔鐵であつた、沙の畦の要所に立つてゐた工夫達は、手快く丁字形の木鍬を操つて、その流れを數十畦の畝へと道を啓いて導びくのである、火龍のさまに蜿蜒と流るゝ熔鐵は、次第にその畦に流れ入つて海鼠型の銑鐵となり、熔鐵の渣滓は別路を傳ふて臺上から、一道の瀑布となつて地上に落下するのである、唯だ見る、火の霧、火の川、火の畦、火の瀧である。

熔鑛爐の壯觀を見た私は、車を回へしこの地の工業學校に梅本俊次氏を訪ふ、考古學の先達である、私はその蒐集の石器、土器、古銅器のくさぐさを見ることを得た、私は近ごろ附近の山地から發掘した畫像石と、その拓本とを見た、鞍山市内の眞言寺院にある畫像石は、二人の武士が馬を降つて、錫杖をもつ一人の僧侶に對して禮拜してゐる圖樣の平肉彫で、石質は綠泥片岩であつた、同じ日蓮宗の寺院にあるものは、王者中央に坐し、侍者跪いて酒を濺いでゐる圖樣である、石質は前と同じく綠泥片岩であつた、私は曩に大連の圖書館で、この畫像石の一部を見、又た遼陽の圖書館でもこれを見た、各圖には雲の模樣がある、私は竊かに高勾麗時代のものであらうと想つた。

旅塵を洗ふ湯崗子温泉

私は湯崗子の温泉對翠閣に、汗漫七十餘日の旅の塵垢を洗ひ落すことを得た。

湯崗子は、我が滿洲に於ける五龍背、熊岳城と共に、三泉場の名をもて知られ、特に他の二泉場に比してその設備の整備せるをもて著聞してゐる、唐の太宗の高勾麗親征の時、軍兵の創痍を療したところと傳へられ、近くは日露戰役當時は、共にこゝに傷病兵の治療所を置いたところである、無色透明のアルカリ泉で、多量のラヂウムが含有されてゐると稱せられてゐる、東鞍山、西鞍山、その近碧の背に高く遙翠の奇峯を簇らせてゐるのは五大禪寺と二十三の道觀をもつといふ千山で、對翠閣の窓は日夕その孱顏を容れてゐる、對翠閣の外に、玉泉館と清林館とがある、玉泉館は室代と食事が別々になつてゐるが、室代も食料も至極低廉、清林館は自炊の實費制度である。

私は對翠閣の二階の一室に賃居することを得た、日本風の座敷、そこに副室まであつて、大きな硝子窓を前のベランダには、籐椅子や卓が按排されてあつた、浴室は、一大浴池の外に家族風

呂といふやうな小さな浴室もあり、ベコニヤやチユーリツプの花の栽込が、湯氣で帛を挂けたやうに薄ぐもる硝子窓を透して、美しく暈されてゐる、その設備は內地の名高い泉場に勝るとも劣ることはないと思はれた、閣の前には、廣い泉水があり、綠樹の蔭には亭榭があり、私はそこに綸を垂れてゐる多くの人を見た。

翌る朝は晏く起きた、今日はしも大連に還るべき日であつた、私は靜かに几案を掃つて、滿鐵の人々から委囑された雅箋や書畫帖に、詩、俳くさ〴〵の旅中の口號を書き留めた、最後に閣の主人の擔ぎ出して書けよと要請された金屏風に向つて、私は稚拙なる詩を題するの慚愧に勝えなかつた、ひたすらに辭謝したが、それは終に免されなかつた。

青島から上海へ

一、諸友多くは凋落

大連のヤマトホテルに三日二夜を過した私は、奉天丸に搭して上海に向つた。翌日の正午頃には、船は青島の岸壁に繋がれてゐた、始めて青島を訪づれたのは、大正三年多十二月で、彼の世界戰爭の初頭、我が神尾軍が青島攻略一箇月の後であつた、私は戰蹟視察記者團に加はつて、支那公使日置益、男爵船越光之丞氏と共に臺北丸の客となり、沙子口に上陸し、關東丸に神尾將軍の凱旋を迎へてから、汽艇、青島に上り、井上幾太郎大佐の東道の下に悽愴なる戰蹟や莊麗なるワルデツク總督の官邸を觀、舊友澁川玄耳を訪ひて款談一夜の後、更に鐵路、濟南府に入り、こゝに僚友に別れて、獨り朝日新聞の遠藤麟太郎氏と共に曲阜に孔子廟を觀、泰安より泰山に登りて再び濟南に還り、大明湖に遊び、千佛山に詣り、泉都の游覽に二日を費し、更に鐵路、青島に入り、歳の將に盡きんとする三十日をもつて宇品に還り、除夜を汽車の中に送

つたのであつた、葛裘十五、その間、私と泰山、曲阜の遊を共にした遠藤氏先づ逝き、澁川玄耳も亦た私が支那四川の旅中に於いて、上總鴨川の僑居に逝き、神尾將軍、日置益氏も亦たついで世を捐てゝ墓木は既に拱し、船越男爵は酒詩の間に隱れ、その他の人もその消息を絕てるが多い中に、獨り當時大佐であつた井上氏の、今は累進して大將となり、今次の陸軍大演習には北軍の總帥となつて肥馬、大刀、常野の間に馳騁して當年の餘勇を觀めしてゐる、往事は誠に夢のやうである。

二、穢ない靑島市

船の荷役する間を、私は市中を散步した、曾つては明麗にして瀟洒なりし靑島市街の、還附以後、今は誠に穢陋にして蕪雜なるに驚かざるを得なかつた、元のカイゼル、ウヰルヘルム街、當時の舞鶴通りのプリンツ、ハインリツヒ、ホテルのあつたところには、靑天白旗が誇らげに揭げられ、馬矢犬糞、路に充つといふ有樣であつた。

海路平安、上海に入つて、私の長子とその新婦とに迎へられて、共同租界の施高塔路の僑居に

詩嚢を卸したのはその翌日の午後であつた、是れより一週日の間は、長い旅の疲勞を醫すべく悠々として自適した、或る日、僑居の附近にある書店に就いて古書を漁つてゐた時、料らざりき、今關天彭氏に邂逅してその奇遇に驚喜した、最初私は奉天から北平に行くべく日程を編んでゐたが、北地の溽暑に避易して燕京の遊びはこれを他日に讓ることにした、北平に行けば、天彭氏の東城裱褙胡同の宅に宿るべく豫期してゐた、今まこゝに相見えんとは、誠に意外千萬の事であつた、氏は明日をもつて南京に蔣介石氏に會すべく行くのであるといふ、私は強いて氏を吾が僑家に勾引し來つて、酒飯を共にして相語つた。

三、競犬を觀る

先輩諸氏の招宴や、舊知の人との徠往や、その隙を市中の游目に費した私は、長崎丸の纜を解くその前一夜、長子夫妻とその友と共に、マゼスチック、ホテルに晩餐をしたゝめた後、佛租界にある競犬場へ往つて觀た。

楕圓形なす雛壇の觀棚は白晝を欺むく電燈に照らされて、はや數千の觀衆が簇がつてゐた、觀

棚の背後には三箇所の犬券賣場がある、その一つは獨贏といひ、己れが贏つべしと豫想してゐる犬を賭してその札を買ふところである、その二は位置といひ、自分の買つた番號の犬が、三著までになつた時、その位置によつて賭金の幾倍かを得るのである、その三は双贏といひ、己れが贏つべしと豫想して買つたその犬が、第一回と第二回とに續いて勝つた時に賭金の幾倍かを得るもので、この三つの輸贏のうち、位置は素人でも賭け易く、その次は獨贏、最後の双贏は、最も深大な商量を費さねばならぬから、隨つてその受くる賞金も亦た多い譯である、犬券を購ふとする人は先づ場内の犬圈に向つて殺到する、そこには回毎に出場すべき犬が繫がれてある、犬は皆グレイハンド、支那人の所謂細狗、若くは西狗と稱するもので、その容は狼のごとく、頸長く肚は痩せ、四肢は削瘠して、その尾を卷いてゐる、そして、羅馬數字で、白く太くその番號を描き現はした胴衣を纏ふてゐるのである、隋圓の觀棚に圍まれた競走場は、矢張り隋圓の環狀形に設けられてある、南北百米突、東西四十米突ばかり、上には高麗芝を栽え、芝生の中に一條の軌條がある、いよ〳〵競犬の第一プログラムに入ると、犬の飼養者は、人毎に出場犬を牽き出して、競走場を一周して、如何なる犬が今度の競走に出場するかを觀衆に示す、一匝の後、その出發點に

位置を正して氣負ひ立つ犬を駢べて相圖を俟つてゐるのである、出發點の前なる軌條の一端には剝製の野兎が一頭据えられてある。

相圖の號笛が鳴ると、剝製の野兎は、電氣仕掛によつて一駿に軌條の上を走り、出場の群犬は、我先にその兎を獲んとして滾々として奔るのであつた、觀衆は歡呼し且つ拍手する、先祖は狼であるらしい細狗は、電光石火のやうな疾さをもつて、目にも留らず駈け去るのである、決勝點に入つて、勝敗は四五十秒時の瞬たくまに決定する。

私は、試みに一弗を投じて獨贏券の一枚を購ひ求めた、偶然にも私の購つた犬は、第一着となつて、七弗の割當金を贏ち得た、更に數回の輸贏を試みたが、最初に贏ち得た金を拋却した上に、尙ほ且つ數弗を輸けたのであつた。

場を出た、月は天心に懸つてゐた、大路に布く霜のやうな月光裡をドライブして、夜闌けて施高塔路の僑居に還つた。

即興七十句

慶州にて

蒲公英の路川に入りて橋を閑却す

菜の花あらば大和路に似たるかな

アラヽンの唄に暮れゆく遲日かな

花遠近岐れ路に天下大將軍

春の水地下將軍をめぐりけり

佛國寺

彼岸會に白粉つけし佛かな

青嵐鐘なき閣を吹きぬけり

青東風や新羅王の陵を三匝す

峽に入る第一橋やほとゝぎす

世を避けて人の村あり桃の花

梵妻の藥干したる日南かな

子供等のパカチで量る落花かな

會寧にて

蝸牛の髭題目や古瓦（清正の遺蹟）

國境に引き渡したり夏霞

温突や寢ながら足で足袋をぬぐ

龍井村

鯉幟胡沙吹く風に躍りけり

杏花萬朶胡沙吹く風を東風にして

青東風や大和をまねて圖們富士

金剛山にて

萬二千峯皆な夏を痩せにけり

ほろ〳〵と躑躅散るなり霧の道

峯を包む雲の底より花吹雪

鐘の音の思ひ〳〵に霞みけり

京城雜觀

さゝ濁る水に衣搗つ漂母かな

春寒むのちよろ〳〵水や衣を搗つ

子供等の寫眞に集ふ遲日かな

水を出づる鴨の濡れ羽に落花かな（慶會樓にて）

月や望銀色に光る花吹雪（慶昌苑にて）

妓生（キイサン）の周衣（つるまき）に風薫るなり

遁れ來て醉をさますや月朧

米研いて月の朧に流しけり

旅順の鴻臚井

古井戸の浚ふてあるや氷面鏡

四平街にて

夜をこめて戰語りや杜宇
馬賊出づとの噂さにふけて杜宇

熊岳城溫泉

橋板に別れ霜かや柳絮敷く
有明の月かと踏めば柳絮かな
アカシヤの花の散り込む河原風呂
酒を賣る相如、文君門に掃く

楡錢不補貧

草の屋の庭に一斗の楡錢かな

遍遼にて

短夜や日出づる國は三萬里

稻妻の太く鋭し青龍刀

黄沙萬里一鳥遠く雲に入る

莫林廟道中

白はへの風に空蹴る流沙かな

楡若葉泥に彫りしは何佛

緋牡丹を吐くかと燃ゆる篝火かな

洮南にて

陽炎の晝に驕りて蜃市かな

逃水の逃げもせである草の海

齊々哈爾

看版の藥玉馬が嘶いてゆく

羊牧ふ蘇武は老ひたり雁歸る

朱萸（グミ）の實と雲爛らせて入日かな

仔を連れた胡馬の歩みや城麗ら

哈爾賓

粥すゝる一山の大衆夏を痩す（舊敎本山）

短夜を踊りぬきたる毛唐かな

夏草や青燐夜を燃えんとす（志士の碑）

羅郭金司吉酒莊に飲む

壺を出でゝ青き胡瓜や瑠璃を咬む

吉林にて

短夜や淡墨の橋に灯が通る
青蘆に一丈高き蒲帆かな

支那旅客の無作法

洟かんで戻すタオルや蒜臭し

敦化にて

眼にしみる蓼の香りやあらひ鮒
天草の子の手すさびや一夜酒

短夜を靴下のまゝ寝たりけり

鞍山の製鐵場

炎天の下や火の霧火の嵐

たぎり落つる炎の瀧や雲の峯

遼陽にて

青東風の除けて吹き行く白塔（ペトン）かな

我が旅は汝に似たりつばくらめ

夏行寺、老鶴簷に經を聽く

夕涼し塔より長き人の影

高麗山城

うはゞみの膽吹きや腥し草いきれ

山城より鳳凰城を望む

鷹の背に赤き夕日や城霞む

湯崗子にて

髭剃らせて短夜を湯の別れかな

柳條邊の老柳によせて

青柳は老の身ながら梳づる

砂漠にて

喇嘛僧霞み鷹(タカ)霞み鄂博(オボ)霞みけり

滿鮮趣味の旅　終

昭和五年四月一日印刷
昭和五年四月五日發行

滿鮮趣味の旅
定價金貳圓

著者 遲塚金太郎

發行者 濱井松之助
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者 山崎一男
東京市神田區表猿樂町二番地

三新舍印刷

發兌 大阪屋號書店
東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
振替東京 一三七五番
電話日本橋(24) 三七三七番 三六八九番 四五三五番